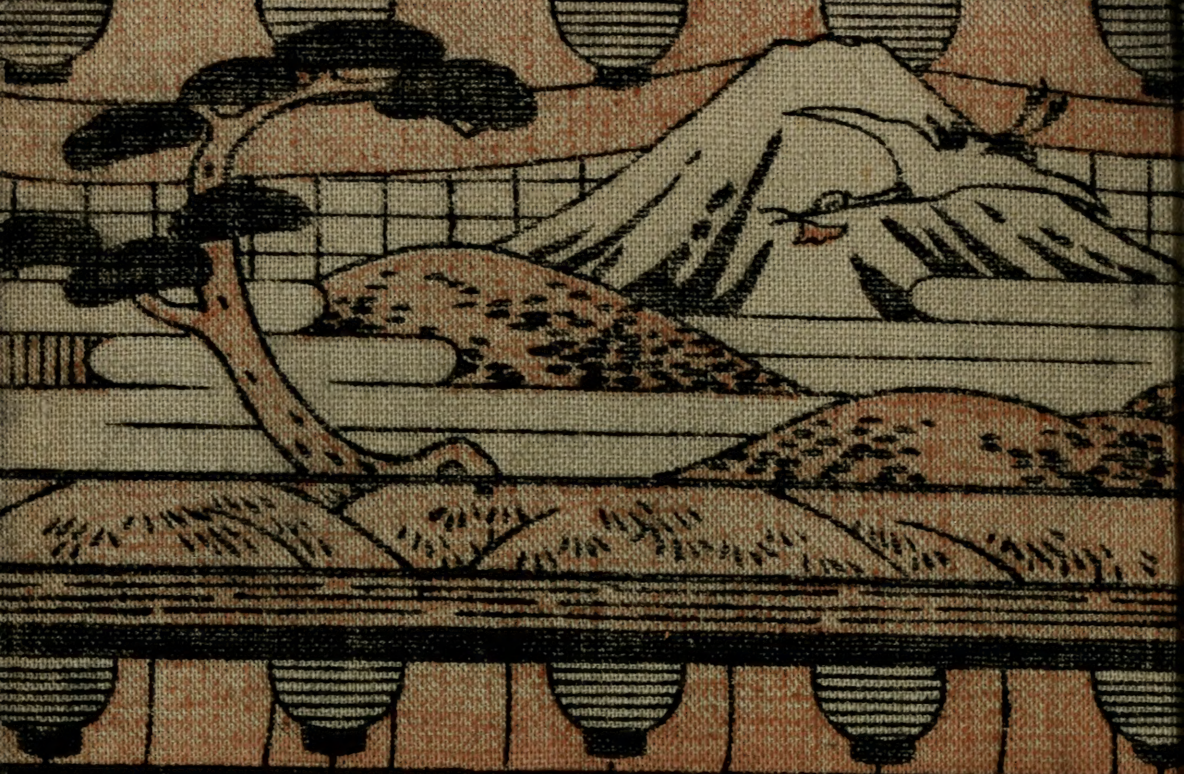


第六巻

累物語

碁太平記白石噺

鬼神於松

夏祭浪花鑑

PL 767 K32 v.6
Kawatake, Shigetoshi
Sewa kyogen Kessaku shu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河竹繁俊
濱村米藏 共編
渥美清太郎

世話狂言傑作集

第六卷

東京
春陽堂發行

PL
767
K32
v. 6

UNIVERSITY OF TORONTO
MAR 15 1971
LIBRARY

目次

解説……………………………………一―一六
◎伊達競全盛曾我（累物語）……………………一
◎碁太平記白石噺（白石噺）……………………一五三
◎百千鳥沖津白浪（鬼神お松）……………………二三九
◎夏祭浪花鑑（夏祭り）……………………三三九

挿繪の目次と說明

○義平次殺し……………………………………卷頭
（初代豐國筆の泥仕合。四世坂東三津五郎の團七九郎兵衛、市川市藏の義平次）

○累物語……………………………………一頁の前
（龜戸豐國の見立錦繪。四世澤村宗十郎の與右衞門と四世尾上菊五郎の累）

○白石揚屋……………………………………一五三頁の前
（龜戸豐國筆の揚屋、坂東龜藏の惣六、坂東しうかの信夫、嵐璃寛の宮城野）。

○鬼神お松……………………………………二三九頁の前
（龜戸豐國筆。八世團十郎の夏目、坂東しうかの鬼神のお松。）

○燒きがねお辰……………………………………三三九頁の前
（龜戸豐國筆の見立錦繪。三世澤村田之助のお辰。）

坂東三津五郎
市川市蔵

坂東三津五郎
市川市蔵

解説

「伊達競阿國戲場」俗に云ふ「累」の狂言は、初代櫻田治助の作で、安永七年の八月、江戸中村座に初めて上演された。累の實説に就いて、下總國岡田郡羽生村の羽生山法藏寺に傳へられる由來は、次のやうである。

羽生村の百姓に與右衛門といふ鰥夫があつたが、同郡横曾根村に男兒一人持つた寡婦を世話する者があつて妻とした。その連子の男兒は容貌甚だ醜くかつたので、與右衛門は之れを虐待した。妻はそれを苦にした結果到頭意を決して慶長十七年四月十九日に、この子を絹川へ連れて行き、横堀へ投げ入れて殺してしまつた。その後與右衛門は、よく子供を殺したとてその妻を最愛し、二人の間に女兒を産んだが、その女兒の顔は先年殺した男兒の助にその儘であつた所から、名は累といふのであつたが助が重ねて産れたのであらうと、異名をかさねと呼んだといふ。この累が成人の後與右衛門夫婦は世を去つた。その頃六十六ケ國廻國の修行者で、羽生村へ來て農家に雇はれ、耕作の手助けなどをしてゐる者があつたのを幸ひに、累もいつ迄も一人でおけもしまいと、里人が世話して累の養子にした。修行者は累の家が七石ばかりの田畠を持つてゐるのに目がくれ、累の醜いのにも構はず養子になり、名も先代通り與右衛門と改めた。

かうして暮してはゐたものゝ、累は生來心がねぢけ、嫉妬心が强かつたのに弱つて、與右衛門はある日田からの歸り道に絹川のほとりで、有り合はせた草苅鎌で切り殺し、絹川へ投げ込んだ。さうして世間へは累が誤つて川で溺死したと披露して寶藏寺へ葬り、戒名を歸眞理性貞信女と名づけ、承應二癸巳年八月十一日と鐫つた石塔を建てた。其後與右衛門は何人となく後妻を迎へたが皆早世し、最後の妻の腹にお菊といふ子が産れたので、妻の甥の金五郎といふ者を養子に迎へたが、お菊に累の怨靈が乘り移り散々にお菊を苦しめる。丁度その頃祐天上人は年二十六歳で、同郡弘經寺(ぐぎやうじ)に遊學して居られたが、この話を聞き與右衛門の家に行き、十念を授けて累の怨靈を立ち退かしたといふのである。

この因緣話を脚色した作中、最も古いと信ぜられるは、津打治兵衛の作「大角力藤戸源氏(おほずまふふじとげんじ)」である。これは享保十六年十一月に市村座で上演されたもので、門人津打九平次との合作である。佐々木盛綱の藤戸の先陣の世界で、これに累與右衛門の筋を持ち込んだのである。役割は初世坂東彦三郎の盛綱で先陣物語、三條勘太郎の累の怨靈、中村新五郎の與右衛門である。川邊で累殺しの所のかけ合ぜりふ「絹川紅(きぬがはべに)の潮(うしほ)」が、大當りであつたと傳へられてゐる。

院本物に「累解脫打敷(かさねげだつのうちしき)」といふ物がある。これには津打治兵衛の作を並木良輔、八州堂、三樂坊の三人が院本化したものと明記してある。興行年月日は寬政四年二月肥前座とあるが、こ

の時はもう治兵衛の歿後であるから、これは寛延四年八月の江戸肥前座の興行、「小山判官信田小太郎新版累物語」を改題して再興行したものに違ひない。さう解さなければ「解脱打敷」の五段目の切にある「新版累物語と、書き傳へたる筆の跡、二百十日に異もなく」が生きてこない。八月だから二百十日が利くのであつて、二月では何の意味もないのである。この作は信田の世界であるから、前の「藤戸源氏」とは別物であつて、藤戸源氏の外にかうした作が、治兵衛の作中にあつたものであらう。「伊達競阿國戯場」に比べると、この方が餘程實説に近い。累は始めから容貌が醜く、心がねぢけ嫉妬心が強く、母親がせめて後世菩提のためにと、佛へ上げた打敷に仕立てゝある龍田川の小袖がほしさに之を盗むのである。母親の慈悲心から決して累に鏡を見せない事は、これ以後の累の狂言と同じことである。

この他にも累の狂言はあるが、累の筋を伊達騒動に持ちこんだのは「伊達競阿國戯場」が最初である。初演の折の役割は。

絹川谷藏、渡邊民部（四世松本幸四郎）。足利頼兼、豆腐屋三婦（二世坂東三津五郎）。高尾（久米次郎）。妹累、仁木彈正（大谷廣右衛門）。荒獅子男之助、細川勝元（五世市川團十郎）等であつた。

この興行で、四世幸四郎と五世團十郎との間に不和が生じたのは、有名な話である。團十郎

の役に細川勝元があつたりするのは、もとは長い狂言であるからである。こゝに收錄したものは、たゞ累の件りのみを演じた折の臺本である。又それだけで立派に一つの劇を構成し得るからである。初演の時には對決もあるから細川勝元が必要になつてくるので、幸四郎の扮してゐる渡邊民部も對決の場での立役である。收錄した臺本の序幕の前に絹川が賴兼の寵愛の高尾を殺す場面があるはずである。絹川は高尾があつては賴兼が色に溺れて惡人に乘ぜられるからといふので、忠義一途の心から殺すのであるが、高尾は戀しい殿樣に別れるのが辛いために、殺された恨みから、その一念が妹の累にとりついて絹川を苦しめるのである。所載の臺本は天保九年正月市村座上演の折りのもので、その役割は、

絹川谷藏、羽生村與右衞門（澤村訥升）、豆腐屋三郎兵衞（市川九藏）、羽生村金五郎（大谷友右衞門）、與右衞門女房かさね（岩井杜若）、左金吾賴兼（市村家橘）等で、名題は「伊達(だて)競全盛曾我(くらべぜんせいそが)」であつた。

この狂言は初演以來評判がよかつたので、初演の翌年、安永八年三月に、義太夫節に移され、名題もそのまゝ「伊達競阿國戲場」として江戸肥前座で上場された。作者は烏亭焉馬(うていえんば)、達田辨二兩人の合作である。これが今日も行はれる「累身賣り」の段のある「薫樹累物語(めいぼくかさねものがたり)」の原作である。尙、累の型は怪談物の名人、初代尾上松助（後に松綠といふ、三世菊五郎の父）が殘し

たものである。

この作は怨靈をとり仕組みながら、割合に怪談じみた所が少なく、凄慘といふより寧ろ淸楚な感じをさへ與へてゐる。脚色振りも決してあくどくない。前に云つた津打治兵衛の作を院本に直した「解脱打數」などは隨分種々な事件を盛り澤山に集めて、累と金五郎とは本統の兄妹でありながら、又それを明かに知りながら契るといふ、畜生道なども挿入してあつて、煩雜極まる物になつてゐるが、この作にはそんな雜點は殆どなく、眞直に筋を運ばせていつた所が好い。この作の院本になつた物には、特に累身賣りの段があつて、累が自分の容貌の變つたのも知らずに身を賣らうとする。可憐には相違ないが、少し責道具が多すぎて、この作のすつきりしてゐるのには及ばない。元來この累の狂言は西澤一鳳が傳奇作書にも云つてゐる通り、與右衛門歿後百七十年にもなりながら、累が餘り醜女なので、狂言になり兼ねてゐたのであるが、治助が實説を打破して、累を美女の心優しい者にし、姉高尾の怨靈によつて醜女なり、嫉妬の強い女となつて、遂に非業な最期を遂げるといふ脚色にしたのは、（必ずしも治助によつて始められた形式とは云へないが、）とにかく治助の作者としての手腕が、決して凡庸でなかつた事を證してゐる。

「碁太平記白石噺」は本來安永九年の春、江戸薩摩小平太座に上場した義太夫節である。作者は、烏亭焉馬、紀上太郎、容揚黛、焉鳥旭、三津環等、江戸作者連中の合作である。

この淨瑠璃はたゞ單に、享保年間の出來事仙臺の矢倉姉妹が、父の敵田邊志摩を討つた一件を脚色した、所謂「宮城野信夫」の件りだけの芝居ではない。全部で十一段物の大作であつて、その背景となるべきものは、慶安年間に起つた由井正雪一味の事件である。

由井正雪の事件を劇に仕組んだものには、享保十四年の二月に「尼御臺由井濱出」といふ名題で、大阪竹本座の操りに上場されたのが最初である。作者は竹田出雲、長谷川千四兩人の合作で、由井正雪は奇井中節、丸橋忠彌は角屋秋夜といふ變名を以てし、世界は具の親衞に托してあつた。次いで出たのが「太平記菊水の卷」で、寶暦九年九月の竹本座上場のもの。作者は二歩堂、豐竹一鳥、近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衞、三好松洛等六人の合作物である、これは世界が南北朝で、正雪は宇治常悦、忠彌は鞠ケ瀬秋夜となつてゐる。

「碁太平記白石噺」はこの「菊水の卷」による所が多い。世界も南北朝であり、人名も同じである。常悦、秋夜の助太刀によつて敵を討つまでも同じである。こゝに正雪一味の事件と宮城野信夫の件りとが、どう關係をつけて書かれてあるかを知るために「碁太平記」一篇の梗概を書いておかう。

第一段は、後醍醐帝の御前、南殿の場。南朝の忠臣楠判官正成と坊門の宰相淸忠との論爭がある。淸忠の讒言で正成に疑ひがかゝるが、主上の情で疑ひ晴れて、湊川へ出陣する。

第二段は、白坂明神の場で本卷收錄の序幕の二場目に當る。河內國の浪人と山城國の浪人との出會ひがあつて、山城國の浪人卽ち宇治常悅は、自分が楠氏の嫡統なる事を知る。

第三段は、石堂大領館の場である。大領は世を去つて後室寄浪御前が、萬事を指圖してゐるこの家へ若黨伊達助と名乘つて入り込んでゐるのは、新田義興であるが、それとこの家の娘千東姬とは兼ねて戀仲である。千東姬に思ひをよせてゐる當家の家臣志賀臺七は、戀の取持ちを朋輩の楠原普傳に賴む。楠原普傳は曲者で、呂洞賓から習ひ覺えた妖術を以て日本國を覆さうとの野心があり、最初に石堂家を滅ぼす積りなので、臺七にその妖術を指南し味方につける。がこの企も寄浪御前のために看破され、普傳は元來支那の盜賊である事が判明する。普傳は妖術で人を惑はさうとするが、辰の年辰の日辰の刻に產れた千東姬の血と、未の年未の日未の刻に產れた伊達助の血とを混じたものを、そゝぎかけられて通力を失ひ、普傳は切腹する。

第四段は本卷收錄の分の序幕に當るもので、與茂作殺しの場。臺本では鎭守の森になつてゐるが、原作では畔道である。

第五段は、逆井村の場で、本卷の二幕目である。

第六段は、淺草寺境内の場で、おのぶが田舍から出て來て姉を尋ねる。悪女衒觀九郎の手にかゝつたのを、通り合はせた大黒屋惣六が、不便に思つて、自分が買つて家へ連れ戻る。

第七段は、吉原揚屋大黒屋の場で、本卷のものゝ大詰であるが、本卷に收めたのは舞臺本として幾多の改訂を加へられたものであつて、原曲とは大分違つてゐる。原曲では惣六の異見の後宮城野は座敷へ出て、鵜の羽黒右衛門と變名してゐる臺七に逢ひ、又常悅、秋夜にも逢ふ。常悅は一旦の言葉から宮城野信夫の助太刀をするといふ。大黒屋惣六といふのは實は新田の浪人島田三郎兵衛で、姉妹に快く暇を與へる。

第八段は、牛込榎町常悅の邸。信夫は常悅に引きとられて劍術を敎へられ、宮城野は秋夜に引きとられてゐる。常悅は仲々敵討をさせない。といふのは、臺七の知つてゐる普傳の妖術を知りたいためである。秋夜宮城野が訪ねて來た日に、常悅は幻術で臺七の姿を現し、それを姉妹に討たせて臺七の心を許させ、普傳の妖術を全部覺えた後、本物の臺七を姉妹に討たせる。宮城野と谷五郎とは夫婦になる。信夫はこの場に至つて、始めておのぶを改めて信夫になるので、揚屋の場ではまだおのぶとすべきであるが、校訂に際しては呼びならされた、通り名に從つて、信夫にしておいた。

第九段は、「道行いはぬいろぎぬ」で、伊達助千束姫の道行。

第十段は、紺屋の場で下男に化けた伊達助、下女に化けた千束姫、娘のお染と三つ巴の戀物語がある。こゝで始めて常悅實は楠正之と、伊達助實は新田義興との對面がある。

第十一段は、南北朝の對陣してゐたのが和睦する。千束お染は義興の妻妾になる。

「碁太平記白石噺」はかういふ仕組みのものである。それが本巻に收めたやうな、舞基本になるまでには、俳優の型の影響が大いにある。揚屋の場などは原作に比べると、現行のものはぐつと引き締つたものになつてゐる。

この作が始めて歌舞伎に移されたのは、原曲の出來たと同じ安永九年で、森田座に於てゞあつた。當時の役割は、

宮城野、與茂作女房(小佐川常世)。信夫、奴伊達助(三世市川八百藏)。七郎兵衛、大黒屋惣六(四世市川團藏)。志賀臺七(中島勘左衛門)。楠原普傳(澤村四郎五郎)。宇治常悅(初世中村仲藏)等。

本巻に收めた臺本は、嘉永六年九月河原崎座に於て坂東彥三郎、坂東しうか、嵐璃寛、嵐璃珏、淺尾奥山等によつて演ぜられた時のものを底本とした。全篇中では、本來揚屋の場がやはり傑出してゐる。場所を吉原仲の町へもつて來て、田舎娘を出し、思ひ切つた田舎詞を使はせた所に、作者の手腕がほの見える。

「百千鳥沖津白浪」といふのは「鬼神のお松」の芝居である。これは文化文政の頃、ちよんがれ節に笠松峠の女賊の事が唄はれた。それは夏目某といふ武士が、笠松峠で道連れになつた女に色仕掛けで蕩(たら)しこまれ、その女を背負つて谷川を渡る時、そのまゝ刺し殺されるといふ、その頃の事實談である。

これを脚色したのが三代目の櫻田治助で、名題を「新版越白浪(しんぱんこしのしらなみ)」と云ひ嘉永四年九月　市村座の上場である。初演の役割りは、

鬼神のお松（坂東しうか）。夏目次郎三郎（八世團十郎）。作内（大谷友右衛門）。夏目四郎左衛門（嵐吉三郎）等。

こゝに收めた臺本は慶應元年正月守田座上演のもので、當時の役割は

夏目四郎太郎（四郎左衛門）、下部柴平（中村芝翫）、鬼神お松（澤村田之助）、夏目四郎次郎（次郎三郎）（市川九藏）、主水妹藤浪（中村歌女之丞）等であつた。名題は「百衛艶曾我」であつたが、後年上演の際に「百千鳥沖津白浪」と改題されたものであらう。

鬼神のお松といふ名の代りに、牙のお才とした同じ行き方の狂言もある。

「夏祭浪花鑑」は延享二年の十月、大阪竹本座に上場せられた義太夫節で、作者は並木千柳三好松洛、竹田小出雲三人の合作である。これは元祿十一年の頃に、初代片岡仁左衛門が演じて、大當りをとつたといふ「宿無團七」といふ歌舞伎狂言を、操りに書き直したものであつて、初代仁左衛門の團七の型なども、この作に傳へられてゐるといふ。この折には、德兵衛（彦右衛門）三婦（與次兵衛）團七女房（瀬之助）などゝいふ配役であつたといふ。この狂言は姉川新四郎なども折々演じた狂言である。

さて「夏祭浪花鑑」といふ作は、義太夫劇史上にはやゝ注目すべき作である。それは、この作が舊來の例を破つて、世話物の九段續きの先鞭をつけた點と、も一つは夏狂言であるから、四段目から八段目までに、人形に帷子衣裳を着せた點である。帷子衣裳などは何でもないやうであるが、あの人形に、薄い着物一枚きりで、しかもごつ〳〵した不恰好を見えさせずに遣つた程、操りはこの當時發達してゐたのである。

現今演ぜられるのは、普通住吉鳥居前から義平次殺しまでの三幕であるが、全篇九段の首尾聯絡をとるために、その梗概を記しておく。殊に八段目の田島町團七內の場などは、遺憾ながら頁數の關係上本卷へは收められなかつたが、時として演ぜられる場面でもあるから、その補遺旁々特に詳細に述べておかうと思ふ。

第一段は、お鯛茶屋の場で、見出しは「色の水上汲分けた御鯛茶屋の鹽竈」といふ。玉島磯之丞がお鯛茶屋で、皆々を頼光の四天王に扮裝させて遊興してゐる所へ、團七女房お梶が磯之丞の母親の使ひに來るが、異見がましい事はちつとも云はない。そこへ乞食が來て身の懺悔話をする。その話を聞いた磯之丞は、急に里心がついて家へ歸る。その乞食はかねてお梶が頼んでおいて、憐れつぽく話をして、磯之丞を家へ歸らせる計略なのであつた。お梶にお禮の金を貰つたその乞食は、一寸德兵衛であつた。それ故住吉で團七と喧嘩をしても、德兵衛はお梶には頭が上らないのである。

第二段は、玉島兵太夫邸の場で「殿の諚意を織込んだおやま繪の拜領。」和泉國濱田の御城主御歸國になり、兵太夫の邸へ介松主計が使者に來て、兵太夫には五百石を加增して下さるが、子息の磯之丞にはおやま繪を下されて、放埒をいましめられる。兵太夫は怒つて勘當する。お梶はもと玉島家に奉公してゐた者であるが、夫團七が人を殺して入牢してゐるのを、御赦免になるやうに歎願する。大島佐賀右衛門は獨り反對するが、主計兵太夫の二人によつて團七は赦される。兵太夫は餘所ながら磯之丞の事を團七夫婦の者に頼む。

第三段は、住吉鳥居前。「出入の數をつまぐつた珠數三昧の男作。」本卷に收めた序幕である。

第四段は、本町通筋道具屋の場。「手代が戀に掘り出した浮牡丹の箱入娘。」道具屋の清左衛

門方に磯之丞は淸七と變名して手代になつてゐて、娘のお仲と戀仲になる。お仲に心を寄せてゐる手代の傳八が三河屋の義平次などゝ心を合せて、浮牡丹の香爐をかたに五十兩騙りとり罪を淸七に着せる。淸七が怒つて詮議せうとすると、丁度來合せた淸七の請人魚屋團七がなだめる。淸七はお暇になる。

第五段は、「道行妹背の走書」でお仲淸七の道行。二人が心中しようとする所を三婦が助ける。

第六段は、三婦の家。「男の意地を立てぬいた燒鐵の女房作。」で本卷に收めた二幕目。

第七段は、長町裏殺し。「男が欲を止め兼ねた紅粉紋の色入帷子」で、本卷に收めた大詰。

第八段は、田島町團七内。「友達に心を碎いて石割雪駄の合印。」團七が舅を殺してから家に居る所へ、一寸德兵衞が訪ねて來て、自分の故鄕で女房お辰が磯之丞のお供をした備中玉島へ落ちよといつて、長町裏の現場に落ちてゐた雪駄を見せるが、團七はとやかう云つて實際の事を明かさない。もう外に手段のなくなつた德兵衞は、かねて三婦お梶と云ひ合せた通り、お梶に不義をしかけ、團七と爭ひになる時三婦が出てとめて、團七に三行半の離緣狀をやれと云ふ。緣を切れば赤の他人、從つて義平次は舅でない事になつて、團七は親殺しにはならないからである。そこへ捕手が來る。德兵衞は團七と立廻りながら、耳に口をよせて備中玉島へ落ちよと囁く。團七は忝いとばかりに逃げて行く。

第九段は、備中玉島徳兵衛の家。「親と子の緣をつないだ貫ざしの捕繩。」磯之丞團七兩人ともこの家に隱れてゐる所へ、介松主計が來て殿の主家の千壽院力王の刀紛失して、その盗人は磯之丞だといふ佐賀右衞門の申立によつて、繩をかけ旅宿へ引くと云ひ、徳兵衛を男と見込んで頼むといふ。徳兵衛も主計を侍と見込んで磯之丞を預ける。その後へ三婦がお梶と子供の市松とを連れて來るが、折角離緣した甲斐もなく、暇の狀が殺[illegible]た後の七日後で言譯たゝず、市松は懷手旋にかゝつてゐる。所へ主計佐賀右衞門が國へ歸る途中に立寄る。佐賀右衞門は一打にと磯之丞へ切りつける、とその手を押へた主計の指圖で刀を見れば、即ち力王の刀。磯之丞の身の立つ上はと團七は潔く名乘つて出るが、これも主計のはからひで、いやがる市松の手を徳兵衛がもち添へて繩をかけ、その手柄で市松の拘り合ひの罪は赦される。「と引立てさせる天の網、かゝりやつながる磯之丞我身にかへて命乞ひ、追付け目出度い吉左右と、情も深き備中の、玉島にて徳兵衛が團七九郎兵衛捕つたりしと、云傳へしは義理の繩、情の繩と怨の繩、皆引連れて和泉の國、濱田の館へ立ちかへる」といふので、團七も赦される事をほのめかして終つてゐる。

この淨瑠璃の當時は、操りの全盛で、「諸事閙書往來」にも、「操り段々流行して歌舞伎はなきが如し、芝居表は數百本の幟進物など數を知らず、東豐竹西竹本と相撲の如く東西に別れ、

町中近國贔屓をなし、操りのはんじやう、いはん方なし」と記してある。この當時はかうした有様であつたから、操りで當りを取つた狂言は、すぐ歌舞伎でも上演したのである。此狂言なども、同年の延享二年の八月五日から、京都の嵐喜代三郎座で、團七（中山一吉）三婦（榊山小四郎）、お梶（喜代三郎）でやつて居り、同じ延享二年の十二月には大阪の三座が競つて上演してゐる。嵐三右衛門座は三日から、市山助五郎座は十日から、嵐三十郎座は十五日からといふ狀態であつた。大凡の役割を擧げて見ると、

三婦（嵐新平）。團七（中山新九郎）。磯之丞（嵐三四郎）。德兵衛（櫻山四郎三郎）。義平次（藤川半三郎）。佐賀衛門（桐山紋治）。お梶（嵐小六）。お辰（嵐小六）。琴浦（水木辰之助）。

三婦（榊山小四郎）。團七（嵐七五郎）。磯之丞（市野川彦四郎）。德兵衛（市山助五郎）。義平次（中村次郎三）。佐賀右衛門（市川佐傳次）。お梶（三條浪江）。お辰（瀨川改め岩田染松）。琴浦（佐野川華妻）。

三婦（中村新五郎）。團七（嵐三十郎）。磯之丞（山下又太郎）。德兵衛（岩井半四郎）。義平次（平十郎）。佐賀衛門（坂東國五郎）。お梶（吉澤嵜之助）。お辰（三保木七郎）。琴浦（柴崎民之助）で、一番評判のよかつたのは、中山新九郎の團七であつた。

江戸では安永三年五月、中村座上場が始めてゞあつた。その時役割は、

團七(坂田半五郎)。德兵衞(三五郎)。三婦(中村助五郎)。お辰(中村富三郎)。お梶(七藏)。磯之丞(九世羽左衞門)。兵太夫(三世團藏)。義平次(中島三甫右衞門)等。

こゝに收めたものは現行の鎌臺脚本である。

この他、この作の飜案に、女團七といふものがある。嘉永五年五月市村座上演の物で、三世櫻田治助(狂言堂左交)の作「新造潯上奇談」といふ。「夏雨濡神輿」といふのは、治助の作の改作で、明治六年七月村山座へ三世河竹新七が補筆し、上演したものである。

(例によつて、本卷の校訂、解說の作製に際しては、文學士山田民夫氏の援助、研究に俟つ所甚だ多いことを附記しておく。大正十四年十月初旬、河竹繁俊しるす。)

伊達競全盛画枚

歌川豊国筆

伊達競全盛曾我（累物語――四幕）

發端　朱雀野京橋の場

役名　絹川谷藏、足利左金吾頼兼、黒澤官藏、鬼貫下部郡平、同徳平、同行平、同逸平、駕籠屋等。

本舞臺後ろ黒幕、上の方、橋の袂を見せ、眞中に藁葺きの辻堂。左右藪畳。下の方に柳の立木。上の舞臺前に浪板。柳の釣枝、すべて朱雀野京橋の體。時の鐘、合方にて幕あく。と直に花道より黒澤官藏、徳平、行平、郡平、逸平、いづれも着流し、大小、頬冠り、尻からげにて走り出て來り。

官藏　こりや〳〵いづれも、最前も申せし如く、この道筋が頼兼殿の歸り道、忍びの路次を幸ひに、絹川諸共心得たか。

下部四人　心得ました。（トこなしあつて、舞臺へ來る。）

行平　イヤ又、絹川であらうが木綿川であらうが、高が知れた、たつた一人。

徳平 郡平　何の、造作もございませぬ。

官藏　ヲヽ、さうとも〳〵。その心得でなければ叶はぬこと。ときに、モウ來さうなものぢやが。

ト、いづれも向うへこなしあつて、

アレ〳〵、ほのかに見える燈しこそ、確に賴兼。

逸平　成程、きやつらに相違ございますまい。

官藏　それならわいらは、この辻堂の後に忍んで、絹川めを。

下部四人　心得ました。

官藏　身共はその內、賴兼めを。

下部四人　官藏さま。

官藏　コリヤ、忍べ。

下部四人　合點だ。

トこれにて下部四人、目貫をしめし、向うへきつとこなし。早き合方になり、花道より駕籠屋二人、聲かけて四つ手駕籠をかつぎ出る、後より絹川谷藏、角力好みのこしらへ、一本差しにて附添ひ、舞臺へ何心なく來り行きかゝる。官藏窺ひ寄つて、駕籠に下げし提灯を切落す。これにて闇になる。

駕屋　ヤア切つた。人殺し、人殺し。

ト言ひながら逃げてはひる。駕籠はそのまゝ置いて行く。この時内より垂れをあげ、足利左金吾頼兼羽織衣裳なりにて、よろぼひ出る。谷藏驚き。

谷藏　ヤ、、君には、お怪我は、ござりませぬか。

頼兼　イヤ〳〵、おりや怪我はせぬが、今のは何であらうな。谷藏、そちも怪我はなかりしか。

谷藏　イヤ、拙者はどうなりましても。（ト言ふうち、後より、）

官藏　頼兼觀念。

ト官藏頼兼に切つてかゝる。谷藏支へる。始終くらやみの仕組。

谷藏　さてこそ、曲者。

ト官藏を引留める、郡平、行平、逸平、德平、扮身にてつか〳〵と出て、谷藏に切つてかゝり、立廻りよろしくある。よき程に、覆より月出る。谷藏官藏を透し見て、

谷藏　ヤア、誰かと思へば黑澤官藏。うぬア、何恨みあつて、頼兼公へ刃向ふのだ。

官藏　恨みはそつちに覺えがあらう。こま事ぬかさず、くたばつてしまへ。

ト切つてかゝる。皆々花やかなる立廻りある。頼兼おろ〳〵して、

頼兼　コリヤ谷藏、怪我せまいぞ。あぶないぞや〳〵。

ト橋の上にてあせり居る、谷藏これを見て、心遣ひのこなし。

谷藏　お氣遣ひなされますな。あなた、それにござつては、おあぶなうござります。その辻堂へなとござりませ。

賴兼　でも、其方が。

谷藏　ハテマア、ござりませ。

賴兼　それならわしは、こゝに見てゐるぞや。

ト辻堂へはひる。官藏、それと行くを、谷藏支へる立廻り。この內知せに付き、月雲隱れする。鳴物、大太鼓入り、海晏寺の唄になる。立廻り好みの通り、この內、官藏手を負ひ倒れる。谷藏彌平、德平を見事に切倒し、官藏を尋ねる思入。行平、逸平、又谷藏にかゝる。兩人とも、又切倒される。賴兼、たどり〳〵出て來り、こは〴〵こなしあつて、

賴兼　谷藏〳〵、怪我はなかつたか。闇うて何かの樣子が知れぬわえ。

谷藏　谷藏はこれに居ります。御前にも、お怪我も遊ばされず、重疊〳〵、有難い儀でござります。

賴兼　ヲヽ、うい奴ぢや。シテ惡者どもはどうしたや。

谷藏　見ん事仕留めましたが、肝腎の官藏めは。

賴兼　ムヽ、取逃したか。

谷藏　イヤ、逃げた樣子はござりませぬが。そこらに居るでござりませう。拙者は彼めを仕留めまして、お後から參るでござりませう。あなた樣には、又もや狼籍者の參らぬ內、ちつとも早くこの所を、お立退き遊ばされませ。アレ、アノ通りを眞直に、南禪寺とお尋ねなされてござりませ。その內には私めが、追付きますでござります。

ト賴兼もぢ〳〵して、

賴兼　ヲヽ、それなら、わし獨り行くのか。

谷藏　アイヤ、私めも、お後から參ります。モシ、南禪寺前の、豆腐屋でござりますぞえ。

賴兼　ヲヽ、然らば行くぞや。（ト賴兼、行きかけて、足の痛むこなし。）谷藏〳〵。どうもこの下駄では、足が痛うて、歩かれぬ〳〵。（ト中腰になる。）

谷藏　御尤もでござります。むさうはござりますが、この草履を召してござりませ。

ト谷藏、履いてゐる草履を脱ぎ、賴兼に履かせて、賴兼が履いてゐたる伽羅の下駄を取りて、手拭にていはへ、腰に結び付ける。

頼兼　そんなら身は、モウ行くぞや、怪我せぬ様に、官藏を討捨てなば、早う來てくれいよ。

谷藏　お氣遣ひなされますな。御前様にも夜道なれば、隨分氣を付けて、そろ〳〵お徒歩なされませ。

ト頼兼、そろり〳〵と行きにかゝる。この内始終靜かなる合方。谷藏思入あつて、

アイヤ、チトお待ち遊ばせ。

ト頼兼立留まる、谷藏、ずつと傍へ來て、

このお姿では、餘り人目に立ちまするから、むさうはござりまするが、憚りながら、これを召しまして。

ト頼兼に自分の手拭にて、頬冠りをさせる事、頼兼立つたまゝ、自由になつてゐる。

サア〳〵、これでは目立ちも致しませぬわい、ちつとも早うござりませ。

頼兼　ム、、これでよいのか。それなら、ちつとも早う來てくれい。

トそろ〳〵と花道へかゝり、兎角歩みかねるこなしあつて、やう〳〵に花道の中程迄來り、少し頭き中腰になる、谷藏を見返り、

少しも早う、來てくれい。

谷藏　イヤモウ、如在はござりませぬ。隨分とお氣をつけられまして、南禪寺前の豆腐屋で、湯なとお貰ひ遊ばして、お休みなされてござりませ。

賴兼　ヲヽ合點ぢや、合點ぢや。それなら谷藏、待つてゐるぞや。

トしづ〳〵と花道へはひる。谷藏、後を見送り、

谷藏　アヽ、馴れもなされぬお獨り道、殊に今宵は月も入り、後先見えぬ眞の闇、お心細いは御尤も。どうぞ首尾よく、南禪寺前の豆腐屋迄お出でなされて。ア、何を言ふにも眞暗闇、これから何でも官藏めを。

ト身繕ひして立上る、これにて後より官藏窺ひ出で、だしぬけに切つてかゝる。谷藏、飛び退きすらりと拔いて、ざつぶりあびせ、

おのれ故に艱難辛苦、今こそ晴らす、思ひ知れ。

ト官藏の足をすくつて、どうと打倒し、

主の罰惡の報い、廓の下駄の返禮まで、かう〳〵〳〵。

ト官藏をさん〴〵に打擲ゑる。官藏、肩息になり苦しむ。谷藏上へ乘つかゝり

賴兼公もこれにて安堵、有難く成佛しろ。

ト とゞめをさして、刀の血を拭ひ、

この上(うへ)は、殿(との)のお後(あと)を。（トしやんと刀を納める。）ソレ。

ト花道へ出る。この途端宜しく

ひやうし幕

ちつとも早(はや)く。

ト尻をからげ、見得。

ヲヽ、さうだ。

ト波の音、ゴン送りにて、谷藏花道へ走りはひる。

跡　シヤギリ

序幕　豆腐屋の場

役名　絹川谷藏、豆腐屋三郎兵衞、足利左金吾頼兼、丁稚豆太、講頭家主市

郎右衛門。豆腐屋娘累、累姉高尾の靈其他。

本舞臺三間の間常足の二重。見附け、押入れ暖簾口。下手は土壁、神棚、大福帳その外色々の帳掛けあり。上の方、障子屋體。いつもの所、門口。この傍に大釜土竈、大桶の上に豆腐箱、石臼、豆の入りし桶など取並べ、門口の外、豆腐の幟を取付け、板塀。ずつと上手、六枚屏風を立廻し、この前の机の上に紙位牌、香花を手向けある。尤も屏風の上に高尾の裲襠掛けあり。幕の內より市郎右衛門、亭主のなり。講中一、二、三、四、この外三四人打交り、百萬遍の珠數を繰り、市郎右衛門は叩き鉦を打ち、音頭を取りゐる。下手に豆腐屋三郎兵衛、七輪に土瓶を掛け、團扇にてあふぎ、この脇の長火鉢に、燗鍋、小さき廣蓋、小皿、精進物など取並べあり、すべて南禪寺前豆腐屋の體。

皆々　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト皆々、珠數を揉みしまひ、市郎右衛門鉦を打上げる。と三郎兵衛、丸盆に茶碗を澤山のせ、煮花の土瓶を持ち出て、

三郎　これはどなたも、御苦勞でござりました。マア、お茶一つ上りませ。

皆々　これは構はつしやるな。構はつしやるな。

ト皆々、宜しくあつて、茶を呑みながら後合方になり、

市郎　時に三婦殿や、アノ妹御の累どのも、モウ、よい娘盛りぢやが、何處ぞ相應な處があつたら、モウ片付けさつしやつたら、よささうなもの。したが、娘ぢや娘ぢやと思うてゐる内に、内證はいつか、年增になられたも知れぬわいの。

三郎　イヤモウ、思召の所は、有難う存じますが、私も今では兄弟と申してもあればかり、どうぞ相應な所へ片付けまして、私の力にも致さうと存じまするによつて、よい人があれば、遣はさうと思ひますが、兎角妹は厭がりまして、まだどつこへも、行かぬ〳〵と申しまする。

市郎　ハテ、それは、あの樣に見えても、どうでも兄御の仕付けぢやゆゑ、まだ一向おぼこと見えます。

講一　ぜんたい累どのは、可愛らしい娘御、三婦どんは仕合せでござるて。

三郎　ハヽヽヽ、なに、左樣でもござりませぬ。

市郎　イヤ、好い器量でござる。アノ、そして、志しの佛と言はつしやるも、三婦どんの妹御ぢやさうなが、そりや累どのゝ、又妹かな。

三郎　イエ、私が直の妹、累がためには、姉でござります。それ故累は、只今寺參りに遣はしました。

講一　ハア、それは、氣の毒な事ぢやが、芝居や何かと違つて、寺參りは面白くないものぢやて。

三郎　イヤモ、左樣でござりまする。

トこの内、愁ひの思入あつて、

ア、、ほんにお燗が、遲なはりました。

トやはり合方にて七輪の傍へ來て、精進物を拵へるこなしあつて、茶釜に入れある德利を出し銚子へ明け、硯蓋に盛つたる肴を一つに持ち、皆々の前へ出して、

何もござりませぬが、一つあがつて、下さりませ。

市郎　これは〳〵、忝い。したが、モウ決して構うて下さるな。心配は無用でござる。

講中　ほんに、三婦どん、構はつしやるな、構はつしやるな。

三郎　イヤモウ、何をあげたうても精進物、それに何もないから酒、どうせ呑めは致しませぬが、ほんの志しばかりでござる。サア、まづお家主樣から、お始めなされて下さりませ。

ト猪口を市郎兵衛の前へ出す。

市郎　イヤ、まづ御亭主から。（ト三郎兵衛の前へ押返す。）

三郎　いや〳〵、ひらにあなたから。

市郎　それならお辭儀なしに、始めませう。（ト猪口を取る。三郎兵衛酌をする。）ヲツト、、、わしも近頃は餘り、深うはたべませぬ。

三郎　でも、この小さい猪口で、六つや七つは。

市郎　イヤ〳〵、さうでない〳〵。

ト市郎兵衛、呑んで、講中の一へ差す。これより捨ゼリフにて順に皆々酒盛りになる。

市郎　時に三婦どの。あぢな事を聞くやうぢやが、けふ志しの妹御に、わしは遂に逢うた事もないが、こりや何かな、小さい時分から養女にでも、遣つてあつたのかや。

三郎　イヤ、左樣でもございませぬ。これは、チト樣子がございまして、お恥しいが廓の勤めを致させておきましたが、ふとよい客が付きまして、來月頃は身の片付きも、出來さうになりましたによつて、悦んでをりましたが、老少不定は致し方ございませぬ。ツイハヤ、病死致しましてございます。（トホロリと泣くを隱す思入。）

講二　イヤモウ、御愁傷は察してゐるが、その妹御の死なれた事を、どうか世間では怪しい取沙汰、確か角力取に殺されたとやら。

ト三郎兵衛、驚きながらこれを打消して、

三郎　ア、モシ／＼、どうしてその様な事がござりませう。妹めは誠病死でござります。それは、ほんの世間の悪口でござりませう。

講一　ウム、成程々々／＼。そんなら、人の悪口ぢやな。

講三　兎角世間では、種々の事を言ふものでござるて。

三郎　左様々々／＼、妹めが少しの内でも高尾になつたと思うて、世間ではその様な噂を致すも知れませぬ。ア、モウ、その様な事は、聞くも厭でござりまする。

ト時の鐘、合方、バタ／＼になり、花道より谷蔵、前幕のなりにて走り出て、門口へバッタリ行き當る。内の皆々、びつくりして．

皆々　ヤア、今の音は何でござるな。

三郎　左様さ、大方犬めが、門の雪花菜食ひに、うせたのでござりませう。

皆々　それにしては、仰山な音でござつたわえ。

三郎　ドレ、豆太めが、桶をそのまゝにしておいたであらう。こなたは。

ト言ひながら門口をあけ、外の谷蔵を見て、

谷藏　ヘイ、チトお賴みがござる。チト心急きでござるが、何卒水を一つ御無心願ひたい。

トト小聲にて言ふ。三郎兵衞思入あつて、

三郎　アイ〳〵、今進ぜませう。

ト思入、内へ入り、手桶を谷藏の前へ持出す。

ソレ、澤山呑まつしやれ。

谷藏　これは忝い。（ト谷藏、柄杓より水を呑む事あつて、思入あつて）

モシ、チト餘儀ない願ひがござる。聞屆けて下され。

三郎　ム、、餘儀ない賴みと言ふは。

谷藏　外でもござんせぬ。どうぞ宿を貸しては下さるまいか。

三郎　ム、、宿を貸せとは。マア、匿うてくれいと、言ふやうな事でござんせうな。

ト言はれて谷藏ぎつくりして、

谷藏　如何にも、お察しの通り、何を隱さう。（ト言ふを、内にて、）

皆々　三婦どんや三婦どんや、三婦どんや。

ト呼び立てる故、双方に氣を兼ね、思入あつて振返り、

三郎　ハイ〳〵今それへ参ります。これ〳〵關取、折が悪い。マア〳〵、わしが案内する迄そこらに忍んで、待つてござれ。

谷藏　左樣なら、宜しくお頼み申す。

ト言ひながら、谷藏表の豆腐の水槽へ腰をかけ、待つてゐる。三郎兵衛はとつかはと内へはひり。皆々へこなしあつて、

三郎　これは〳〵、大きに失禮を致しました。

市郎　イヤモ、いかい御造作にあづかりました。お手前は表で、太う手間取らしやつたが、表へ何ぞ來ましたか。（ト三郎兵衛もぢ〳〵して）

三郎　イヤ、何も参りは致しませぬが、ヲヽそれよ、今申した犬めが、雪花菜桶を返した故、犬を追つてをりました。

皆々　ハヽア、いよ〳〵犬でござんしたか、わしや、誰ぞ來たかと思ひました。

三郎　イヱ〳〵、何も参りは致しませぬが、マア一つ上りませ。（ト銚子を持ち、皆々へこなし。）

市郎　イヤ〳〵、モウ、大きに喰酔ひました。

皆々　わしらも、大きに酔ひました。

三郎　イヤモどうでござりましたか、お構ひ申しませなんだ。これもハヤ、皆心安いに任せましての事、御免なされませ。

市郎　イヤ〳〵、その御挨拶では痛み入ります。時に皆の衆、モウお暇いたさうではないか。

皆々　いかさま、モウ、お暇にしませう。（ト皆々立上る。）

三郎　まだ宵でござる。モウちつと、お話しなされませ。

市郎　イヤ〳〵、わしはまだ、念佛講へ行かねばならぬ。そんなら後の衆は殘つて、わしばかり歸りませう。

ト珠數を持ち門口へ出ようとするを、三郎兵衛留めて、

三郎　アヽ、今お歸りなされては、チト惡うござる。

市郎　そりや、何故でござる。

三郎　エ、サア、アノ累が、歸りますまで皆樣を、お歸し申してくれるなと、申しおきましたによつて、マア〳〵お待ちなされて下さりませ。（ト無理に下におく。）

市郎　ハテさて、それは困つたものぢやが、どうしても先へ、わしは歸らにやならぬ。

ト又立上る。三郎兵衛前へ廻り、皆々を留めて、

三郎　イヤモシ、それぱかりぢやござりませぬ。悪い事がござります。

皆々　そりや、何故でござるな。

三郎　サア、アノ、ヲ、それ〳〵、今外に大きな病犬が居りますぞえ。

皆々　ヤ、、、なに、病犬が。

ト皆々下に居る。三郎兵衛、落着きし思入、

三郎　ぢやによつて、マア〳〵、累が歸るまで、待つてやつて下さりませ。

市郎　いかさま、病犬と聞いては、ア、何より怖い、それなら累どのゝ歸らつしやる迄、マア、奥で話しませう、皆の衆。

皆々　成程、それがようござります。

三郎　さうなされませ〳〵、奥へ行つて、寢るなりと起きるなりと、妹が歸る迄待つてやつて下さりませ。その内には病犬めも、どこかへ行くでござんせう。

市郎　それなら三婦どのや、この珠數はわしが歸る迄、この押入へ入れておきますぞや。

ト戸をあけ、珠數を入れる。

三郎　どこへなと、おかつしやりませ。

講二　それなら奥へ行つて、累どのゝ歸りを。

皆々　待ちませうかい。

市郎　三婦殿。

三郎　マア、ござりませ。

　ト唄になり、市郎兵衛先に皆々暖簾口へはひる。三郎兵衛、後先を見廻し、こなしあつて門口をそつとあけ、小聲にて、

　マア／＼、こちらへはひらつしやれ。さぞ待遠でござんしたらう。

谷藏　ハイ／＼、モウはひつても、ようござりまするか。（トおづ／＼家へはひり、下にゐる。）

三郎　客をば、奥へやつてしまへば氣遣ひなし。マア、落着いて煙草でも。

　と言ひながら、谷藏の前へ煙草盆をおく。その身も傍へ座り、

谷藏　これは／＼、いかいお世話にあづかります。

　ト煙草をのみながら、三郎兵衛をぢろ／＼見てゐる。三郎兵衛思入あつて、

三郎　ときにこなさん、強う取逆上せた樣子だが、それには何ぞ仔細がござんせう。マア、その譯は。

谷藏　サア、樣子と言ふは。

ト差して來た脇差を、三郎兵衛が前へ出し、

これでござんす。

三郎　ナニ、仔細といふは、この脇差。

ト三郎兵衛思入あつて脇差を取り、少し拔きかけ血のしたゝるを見てびつくりし、鞘へしやんと納め、

ヤヽこの血は。（ト互ひに思入）

谷藏　サ、それ故に、お宿の御無心、何と匿うては下さるまいか。

三郎　ムヽ、スリヤ、これ故に宿の無心か。ハテなう。

ト谷藏の體を見て、

ようござんす、匿うて進ぜませう。

谷藏　まづもつて忝い。わしもちと樣子があつて、滅多に身の上は明かされませぬが、その親切な心でも、家處知れぬ風來者匿うたと思はれては、氣持もよくはござんすまいによつて、名前も打明けて。

ト言ふを、三郎兵衛留めて、

三郎　イヤ〱、それは料簡違ひ、かうしてわしが匿つておく心意氣は、ハテお前樣にも、知つてでござんせう。假令、名も無き下司下郎、又は乞食非人でも、匿ふ人の心は一つ、名を聞いたとて聞かぬとて、何もその樣な事に構ひはござんせぬ。又名を聞いて事により、後の、イヤサ、後で聞いても、すむ事ぢやござんせぬか。

ト思入あつて言ふ、谷藏悦ぶこなし。

谷藏　成程、こりや、わしが早まつた。匿うて下されると聞いた忝さ、名迄早く明かしたくなつたのさ、ハヽヽヽ。

三郎　イヤ又、なんぼこんなにしがたく暮し、一合五文か七文の豆を買つて豆腐を引き、輕い生業してゐても、關取殿を見るやうな人の一人やそこらは、匿ひかねるわしでもござんせぬ。しつかりと落着いて、ハテ、いつ迄も居さつしやりませ。

谷藏　重ね〲の御親切、忘れはおかぬ、忝い。その親切に甘へて言ふのぢやござんせぬが、わしばかりでござんせぬで、まだ外にも一人大切なお方がござんすが、それをもどうぞ匿つて貰はにやなりませぬ（ト三郎兵衞思入あつて、）

三郎　ようござんす〱。一人でも二人でも、この三婦が談合、隨分匿うて進ぜませう。

谷藏　そんなら、それも聞屆けて。

三郎　ハテ、大切なるお方とあれば、尚もつて隨分氣を附け匿ひませう。シテ、そのお方は。

谷藏　おツつけこれへござるでごんせう。アノお方さへ匿つて下さりやア、わしやアどうとも、何分共に頼みましたぞ。

三郎　イヤモウ、案じさつしやるな。この三婦が呑込むからは、大船へ乘つたと思つて、マア奧へ行て疲れを休めてござりませ。

谷藏　それは重疊、添い。いかさま馬鹿なもので、少しの内でも心配をした故か、イヤモ、大きに疲れました。

ト足をさすりながら、あたりを見廻し、屛風の褊襠を見て、ぎつくり思入あつて、氣を替へ、

モシ、御亭主、、、おつな事を聞くやうでごんすが、この新佛樣は、お宿のかえ。

三郎　そりやあ、わしが妹でござんしたが、樣子あつて勤奉公に出した所老少不定は仕方のないもの、この間、ツイ病死しました。

ト涙ぐみうつむく。谷藏、さてはと思入あつて、同じくホロリとして、

谷藏　それはハヤ、ひよんな事をお聞き申して、御亭主に無常を起させましたが、かう一夜の宿を無

心致すも、誠に深い緣なればこそ。ドレ、わしもこの佛樣へ回向して進ぜませう。

ト思入あつて、上手の机の前へ向き、手を合せこなし。

三郎　それは奇特な、忝い。さぞ佛も悦ぶでごんせう。ドリヤわしも水を汲みかへて。

ト立つて、茶碗に水を汲んで持ち來る。

谷藏　ドレ、わしが供へませう。

ト茶碗を取り机の上へのせ、手向けして回向にかゝる。うすドロ〳〵になり、屛風の上より燒酎火現れ、裲襠自然と動き出す。やはりドロ〳〵になり、三郎兵衛びつくりして顫ふ。谷藏もびつくり飛退きて、

ハテ、心得ぬ。

ト兩人ちよつと立ちかゝり、氣味合、谷藏ツイと奥へはひる。三郎兵衛も、行かうとして又立戻り、合點の行かぬ思入あつて、

三郎　アノ關取が回向をせし所、合點の行かぬ今の動き樣。ほんに病氣でもあることか、邪險な刄に命を早め、不運な妹が最期の時の心の內、思ひやられて（ト愁ひのこなし）ア、、迷つてをるも尤もだ。おツつけ敵を尋ね出し、この兄が討取つて、そちが恨は晴らしてやる。成佛してくれ、コレ妹。（トちよつとこなしあつて、）

アノ關取が、もしや、ム、、ハテなア。（ト思案しながら、表をすかし見て、）
モウ累が歸りさうなもの、又豆太めが阿房つくして、道草食つて居るであらう。

ト合方、生け殺し、唄になり、花道より累、着流し振袖娘にて、後より丁稚豆太、前髪丁稚のこしらへにて、籠に鯛鱧などを入れて持ち出て來り、花道にて、

累　ナウ豆太、この樣にマア遲うたつたが、どうしようぞいの。そしてマア、あのお方は、何故にあの樣に、急がしやんしたであらうぞいの。

豆太　アノ關取はね、飛脚にでも雇はれたか、但しやア虫氣付いたのを知らしに行くのか、何だか知らねえが、旦那さんに叱られたら、お前があの人に見惚れてゐて、それで遲くなつたと、わつちやあ正直に言ひますぜ。

累　ヱ、、モウ、それ云うてよいものか。

豆太　それでも、さうだもの。

累　ぢやと言うて、その樣なこと、兄さんに言うてよいものか。どうぞそのやうなこと言うてたもんなや。

豆太　イ、ヱ、わつちやあ、つい言ふなとばかりぢや、厭だ、厭だ。

累　そんなら何なと、そなたの望みのもの買うてやらう程に、その樣な意地惡のこと言やんなよ。

豆太　そんなら累さん、どうぞわつちに、博多の帶を買つておくんなせえ。

ト大聲にて言ふ。累うなづき。

累　ヲヽ、買うてやらう、買うてやらう。その代り、今の樣なこと、あの兄さんに悟られぬ樣にしてたもいの。

豆太　承知さ、承知さ、わつちにもその代り、博多の帶を忘れなさんなよ。

累　何のいの、そりや忘れはせぬ程に、そなた必ず途中のことを、言やんなや。

豆太　アイ／＼、くどいわいの、言やあしねえよ。（ト言ひながら、累が尻をつねる。）

累　モウ何をてんがふ、止しやいなう。

ト累先に豆太付いて、本舞臺へ來て門口を覗き、累氣味惡き思入。

アレ、豆太、見やいの。兄さんが、あんな怖い顏をして、ゐやしやんすによつて、どうもわしやはひり難いわいの。

豆太　エヽ、そんな事言つてゐるだけ遲くなりやす。きり／＼、はひりなせへ／＼。

ト無理に内へ入れる。累思入あつて、こは／＼三郎兵衞の傍へ行く。

累　兄さん、只今、歸りましたわいなア。

ト　おづ〳〵して居る。三郎兵衛、顔を上げて不機嫌の體。

三郎　大分遲かつたな。

累　アイ。

三郎　コレ累、叱るぢやない、言つて聞かせる事がある。マア、下に居やいの。

累　何でござんす。

ト　こはさうに三郎兵衛が傍に座り、締めてゐる腰帶を捻り、もぢ〳〵してゐる、

三郎　外の事でもないが、これからはチト、氣を付けるがいゝわな。マア若い女の、暮れ方に出歩くのは、餘り出來た事でもないぞや。その上そなたは、兩親は無し。

ト　ホロリとして、

モウ今では、同胞とてもそなた一人、この樣に異見を言ふも、みんなそなたが大事故、必ず必ず惡う聞いては、そなたがためにならぬぞや。

累　アイ〳〵。（トロの内にて返事してゐる。）

三郎　今度から、氣を付けたがよいぞや。（トこの内、豆太をかしみあつて、）

豆太　なに、累さんはね、用があつて、ツイ遅くなつたのさ。
三郎　何があつた篦棒め、詣りの道で、何の用があるものか。
豆太　イヽエアノ、遅くなつた譯はねえ、累さんがお寺へ行つて、それから何でもマア、お墓へ行つて。
三郎　篦棒め、寺詣りをすれば、墓所へ行くは知れたことだわ。
豆太　エヽ、旦那さんも忙しねえ、それからまだ後がござりまさあ。
三郎　それから、どうした。
豆太　サア、それからずつとマア、お墓を拜んでね、それからアノウ、和尚様に逢つてね、話をしてね。

ト言ふ内、累めつたな事をいふなと思入。

三郎　そして、どうだ。
豆太　サアそれから、お寺の歸りに見やしたね。

トこなしあつて、

さうばかりさ。それで、遅くなりやした。

三郎　何を言ふやら、ねツから分らねえ、そして見やしたとは何を見た。

豆太　アイ、見たのは、見やしたのさ。

三郎　ヱヽ、何を見たかと言ふことよ。

豆太　ヱヽ、何とか言つたつけ。それ〳〵、べんべらを見たと言ふことさ。

三郎　何だ。べんべらとは何の事だ。

豆太　それでも、べんべらと言つたつけねえ、累さん。

ト累を見る。累何も言ふなと、三郎兵衛に見えぬやうに、手前の帯を叩き、仕方にて豆太に呑込ます、豆太、成程さうだといふ思入にて默つてゐる。

三郎　何を言ふか、さつぱり分らぬ。累、アリアマア何の事だ。

ト言はれて、累もおど〳〵して、

累　サア、あれはな。エヽ、モウ豆太が、何の言はいでもよいことを。（トじゆつなき思入。）

三郎　何のこツた。やつぱり分らぬ。これさ豆太、そのべんべらと言ふは、どんなものだ。

豆太　サア、そりやあね、關取さ。それに累さんが、ヲツト博多。

ト思入あつて默つてゐる。三郎兵衛、合點の行かぬ思入。

三郎　何だか、われが言ふ事は、俺にやあさつぱり分らねえ。

豆太　ナニ、よく分かつてゐるけれど。

三郎　それ程分つてゐる事なら、何故、分る様に言はぬのだ。

ト累氣を揉み、豆太に言つては惡いと思入にて言ふ。豆太これに心付かず、

豆太　サア、その關取に、累さんが惚れて。

ト累これを留めて、術なき思入。三郎兵衛、ムヽト思入、累をぢろ〳〵見て、

三郎　ムヽ、それからどうした。

豆太　アイ、それからそのべんべらを。ヲヽ、それ〳〵、べんべらぢやなかつた、絹川〳〵。

ト言ふ故、累、これをやらぬといふ思入にて、又帶をたゝいて見せる。豆太呑み込み、

オツト、博多。(トこなし。三郎兵衛ぢれて、)

三郎　たはけめが、それからその絹川が、どうした。

豆太　サア、その絹川を、見たばかりさ。まだちつと言ひたい事があるけれど。

三郎　言ひたい事があるなら、言つたがよいわさ。

豆太　それなら言ひやせう。その絹川を、オツト博多。

トしょげる。三郎兵衛、大概推量したる思入にて、

三郎　そりやあマア、何だか分からぬ話し。それはさうと、コレ累、おぬしが留守で、困つたことがある。

累　何でござんすえ。

三郎　サア、外の事でもないが、今宵は高尾が逮夜だから、何ぞ拵へて佛へも供へたり、又あの衆にも、振舞はずばなるまいと思うて。

累　それ〳〵私も、その様なことがあらうによつて、ちつとも早う歸らうと思うたれど、ツイ何やかやで遲うなつたわいなア。

豆太　さうさね、そんな事も氣になつたが、又そりやあアノ關取も、氣になつたのさねえ。

累　エヽ、又かいなう。

豆太　ヲツト、博多々々。そりやあさうと旦那さん、わしがね、そんな事もあらうと思つて、累さんは氣が付きなされねえから、わしが、いゝ物を買つて來た。

三郎　ムヽ、阿房めが始めて出かしをつた。ドレ〳〵、何を買つて來た。

豆太　マア、こんな物さ。

果　ほんに、よう氣が付きやつたなう。

ト言ふ内、以前の籠を取つて來て、

豆太　そら、ぴん〳〵する鯛よ。そら、鱸。

ト三郎兵衛の前へ魚を並べる。三郎兵衛、果、あきれしこなし。

三郎　イヤハヤ、話にもならぬ馬鹿を盡しをるわえ。

果　ほんに、あんまり呆れて、物が言はれぬわいなう。

三郎　何ぼわれが阿房でも、精進物ばかりでやる事は、辨へてゐさうなもの。殊に今宵は大事の逮夜。それに鯛の鱸のと、コレ、何の役に立つものだ。たはけ面めが。

ト叱り付ける。豆太、腹を立て三郎兵衛の傍へすりより、

豆太　コレ、旦那さん、お前方ア、私が心意氣を知らねえと言ふもんだ。マアよく物を積つて見やしやれよ。高尾さんは、全盛の太夫とやらで、毎日々々いゝ物ばかり食つてゐなすつたらう。それだによつて死んだとて、假令お前等が、毎日々々食はれもしねえ、牛蒡や人參でもいゝが、アノ高尾さんが嬉しがらうと、かういふ旨い鯛や、鱸の樣な物でも振舞うたら、ちつとは食付きなさらうと思つて私が、段々心遣ひして買つて來やした物を。その心入れも知らねえで、旦那

さんは馬鹿だ、馬鹿だ〳〵だ。

ト三郎兵衛の方へ指をさして笑ふ。三郎兵衛、むつとして、

三郎　たはけ面め、阿房のくせに、好きな痴事言はせておけば、方圖がない。

ト傍にかけある棕櫚箒で　豆太をくらはせる。豆太わつと泣きながら、門口へ逃げて來て、

豆太　旦那さんが打つたア、おらア何にも、惡い事をしやしねえものを、旦那さんが打つたア。ワアア、。

ト大聲あげ、泣く。

三郎　うぬ、まだぬかしをるか。（ト又打たうとするを、果留めて、）

果　マア〳〵、堪忍してやらしやんせ。今日は姉さんの、逮夜ぢやござんせぬか。兄さん、モウ料簡してやらしやんせいなア。

三郎　ム、いかさま、おぬしがさう言へば、今日は常の日とは違ふによつて許してやる。阿房め、重ねてきつと嗜め。今日だによつて許してやる。

豆太　アイ〳〵、モウ今度から、高尾さんの逮夜に、魚を買ふと言ひやすめえから、御免なさいましヨウ〳〵。

トめそ〳〵泣く。

三郎　ヱヽ、許してやると言ふに、まだほえるか。

杲　コレ豆太、モウ、ちやつと默りやいなう。その樣に泣いてゐやると、又兄さんがな。

ト思入。豆太、すゝり泣きながら、

豆太　アイ〳〵、モウ、泣きやあしませぬヨウ。

ト泣きやむ。この内合方になり、奥より谷藏出來り、

谷藏　モシ、御亭主、わしやあどうでも、行つて見て來ませう。

ト三郎兵衞、ちよつと振り向いて又杲に向ひ、

三郎　ほんに杲や、おぬしに逢はせる人がある。このお人はわしが前方の馴染みであつたが、今度こちらへござつた故、尋ねて來て下されたのぢや。モシお關取、こりやア私が妹でござんす。近付きになつて下さりませ。

杲　ヱヽ、そんなら、あのお方は。（ト思入。谷藏も杲も、ぢろ〳〵見て思入。）

谷藏　成程、可愛らしい、よい妹御でごんす。

杲　初めてお目にかゝりました。

三郎　コレ妹、このお人も、マア俺が家に、逗留さつしやる筈だによつて、おぬしも隨分氣をつけて、何なと御馳走申してくりやれ。

果　アイ〳〵、私もさう思つて、ゐるわいなア。

ト果、豆太の傍へ寄り、最前見たのはあの人ぢやと暫く思入あつて、悦ぶこなし。豆太もきよろ〳〵見て、

豆太　ドレ〳〵何處に。ア、成程〳〵。べんべらだ、べんべらだ。

果　これいなう、何の事ぢやぞいの。

トそつと叱る。又果、谷蔵の傍へ行き、色々見る事あつて悦び、我を忘れて、

モシ、お客さん。

谷蔵　アイ、私が事かえ。これからはお世話になるでごんせう。

果　何のまあ、お世話な事がござんせう。何卒私が宅に、二日も三日も、十日も一月も、十年も百年も逗留してゐて下さんせ、さうなりや私も嬉しい、

ト言はうとして、三郎兵衞を見てもぢ〳〵して、

サア、事の樣な物のやうに、存じまするわいなア。

谷藏　どうしても、落着いてゐられない。ドリヤ一走り行つて來ませう。

ト立上る。三郎兵衞留めて、

三郎　アイヤ、滅多に外へは、出さつしやりますな。

谷藏　ハテさて、最前話しておいた大事の御人、モシ道で迷うてござらうかと。

三郎　ム丶、案じられるも至極尤も。しかしこなたが行かれては、又その後で私が氣遣ひ、こりや、私が迎ひに行つて來ませう。

谷藏　イヤ〱、それでは却つて氣の毒。ナニ一走り、大事ごんせぬ。

ト又門口へ出ようとする。累、色々思入あつて、

累　アノお前、たつた今、おいでなさんしたではござんせぬか。それにモウ、お歸りなさんすかえ。マア〱、兄さんもあの樣に言うてぢや程に、お前は家にござんせいなア。

谷藏　イヤ〱、御亭主さんは、見た事もない御人。どうしても私が一走り。

三郎　ハテさて、それは悪い料簡、常とは違うて今宵のしだら。それとも是非行かつしやりあ、私も一緒に行かねばならぬ。ハテ、私も豆腐屋の三郎兵衞、鷺を雁と見違へもしやすまい。マア、とつくりと落着いて、關取留守を頼みましたぞ。

ト立上り、身繕ひする。

谷藏　ハテ、何事も、粋な御亭主。頼もしい親切を、無に致すも、どうやら異なもの。そんなら御亭主、よい樣に頼みましたぞ。とは言ふものゝいかい御苦勞。

三郎　何の〳〵、大事ごんせぬ。

累　兄さん、お前、そんならあなたの代りに、行かしやんすかえ。

三郎　オヽサ、俺が行く。その內、おぬしやあアノお人に、何ぞ御馳走申してくりやれ。

ト思入あつて、門口を出てこなしあつて、

そんなら聞取、行つて來ますぞ。私が留守に何なりと用があるなら、遠慮なく妹に言うて達して下され。コレ累、よく氣を付けて御馳走申しやれ。お客人。

谷藏　待つてゐます。

三郎　それ。

ト三重にて、三郎兵衞尻を端折つて花道へはひる。谷藏、累、豆太、後を見送り。静かなる合方。

豆太　サア、累さん、何でも言ひなせえ、エヽ埒の明かぬ。

ト小聲にて言ふ。累、谷藏に心意氣あつて、やう〳〵心付いたる思入にて立上り、茶臺へ茶碗をの

せ持つて來て、茶を汲みながら谷藏に見惚れて居て、茶をこぼす。氣の付かぬこなしにて谷藏が傍へ寄り、茶臺を出し、

果　ハイ、お茶をあがりませ。

谷藏　アイ、こりやあ、おかたじけ。

ト素氣なく取つて下におく。果、又煙草盆を持つて來て、火を入れて谷藏が右の方より、

果　ハイ、お煙草盆。

ト谷藏が顏を見ながら出す。谷藏も果をちよつと見て、

谷藏　アイ、これは。

ト言つたばかりで、果手持なく、又こちらへ來て以前の如く、又茶を持つて來り、

果　アイ、お茶。

谷藏　これは、度々。

トにつこりと思入して、茶を取る。果、又こちらへ來て、外の煙草盆に火を入れ、以前の如く谷藏が前へ出し、

果　ハイ、おたばこぼん。

ト出して、谷藏の顏に見惚れ、うつとりしてゐる。

谷蔵　これは〳〵、度々お世話。モウ〳〵、構はしやつて下さるな。

ト谷蔵、累を見て笑つてゐる。累もぢ〳〵して恥しき思入。豆太、もどかしいといふ思入にて、をかしみ色々あつて、谷蔵の後から、

豆太　思つてばかり、ゐたわいなア

ト谷蔵に抱付く　谷蔵びつくりして、

谷蔵　何を、てんがうな。

ト振返り見て、につこり思入。

ム、、ハ、、、。おどけた小僧だ。

ト笑つてゐる。累、氣の毒なる思入。

累　コレ豆太、そりやあまあ、何のことぢやぞいなう。

ト言はれて、豆太こちらへ來ながら、

豆太　それだによつて、累さん、早くかうしなせえといふに。お前、恥しがつてばかりゐて、役に立たねえもんだから、俺がかうして見せたのさ。

累　ぢやと言うて、その樣な事を、どうしてまア。

豆太　何の造作もねえ事さ、ソレ、かうしなせえ。

ト いやがる累を、無理に谷藏の傍へ寄せて突放すと、累谷藏にこけかゝる。

谷藏　これは、粗相千萬。

ト言ひながら思入。累こちらへ退き、もぢ〳〵して、

累　イヱ、粗相でもござんせぬ。あのナ、私しやお前に、ヱヽ、づんとモウ。

ト恥しき思入。袖にて顔を隱しこなしある。谷藏、さてはといふ思入あつて、わざとしら〳〵しく、

谷藏　ムヽ、私にどうしたと。

累　サア、アノ私しや、お前に惚れました。アイ、眞實お前に、惚れたわいなア。

ト思ひ切つて言ふ。

谷藏　ムヽ、何だと。

ト累と顔見合せ、

スリヤ、眞實に、アノ私に。

累　サア、過ぎし龍田の祭りの夜、角力の崩れに思はずも、お前にちやつと行當り、見れば見る程しやんとして、愛しらしいと思ふたりや、恥しいやら懐しいやら、あんなお方に連添うて、水仕飯炊きしてなりと、一生仲よう暮したら、女子に生れた本望ぢやと、思うた甲斐も情ない、

人目の關に隔てられ、殘り多いと悲しさに、歸るも忘れてをりましたが、せめてお名なと聞いたなら、後で又逢ふ印にと。

豆太　それ〳〵、私が氣を利かせて、アノ角の茶屋で絹川さんと聞いて來て、累さんに言つたから、それでお前と知れやした。

累　そして家へ戻つても、明暮れにお前のこと、ほんに忘るゝ暇もなう、床しう思へど兄さんが、知らしやんしたら恥かしいと、包むに餘る戀路の習ひ、懷しいにも逢ひたいにも、何處にどうしてゐやしやんすやら、知れぬ物をと諦めても、思ひ切られぬ心の迷ひ、觀音樣へ願掛けて、どうぞ逢はせて下さんせと、願うてこがれた甲斐あつて、今日姉さんの墓參り、歸る道にて行逢うた、その嬉しさに引替へて、ツイに詞もかけぬお前、マア何と言うたらよからうと、兎や角う思うたその內に、モウ何處へやら行かしやんして、後にうつかり張合拔け、歸りが遲うなりましたと、豆太が言ふにびつくりして、こは〳〵歸れば兄さんの機嫌も惡う、案じてばかりをりましたに、マア思ひがけない、三年こがれた絹川さん、よう尋ねて來て下さんしたなア。

トこの內始終　腰帶を捻り色々思入ある。これにて谷藏、思案の思入して、

谷藏　ム、、姉の高尾が恨みもあり、妹の累の慕ふもあり、ハテ爭はれぬ事のしだら。累どの、眞

實こなたがこの私に、さういふ心があるにもせよ、どうもそれは。

累　そんなら、お厭でござんすかえ。私が樣な田舍もの、そりや尤もでござんすが、私しやお前のお傍にゐたいわいなア。

谷藏　イヤ、嫌ふではなけれど、これには譯のある事さ。

累　エ、、その又、譯と言ふわえ。

谷藏　サア、それは。（ト思入あつて、氣を替へ）ハテ、こなたがその心なら、私も兄貴に相談の上、どうなりとならう心さ。

累　エ、、嬉しうござんす。（ト悦ぶこなし。）

谷藏　それは格別、あのお方、モウござりさうなものだ。

ト誂への合方、ゴンになり、花道より前幕の賴兼、足の痛むこなしにて、そろ〳〵と出て來り、よき所へ留り、

賴兼　ア、、しんどや〳〵。この谷藏はどうしてくれる事ぢややら。アイタ、、、ア、、モウしんどや。アイタ、、、。ア、モウ、とんと節分の座敷を歩く樣で、足が痛うて歩かれたものぢやない。（ト言ひながら、よち〳〵歩き、又立留り、）ア、、いかう空腹になつて咽喉が乾いてどうに

もならぬ。この邊りに葛水でもあればよいが。ア、それにしても太夫は、どうしやつたか、アア逢ひたいものぢや。（ト又そろり〳〵歩き舞臺を見て、）マヽ、あれに見ゆるが、大方谷藏が言うた豆腐屋であらう。コレ、そこ開けい、開けい。

〽花道より大風に言ふ。豆太聞付け、

豆太　何だ。今時分に何處の人だ。モウ、雪花菜も犬にやつてしまひ、油揚も賣切れた。

ト わめく。賴兼これに構はず。

賴兼　こゝ開けい、開けい。早う開けてくれ、誰も居らぬかやい。

ト言ひながらやう〳〵門口へ來る。谷藏これを聞き、あわてゝ出て門口をあけ、

谷藏　これは〳〵、さぞ、お疲れでございませう。まづ〳〵、これへ。

ト言ひながら賴兼の手を取り、内へ入れる。

賴兼　ヲヽ、谷藏か、谷藏か。ヤレ〳〵嬉しや。

ト家へはひりながら門口にて躓き、直にそこへ倒れる、谷藏心配して、

谷藏　アヽ、お危うございます。何處も打ちはなされませぬか。

ト賴兼、やはり倒れしまゝにて、

賴兼　イヤ〳〵、打ちはせぬが、モウしんどや、しんどや、咽喉が乾いてどうにもならぬ、湯を一つ

くれい〳〵。

谷藏　ハツ〳〵。

ト立つて茶碗をゆすぎ茶を汲んで、茶臺にのせて持來る。賴兼取つて呑み、

ドリヤ、まづお洗足を。コレ〳〵累どの、どうぞ綺麗な盥へ、湯を一杯。

累　アイ〳〵、コレ豆太、アノ私が手水盥へ、湯を汲んでおじや。

ト豆太、不承々々に、

豆太　ヲイ、いめえましい。よく人を使ひ立てる。

トロ小言を言ひながら納戸口へはひる。賴兼茶を呑みじまひ、

賴兼　アヽ、これでチト落着いた。イヤモウそちを尋ねて、大抵難儀した事ではないわい。

谷藏　成程、左樣でござりませう。私も早う參りませうと存じたれど、お蔭で大きに手間取りさした故、御前には最早、これへお入りと存じまして、お先へ參りましたのでござりまする。

賴兼　ヲヽ、さうであらう〳〵。シテ、宮藏めはどうしたのぢや。

谷藏　イヤモウ、手も無く仕留めましたが、憎いやつでござります。

賴兼　ヲヽ憎いやつぢや、憎いやつぢや。から皆仕留めたか、出來した〳〵。

ト豆太、盥へ湯を入れ持つて來る。谷藏取つて、捨ゼリフあつて、

谷藏　まづ、お洗足をなされませ。左樣なされますると、大きにお疲れも退きまする。

頼兼　ヲヽ、洗うてくれ、洗うてくれ。

ト足を出す。谷藏捨ゼリフにて頼兼の足を洗ひ、頼兼の冠りし手拭にて拭かうとして、思入あつて、懐中より紙を出し、頼兼の足を拭きやり、盥を片付け、

頼兼　ヲヽ、これでよい／＼。アヽ、睡たい、睡たい。（トとろ／＼してゐる。）

谷藏　いかさま、左樣でござませう。しかしこゝは、餘り端ぢか。マア／＼、あれへ、ゐらせられませう。

頼兼　ヲヽ、合點ぢや、合點ぢや。

ト起上り行かうとして、歩かれねこなし。谷藏、介抱して上の方へ連れ行き、捨ゼリフにて枕など出してやる。頼兼直ぐに横になり、豆太を見て、

これ／＼、足をさすつてくれい、さすつてくれい。

豆太　ヌヽ、押しのつえゝ、俺ア厭だい。

トつんとしてゐる。累氣の毒なる思入。

累　コレ豆太、何故、その樣に憎體口を言やるぞいなう。

谷藏　アイヤ、構はつしやるな。私がさすつてあげませう。

ト累の足をさすつてゐる。累すや／＼寢入る思入。

ヤ、モウおよるさうだ。ほんに、さうでもあらうかい。毎夜廓にござつては、とつけりともおよらず、殊に今宵は馴れもなされぬ闇の道、お供でもある事か、たつたお一人。ア、さぞや、御難儀でござりませう。それはさうと、今お目が醒めたら、お湯漬でも上げずばなるまい。コレ累どの、どうぞこのお方に、お湯漬を上げたいもんでごんす。

累　アイ／＼そんなら、せめてお湯漬なと清うして、上げませうわいなア。サア／＼豆太、おじやいなう。

豆太　エヽ、おめえ、打捨つておきなせえな。何の、知りもしねえ人に、そんなに構ふことはねえわな。

ト累氣の毒なる思入。

累　エヽ、まだ、その樣なことを。チト、たしなみやいなう。何であらうと來やと言へば、おじやいなう。

ト豆太、不承々々に口小言を言ひながら後より付き、唄になり奥へはひる。直ぐに奥にて、

市郎　三婦どんや、三婦どんや。

ト聲する。谷藏聞き、頼兼をゆすり起す。頼兼起上り、きよろ〳〵そこらを見て、

頼兼　何ぢや、何ぢや。

谷藏　アイヤ、これにござりましては、人目に立ちます。御不自由ながらしばしの内、アノ押入れに、お忍びなされてござりませ。

ト言ひながら、頼兼を手早く押入れの中へ入れる。奥より市郎右衛門出て來ながら、

市郎　ヤレ〳〵、三婦どの、大きに食べ醉つたな。ハヽヽ、三婦どん、わしやア、モウ歸ります。最前の珠數を下され。

トそこらを見て、三郎兵衛がゐぬ故、

ハヽア、留守ださうな。どりや、わしが出して。

ト戸棚へかゝる。谷藏つか〳〵と入替り、あわてゝ留めて、

谷藏　こりや、何をさつしやる。

ト市郎右衛門びつくりして谷藏を見て、

市郎　ヤア、こなたは、どこの人ぢや。

谷藏　サア、わしやこゝの、ヱヽ、親であつた。

トどぎまぎして分らず言ふ。市郎右衞門、合點の行かぬ思入。

市郎　何ぢや、こなたが、こゝの親ぢや。

谷藏　イヤ、サア、ヲヽ、それ〳〵、こゝの宿六と心安い者でごんす。

市郎　ムヽ、はてな。わしやア歸ります。御亭主が歸られたら、よう言うて下さい。

谷藏　勝手次第に、歸らつしやい。なにも貴樣に用はごんせぬ。

市郎　アヽ、歸ります〳〵。どりや、鉦と珠數を。

トヌ押入へかゝる。谷藏市郎右衞門を突退け、押入を圍ひ、

谷藏　假令、珠數でも金銀でも、この押入れはこの家の物、殊に亭主の留守といひ、開ける事はなりませぬ。

トヌ押入へかゝるを谷藏さゝへて立廻る、この內烈しき立廻り、合方になり、花道より三郎兵衞、以前のたりにて、菓子袋を手に下げ出て直ぐに舞臺へ來り、門口をはひり、この體を見て取りおさへる仕組よろしく、

市郎　イヤ、何でも珠數を。

ト市郎右衞門、こけて起上り、

三郎　コリヤ、大家さま、何事でござります。

市郎　ヤア、三婦どん、聞いて下され、私が歸るによつて、最前の珠數を出さうと思つて、アノ押入れを開けようと思へば、この客人が私を捕へて投げられたが、私も家主市郎右衞門ぢや、これぢやアすまぬ〳〵。

三郎　ハヽヽ、そりやあ、私も見てゐましたが、今こなさんが、ソレ、その煙草盆にけつまづいて、こけられたのでござります。何の誰が投げるもんでござんす。

ト市郎右衞門思入して、

市郎　ハヽア、さうでござつたか、ハヽヽヽ、私が一人で轉んで、コレ三婦どん、珠數と鈺を出して下され。モウ歸りませう、歸りませう。

ト三郎兵衞何心なく戸をあけようとする。谷藏留めて、

谷藏　待つた、この戸棚は、滅多には開けられまい。

三郎　スリヤ又、何故に。

谷藏　サア、戸棚の內の、伊達小袖。

三郎　ムヽ、スリヤ、この戸棚に。

トうか〳〵と戸棚を開けると、吹替の顔が居る故、びつくりして手早くしやんとしめ、

成程、滅多には開けられぬ。

トこなし。谷藏、落着く思入。

市郎　三婦どん、珠數は。

ト言ひながら戸棚へかゝる。三郎兵衛ちよつと突退ける。市郎右衛門前へたぢろく間に、三郎兵衛手早く戸棚をあけて珠數を出す。市郎右衛門起上る。この途端宜しく、

三郎　そりや、珠數、鉦。

ト投げてやる。市郎右衛門取つて、捨ゼリフにて懷中へ捻込み、思入にて段々に門口へ來て、

市郎　何でも怪しい、戸棚の内。

ト押入の方へ思入。三郎兵衛、あわてゝ市郎右衛門を門口外へ突出し、しやんと戸をしめる。

三郎　ようござりました。（ト戸を押へてゐる。）

市郎　ようござりましたもすさまじい、人を外へほかし出して、いけたやつらではない。

トぶつくさ口小言を言ひながら、[illegible]方になり、花道へはひる。谷藏三郎兵衛後を見送り、ホツトこなしあつて、前へ出て下にゐる。

谷藏　これは、大きに御苦勞をかけました。時に今の伊達小袖、何と匿うては下さるまいか。

三郎　知れたことさ。最前も言ふ通り、匿はひで、どうするもんでござんす。

谷藏　忝い〳〵。そんなら御亭主、戸棚の内をとつくりと。

三郎　成程、戸棚の内の伊達小袖、邊り近所で滅多に着られぬ物、私が隨分氣をつけて、仕つけぬ所へ入れておき、鼠に食はせぬやう、人の守りをつけて、匿ひませう。ハテ、私も豆腐屋の三婦、ちつとも氣遣ひさつしやりますな。

トツカ〳〵と行き、押入へ錠を下す。谷藏落着くこなし。

谷藏　ア、、何にも言ひませぬ。忝い〳〵。

三郎　イヤ、時に最前、妹へ供へようと思つて、菓子を買つて來ましたが、どりや、供へてやりませうか。

ト立つて、菓子の袋を机の前へ持ち行くを、

谷藏　モシ、その菓子を、私に供へさせちやあ下さるめえか。

三郎　ア、、それは忝い。奇特な事を言うて下さる。サア〳〵こなた供へて下され。わしやあ、水でも代へてやりませう。

ト合方にて、三郎兵衞水をかへて持ち來る。谷藏は右の菓子を供へて、回向しようとする。雨窓を

下し薄ドロ〳〵になり、屏風の上より燒酎火燃ゆる。屏風にかけてある裲襠、以前の如く動く。大ドロ〳〵になり、谷藏驚き、後ずさりして宜しく見得。三郎兵衞、谷藏が後につき、合點の行かぬ思入。谷藏、色々あつて一腰を出し切つてかゝり、立廻りあつて宜しく一刀を投出し、平伏して見得よく留る。三郎兵衞きつとこなし。

谷藏　エ、まだ浮ばぬか、高尾殿、モウ浮まつしやい。成佛さつしやい。無理非道の譯でもなく、大事の君のおため故、是非なく私が思はぬ殺生。その執念を殘らず晴らし、成佛さつしやい。浮んで下せい。

ト切拂つてどうとなる。と屏風の蔭にて、

高尾　エ、恨めしい絹川どの、成佛厭ぢや。浮まれぬわいなア。

ト聲をふるはして言ふ。三郎兵衞、この內、後にてさてはと思入あつて、脇差を隱し持つて、暖簾口に窺ひゐる。谷藏刀にて切拂ひ〳〵する。ドロ〳〵止む、裲襠の動きも留まる。

谷藏　ハテ、恐ろしい。

ト三郎兵衞をちよつと見て、思入あつて氣を替へ、どつかりとなり。

三郎　イヤモシ、わしやあチトこなさんに、聞きてえ事がございんす。

谷藏　何でござんすな。

三郎　どうぞ、今こそこなさんの名を、聞かしちやあ下さるめえか。

谷藏　ムヽ、いかにも、私が名は隨分言うて聞かせませう。宵にさへ明かさうと言うた、私が名前。何を隱さう、わしやあ絹川の。

三郎　ムヽ、絹川の、何と言ひます。

谷藏　谷藏さ。

三郎　何、絹川の谷藏とな。（ト身繕ひして、）さてこそ尋ぬる妹が敵、それとも知らず心を碎き、匿うて迄やらうとしたは、今々思へば口惜しい。モウのがされぬ。サア、立上つて勝負々々。

谷藏　三婦殿待つた、早まるまい。

ト言ひながら隱し持つたる刀を拔いて切つてかゝる。谷藏どつこいと受留め、

三郎　卑怯な事を。

ト言ひながら切つてかゝる故、谷藏、詮方なくあしらうて、誂への鳴物にて、少し立廻りある。この内奥より、果、出かゝりゐて、この體を見てびつくりして、有合ふ二枚屛風を持つて來て、兩人切合ふ中を色々留め、切結びし所を屛風にて押へ、よろしくとめて、

果　マア〳〵、待つて下さんせ。お二人ともに、危ないわいなア。

三郎　妹放せ。そちがためにも姉が敵、打つて恨みを晴らすのぢや。サヽ、放せ〳〵。

杲　イヱ〳〵、さうでもあらうけれど、マア〳〵待つて下さんせ。

ト押付けて谷藏を庇ふ。谷藏、こなしあつて、

谷藏　三婦どん、かう言へばどうか私が、卑怯のやうにも思はつしやらうが、全くさういふ譯ぢやござんせぬ。今お身樣の手にかゝり、打たれて進ぜるは安けれども、それぢやあ、アノ押入れが心殘り、卑怯とも言へ、未練とも言はつしやい。命が惜しい、死にともない。サ、こゝの所を推量して、この一らつの納まる迄、どうぞこの場の敵打ち、延ばしちやあ下さるまいか。

ト思入にて言ふ。三郎兵衞も成程さうであらうといふ思入あつて、

三郎　成程、さう言はれりやあ、命が惜しいも尤も、ようござんす。望みの通りこの場の勝負、延ばして進ぜう。

谷藏　そんなら今のを、聞分けて。

ト谷藏、悦ぶ思入あつて、

忝い、現在敵のこの谷藏、見のがしにさつしやるは、寶の山へ入りながら、手を空しくするこの場の仕儀、さぞ、口惜しうごんせうなう。その無念をもぢつとこらへ、延ばしてやるとの

志し、忝い、〳〵。

三郎　イヤサ、たま〳〵手に入る妹が敵、滅多に一人手放して、取りにがしてはならぬによつて、延ばして進ぜるその代り、のがさぬ樣にしつかりと、目代をつけて進ぜるが、それ合點なら延ばして進ぜう。（ト累へ思入あつて言ふ。）

谷藏　のがさぬ樣に、目代とは。

三郎　サア、その目代はこの累。

累　エヽ、スリヤアノ私を、絹川さんに。何と聞分けのよい、兄さんであるわいなア。

ト悦ぶ思入。

谷藏　ムヽ、そんなら私が目あかしに、この妹の累どのを。

三郎　サア、姉の恨みがあるにもせよ、あれ程こなたを慕ふ妹、その心根がいぢらしい。殊に今ぢやあ、父にも母にも同胞にもたつた一人、さぞ心細からう程に、姉の恨みがあればとて、この兄の三婦が許す、谷藏殿、何と女房に持つてやつちやあ下さるまいか。

谷藏　そりやハヤ、持つまいものでもごんせぬが、アノ恨みある高尾殿の妹御を、女房に持てとは。

　　ト三郎兵衞を見て、合點の行かぬ思入。

累　サア、假令姉さんがどの樣に、恨ましやんしても、兄さんの許さんすこと。絹川さん、どうぞ女夫に、なつて、下さんせいなア。

谷藏　成程、兄貴の話しといひ、段々の親切何のいなみませう。そんなら累どのは、私が一生見捨てずに。

三郎　女房に持つて下さるか。

谷藏　いかにも。

累　エヽ、嬉しうござんす。何から何迄氣の通つた兄さん、有難うござんすわいなア。

　　ト三郎兵衞を拜む思入。机の方を向いて、

　　姉さん、許して下さんせえ。

　　ト又手を合せ拜む。

三郎　愁ひは愁ひ、祝儀は祝儀。今宵は丁度日柄もよし、谷藏殿と妹に、せめて祝言のまなびたりと。それは格別この上は、かの奧深き谷蔭の名も鬼怒川の近邊に、累を連れて身を忍び、時節を待つてかのお方を。ナ、合點か。

谷藏　心得ました。それにつけても戸棚の內、くれ〴〵賴みましたぞよ。

三郎　そりや氣遣ひさつしやるな。この三婦がしつかりと預かりました。

谷藏　忝い〳〵、身の願ひさへ叶うたら、何處の山奥谷蔭でも、搜し求めてこの絹川、敵を討たれに來る程に、待つてござれ。

三郎　ハテ、それはその時。どうぞ、妹を見捨てずに一生添うてやつて下され。

谷藏　そりやア私も男、一生添ふとこなさんに、番つた詞を變替して、見捨てる樣な絹川でもごんせぬ。

三郎　忝い、忝い。

累　そんなら兄さん、私も、この髮でも、結ばずばなるまいほどに、ちよつと髮を丸うして。

三郎　いかさま、髮も直さずばなるまい。私もその內奥へ行て、杯の用意をしようか。

谷藏　とは言ひながら姉御の恨みに、どうぞ行末。イヤ行末々も、睦じう。

累　添ふが要の、三つ扇。

谷藏　丸にいの字の角もなう、夫婦仲よく暮すのを。

三郎　三升は兄の、この三婦が、

累　その祝言の、三々九度、
三郎　結ぶ妹背の杯も、
谷藏　三國一の、
三郎　婿どの、
谷藏　舅どの、
三郎　サア、ござれ。
　ト唄になり、谷藏、三郎兵衛、兩人こなしあつて、三郎兵衛先へ納戸口へはひる。累殘り、無性に嬉しきこなしあつて、
累　ほんに嬉しい、粹な兄さん、私が思ふ通りにして下さんした。どりや髮を直して、着物でも着替へようか。
　ト唄になり、鏡臺を立て櫛箱を取つて來て、前垂を後へかけ、鏡に向ひ、髮を解きにかゝる。と奥より、豆太出て來り、
豆太　モシ累さん、お前今夜婚禮なさると言ふことだから、大方これが入らうと思うて、隣りの伯母さんに借りて來やした。

ト懐より綿帽子を出して、累に渡す。

累　ヲヽ、ほんによう氣が付いて、借りておじやつた。成程、これが入るわいの。

豆太　それ見たか、よく氣がついたらうな。何と、今時の馬鹿にやあ、油断がなりやすめえ。ドレ、お前の婚禮の支度に、先刻の魚を燒いておかうか。

ト門口の傍におきし以前の提籠を持つて來て、長火鉢を出し、傍に有合ふ木端を入れ、魚を出して上にのせ、澁團扇にて煽ぎながら、捨ゼリフにて段々木端を無性にくべて、以前の伽羅の下駄を一つにつきくべる。累、この匂ひをかぎ立てる樣子にて、

累　コレ豆太、何やら、匂ふぢやないかいの。

豆太　何、匂ひがするえ。ヲヽ、わしやあねえ屁もひらず、そして掃除屋も來やしねえものを、何が匂ふものかえ。

累　何のいなう、その樣な匂ひではないわいの。よい薫りがするによつて、誰ぞ香でも焚きやせぬかと、言ふことといなう。

豆太　ヲヽ、色々な難かしい事を言ひなさる。ドレ勝手でも行つて見て來よう。

ト唄にて豆太奥へはひる。累髪を解き櫛にてかいてゐる。この時分、長火鉢の伽羅の下駄の燃ゆる匂ひに連れ、寢鳥になり、屛風の襴襟動き出し、燒酎火燃ゆると、累思はずすつくと立ち、後へ引

付けらるゝ見得。

累　ヱヽモ豆太、何をてんがうしやるぞいの。アタ阿房らしい、放しやいなう。ヱヽモ何ぢやぞいの。

ト後より髪の毛を引く心にて、色々もがき苦しみ、振放さうとして後へ引戻さるゝ見得よろしく。

これいなう髪が釣れるわいの。ヱヽモ、兄さんに告げるぞや。止しやといふに、放しやいなう。早う、髪を結はうと思へば、色々な邪魔して、ヱヽ、憎らしい。

トこんな事を言ひながら無理に振切り、鏡に向ふと、高尾の姿うつる體に、累びつくりして、

ヱヽ、姉さん、お前はこゝへ、いつの間にござんしたえ。お前はマア、死なしやんしたではござんせぬか。それにマア、こゝへはどうしてござんしたえ。

ト始終薄ドロ〲寢鳥にて、累色々こなしあつて、屏風の方をきつと見て、

姉さん、何と言はしやんす。絹川さんに恨があるとえ。そりやお前、尤もでござんすが、そりや、我儘でござんすわいなア。

ト又屏風の方を見て、合點の行かぬ思入。

ヱヽ、今迄居やしやんして、モウ、何處へ行かしやんした。姉さん、姉さん。

トそこらを見廻しうろ〳〵してゐると、大ドロ〳〵になり、

ヱヽ何とえ、アノ絹川さんには私を添はせることはならぬとかえ。イヽヱ、そりやお前が、どの様に言はしやんしても、こればかりはどうも、思ひ切られぬわいなア。折角思ひ思うて女夫になり、殊に現在兄さんが、許して添はせて下さんすもの、どうぞ添はせて。

ト寝鳥にて、累、高尾の物言ふを聞いてゐる思入。

これ程に言うても、ならぬとかえ。イヽヱ、そりやお前の無理と言ふものでござんす。私や、お前のほんの妹ではござんせぬか。それに、私がこれ程迄戀慕してゐる絹川さん、それを察して兄さんが、許して添はして下さんすを、お前が恨みがあるとて、その様に意地悪く、添はさぬと言はしやんすは、そりやみんなお前の我儘と言ふものでござんす。サアかう言うたら、腹立てさんせうがモシ姉さん、拜むわいなア。これいなア、モシ、お前の恨みのある絹川さんに、添はさぬといふも尤もでござんすが、ちつとは私の心も汲分けて、許して添はせて下さんせ。拜むわいなア、拜むわいなア。

ト腹立てゝ見たり、又手を合せて詫びたり、色々こなし。薄ドロ〳〵をあしらひ、累又聞いてゐるこなし。

ム、、スリヤどうあつても絹川さんに、添はせることはならぬとかえ。イヱ〳〵、この樣に言うても合點さんせぬは、お前の無理、そんなら私もモウ負けてゐぬほどに、何と言はしやんしても、私しや絹川さんと女夫になる。アイ、なつて見せるわいなア。

トドロ〳〵生け殺し。累高尾に引立てられるこなし。

ヱヽモ、私をどうなさんすのぢやぞえ、アレ姉さん、止して下さんせいなア。アイタヽヽ。

ト身内を所々抓らるゝこなし。

ヱヽお前、その樣に腹立てさんして、ようまあ私を抓らしやんしたなア。お前がむがう抓らさんしたり、叩かしやんしたり折檻さしやんしても、私しや絹川さんのことは、思ひ切られぬ、アイ、切られぬわいなア。

トこなしあつて、後を恨めしさうに見て、又抓られし思入。

アイタヽヽ。又抓らしやんしたな。アイタヽヽ。

ト樣々折檻に逢ふ仕組み、色々身をもみて泣きながら、

姉さん、あんまりぢや〳〵、あんまりぢやわいなア。アイタヽヽ。その樣に抓らしやんしては、私も負けてはゐませぬ。私もかうするわいなア。

ト人を突退けるこなし。又こちらへ來て、色々苦しむ事あつて、

アイタ、、、。姉さん、何と言うても、聞分けさんせぬかいなア。エヽ、恨めしい。アイタ、、。顔も何も、この樣に痛めさんして、アイタ、、、。

ト色々苦しむこなしあつて、トヾ、うんと悶絶して倒れる。物凄き合方になり、奥より谷藏出て來り、累を見て合點のゆかぬこなしあつて、

谷藏　コレ累、今私を呼んだは何の用だ。こりや累、氣をしつかり持ちやれ、氣をしつかりと持ちやれ。

ト抱起す。谷藏が聲やうやく耳に入りし體にて、谷藏を恨めしげにきつと見る。薄ドロ／＼寢鳥になる。谷藏びつくり思入あつて、傍にある高尾の裲襠を、うろたへて累にかける。累そのまゝにてすつくと立上り、付け聲にて、

累　（高尾の思入にて）エヽ、恨めしい絹川殿、折角思ひ思はれた、アノ殿樣に別れたも、非業の刄にかゝりし故、その恨みあるこなさんに、やはか妹を安穩に、添はせておくべきか。

ト亡魂乗りうつり、恨みを言ふこなしあつて、ばつたりと倒れる。

谷藏　ム、。

ト手を組み思入あつて、累をぢつと見てこなし。奥より三郎兵衛出て、

三郎　サア〳〵、娣、髮が出來たら聟殿と、祝言しやれ。ア、、目出度い〳〵。

ト愁ひをふくみ、裲襠をかぶりし累へこなしあつて、

こりや、をかしな物を着てゐるな。コレ累、コレ累や、累や。おぬしやあ髮を結ひかけて、マア、どうぞしたか。

谷藏　アイヤ、これには譯が。

三郎　成程、樣子の。

ト言ひながら累のかけてゐる裲襠を取ると、面體の變りし恐ろしき顏になつてゐる。三郎兵衞びつくりして、裲襠を持ちしまゝ尻へにどうと座し、

ヤ、、、この面體は、絹川殿。

ト言ふを、谷藏目まぜにて、言つてくれるなといふ思入。

谷藏　サ、假令どうなつても、一旦男が貰うた女房、變る事はごんせぬ。

三郎　スリヤ、あの顏でも。

谷藏　ハテ、まだこの上にどの樣な、濟まぬ事があらうとも、累は私が一世かけて、女房に持つて添ひとげます。

三郎　何にも言はぬ忝ない。したが今迄、人並よりか。

ト谷藏、引取つて、

谷藏　サア、美しいこの累、私が女房に持つからは、ハテ、何にも案じさつしやることはごんせぬ。

三郎　忝い。（ト谷藏を拜む。）

谷藏　累やあイ〳〵〳〵。

三郎　累やあイ〳〵。（ト兩人して呼生ける。）

累　アイ〳〵。

トやう〳〵と氣の付いたる思入。

三郎　こりや累、氣をしつかりと持つたがよいぞや。

累　アイ〳〵。エヽ、モウ、怖いことでござんしたわいなア。

谷藏　そりやまア、どうしたのだ。

累　サア、アノ死なんした、姉さんがござんして、私を捕へて抓らしやんしたり叩いたり、色々折檻に逢うたが、今ではさつぱりしたわいなア。

ト谷藏、三郎兵衛顏見合してホロリとして、

三郎　コレ累、シテ心持は、何ともないか。

累　イヽエ、何ともござんせぬ。

三郎　ムヽ、はてなア。

累　何故でござんすえ。

谷蔵　イヽヤ、早くよくなつて、よいといふ事。

三郎　どりや、祝言の杯をちつとも早う。

ト言ひながら立ちにり、又累をぢつと見て、

とは言ひながら、生れも付かぬ。（ト言ふを谷蔵、ちやつを押へ〕

谷蔵　ハテ、ようごんす。私が女房。

三郎　忝い。

ト銚子と三寶に土器をのせて持つて來り、累と谷蔵が中におく。

そんなら累、一つ呑んで聟殿へ。

累　アイ〳〵。

トいそ〳〵杯を取る。三郎兵衛つぐ。累呑んで谷蔵へさす。谷蔵も一つ呑んで、

谷藏　ア丶、目出度い〳〵。
三郎　ム丶、目出度い〳〵。まづこれで、祝言もすんだと言ふもの。〔ト愁ひの思入あつて〕そんなら聟殿、今言はしつた詞に違はず累は一生見捨てずに。
谷藏　ハテ、男同士の言約束、何の變替してよいものでごんす。その代り、又私が預けた大事の物も。
三郎　そりや私が身に代へても、大事にかけて匿ひ申す。
谷藏　忝い、私も累を大事にかけ、未來迄も添ひとげませう。
三郎　忝い、私も大事の一人の妹。こなたの大事の伊達小袖。取替へたといふ證據の一品。
谷藏　成程、私も證據の品を。
ト三郎兵衞は懷より、袱紗に包みし稲妻の名鏡を出し、谷藏は以前の豆太が長火鉢にくべたる、伽羅の下駄を持つて來り、
三郎　コレ、この鏡は稲妻の、イヤサ、妹が魂、これをこなたに、聟引出なり證據なり、取つておいて貰ひませう。
ト谷藏へ渡す。谷藏、きつと見て、

谷藏　ムヽ、スリヤこれが、累の魂。

ト思入あつて、下駄を出し、

こりや、私が命に代へて大切の伽羅の下駄。イヤサ、大事の伊達小袖を、頼んだ印の後日の證據、この名鏡と引替に、しつかりと預けましたぞ。

三郎　そりや、氣遣ひさつしやるな。しつかり預かりました。この上は、ちつとも早く、累を連れてこの家を立退き、名も鬼怒川の末みなもと、随分人に悟られぬやう、ナ、合點か。

谷藏　心得ました。何から何迄お心配り、お禮は詞につくされませぬ。そんなら累。

累　アイ、そんなら兄さん。モウおさらばでござんすぞえ。

三郎　ヲヽ、モウ行きやるか、言ふ迄はなけれども、随分夫を大切に、出入りの節その外とも、心を付けて必ずとも、見捨てられぬ樣氣をつけて。

累　アイ〳〵、何のマア、見捨てられてよいものかいなア。

ト顏の替つた事に心付かぬ故、三郎兵衞ホロリとして、

三郎　不便や、何にも知らずに。

累　何のいなア、私しやどの樣な、辛い貧苦をしてなりと、絹川さんの女房になりや嬉しいわい

なア。

谷藏　そりやあさうと、私が名も谷藏ではすむまい。何ぞよい名がありさうなもんでござんすが。

三郎　ムヽ成程。ムヽ、幸ひな事がござんす。私や若い時與右衛門と言つたが、その名を讓つて進ぜよう。マア假に、さうとでも名乘つてござれ。

谷藏　いかさま、百姓めく樣に、何かの都合も與右衛門が、やがて目出度く。

累　花の開くを。

三郎　待つてゐさつすぞ。

ト谷藏累が手を取り、門口へ出ようとする。トドロ〳〵寢鳥になり、谷藏累を先へ突きやり、机の前へ立戻り、懷より以前の名鏡を出し、亡魂を拂ひのくる仕組。

谷藏　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。恨みを晴らして成佛さつしやい、高尾殿。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト拂ふ。三郎兵衛ムヽと手を組み、愁ひの思入。

モウ執念を、晴らさつしやい。

ト色々鏡にて拂ふ。この時累花道にて、頭き下にゐて、

累　アイタヽヽ。

ト兩手にて左の足を押へ、立上ると引きずり、痛むこなし。谷藏、段々拂ひのけながら門口へ出る。と三郎兵衞高尾の裲襠を取つて、

三郎　執念殘りしこの裲襠、その儘おくも後日の氣がゝり、晉の豫讓にあらねども、今日目前に妹の敵、まツこの通り。

ト件の裲襠を刀にて貫く。この途端薄ドロ〳〵やむ。谷藏思入。三郎兵衞、刀をしやんと納める。この仕組宜しく、

谷藏　そんなら、三婦殿。

三郎　この間に早く。

谷藏　さらばでごんす。（ト身繕ひして行かうとする。）

三郎　イヤ、コレ聟殿。

谷藏　何でごんす。（ト少し立戻る。）

三郎　愚痴な事だが、アノ累に、鏡を見せて下さるな。

谷藏　ハテ、氣遣ひさつしやりますな。滅多に水鏡も、見せるこつちやあごんせぬ。

三郎　くれ〴〵も、一生見捨てずに。

谷藏　ハテ、最前も言ふ通り、まだこの上にどの樣な、濟まぬ事があらうとも、あれ程迄にこの私を、思うてくれるアノ累、どうして見捨てるもんでごんす。

三郎　そんなら、隨分息災で。

谷藏　やがて、便りを。

三郎　待つてゐるぞや。

トしやんと門口を立て切るを木の頭にて、この仕組、薄ドロ〳〵キザミにて、

ひやうし幕

ト幕外。薄ドロ〳〵、花道の上、人魂舞臺より出て中有に迷ふ仕組。谷藏、累の花道にうつとりとしてゐるを見て、

谷藏　累、おじや。

ト愁ひ三重になり、手を取り引立てる。累、びつこを引き〳〵、兩人こなしあつて花道へはひる。

と後シャギリ。

二幕目　　羽生村の場

役名　絹川與右衞門、豆腐屋三郎兵衞、羽生村金五郎、笹野才藏、浪人、當の嘉藤次、與右衞門女房かさね、持氏息女園生の前、其他。

本舞臺三間の間、向う鋲臺。上の方に茅葺の辻堂、すべて在體の模樣。在鄕唄にて幕あく。と花道より園生の前、着流し、旅どしらへの拵のなり。菅笠を持ち、杖を突き出て來る。後より笹野才藏、同じく旅なり。半合羽、大小、脚絆なり、園生の前の供をして出て來り、

園生　今鳴る鐘は、モウ入相。この樣にわくせくと、ならはぬ旅に心を痛め步むのも、我夫のお亂を宿せしこの身故、惜しからぬ命を永らへをるわいの。妾は妾故厭はぬが、そなたはさぞマア、難儀に思うてゐやるであらうわいの。

才藏　これは又、怪しからぬ仰せ、その御大切のお命を惜しからぬとは勿體ない。これと申すも、遊ばしつけぬ旅路故、お心細う思召しまするも御尤も、お氣遣ひ遊ばされますな、與右衞門方へ

も、最早左ほどにもござりますまい。私にお構ひなく、随分共にお心強う、お静かにござりませ。

園生　イヤモウ、足弱の自を、介抱しての心遣ひ、過分なわいの。

ト言ひながらそろ〳〵本舞臺へ來る。合方になり花道より、蔦の嘉藤次、荒流し、大小、浪人者のこしらへにて急ぎ出て來て、才藏にわざと行當る。

才藏　こりや、お侍、足弱を同道せし旅人に向つて、何故の狼籍。様子によつてはお身たちの、ためになるまい。返答ぶちやれ、ナ、何と。

嘉藤　ハヽヽ、ほざいたり、腹の皮悪く力みやあがると、こつちのためより、そつちのためにならないわ。

ト言ふ内、花道より○△の駕舁二人出て來り、

○　見りやあ、怪しい二人のやつら、山名様から言付けられた。

△　お尋ね者の注文通り。連れて行つて褒美にする。二人ともに。

○△　うしやあがれ。

ト両人、才藏と園生の前にかゝるを立廻りあつて、

才藏　やあ二人とも、聊爾せまい、我々は、そんな怪しい者ではない。

園生　ヲヽ、これ／＼、自はそんな怪しい者ではない。そこ退いて通しや。

嘉藤　その言譯がなほ怪しい。自といやあ、昆布より外は知らないおいら。そんな事をぬかすからは、お尋ね者に違えねえ、何でも俺が連れて行く。

　トかゝる。才藏支へて立廻りゐる所へ、奥より羽生村の金五郎、剃下げ奴、大どてら、一本差しにて出て來り、皆々をはり倒し、

金五　こいつらア何をしやあがる、俺を誰だと思ふ、羽生村の金五郎樣だぞ。あなた方、マア、こゝへはひつてござりませ。こゝは私が預かりませう。

　と立廻りながら、園生の前と才藏を辻堂へ入れる。

才藏　いづくの人かは存じませぬが、忝い／＼。

金五　何の、禮にやあ及びませぬ。

　ト言ひながら扉を立てる。嘉藤次、駕舁、立ちかゝり、

嘉藤　金五郎、邪魔せずと、女をこつちへ渡せ。

金五　うぬらに渡して、詰るものか。

イヽヤ、渡せ。

金五　いやだわえ。

嘉藤　所を。

トかゝる、嘉藤次を金五郎留めて、立廻りの内、金五郎敵役の三人へ「こゝは呑込んでゐるから「逃げてくれと三人へ思入する。これにて三人は呑込み、をかしみの立廻りあつて、わざと逃げて下手へはひる。金五郎思入あつて、

金五　成程世間にやあ、悪世話焼きの粋狂者もあるもんだ。人を馬鹿にして、何處の人か知れもせぬ者をつかまへて、やれお尋ね者だの、イヤ山名様へ連れて行くのと、とんだ馬鹿アつくしやあがる。あんなやつに出逢つたが、これが災難だ、ハヽヽヽ。

トこなし、この内園生の前、才藏と辻堂より出て、

才藏　ヤレ〳〵、大きにお世話になりました。忝い〳〵。シテ、モウ悪者は、逃げてしまひましたか。

金五　追ひまくつてしまひました。

才藏　アヽ、それで落着いた。アヽお蔭で助りました、お禮は詞で盡くされぬ。忝い〳〵。

金五　これは〳〵、お禮で却つて痛み入ります。何のお前さん、あいつらアおゑねゑ惡たれ者でござんすから、今頃は又外へ行つて、あんな事を言つてゐるでござりませう。モウ、お氣遣ひはござりませぬ。

園生　ついに、逢うたこともない人ぢやが、ようマア親切に世話してたもつて、自らにも障りなうて、嬉しいわいなう。

金五　イヤモウ、馴れもなされぬ旅などで、あんなやつにお掛り合ひなされましては、御難儀な事もまゝあるものでござりまする。

園生　さいなう、そなたの言やる通り、自らとても慣らはぬ旅。さりながら、最前の樣に難儀に遭うても、そなたの樣に、親切深いお人に逢うて、何ごともないと言ふは、大方この難有いお旅のお蔭であらうわいの。

才藏　いかさま、左樣でござりませう。

ト金五郎、さてはと思入あつて、

金五　そりやア難有いものを、お持ちなされておゐでなされますが、何か存じませぬが、拜みましたら大概の瘧ぐらゐは、落ちる事でござりませうな。

才藏　いかにも〳〵。モシ園生樣、このやうに世話をかけた禮に、なんと拜ませては遣はされませぬか。

園生　ヲヽ、それ〳〵、大事のお旗なれど、苦勞をかけた今の返禮、拜ませてやりませう。

金五　それは難有うございます。

ト園生の前、懷中より紫の袱紗包みを出し、内より二つ引きの旗を出し、袱紗と共に金五郎へ渡す
金五郎、捨ゼリフにて、この旗を見て思入あつて、園生の前と才藏へ見えぬ樣に、有合ふ稻荷の白幟を取り、この旗と替へ旗をば我懷中へ手早く入れ、袱紗に包んで園生の前へ渡し

金五　こりやア、難有い物を拜みました。どうか氣が、はつきりしたやうでございまする。

園生　成程、さうであらうわいの。難有いこのお旗、自が肌身放さぬ、大切の物なれど、世話してたもつたそなた故、拜ませてはやつたれど、必ず外へは沙汰してたもるなや。

金五　そりや、お氣遣ひなされますな、申すこつちやアございませぬ。時にあなた方は、この邊には見馴れぬお方、マア、何處のお方でございまする。

園生　サア、自やあの者は、樣子あつてこの東國へ。親切に世話してたもるそなたのこと、何を隱さう、自は。ト言ひかけるを才藏留めて〔

才藏　ア、モシ。（ト押へてこなし。金五郎うなづき、）

金五　いかさま、からと打明けて、おつしやりにくきお二人樣の御樣子、お氣遣ひなされますた。この羽生村の金五郎が呑込むからは、これ程氣遣ひない事はござりませぬ。シテマア、何處を尋ねて、おいでなされました。

トこの內、園生の前、才藏と顏見合せ思入あつて、

才藏　イヤ、我々は絹川とやらいふ所の、與右衞門と云ふ者を尋ねるもの。

ト金五郎、わざと驚きし思入。

金五　ヱヽ、そんならアノ與右衞門を、お尋ねなされて。ありやア私が由緣の者でござりまする。道理こそ、先からのこのお世話、これも盡きせぬ御緣とやらでござりませう。

園生　ヱヽ、そんならそなたは、與右衞門が由緣の者とや。そりやよい人に逢うて、嬉しいわいの。

才藏　ほんに、よい人に逢ひました。

金五　イヤサ、この樣に途中でお目にかゝりまして、御難儀を救ふも、神佛のお引合せでござりませう。これから與右衞門が所まで、私がおつれ申しませう。お氣遣ひなされますな。

園生　重ね〴〵もそなたの親切、忘れはおかぬ忝い。そんなら才藏、あの者に案內頼まうかいの。

才藏　左様がよろしうございませう。然らば其許大儀ながら、與右衛門方迄我々を案内して下され。

金五　合點でございまする。

ト園生の前、先に、才藏立ち上りながら、

才藏　ヤレ〳〵、よい人に逢うて、いかい世話になりました。そんならこなた頼みます。

金五　サア〳〵、先へ立つてございませ。

ト園生の前才藏、何心なく花道へ行く所を、金五郎後より拔き打ちに、才藏へ一太刀浴びせる。才藏どうとなる。

才藏　ヤ、、、騙し討とは、卑怯なやつの。

ト言ひながら、ばつたりこける。園生の前驚き、

園生　ヤ、、、才藏、そなたが死んで、わしやどうせうぞいなう〳〵。かういふ事とは知らずして、騙されたが口惜しい。どうせうぞいなう〳〵。

トうろ〳〵して泣落す。下手より以前の駕舁二人、四つ手駕を舁ぎ出て來て、園生の前を引捕へ、駕籠の中へ押込む。園生の前びつくりして、

ヤ、、、こりや自を、何とするのぢや。

○△　何ともしねえ、默つてうせろ。

ト無體に關生の前を駕籠に押込み、垂れを下す。

○　親方、この女はさつきの通り、計らひませうか。

金五　ヲヽ御苦勞々々早く行け。

○△　合點だ。

ト駕籠を擔ぎ、逸散に花道へはひる。才藏それをやつてはと立上り、

才藏　ヤヽ、そのお方を人手に渡しては、この才藏の武士が立たぬ。

トよろぼひ〳〵立上る。

金五　やかましいわえ。うぬを生かしておいちやあ、アノ女めが、この金五郎樣の自由にならぬわえ。そこで、殺してしまふのだ。ぢたばたせずとくたばつてしまへ。

トよろぼひ〳〵立上る才藏を、なぶり切りに切倒し、止めをさしながら、

アヽ、思の外弱いやつだ。ハヽヽヽ。

ト笑ひながら刀の血糊を拭ふ。と上手にて人音する故、金五郎ちよつと小隱れする。この時以前にすり替へし旗を落す。暮六つの鐘。誂への合方になり、奥より累、草刈鎌を腰にさし、頰冠をして與右衞門に手を引かれ、跛を引きながら出て來て、兩人、才藏の死骸に躓き、びつくりして、手を放し、兩人あたりを窺ひながら下にゐて、あたりを探り見て、與右衞門金五郎が落せし旗を拾

ふ。この内、累は腰にさしたる鎌を落す。與右衛門は伽羅の下駄の片しを落し、兩人これに心付かず、窺ひ〳〵花道の方へ來て、

與右　累か。

累　與右衛門どの。

與右　サア、來やれ。

ト三重になり、與右衛門累が手を取り、花道へ走りはひる。金五郎そろ〳〵出て來て、思入。

金五　ムヽ、今のは確に、與右衛門、累。

ト思入。時の鐘、合方になり、花道より三郎兵衛、半合羽、一本ざし、脚絆、三尺の上締を締め、三度笠を手に持ち出て來て、直ぐに舞臺へ來る。金五郎思入あつて、拔き打ちに三郎兵衛が持ちし小田原提灯を切落す。三郎兵衛びつくり驚き、柳行李と三度笠を取落し、ばつたりこけて起上り思入あつて探りながら、又才藏の死骸に躓き、びつくりあはてゝあたりをかき廻し、手に觸る物を取つて三度笠へ入れる。この内、以前の累の落せし鎌もはひる事。三郎兵衛、鎌をいちり透し見て思入。金五郎は與右衛門が落せし伽羅の下駄を拾ひ、懷へしつかり入れる。これを木の頭、又方宜しく双盤のせめにて、

幕

三幕目　與右衛門住家の場

役名　絹川與右衛門、豆腐屋三郎兵衛、羽生村金五郎、判人文吉。與右衛門女房累、持氏息女園生の前、齋坊主、村の歩き、捕人等。

本舞臺、三間の間茅葺きの軒を見せたる世話屋體、常足の二重、左右に榎の大樹。眞中に暖簾口。上の方、佛檀を飾りつけ、これに新しき花を手向けあり。下の方に神棚、これに誂への小さき兩開きの宮をのせ、平舞臺よき所に踏石を据ゑ、上の方に前幕の明荷、神棚に箱入りの鏡二面載せてある。下の方に草井戸、纏釣瓶をつけ、いつもの所門口。すべて羽生村與右衛門住家の體。幕の内より累、着流し、襷、前掛の拵へにて、團子を丸め、これを齋坊主手傳ひゐる。文吉、女衒のこしらへにて、煙草盆を控へ煙草をのんでゐる見得、在鄕唄にて幕あく。

齋坊　ア、、モウ〳〵大概片がついた。坊主の私迄手傳つて、拵へるこの團子。これぢやア佛も浮むぞえ。

累　さいなア、御出家樣のお手傳ひ、ほんにモウ、有難い團子でござりますわいなア。

文吉　から累さん、與右衛門殿は、モウ歸りさうなもんだな。

累　さればいなア、モウ疾うに歸らるゝ筈でござんすが、何をしてやら、ほんに遲いことでござんすわいなア。（ト待兼ねる思入。）

文吉　おめえの樣な美しい女房を一人おいて、外へ長居するといふは、與右衛門殿もよッ程。平氣な人だわえ。

累　文吉さんのぢやら〳〵と、何を言はしやんすやらヲホヽヽ。

ト笑つてゐる。テンツヽになり、花道より與右衛門、三郎兵衛、前幕のなりにて出て來り、

與右　ヤレ〳〵、マア、よう尋ねてござりました。私もとうから、音信する筈でござんすが、貧乏用に取紛れ、大きに無沙汰になりました。

三郎　そりやア、お互ひでござんす。私もハヤ疾うから、尋ねて來よう〳〵と思ふ内、月日の立つは早いもの、妹とこゝへござつて、最早一年。

與右　さればさ、したが、便りもせぬはお互ひに、變る事のない故でござんせう。

三郎　マア、そんなものさ。そりやア兎も角も、いゝ所でこなさんに逢うて、尋ねて迷ふ世話もなく、私が仕合せ。

トこんな事を言ひながら、舞臺へ來り、

與右　サア、はひらつしやいまし。（ト先へはひり、）累、今歸つたぞよ。

累　ヲヽ、こちの人、戻らしやんしたかえ。（ト悦ぶ。）

與右　コレ累、おぬしに、悦ばせる事がある。

累　そりや、何ぢやえ。

與右　今歸る道で、三婦どんに逢うて、連れ申して來た。

累　エヽ、スリヤ、あの兄さんが、尋ねて來なんしたとえ。

トは團子を丸めながら、跛を引き〳〵立上る。

文吉　コレ與右衞門殿、わしやあ先刻にから、こなたの歸るを待つて居ました。

與右　そりやアさぞ、待ち兼ねでござんせう。から累、マア、兄さんに洗足の湯でも。アヽイヤ〳〵、また、水鏡でも見ちやア惡い。ドレ〳〵、俺が取つてやらう。

トこの内三郎兵衞、門口にて草鞋の紐を解いてゐる。累門口へ來て、

累　ヤレ〳〵、兄さん、ようマア尋ねて、來なさんしたなア。

三郎　ヲヽ、累、變る事もないか。與右衞門殿、構はつしやるな。

ト與右衛門、盥へ銚子の湯を汲み、捨ゼリフにて持つて來る。三郎兵衛禮を言ひながら、足を洗ふ。累はたゞ嬉しき思入。

累　マア〳〵久しぶりで、兄さんの顔を見て、嬉しいわいなア。

三郎　ヲヽ、俺も久し振りで、お互ひに逢うて。

ト累をぢつと見て思入。

よく、變る事もなかつたなア。

累　兄さんとしたことが、變ることがあつてよいものかいなア。お前初め私等夫婦、變ることのないのは、目出度いではござんせぬかいなア。

三郎　いかにも、變る事がなくて、よいわ。（ト思入あつて、氣を替へ）アヽ、これでさつぱりした。

ト盥の湯を、累の方へ見せぬ樣にして外へあけ、内へはひり、

累　サア〳〵、マアこつちへ來て、草疲を休めなさんせ。

ト三郎兵衛、着物の裾を落し、捨ゼリフにて齋坊主、文吉に挨拶し、こなしあつて與右衛門の傍へ座る。

與右　はる〳〵の道といひ、歩いてばかりもござるまいが、さぞ、草臥れたでござんせうな。

三郎　アヽイヤ、かうしてゐては、草臥れた樣でもごんせぬが、晩にやアさぞ草臥が出るでごんせう。ときにマア、こなさんには別して禮を言はにやアならぬ、私が頼んだ義理を立てヽ、あんな妹を愛想もつかさず、女房に持つて添ひ遂げて下さる志し、忝い／＼。

與右　イヤモウ、何の禮に及ぶもので。

三郎　イヤ／＼、志しが忝い。シテ妹は、鏡は見ますまいな。

與右　いかにも、豫ての頼み故、鏡といつちやア水鏡も、見せやアしませぬ。それ故累が魂と、預かつておいた鏡も、アレ、アノ神棚に封じて、朝夕拜むばかりさ。

ト神棚へ指さしする。文吉、これを見て思入。三郎兵衛もちよつと見て、

三郎　ムヽ、いかさま、あゝしておけば氣遣ひごんせぬ。

ト累思入れあつて、

累　モシ兄さん、お前の前ではちつと言ひ難いけれどナ、モウ／＼與右衛門殿が、それは／＼私を可愛がつて、いたいけにして下さんすによつて、私しや、ちつとも苦になることはないわいなア。そしてアノナ、私しや懐姙して、六月になるわいなア。お前が來なさんしたら、吹聽して悦ばせようと、たいてい大方、樂しんでゐたことぢやござんせぬわいなア。

トこのセリフを言ふ内、恥しき思入よろしく。三郎兵衛驚き、

三郎　ヤヽナニ、懐妊して、モウ帶も締めたとか。

累　アイナア。

三郎　そりやマア、何より目出度い〳〵、與右衛門殿、何にも言はぬ、忝い〳〵。

ト涙をふき〳〵悦び禮を言ふ。

ときに、わしや味な物を拾ひました。

與右　味な物とは、そりや何を。

三郎　これでごんす。（ト前幕に拾ひし鎌を出す。累見て）

累　ヤア、その鎌は。

三郎　昨夜鬼怒川堤にて、黑白も見えぬ暗で、ぴつかり光るは稻妻か、目先へ閃く鎌の柄に、危い事とこの三婦が、かゝりやつながる妹の婿殿、羽生村の與右衛門と、彫付けてある草刈鎌、何と、覺えがごんせうなう。（ト思入。與右衛門も思入あつて、

與右　成程、こりや私がのさ。昨日山の木樵りに行つて、歸りは日暮に心せき急いで戻る暗紛れ、累も共にばつたり躓き。

累　透して見れば、あたりは紅。
三郎　こける途端に、荷物を落し。
與右　驚きあわて起上り。
三郎　取違へたるこの鎌は。
累　私が、腰にさしてゐて。
與右　落したと思ふ所は、藪陰の辻堂前。
三郎　拾つた所も、丁度そこら。
累　味な所に。
三郎　味な捨物。
與右　ハテ、不思議な事の。
三人　次第ぢやなア。

ト三人、心々の思入。與右衛門氣を替へ、

與右　累、何はなくとも兄貴に、茶漬でも進ぜてくりやれ。
累　ほんに私としたことが、嬉しいのが一杯で、氣がつきませなんだわいなア。ドリヤ、おこんま

の支度にかゝりませう。（ト齋坊主も思入あつて、）

齋坊　私も坊主の當り前、味噌でもすつて、手傳ひませう。

ト誂への合方になり、累、齋坊主奥へはひる。三郎兵衛、後を見送り、

三郎　あんなになつた妹に愛想もつかさず、面倒見て下さる志し、忝い／＼。これぢやア、死んだ妹も、浮ばざアなるまい。シテ又いつぞや、片しづゝ取替へおいた伽羅の下駄も、大切に持つてござるでござんせうな。

與右　サア、その下駄は。（トつかへる。）

三郎　何としました。

與右　サア、その下駄は、持つちやゐませぬ。

トくど／＼つかへる。この内合方にて、花道より金五郎、前幕のなりにて出て來り、以前の駕舁二人、駕籠を擔ぎ出て來り、直に舞臺へ來り、金五郎、家の樣子を窺ひ、駕舁にちよつと囁く。兩人はうなづき門口に待つてゐる。金五郎、づつと内へはひり、

金五　御免なせへやし。

ト與右衛門の前へぶッすわる、

與右　こりやア金五郎、何と思うて。マア〳〵、煙草でも。

ト煙草盆を出す。金五郎、三郎兵衞を見て思入。

金五　與右衞門さん、この人は三郎兵衞殿と言つて、嗅アが兄貴さ。

與右　こりやア、どこの人だ。

金五　そりやア、初めてお逢ひ申しました。わしやア鬼怒川の金五郎と言ふもんでござんすから、時におらあ、生業を始めようと思ふ。

與右　そりやアまア、何にしろいゝこツたが、おぬしやア、何を商ふ積りだ。

金五　俺か、おらア足駄の齒入れをする積りよ。

與右　ム、、そりやア、とんだ思ひ付きだな。

金五　然もこんな、誂へ仕事があらア。

ト前幕にて拾ひし伽羅の下駄を、與右衞門の前へ投出す。與右衞門見てびつくり。

與右　ヤ、、この下駄は。

金五　ム、、さうだらう。その下駄、おぬしやア、ほしかアねえか。

與右　サア、それは。

金五　ム、、欲しかア買つてやらうが、こりあたゞの下駄ぢやねえ。値が高い、梅ケ枝ぢやねえが、三百兩だ。サア、買はゞ買ひねえ。

與右　ムヽ。

ト手を組み思案する。三郎兵衞思入あつて立上り、下駄を取つて見る。金五郎驚き、

金五　こりやアお客人、この下駄をどうするのだ。

三郎　アイ、この下駄は、私が下駄だ。昨日こゝへ來る道で落したが、そんなら、こなたが拾はつしやつたか、ヤレ〳〵、こりア思はず元へ戻つた。忝い〳〵。

ト下駄を取つてこちらへ來る。金五郎むつとして、

金五　エヽ、馬鹿々々しい、何のこツた。人の拾つたその下駄を、俺がのだ、元へ戻つたも氣がつえへわえ。こなたのだといふ證據があるか。

三郎　サア、確な證據は、このかたし。

ト柳籠の内より下駄のかたしを出し、一足に揃へて、

コレ、この通り揃つたこの下駄、何とわしがのに、違えごさんすめえ。こりア大きにお世話でござんした。

ト これにて與右衛門喜ぶ思入。金五郎あきれしこなし。

金五　何のこツたあ、ユ、、夢を見たやうな目に逢つた。とんだ横合ぢやアねえか、何ぼ手前の下駄だといつて、人のやらうとも言はねえ物を。こりやア客人もたゞ者ぢやねえわえ。

三郎　ハテ、私が落した下駄だによつて、私が取るに何もいさくさアござんすめえ。

金五　イヤ、さうぢやねえ。與右衛門、これぢや濟むめえ〳〵。

與右　ハテさて、見らるゝ通りの譯、何の私が知るもので。アハヽヽヽ、私が所へ來たアノ客が落した下駄を、こなたが拾つたによつて、今又客人が取つたのさ。

金五　そんならそりやア、まアさうよ。時に、まだ見せるものがあるわえ。

與右　ムヽ、そりや何を。

ト 金五郎、立つて門口へ來て、園生の前を駕籠より引出し連れて來て、與右衛門の前へ突きやる。

金五　サア、その下駄の替りは、この女さ。

ト 與右衛門、園生の前を見て、びつくり思入。園生の前もびつくりして、

園生　ヤヽヽ、そなたは、與右衛門。（ト言はうとするを、）

與右　こりや何も、言ふにやア及びませぬ。（ト思入。金五郎も思入あつて、）

金五　何と與右衛門、この女ア、おぬしア欲しくはねえか。

與右　いかにも。

金五　ヲヽ、さうだらう／＼。こりやア大事の品物だ。欲しかア貴様に、賣るべえか。

ト文吉、これを聞き、前へ出て、

文吉　コレ、金五郎、その女あ、先刻に俺が百兩に値をしたが、おぬしやアまだ外へやる氣か。

金五　ヲヽ、ぬしが方は變替して、與右衛門に賣るのだ。から與右衛門や、今聞く通りの仕儀だから、百兩を一文ぶつかいても賣らねえよ。それでよかア、賣つてやるべえ。

與右　ムヽ、是非とも私が買はにやアならぬが、今百兩といふ金は。

文吉　與右衛門殿、貴様ア又、アノ女を何故その様に欲しがるのだ。ハヽア、こりやア色事だな。

園生　何の、自が。

與右　こりや。

ト押へる。園生の前、合點のゆかぬ思入。この内三郎兵衛、園生の前が體を見て、これも心得ぬこなしよろしく。

こりやちつと、この場では言ひにくい事ながら、この女は私が、深い馴染の女郎さ。

ト園生の前、それはと思入。與右衛門、何も言ふなと思入。

それに今ぢやア、たゞならぬ身でごんすによつて、請出してやらにやア、義理が立ちませぬ。

ト三郎兵衛思入。

金五　成程、それぢやア是非とも請出さざアなるめえわえ。

文吉　ヲヽ、與右衛門殿にやア、累といふお上さんがある上に、又こんな者を引きずりこんでも、大事ないかな。

與右　ハテ、女房累はほんの据物。こりやア、私が樂しみ。

金五
文吉　ハテ、そりや、榮耀なことの。

ト三郎兵衛、さてはといふこなしあつて、園生の前をぢつと見て、

三郎　いかさま面體と言ひ、是迄あのやうになつた妹、愛想の盡きるも至極尤も。

ト與右衛門、これを聞き切なき思入あつて、

金五　サア、與右衛門、きり／＼、この女の片をつけねえか。買はざア直につれて行く。買ふなら百兩、受取るべいか。

與右　サア、どのみち私が請出すから、百兩でも二百兩でも、出すめえもんでもねえ。とは言へ金

は。

ト ちよつと思案して、脇差を持ち來て、

コレ金五郎、かうしてくりやれ。親からの譲り物だが、アノ女にやア代へられぬ。この一腰を明日まで抵當に取つてくりやれ。

ト金五郎、脇差を取つて見て、

金五　成程、こりやア値打の道具だ。隨分抵當に取つてやらう。したが、明日迄は待たれねえ、晩迄待つてやらう。

與右　ム、、是非に及ばぬ、そんなら晩迄。

金五　こいつア有りがてへ。そんなら晩迄、きつと百兩。

與右　マア、それまぢやア、その脇差。

金五　女も、そつちへ預けたよ。

與右　そんなら晩迄。

金五　きつと詞を、違えめえぞ。（ト思入あつて立上り）

文吉　おらア、虻も取らず蜂も取らずだ。いめえましい。ドリヤ、まん直しに、酒でも呑まうか。

ト唄になり、金五郎、文吉、こなしあつて奥へはひる。三郎兵衛、與右衛門、園生の前、後を見送り思入あつて、

與右　一つ穴の狐めが、ごた〳〵をぬかしやアがる。そりやアさうとお前樣は、ハテ、さて危ふい目にお逢ひなされました。

ト三郎兵衛これにてこなしあつて、

三郎　ヤア、そんなら、その女中は。

與右　ハテ、今の樣に言うたは、當座のがれの嘘八百。さうとは知らず三婦殿の、さぞ人でなしと思はつしやろと、ちつとの內とは言ひながら、いゝ苦勞をしました。

三郎　ムヽ、成程、それで讀めた。私もこなさんの心は知つてゐる。よもやとは思へども、あの樣になつた妹故、もしや愛想が盡きたかと、私が愚癡な料簡から、アノちつとの間案じました。

與右　私もこれで落着きました。シテあなたには、どうして又アノ金五郎に、お逢ひなされました。

園生　サア、自は、そなたを尋ねはる〴〵と、この國へ來たのぢやが、昨日鬼怒川とやらいふ所で狼籍者に出逢つたを、アノ金五郎に助けられそなたの所を問うたれば、私は與右衛門が、由緣の者ぢや程に、案內してあげませうと、親切らしく言うたは嘘。自が召連れて杖柱とも思

うてゐた、笹野才藏といふものを、騙し討にしやつたわいなう。

與右　ヤヽヽヽ、スリヤそのお供を、金五郎めが。ムヽ、重ね〲も憎い奴。

　　トロ惜しきこなし。三郎兵衛見て、

三郎　ムヽ、段々のお話しを、聞けば聞く程あなた樣は、由あるお女中樣。

與右　サア、この御方は、賴兼どのゝ北の方、園生の前樣。

三郎　ヤヽヽヽ、スリヤあなたが。それとは知らず最前より、大きに御無禮申しました。私めは豆腐屋三郎兵衛と申しまして、この與右衛門が、女房の兄でござります。憚りながらお見知りおかれ、下さりませう。

　　ト俄に平伏して敬ふ思入。園生の前こなしあつて、

園生　自とても便り少い今の身の上、この上ともにそなた衆の、どうぞ世話を賴むわいなう。

與右　お氣遣ひなされますな。この與右衛門が、お匿い申せば、大船に乘つたと思つておいでなされませ。シテ、あなたは、何ぞ落しはなされませぬか。

園生　さればいなう。何も落した覺えはないが、自が身にも代へぬ、大切のお旗。

　　ト懷中より、金五郎にすり替へられし樣の袱紗包みを出し、

與右　ムヽ、そのお旗、お見せなされませ。

ト袱紗のまゝ、與右衞門取つて中を開き見て、驚き、

色々難儀に遭うたれど、こればかりは肌身に添へて、放さぬわいなう。

園生　ヱヽ。（トびつくり。三郎兵衞もこれを見て）

こりやお旗ぢやアござりませぬ。

三郎　ムヽ、こりやこれ、地藏尊の幟。

園生　ヤヽ、そりやマア、どうしたことであらうぞいの。

與右　アイヤ、その樣に、お騷ぎなされるにやア及びませぬ。その旗は、こゝにござんす。

園生　ムヽ、スリヤ、どうしてそなたが。

與右　サア、夜前山より歸りがけ、今々思ひ合はすれば、才藏殿の死骸に躓き、思はず私が、手に入るこの旗。イザ、お受取りなされませ。

ト前幕に拾ひし二つ引の旗を出す。園生の前悦び、

園生　ヱヽ、忝い。すり替へられしこのお旗、又も我手に戻るといふのは、日頃自が信心する、祐天樣のお蔭、そなた衆の忠義故であらうわいなう。

與右　かへす〲も、憎き金五郎。

三郎　さりながら、今荒立てゝは事の破れ、ム、。

ト兩人思入。バタ〱になり、花道より、村の歩き出て來り、直に舞臺へ來り、

歩き　與右衛門殿、與右衛門殿。今代官所から、急にお觸れがあると言つて、呼びに來ました。早くござれ、早くござれ。

與右　ム、、お觸れとは、何でござんすな。

歩き　何か知らねど、早くござれと、待つてゐますぞ。

ト言捨て歸るふりして、思入あつて下手へはひる。

與右　合點でござんす。さて〱忙がしい事ではあるぞ。そんなら兄貴、後を頼みましたぞ。

ト立上り、

ドリヤ、一走り。行つて來よう。

ト早き合方にて、與右衛門門口を締め、こなしあつて花道へはひる。三郎兵衛園生の前、後見送りこなしある。この時、奥にて、

齋坊　マア〱、一服呑んで、行きませう。（ト言ひながら出て來る。）

三郎　これは〳〵、御出家様、今日は御苦勞に存じます。マア〳〵ゆるりと、御休息なされませ。
齋坊　イヤモウ、わしやア旅僧だが、今日爰へ來合せて、一週忌の佛があると、志しのお齋を振舞はれて、大きに世話になりました。
三郎　何のお前、心ばかりのこツたから、ろくにお世話も致しますまい。わしやア、今日の佛の兄でござんすが、一年ばかり立つのは、さて〳〵早いものでござんす。
ト愁ひの思入。雷の音する。園生の前こなしあつて、
園生　ア、、雷様が。（ト耳を塞ぐ。）
三郎　あなた樣には、お嫌ひでござりまするか。
園生　アイ、自はどうも癪にさはつて、アイタ、、、。（ト癪の起りしこなし。）
齋坊　成程、そりやア困らつしやるでござりませう。幸ひこゝに祐天樣の名號を持つてをります。
ト懐中より出して、園生の前にやる。
園生　エ、、自が日頃信心といひ。有難いこの名號。エ、忝い。
ト出して戴き懐中する。この内、雷、段々靜かになる。
齋坊　アレ〳〵、段々鎭まります。アノ雷め、いゝ加減に鳴りやアがれ。

ト この時、雷の音、つよく鳴る。齋坊主、捨ゼリフにて耳を塞ぐ、園生の前、怖さをこらゆる思入。

園生　有難い今のお守りで、どうやら、心強うなつたわいなう。

トこの内、村の歩き、門口へ出て窺ひゐて、この時門口より、

歩き　ヤア、お尋ね者の園生の前、引くゝつて褒美にする。そこ動くな。

ト門口をあけはひる。三郎兵衛、齋坊主、園生の前、びつくりする。三郎兵衛は、齋坊主に早く園生の前を、奥へ連れて行つてくれといふこなし。

三郎　イヽヤ、こりや與右衛門が、ちゝくりあつた出入りの女。園生だの凧の繪だのと、そんな怪しい者ぢやアねえ。

トこの内、齋坊主、園生の前の手を取り、奥へはひる。

歩き　イヤ、ぬかすまい。最前、與右衛門が迎へに來て、てつきりそれと睨んだ故、歸るふりして門口にて、始終の樣子は殘らず聞いた。山名樣から嚴しいお觸れ、連れて行けば褒美はしつかり、そこ退いて、女を渡せ。

ト三郎兵衛へかゝるを、ちよつと突きのけ、

三郎　イヽヤならぬ。假令女は園生の前でも、身不肖ながらこの三婦が、留守を預かつた上からは、渡す事はマアならぬ。たつてと言やア、私が相手、滅多にさうは。

歩き　小癪な、そこのけ。

三郎　イヤ、ならぬ。

歩き　何を。

ト薄き雷の音になり、三郎兵衛が取つておいた脇差を取り、切つてかゝる。誂への合方になり、三郎兵衛、歩きが持つてゐる脇差をひつたくり、トゞ歩きを切倒し、あたりを見て明荷を持つてきて、歩きの死骸を入れ、刀の血糊を拭ひ、あたりを片付け、

三郎　思はぬ罪を作つたも、與右衛門が大事のお主故、これもやつぱり妹がため。

ト思入。この内齋坊主出かゝり、こなしあつてずつと出て、明荷を背負つて行かうとする。三郎兵衛驚き、

ア、モシ御出家様、その葛籠は。

齋坊　サア、それを承知のこの坊主。人を救ふは出家の役。中の佛を葬むつたら、この家に、何の祟りもあるまい。サ、そこを思ふてづく入が、昨夜からの馳走の禮。葛籠はこの僧が貰つて行きます。

ト三郎兵衛悦ぶ思入。

三郎　何にも言はぬ忝い。御縁もあらば御出家様、重ねてお目に。

ト齋坊主外へ出る。三郎兵衛門口をしやんとしめ、

兩人　かゝりませう。

ト在郷唄の合方。薄き雷の音にて三郎兵衛はこなしあつて奥へ、齋坊主は葛籠を背負ひ花道へはひる。奥より累出て來り、

累　アヽ、つよい雷ではある。それはさうと與右衛門殿は、モウ歸らしやんす時分ぢやが。

ト向うを見て待兼ねる思入、下手より金五郎、文吉出て來り、

文吉　コレ累さん、與右衛門殿は、まだ歸らねえか。

累　アイ、まだぢやわいなア。

金五　ムヽ、でえぶ遲いこツたの。時に累、おぬしやア何故鏡を見ねえ。

累　アイ、私しや、兄さんの願望で、鏡は見ぬわいなア。

金五　それでもおめえ、女の身で、鏡を見ずにゐられめえ。

累　イヱ〳〵、與右衛門殿も承知でござんす。鏡を見いでも世帯持は、大事ござんせぬわいなア。

ト文吉、有合ふ鏡を取り、金五郎に渡す。これにてうなづき、

金五　デモ、さうしたものぢやアねえ。おめえ、顏に久しく逢ふめえ。

文吉
金吾　マア、ちよつと、おら、よく見なせえ。

ト金五郎、文吉、果を中に挾み、兩方より鏡を差付ける。果、是れを拂ひのけ〳〵ながら、

果　ヱ、モウ、こなさん達は、何をさんすぞいなア。兄さんの願掛けぢや程に、鏡を見ぬといふ私に、ヱ、モウ止して下さんせいなア。

金五　イ、ヤ、ちつと見せにやアならぬ譯がある。何でもこれを。

文吉
金五　ちよつと見な。

ト双方より差付ける。果くゞり拔けくゞり拔けしながら。

果　ヱ、モウ、見まいといふに、無禮なことを。ヱ、モ、止して下さんせ。

ト突きのける。双方捨ゼリフにて、果へ鏡を差付ける。果、色々見まいとあせる。兩人、無禮に鏡を、果の額へ差付ける。ト鏡、仕掛にて銅になる。兩人、びつくりして、

金五　ヤア、こりや、鏡が銅に。

文吉
金五　こりや、どうだ。（ト兩人、あきれる思入。）

果　それ、見やしやんせ。私が願掛けぢやといふ鏡を、お前方が無禮に見せなさんした故、その樣に銅になつたのぢやわいなア。そしてマア、こちの家では鏡は禁制、その樣な物は、早う持つ

ていんで下さんせ。

ト兩人を突きのける。金五郎、思入あつて、

金五　成程、これぢやア鏡は、めつたに見せられねえわえ。

文吉　何にしろ、變なことだ。あつたら鏡を銅にしてのけた。ハテ、いめえましい。（ト兩人あきれる。）

呆　ヲヽ、ホヽヽヽ、願掛けて私が見まいと言ふを、無體に見せなさんした、罰ぢやわいなア。

金五
文吉　いかさまなア。（ト兩人こなし。）

呆　こなさん達のぢやら〳〵で、思はぬ暇入り。どりや姉さんへ手向けの水など、取替へてあげうか。

ト立上り茶碗を持つて、水へ顔の寫らぬやうに、水を汲んで茶碗へあける。金五郎見て、

金五　アレ見や、呆が、水を汲んだぜ。

文吉　成程。

ト兩人、うなづき合つて、文吉釣瓶に水を一杯くんで、呆へ思入。

これを後へな。

金五　ムヽ、こいつア面白い。

トこの内證への合方にて、累一心に佛檀に向ひ回向してゐる。金五郎、文吉、釣瓶を累の後へ釣りかける。累、びつくりして釣瓶へこけかゝり、起上り釣瓶を見て、

累　ヱ、、又私に水鏡を見せる氣ぢやの。ヱ、モ、私が鏡を見りやア、どうするぞいなア。

金五　どうもしねえが、マアちよつとこの水を見な。面白い事がある。

文吉　鏡も正眞のこそ悪からう。水鏡ぐらゐは大事あるめえ。サアちよつと見なせえ。

累　ヱ、モその樣に、見せたがりなさんす鏡、こりや何ぞ樣子がござんせう。いかさま、見ようわいなア。こりや、水鏡ぢやほどに、兄さん、許して下さんせ。

トー累釣瓶に向ふ。金五郎文吉思入。

金五　何と見えたか、見えたか。

文吉　アイ、見えたが、やつぱり私が顏。

累　ヱ、なに、やつぱり。

文吉　おめえの顏だ。

金五　ハテ、なア。（ト兩人合點の行かぬ思入。）

文吉　マア何にしろ、よく見ねえ。

金五

累　アイ〳〵。

トよく〳〵水鏡を見て、

成程、私は前度より、いかうこゝらが、細つたかいなア。

ト頬など撫でゝ見て、やはり心付かぬ思入　兩人あきれて、

金五　ムヽ、そんならやつぱり、手前の顏がうつるとか。ハテ合點の行かぬ。

文吉　いかさま、これにやア何ぞ譯があらう。累さん、いよ〳〵おめえの顏に違えねえか。

累　ハテ、私が顏がうつらいでなア、私が顏を見りやア私、お前方が見なさんすりや、お前方の顏が寫る筈ではござんせんか。あじな事ばかり言はしやんす人達ではあるわいなア。

ト金五郎文吉累の顏をつく〴〵見る。

モウ、こちの人が歸りなさんせう。ドレ、茶々でも沸かしておきませうか。

金五　そんならおいらア、こゝにゐて。

文吉　與右衛門が歸りを、待つてゐよう。

累　そんならお前方は、こゝに待つてゐてくんなさんせ。

ト唄になり、累薪を引きながら奥へはひる。金五郎文吉後を見送る。金五郎以前の脇差を取つて、お

が差してゐる脇差を抜き、あたりを見廻し、文吉とうなづき合ひ、抜いて身をすり替へ、鞘へ納まりかねるを、無理にさしこむなどよろしくあつて、

金五　ムヽ、これでいゝ。かうしておきやアこの脇差も、俺がものだ。

文吉　いかさま、それぢやあ與右衛門へ返した所が、元直にやアならねえ。

金五　サ、これからは、この神棚。

ト下の方の神棚へ思入あつて、

こりやア何でも、何とかいふ名鏡だ。これをこつちへ捲上げて、賣つた金は山割だ。

文吉　成程、よからう。

金五　エイ。

ト鏡の入れてある宮を叩きこわし、中より袱紗包みの名鏡を出す。この前より、三郎兵衛、暖簾口へ出かゝり窺ひゐて、これを見てこの途端に前へ出て、手早く鏡を取つて懐中する。兩人びつくりし。

金五 文吉　ヤ、最前のお客人。

金五　その鏡を何故取るのだ。おれが取つたその鏡、そつちへ渡して詰るものか。

三郎　イヽヤ、こりや私が物さ。しかも、妹がこゝへ來る時、一生あれが魂と、持たせてよこした

金五　この鏡、それをお前方へ渡しちやア、妹が魂がなくなりますわえ。そこで私が取返したのさ。

文吉　エヽ、スリヤその鏡も。さつきの下駄もわしが物、この鏡もわしが物だとは、イヤハヤあきれたものだ。

文吉　折角物したその鏡、貴様にやつちやアおたまりやない。

金五 文吉　何でも、こつちへ。（ト三郎兵衛へかゝるを突きのけ。）

三郎　ハテ、こなた衆も悪い料簡、人の物をたゞ取つて、利運をせうとは、マア中位な仕打でごんす。それも私が掛り合のない事なら、構ふことはごんせぬが、この鏡は妹が魂、それ故私が取つたのさ。

金五　そんなら、それも。

金五 文吉　エヽ、いまいましい、何の事だ。

ト両人あきれし思入。合方になり、花道より、與右衛門出來り、後より捨ゼリフにて若い衆、付いて出來り、

若衆　モシ、與右衛門さん、與右衛門さん。

ト與右衛門立留り、

與右　わしでござんすか、（ト若い衆懐中より封じ文を出して、）

若衆　こりや、お前のお馴染の、潮來の女郎衆から來た文さうでござります。私に屆けてくれいと、賴まれましたによつて、持つて來ました。

與右　ハヽヽ、とんだこツてごんすの。（ト言ひながら文を取る。）

若衆　そして又、どうぞおいでなされるやうに言つてくれろと、ことづかつて參りました。

與右　イヤモウ、先度はほんの附合で、しやう事なしに行たものゝ、二度と再び行くものぢやねえのさ。しかし、たつた一度ばかり行つた女郎から文をくれるとは、こりやよツ程、ゝゝゝ、おつりきだわえ。（ト文の封のまゝ煙草入へ入れて懐中する。）

若衆　それなら、お渡し申しました。

與右　こりやア、大きにお世話でごんした。

ト若い衆花道へ引返してはひる。與右衛門門口をはひる。

三郎　與右衛門殿、歸らしやつたか。

與右　今戻りました。シテ、この様子は。（ト驚きし思入。）

三郎　このお宮の内のものを、粗相か何か知らねども、アノ衆達が、どうかしようとさつしやれた故、私が取つておいたのさ。

ト金五郎、文吉に思入して言ふ。

金五　コレ與右衛門や、先刻の出入やア、どうしてくれるのだ。

文吉　おぬしが買はねえけりやア、俺が方へ買ふ氣だが、早く片をつけさつしやい。

與右　ハテ、忙しねえ、まだ日は暮れぬ、晩迄にはどうなとするわえ。

金五　ムヽ、そんなら晩迄きつと百兩、出來ない時にやア、アノ女を連れて行くぞよ。

與右　ハテ、出來ないでつまるものか。

金五　ムヽこの身代で百兩は覺束ねえが、マア晩迄待つてやらう。コレ客人、こなたも今の樣子といひ、この場にゐりやアかゝり合ひ、取逃しちやアならねえわえ。

三郎　ムヽ、用があるならいつでも來なせえ、貧乏ゆすりもするこつちやアねえのさ。

ト灰吹を叩き、こなしあつて、

アヽ、まだ四五日、泊つてをります。

文吉　與右衛門殿の工面の次第で、私らもうんと言ふもんだ。

ト金五郎、コレと文吉へ思入して。

金五　それなら與右衛門、晩の六つ迄。

與右　金拵へて、待つてゐる。

金五　取りに來るぞよ。

與右　合點だ。

金五　文吉、來やれ。

ト金五郎、文吉、合方にて花道へはひる。與右衛門三郎兵衛、後を見送り、

三郎　イヤモ、この鏡も、すんでの事彼奴等に、取られる所。

與右　ヤ、あぶない事な。いゝ時兄貴がござつて、マア、この鏡に傷もつかず、忝い〳〵。

三郎　なんの〳〵。こりやア、果でも見れば悪い。マア私が、しまうておきませう。

與右　ア、、それがようごんす。

三郎　時に、晩迄、百兩といふ大枚の金、才覺の當途があるか。

與右　サア、ちつとは當もごんすのさ。

三郎　首尾よく金の調ふ樣、隨分と才覺さつしやい。わしや大きに疲れたから、奥へ行つて休息しま

せう。

奥右　いかさま、それがようごんせう。たま〳〵ござつて、何ぞ馳走もする筈でごんすが、何を言ふにもこのしだら。ろく〳〵構ひもせぬのみか、却つて世話になりました。

三郎　何の〳〵、心遣ひは入らぬ事。ドリヤ、奥へ行つて休みませう。

トこれより獨吟になり、三郎兵衞こなしあつて奥へはひる、與右衞門後を見送り、手を組み思案の思入。

與右　ハテ、この樣に憂き事も積るものか。代官所よりは、園生樣を山名樣へさし上げよ。モシ承引なくば、首打つて出せとある、嚴しい言付。又金五郎へは、晩迄に百兩といふ金を、才覺して渡さねば、園生樣のお身の上。双方共にお主の難儀、お身代りに立てんにも、金の才覺しようにも、女房累はあの通り。ハテ、どうしたものであらうなア。

と當惑のこなし。又獨吟になり、奥より累出て來り、思入あつて與右衞門が傍へ寄り添ひ、

累　コレ、與右衞門殿、お前そのやうに、一人して苦勞せずとも、ナ、ちつとは女房にも、相談して下さんせいなア。このマア暮しで、百兩といふ金を、田畑を賣つてからが、どうしてマア、出來ませうぞいなア。

與右　ヲヽ女房ども、よう氣をつけてくれた。成程、そなたにも相談しようと思つたが、兄貴といひそなたに迄、苦勞かけうも氣の毒故、今迄は默つてゐたが、いかにもそなたが言ふ通り、この身代で百兩といふ金は、所詮出來ぬはしれた事、とはいへ、關白樣のお身代り、これとても、出來ぬ穿鑿。

ト思入。この內累、いろ〳〵思入あつて、

累　モシ與右衞門殿、かう言へば、どうやら我身をひけらかす樣なれど、私しやこなさんに、たつた一つ、願ひがあるわいなア。

與右　ム、、コリヤ又改まつて、亭主の俺に願ひとは。

累　サア、願ひと言うて、外のことでもござんせぬが、どうぞ私に、身を賣らせては下さんせぬか。假令、まるで金が出來ないでも、せめて半分なと才覺して、どうぞお前の心が休めたうござんす。私しやそれが願ひぢやわいなア。

ト思入。與右衞門、ぢつと思入して、

與右　ム、、それ程迄にこの俺が事、思うてくれる志し、身を賣つても金調へんとは、何にも知らず。イヤサ、何にも言はぬ、忝い。がマア、よう思うても見やれよ、外ならぬおぬしが身

累　の上、兄貴の三婦どんにも恩になり、義理のある女房故、どうもそればかりは。
ム、、ならぬとかえ、そりやモウ、お前のお志し、私しや嬉しいけれどナ、わしやどうあつてもこなさんの、心の休まる樣にして、上げたいわいな。義理のある女房故身を賣らすことはならぬと、言はしやんすも尤もでござんすが、どうぞそんなら、かうして下さんせ。

與右　そりや、どうして。

累　サア、どうぞ私に、去狀書いて下さんせ。(ト思入。)

與右　ヤ、、なんと。

累　飽きも飽かれもせぬ中で、去らるゝといふは、私も厭でござんすが、お前の去狀貰うた上は赤の他人。さうすりやお前も兄さんに、義理の立たぬといふこともござんすまい。どうぞさうしてなと。お前の苦勞のない樣にしたいわいな。(ト與右衞門ホロリとして、

與右　ム、、その樣に思うてくれる志し、忘れはおかぬ、さりながら、なんぼおぬしがさう言つても、愛想も盡きぬ女房に、どう去狀がやられよう。

累　ム、、そんならそれも出來ぬのかえ。お前マアその樣に思うて下さんすは嬉しいけれど、どうも私は案じられる。ほんに今でこそこの樣に、髮形も構はねどさんばら髮も取上げたり、女は

兎も角髪形とやら。ちつとは無理であらうけれど、そんなら、私をお身代りに、立てゝは下さんせぬか。（ト與右衛門持餘したる思入にて。）

與右　いかにもそりやよい料簡したが腹は立てやんな、氏素狀とやらで、何ぼおぬしが美しくつても、どうも園生樣と一つにもなるまい。ア、その樣に苦勞にしやんな、切羽詰つたその時は、今おぬしが言ふ樣にもせにやあなるまい。それはさうと、何かに紛れて、煙草買ふのを忘れてゐた。どりや、粉でも一服。

ト煙草を出し、つがうとして、

累　ア、モシ、私が買うて、來ようわいな。

與右　そんなら大儀ながら、賴まうか。

累　アイ〳〵、つい行つて來る程に、その內お前は、アノ兄さんとも相談して、今私が言うたこと、義理せずともどうぞ叶へて下さんせ。

與右　ヲ、サ、そりやア合點だ。殊によつたら金五郎に逢つて、日延べが出來りやアそれも重疊。コレ、煙草を賴むぞ。

累　合點でござんす、お前は奧の兄さんに。

與右　逢うて話した、その上で、

累　得心あれば、私も安堵。

與右　言はれぬ義理と思へども。

累　親は泣寄り、打付けに。

與右　面おし拭うて、かう〳〵と。

累　言うて、私が願ひを。

與右　三婦殿へ。

累　與右衛門どの。

與右　ドレ、相談して来ようか。

ト唄になり、與右衛門奥へはひる。累こなしあつて、煙草入を持つて門口へ出る。この唄を借り、花道より金五郎出て来り、門口にて累に行逢ひ、

金五　かう累、何處へ行く。

累　ヲヽ、金五郎さんか、私しやこちの人の煙草買ひに行くわいな。お前には與右衛門どのが、相談することがあるといなア。

金五　なに、與右衛門が俺に用があると。ムヽ、與右衛門も俺に用があらうが、おらア、手前に用があらア。マア下にゐや。

累　アイ、何でござんすえ。（トやはり立つてゐる。金五郎思入。）

金五　おらア、手前に惚れたよ。何と俺を間男に、持つ氣はねえか。

累　エヽモ、何を言はしやんすかと思うたら、ぢやら〳〵と、悪てんがうなことばかり、モウ〳〵そんなこと、常談にも言つて下さんすな。與右衛門どのが聞かれたら、モウ〳〵、大抵のことぢやあるまいわいなア。

金五　イヤ、與右衛門が何と言つても、おらア手前に惚れたもの、どうするものか。

累　ぢやと言うて、私には、與右衛門どのといふ。

金五　夫があるか。

累　サア、それぢやによつて。

金五　イヤ、そのおぬしが、大事に思ふ與右衛門は、とうからこなたに秋風だよ。そんな水くさい男に、添つてゐるより、可愛がつてやるおらが嬶になるがいゝわな。

累　イエ〳〵、その様なこと、聞くも厭でござんす。私しや與右衛門どのに、見替る男はないわい

なア。

金五　イヤモ、よつ程眞實に、夫思ひな女ではある。しかし、與右衛門が潮來の女郎と、馴染んでゐることを知つたら、ちつとまづくならう。なんぼ手前がその樣に思つても、與右衛門はとうから手前に、愛想が盡いてゐらア。その證據にやア、ソレ、その持つてゐる煙草入れの中に、潮來の女郎の文があらア。

ト累が持つてゐる煙草入を取り、中より以前の文を出して、

コレ、この文を見たら、手前、愛想が盡きるであらう。

ト累に渡す。累取つて見て、

累　成程、こりやア文でござんす。

金五　ソレ、嘘ぢやあるめえ、明けて見な。（ト累思入して）

累　イヱ〳〵、こりや、モウ見ますまい。與右衛門どのが、假令女郎に馴染があらうが、妾手かけがあらうとも、詰の女房はこの累。日頃からあの樣に、いたいけにして下さんす與右衛門どの、そりやモウ皆、今迄のことでござんす。よし又、外に女子があればとて、私さへ見捨て下さんせねば、何も構ふことはござんせぬ。この文などをわたしが見て、今迄もせぬ、モシャ悋

氣嫉妬の心でも出た時は、却つて與右衞門どの丶心にもないこと迄腹立たせ、愛想の盡きる種ぢやによつて、マア、この文は見ますまいわいなア。

ト文を懐へ入れる。金五郎あきれて、

金五　イヤハヤ、感心に亭主思ひの女だわえ。それぢやア、成程、おいらにやア、靡かねえ筈だ。ムム、精出して亭主を、大事にするといゝのさ。

トこなしある。合方になつて花道より、文吉出て來り、直に門口へずつとはひり、

文吉　ヲヽ、金五郎、こゝにゐたか。おらア、大きに捜してゐた。マア、アノ女の譯は、どうするのだ。

金五　ム丶、俺もさう思つて、今こゝへは來た。これ／＼累、どうせこの身代で、今夜中に百兩といふ金は出來めえ。どうでもおらア、アノ女を連れて行くよ。

累　エ丶、お前も氣の短い。その樣に見限つたこと、言はしやんすな。假令與右衞門どのが、才覺が出來いでも、切羽詰つたその時は、私が身を賣り。

ト兩人、びつくりして、

金五　ヤ、何、手前が身を賣る。

文吉　ア、お前が、身を賣るのかハ、、、、。

ト兩人、顏見合せあきれる。

累　何のマア、その樣にびつくりさんすことはない。夫のために女房が、身を賣ることは、こりやモウ義太夫本にさへ、あることぢやによつて、私しや身を賣つてなと、夫の辛苦を休めたうござんすわいなア。

金五　成程さうだ、尤も亭主のために身を賣るのは、世間に隨分多いが、

文吉　お前の樣に美しいのはあるめえよ。惜しいもんだナ。

ト兩人して、馬鹿にして嬲る。累笑ひながら、

累　その樣なことは言はしやんせずと、ナ、どうぞ私が身を、お前の方へ買つて、アノお女中さんは、私が方へ下さんせ。又後金は、與右衞門どのがよい樣になさんせうから。

文吉　ム、、アノ女の替りに、お前さんを取替へちやア、滿更損も行くめえがナア金五郎。

金五　アハ、、、、そんなら累、手前はいよ〳〵身を賣る氣か。

累　何のマア、噓に私が、身を賣らうと言ふものかいな。

金五　ム、、そりや誠にしろ、おぬしやア女郎になりやア、鏡も見にやアならねえぜ。

文吉　ヲヽ、それ〳〵、朝晩鏡に向つて、つくらにやアならぬ。
梟　それとても身を賣るからは、隨分承知でござんすわいなア。
金五　イヤ、まだ困つたことがあるわえ。おぬしやア、身持ちぢやアねえか。
梟　アイナア。
文吉　それぢやア、おえねえ。
梟　何故でござんす。
金五　ハテさて、身持ちで女郎になられるものか。子があつていゝ物は鮎の子ばかり。
梟　エヽ、こりやどうしたらよからうぞいなア。

ト金五郎、わざと考へる思入。

金五　ムヽ、いゝ事がある。俺が言ふ通りにするがいゝ。コレ、こりやアおろし藥だが、これを吞んでその腹の子を、おろすがいゝのさ。

ト金五郎懷中から藥の袋を出す。梟驚き、

梟　エヽ、何ぢや、おろし藥ぢやとえ、ほんにまア、お前は恐しい物を持つてゐさんすなア。なんぼお前が、さう言はしやんしても、樂しみ暮してたま〳〵、儲けた與右衛門どのゝ胤、どうま

アこれが、おろされうぞいなア。

金五　ムヽ、さう言やア仕方がねえ、アノ女を連れて、去なうか。

果　イヱ〳〵それでは私が、すまぬわいなア。

文吉　そんなら得心して、腹の子をおろしてしまふか。

果　サア、それは。

金五　厭なら、女を連れて行つて、與右衛門に天井見せうか。」

果　サア、それは。

文吉　思案極めて、返事さつしやい。

金五　サア〳〵〳〵。

ト兩人、まくしかけて言ふ。果當惑のこなし。

果　お腹の嬰兒は、大事の大事の夫の胤、賣らうといふ身も夫のため。こりや、マアどうしたらよからうぞいなア。（トうろ〳〵する。）

金五　とても、手前の料簡にやア、らちやア明くめえ。與右衛門に逢うて相談しよう。

果　ヱヽ口惜しい。お腹の嬰兒があつては身を賣られず。どうあつても、こりやま一度、與右衛門

金五　どのに相談して、定めずばなるまいかいなア。
文吉　知れた事よ、どうせ、腹に子があつちやア。
果　女郎にやアなれねえ。（ト果立上り、）
金五　そんなら、私しや與右衛門どのを、呼んで來るぞえ。お前方はそこに待つてゐて下さんせ。
　ト唄になり、累思案しい〳〵奥へはひる。金五郎暖簾口へ來て、奥の樣子を窺ひ、
文吉　ム、、與右衛門は金の才覺にでも行つたと見えて、奥は先刻の旅人ばかり、ゆう〳〵と斬最中。累も裏から出て行つた。上首尾〳〵。（トこちらへ來て、文吉に囁く。）
金五　合點だ。
　ト門口へ來て手招きする。下手より以前の駕籠舁出て來る。この內暖簾口より、出まいとする園生の前を、金五郎無理に引きずつて出て來る。園生の前ふるへてゐる。
三郎　何でも俺が勝手にする。默つてゐな、默つてゐな。
　ト無理に駕籠へ押込む。この內奥より三郎兵衛出て來り、
　ヤア、その女を、やつてはならぬ。
　ト駕籠の方へ立ちかゝる。文吉、どつこいと留める立廻り。三郎兵衛以前の鏡を落す。金五郎すか

さず拾ふ。文吉、三郎兵衛にしがみつく、

文吉　これ〳〵金五郎、こゝ構はずと、その女と鏡を持つて、行つた〳〵。

金五　合點だ。

　トこの内以前の伽羅の下駄の片しを取つて、懐中へ入れる。駕籠の胴中を有合ふ縄にて手早く縛り、駕籠の者に目配せして、

駕籠舁兩人　サア急げ、急げ。
　合點だ。

　ト金五郎先に、駕籠舁ついて花道へはひる。三郎兵衛氣をかへ、

三郎　ヤア、それやつては。

　ト花道へ行かうとするを、文吉支へる。この内、始終雨車。雷の音。烈しき鳴物。兩人、立廻りある。揚幕より、捕手一、二、半纏、股引、十手取縄を持ち、兩人走り來て、門口を入り、

捕一　ヤア〳〵、この家の内にお尋ね者の、園生の前を匿ひおく事、この者が訴人にて確に聞く。縄打つて引く、これへ出せ。

　トこの内、三郎兵衛、文吉を一太刀切倒し、

三郎　ヤア、仰山な捕人呼はり。この家のうちに、その様なものはござらぬわ。

捕二　ヤア、眼前、うぬが人殺し、繩打つて引立てる、觀念なせ。

ト兩人、三郎兵衛へかゝる。烈しき鳴物になり、立廻り。この內奥より、累出て、この體を見て驚き、有合ふ物を取つて、捕人兩人を支へ働く。三郎兵衛立廻りながら、

三郎　こりや／＼累、こゝ構はずと夫の大事、早く金五郎を追駈けい。

累　エヽ、何とえ。

三郎　イヤサ、金五郎めがたつた今、園生樣を連れて行き、稻妻の名鏡持つてうせた。

トこの內、累せきこむ思入。

累　さうぢや。

ト駈け出でんとする。三郎兵衛、捕人兩人をこあしらひながら、

三郎　こりや待て妹、空身では心許ない。ソレ、持つて行け。

ト金五郎が脇差を取つて、投げてやる。

累　心得ました。（ト脇差を取り思入あつて、）兄さん後を。

三郎　こゝ構はずと、早く行け。

累　合點でござんす。

ト立上り、伽羅の下駄を見て、

ヲ、コレ、幸ひのこの片し。

ト下駄を取つて門口へ出て、引きずる足の方へこれを履き、

女でこそあれ、夫の大事、ソレ。

と雨車、雷の音はげしく、累、逸散に花道へはひる。この内文吉、よろぼひ〳〵立上り、後を追つて行かうとする。三郎兵衛手早く、又一かせ切下げる。烈しき立廻りよろしくあつて、與右衛門奥より出て、この體を見て、

與右　ヤ、、、こりや何事。

三郎　何事所か、たつた今、國生様と稲妻の名鏡を金五郎めが、取つて行きをつた。累も後を追駈け行つた。ちつとも早く追駈けて、双方ともに取返せ。

ト與右衛門ぢたんだを踏み、

與右　ム、金五郎め、憎いやつ。幸ひこゝに草苅鎌、うぬ眞二つに、ヲ、さうだ。

ト行かうとするを、

捕二　我をやつては。

ト與右衛門へかゝる。三郎兵衛引留めて、

三郎　こりや、私が預かつた。ちつとも早く。

與右　忝い。シテ、道筋は。

三郎　鬼怒川通り。

與右　ヲヽ、合點だ。

ト雨車、大雷の早三重にて、與右衛門尻をからげ、逸散に花道へ走りはひる。三郎兵衛捕人二と立廻りあつて、見得よろしく、

幕

ト幕外、雨車、雷の音にてつなぎ、引返す。

大切　鬼怒川の場

役名　絹川與右衛門、羽生村金五郎。與右衛門女房累、足利息女園生の前、駕籠舁二人。

本舞臺三間の間高き草土手、本龍の叢を伏せ、上り下りのなる仕掛あり。上の方柳の立木、誂への

辻堂、通しの藪疊、日覆より柳の釣枝。平舞臺上の方に流れ襤褸、こゝに鬼怒川と記したる傍示杭を立てる。舞臺前に流れの浪板、蛇籠、亚繕ひ、下手稻むら、所々に誂への通り、雷の音きびしく雨車。時の鐘にて幕あく。ト直に花道より、以前の駕籠舁、圓生の前をのせたるまゝ、急ぎ舁き出て來り、直に本舞臺へ來る、累以前のなりにて、取亂し走り出て來て、土手の上にて追付き。

累　待つた、待つた。その駕籠やつては、ならぬわいなア。

ト駕籠の棒へしがみ付く。この内やはり雨車、雷の音にて花道より金五郎、走り出て來り、これを見て驚き、累をさゝへ、

金五　こりや、誰だと思つたら、與右衞門の女房累、留めだてするな、邪魔になるわい。

ト此内、駕籠舁逃げてはひる。

累　イヤ〳〵邪魔をせねば、與右衞門どのゝために、ならぬわいなア。

金五　ム、、それ程ほしかアやりもせうが、マア〳〵放せ。

累　イヱ〳〵、まだこればかりぢやござんせぬ。大事の〳〵名鏡も、お前が持つてゐさんせうがな。

金五　ム、成程、それも、俺がぽつぽにあらア。

トちよつと見せる、累それをとかゝり、立廻り。

累　これも欲しかア、やりもせうが、手前これで顔を見るか。

金五　イエ〳〵顔は見いでも、私が魂。サア〳〵、こつちへ下さんせ。

累　ヲヽ、それ程大事な鏡なら、随分やらう、返さうが、ちよつと顔を見た上で。

ト見まいとする累へ、金五郎、鏡を無理に差付ける。と思はずちらりとうつる。累びつくりして。

金　エヽモ、見まいといふに、無理なことばかり、その罰で、アレ〳〵、あんな怖い顔がうつる。

累　こりやマア、誰が顔でござんすえ。

ト合點の行かぬ思入。金五郎しめたといふ思入。

金　やつぱり、累、手前が顔さ。

累　エヽ、何のマア嘘ばかり。

金　おぬしやアそれを、知らねえか。

累　ムヽ、そんなら、私しや。

エヽ。(ト又鏡をぢつと見て)ヤヽ、こりやうつる模様も龍田川。アレ〳〵、物言へば物言ふ、

ト又鏡をぢつと見つめ、涙を浮め思入あつて、

エヽ、何時マア私は、この様な顔になつたぞいなア。

金五郎我が目へ唾をつけ、

金五　ヲヽ、悲しかろ、道理だ〳〵、尤もだ。

累　ほんにマア、私しや何の因果で、この樣に、チヱヽ〳〵。

と泣落す。又鏡を見て、

かういふ見られぬ顏になつたこの累、與右衞門どのは、ようマア、愛想も盡かさず私に鏡を見せいでの心づかひ。兄さんが鏡を見るなと言はしやんした、深い情が却つて徒、わしや恥しい、

ト泣落す。金五郎思入あつて、

金五　ムヽ、まだおぬしやア知らぬえが、成程手前はよつ程亭主思ひ。マア與右衞門は、邪險者だ。しかし、手前がそんな顏になつた故の事でもあらうか、おらア手前の、心意氣が可愛くつて、與右衞門がむごい根性が、小面が憎いわえ。

累　ヱヽ、何と言はしやんす。與右衞門どのが、何とえ。

金五　大事の事だが、聞かさうが、アノ與右衞門はな。

累　何としたえ。

金五　とうから手前にやア秋風よ。

累　ヱゝゝゝ。（ト驚き、又鏡を見て）成程、さうでもござんせう。この様な顔になつた私、愛想の盡きるも、尤もでござんせう。

金五　イヤ、そればかりぢやねえ、まだ與右衛門が俺に頼んだ事がある。こればかりやア、言ふめえと思つたが、言つてしまふ。

累　この様になつた上は、與右衛門どのゝ、愛想の盡きるは知れたこと。何なりと、言うて聞かせて下さんせ。

金五　そんなら、言うて聞かせよう。聞いたら、さぞ腹が立たう口惜からう。こりやア、どうでも、止しにしよう。（トわざと累に氣をもます思入。）

累　イヱ／＼、言つて聞かせて下さんせ。聞かねば胸が、落着かぬわいなア。

金五　聞いたら、猶胸が落着くめえ。それ程聞きたか、大事の事だが言つて聞かせよう。マア、からだわ、アノ駕籠に乘せて來た女は、與右衛門が隠し女房だわ。

累　ヱヽヽヽ。（トびつくりこなし。）

金五　そして、あの女は身持ちだらう。

累　アイ、身持ちさうにござんす。

ト駕籠の方をぢつと睨む。

アノ駕籠の内なは、與右衛門どのゝ隱し妻。さうとは知らず最前も、ヱヽ、口惜しい。

金五　ヲヽ、口惜しい筈、口惜しい筈。まだ〳〵與右衛門は情ない男だ。アノ女の腹の子も、與右衛門の胤だわえ。

累　ヱヽ、あの身持といふも。

金五　ヲヽサ、やつぱり與右衛門が胤さ。それにつけて、まだ手前が腹を立つ譯があらア。美しい女の方は大事にして、これ見やれ。

ト懐中より以前のおろし薬を出し、

手前にやアこれを呑ませて、腹の餓鬼をおろしてくれろと、與右衛門が俺に頼んだ、おらア生來佛心、手前がそれ程、亭主思ひでゐる所へ、むざ〳〵これを呑ませるも、どうも可愛さうだ。不便だによつて、この薬は、おぬしにやるから、手前の戀の遺趣晴らし、アノ女に、呑ませるがよからう。

ト累口惜しきこなし。

累　エヽ、聞けば聞く程腹が立つ。この樣に、見られぬ顏になつたをば知らせもせず、なんぼ私がお腹に宿したとて、やつぱり自分の胤ではないか。與右衞門どのがさういふ酷い心とは、今の今迄知らなんだわいなう。

累　この藥を私に呑ませて、お腹の嬰兒までおろさうとは　マア、恐ろしい企みごと。それもやつぱりアノ女故、エヽ、思へば思へば。（ト口惜しき思入）

金五　コレ累や、さつきの文も、アノ女の所から來たのだよ。

累　エヽ、成程、さうでござんせう。さうとは知らず最前は、義理立てして讀まいでおいたが今では悔しい。（ト煙草入より文を出して）ムヽ、與右衞門さま參る、菊野より。

金五　ヲヽ、それ〳〵、與右衞門が馴染の女郎は、菊野といつた。

累　ムヽ、ナニ〳〵、過ぎしお別れよりは、お前樣のこと明暮に存じ、忘れ兼ね參らせ候。どうぞどうぞ、早う身まゝに致し、女夫になるやう、それのみ祈り念じ參らせ候。

ト段々文を見てむつとこなし。

何ぢややら、いやらしい、この累といふ女房のある、與右衞門どのへ、あたしたゝるいこの文言。エヽ見れば見る程腹の立つ。こんな顏には、何故なつたぞいなア。

トロ惜しき思入、泣きながらよろしくとなし。

金五　何と、違ひはあるめえがの。このおろし薬をおぬしにやるから、腹いせに、アノ女に呑ましてやりやれ。しかし、なまけた事ぢやア呑むめえぜ。〔ト果きつとなし。〕

果　どうなとしてアノ女に、呑ませいで、おかうかいなア。

金五　ヲヽ、さうだ〳〵。あいつも大事の預かりものだが、手前にやつてしまふから、存分に腹を癒やしやれ。

果　アイ、忝うござんす。

金五　さうしてその鏡は、手前に見せてくれろといつて、與右衛門が俺に渡した。そりやア、手前が物だから、どうとも勝手にするがいゝ。

果　スリヤ、この鏡を私に見せてくれとは、私がこの樣になつた故、身で身に愛想がつかさうといふ企みぢやな。

金五　ムヽ、いゝ呑込みだ。マア、そんなものだよ。何でもアノ女めが、與右衛門を迷はせたのだ。

ト以前の御簾の下駄を揃へ、

トキニ、こりやア、俺が貰つて行かうよ。

ト果駕籠の方を見て口惜しき思入。

果　どうなと勝手にさんせいなア。ヱヽ、恨めしいは、アノ女。

金五　ヲヽ、さうだ／＼。鬼になつても蛇になつても。

果　憎いと思ふ女の一念。

金五　必らずぬかるな。

果　心得ました。

ト下駄を持つて金五郎、下手へはひる。後護への木魚入りの合方になり、果こなしあつて鏡を取りぢつと見詰め、ハツと泣落し、又顔を上げ、

ヱヽ、思へば思へば口惜しい。たつた今の今迄、やつぱり我身は、器量自慢してゐたが恥しい。いつも山へ行つた時は、村のお衆が寄り集まり、ほんに累は器量がよいの、イヤ目鼻恰好やのと口々に、與右衛門はよい女房持つて、仕合せぢやと言うたのも、私がかういふ顔故に、嫐るのぢやと露しらず、村の踊りの晴着にも、好んで染めた龍田川、派手な模様もこの顔に、何の似合はうこの小袖、ヱヽ、思へば、思へば。

ト色々身をもだえ、又鏡をぢつと見詰め。

この様に顔の悪くなつたのも、いつそ知らねば悋氣もせまい。もうこの様になるからは、とても夫に見捨てらるゝは知れたこと。ヱヽ、この顔の寫る鏡が恨めしい、かういふ醜い、顔ぢやとは知らず、やつぱり元の累ぢやと、心の内に自慢して、外の女子を笑うたり、悪う言うたが恥かしい。ヱヽ、この鏡がある故に、こんな悔しい思ひをする。こりやマア、夢ではないか。夢なら早く、醒めてくれ、醒めてくれやい。

ト鏡を舞臺へ投付け、又取上げ、

ヱヽ、見直しても、やつぱりこの顔、我身でさへ汚ないもの、男の目にはさぞやさぞ、汚いことであろ、醜かろ、外の女房拵へたも、さら／＼無理とは思はねど、胴慾な、お腹の嬰兒迄おろさうとは、あんまり酷い情ない。かういふ顔になつたとて、女子に生れた悲しさは、見替られたが口惜しい。この鏡もアノ女中のため、大事にかけてゐたのであろ、思へば／＼、我身の敵のこの鏡、どうして腹を癒てこまさう。

ト名鏡を取つて、土手の下へ投げ込む。

あたしたゝるいこの文も、かう／＼／＼。

ト文をずん／＼に裂き、

何を言ふにも恨みにも、この醜い姿になつては、見限らるゝは知れてある。とても生きてはをられぬこの身、せめての恨み、ム、、さうぢや。

ト立上り駕籠の方へ寄り、取りのぼせて、足取定まらぬこなしにて、土手を踏み外し、ころ〳〵とこけかゝり、よろしくしながら、上の方へ来り、有合ふ業螺貝を取り、水をすくひ一つ呑み、息をつくこなしあつて、又一杯すくひてこれを持ち、跛をひきながら土手の道をよぢ上り、業螺貝を下におき、懐中より以前のおろし薬を出し、これに入れて、駕籠の傍へすりより、結へてある繩を解き垂れを上げる。中より園生の前、以前のなりにて出て、あたりを見廻し、あわてゝ逃げようとするを、果引捕へ、

果　モシ、お女中さん、言ふことがある、マア〳〵下にゐやしやんせ。

園生　エ、、自に、何のマア。

ト ふるへてゐる。果、業螺貝の殼を園生の前へ突付け、

果　コレ菊野さん、これを一口、呑んで下さんせ。サア、たつた一口呑みなさんせ。

園生　エ、、自は、その様なものぢやない。そしてマア、むさくろしいその器、その様な物を、どうしてマア。これ〳〵、そこ放してたも。

トやはりふるへながら、どうぞ逃げようといふこなし。果しつかりと押へ、

累　イヤ〳〵、これを呑まさぬ内は、何ぼうでも、放さぬわいなう。

園生　エ、。

ト累を振切る。累、園生の前が裙を捕へ、きつとなり、

累　ヲヽ、呑まれまい、呑まれまい。與右衛門どのゝ胤がある故呑まれまい。さうでなくばこの藥一口呑んで私が迷ひを、晴らさせて下さんせ。

ト園生の前へ突付ける、園生の前、合點の行かぬ思入して、

園生　エヽ、その藥を自が呑んで、何でそなたの疑ひが、晴れるのぢやぞいなう。

累　サア、この藥はその宿つてゐさんす、子をおろすおろし藥。それぢやによつて、サア、一口呑んでくんなさんせ。

園生　何と言やる。そんならそれが。（トうろ〳〵してゐる。）

累　サア、もうどうあつても、呑まさにやおけぬ。エヽこなさんは〳〵、ようも〳〵、遥々とこの下總迄、男を寢取りにおじやつたの。

園生　イエ〳〵、何の自が。

累　イヤ〳〵のめ〳〵と、お姫樣も凄まじい。私が、こんな見られぬ顔故に、與右衛門どのゝたつ

しこみ、ようこの累を、追出さうと企みやつたの。

園生　イヱ／＼、自は、そんな恨みを受ける者ではない。必ずともに言やんなや。ヱヽ、この絹川は、何してぞ。

トうろ／＼して後ずさりに逃げかゝる。累又引留め、

累　ヱヽ、こなさんは／＼、まだのめ／＼と言抜けて、夫の後を慕やるか。

園生　イヤ／＼、さら／＼さうでは。

累　さうでなくばこの薬、一口呑んで私が胸を、晴らして下さんせ。

園生　サア、それは。

ト累、紫螺貝を持ち、園生の前をぢり／＼と付け廻し、突付ける。

累　とても、一人では呑まんすまい。どりや、私が呑ます、厭であらうが、サア、呑んで、下さんせ。

ト無理に園生の前へ呑ませようとする。園生の前、呑むまいといろ／＼もがき、散し髪になるを、累手へ巻付け、色々さいなむ。この内始終、誂への凄き合方。トヾ園生の前、あやふくなる。ト又雨車、雷の音烈しく、バタ／＼にて花道より與右衛門、逸散に出て來り、この體を見て驚き、累を投付け、園生の前を圍ひ、

園生　ヤア、よい所へ與右衞門。

ト累又園生の前へ立ちかゝるを引留め、

與右　こりや累、あなたをどうせうと思ふのだ。そりや氣が違つたか。イヤサ、血迷つたか。

ト累、押へられながら、與右衞門と顏見合せ、くちをしき思入。

累　コレ、與右衞門どの、エヽこなさんは〳〵、かういふ私が、醜い顏になつた故、愛想の盡きたは尤もぢやが、それを明かして下さつたら、この樣に腹は立てまいもの。これ迄私に、鏡を見るなと言はしやんしたは、かういふ顏を知らせまいとの志し、ほんにもうその樣に迄私がことを思うて下さる、忝いと思つてゐたがみんな嘘、敵打を延して貰うた兄さんへ、義理ばかりであつたかいの。その又義理も忘れてしまい、それその樣な美しい、女を都へ呼びにやり、私には難題言ひかけて、追出す心であらうがの。さうとは知らず最前も、御臺樣の奥樣のと、崇めて言うたが口惜しい。エヽ、こなさんは〳〵、恨めしい心ぢやなう。

トこの内與右衞門、一々心得ぬこなし。

與右　ムヽ、さてはわりや最前金五郎に、言うた樣子を。

累　ヲヽ、何もかも、聞いた〳〵聞いたわいなう。

ト與右衛門、さては思入あつて、

與右　そんなら、わりや、金五郎にしやくられたな。そしておぬしやア、鏡を見たか。

累　アイ、見た〳〵、鏡を見たが恨みのはじまり。

ト又園生の前の方へ寄らうとする。與右衛門引寄せ、

與右　ム、あれ程、見るなと言付けたに、何故又わりやア鏡を見た。それもやつぱり金五郎めが、コリヤ累、最前の俺が詞といひ、金五郎めがしやくつたら、その腹立も尤もだが。コレ累。

ト園生の前の方へ寄らうとする累を、しつかと引据ゑ、

コリヤ、心を鎮めて聞いてくれ。何を隠さうこのお方は、足利頼兼公の御臺様、俺が故主持ちの公の、お姫様ぢやわやい。疑ひ晴らして、ともに都へ御供し、お力になつて上げてくれ。コレ累。

ト園生の前、こは〳〵寄り添ひ、

園生　ヲヽ、それ〳〵、與右衛門が言やる通り、自らとても惜しからぬ命なれど、頼兼様の御胤を宿せし大事の身なれば、そなた衆の世話になり、存へてゐるわいなう。疑ひ晴らしてどうぞマア、身二つになる迄は、力になつてたもひなう。

トこの内、累段々しはがれ聲になり、

累　イヤ〳〵、その言譯聞かぬ〳〵。まだ私を騙すのぢや。都にござる頼兼様、その御臺様が、この下總三界へ、どうして尋ねてござんせう。

與右　ヤ、サ、それは世上の事を、御存じない故。

累　イヤ〳〵〳〵、何も聞かぬ〳〵。まだその上に百兩の金、金五郎にやらうとは、何で言やつた。

與右　サア、その入譯をとつくりと、打明けなんだは思ひ違ひ、俺が誤り。

累　ヲヽ、思ひ違ひがしたであらう。思ひ違ひがさいでかいなう。こなさんが可愛がる、その女めに入金とは知らず、この私が現在勤め奉公に、身を賣らうと迄したわいの。ヱヽ、思へば思へば、この身のために、仇敵のその女、喰付いてなとこの恨み、晴らさいでおかうか。

ト國生の首の方へ寄るを、取つて引寄せ、

與右　ヱヽ、これ程迄に事を分け、言聞かすに聞分けのない、こゝな業曝しめが、何故その様に物の道を辨へぬぞ。とは言ふものゝ、思ひ出せば二人が因果。我手にかけし高尾が執念の不思議は、そちが内で泊り合せたその夜のしだら、夫婦の中を割かんとて面體ばかりかソレ足迄もそ

の樣に、生れもつかぬ跛。サ、假令、どの樣な見苦しい、顏にならうとも、三郞殿への志しといひ、故鄕を離れはる〴〵と、この下總の草の中、仕付けもせぬ百姓業、不自由たを苦にもせず、誠を盡すそちが心體、心の器量は昔の百倍。畢竟、鏡を見ればこそ、我と我身に愛想が盡き、さう思ふは理ながら、そんな心は毛頭ない。さういふ心があるならば、この腹帶をしめさせはせぬわいなう。

ト泣きながら累の腹帶を引出し、見物へ見せる。

累　イヤ〳〵、そりや、噓ぢやわいなう。私には愛想がつきた故、腹の嬰兒迄、おろしやるのぢや。

與右　ハテ、さて、惡い料簡、愛想の盡きぬ證據には、朝夕の床の上げ下しも、三度に二度は俺が片付け、遂に一度荒い詞をかけもせず、はし折りかゞみに、仕付もせぬ神佛へ手を合せ、どうぞ累が安々と身二つになれます樣にと、願はぬ日はないわやい。外ならぬそちが身故、猶更、俺は案じられ、どうぞして何事なく、身二つになる樣にと、朝夕祈る與右衞門が、心は知らずこのしだら、ヱ、見下げはてた心ぢやなア。

累　ヱ、、祈らしやんしたであらう、祈らしやんしたであらう。私を祈り殺さんすであらうわいな

う。

ト色々もがく。與右衛門、ちつと累の顔を見て、

與右　ヱヽ、おのれはなア、何の因果でその嫉妬。

トこの内、累色々もがき、與右衛門をふりきり、土手より落ちかゝる。與右衛門鎌を累が帯へかけ引上げる。

累　イヤ〳〵、モウかうなつては、何を言はしやんしても、聞かぬ〳〵、聞かぬわいなう。

與右　ヱヽ、おのれはなア、シテ鏡やお下駄は、何とした。

累　ヲヽ、下駄は金五郎が持つて行た。鏡はあんまり恨めしいによつて、この鬼怒川へ、投込んだわいなう。

與右　ヤヽヽ、スリヤ、アノ二品を。ホヽホイ。

ト思はず累を放し、がつくりとなる。累すかさず脇差を取りて引抜き、うろ〳〵してゐる園生の前の後へ廻り、肩先よりざつぷりと浴びせる。園生の前、ウント倒れる。與右衛門あわて驚き、脇差を引ツたくる。この立廻りに、思はず累が咽喉を切る。

累　こりや私を、殺すのぢやな。

與右　イヤ〳〵、さら〳〵さうではない。こりや怪我だ。堪忍せい〳〵。

累　イヤ〳〵、殺すのぢや〳〵。殺さば殺せ、とても添はれぬこの身の上、死んだ後でもこの恨み、晴らさいでおかうか。

ト色々もがく。與右衛門、累が髪の毛をしつかりと手に巻き、ぢつと顔を見て、ホロリとして、

與右　ヱ、おのれはおのれは、少しの油断に大切の、名鏡は鬼怒川へ投げこみ、お下駄は金五郎へ渡してしまふ。これで與右衛門が、立たうと思ふか。御主君へ申譯がないわいやい。まだその上に大切の御主君、國生様迄手にかけ、殺害なせしその上は、おのれは誠の主殺し。不便ながらもモウ生かしては。

ト泣落し、思ひ切る。累、のたうち廻り、

累　ムヽ、殺さば殺せ。モウ、アノ女を殺したからは、思ひ残りはない程に、サア〳〵、殺しや殺しや。

ト與右衛門が方へ鎌をさしつけ、じだんだ踏む。與右衛門、ぢつと思入あつて、

與右　是非に及ばぬ。

ト思ひ切つて、累が胸先へ鎌を突込み、片手にて詫びる思入。この途端又雷、本雨降る。累色々苦しむ。與右衛門、鎌を取直し、累が首を抱へ、ぢつと見て思入。雨止む。

心がらとは言ひながら、淺ましいこの死樣、みんな心の僻みから、これ程の事聞分けぬ、常の氣性知つてはゐれど、何を言ふにも魂が入替つて、姉の高尾が死靈のなす業。三婦殿へ番うた詞もあるなれど、主人へ言譯け二つには、所詮叶はぬ痛手故、心强くも手にかけて、殺すこの身は何たる業。姉が忌日も今月今夜、廻り廻りて一周忌、妹の累も我手にかけ、姉妹ともに殺すといふは、思ひ廻せば廻す程、よく〳〵深い因果ぢやなア。せめて兄貴へ言譯には、腹切つて後から追付く、こりや累、六道の辻で待つてゐい。

　　トホロリとして、あたりを見て思入あつて、首をおき、土手をおり、流れ灌頂の切れを取り、

ア、、これも、産んで果てた人さうな。ドリヤ、これを借りて。

　　ト右の切れを持ち、又土手を上る。このうち始終一つ鉦の合方。與右衛門どつかりと下にゐて、

ア、、かうも思案の違ふものか、二品の寶は手に入らず。園生樣はお果てなされる。女房累は手にかける。我思ふ事は鶍の嘴。ハテ、是非もなき成行きぢやなア。ア、、我ながら愚痴な繰言、所詮嘆いて返らぬ事、ドリヤ、三婦殿へ書置を。

　　ト竹笛入の合方になり、與右衛門、流れ灌頂の切れへ書置をして、累が首を包み、辻堂の上へのせ、心靜かに回向する見得あつて、こちらへ來てどつかりとゐて、肌を脱ぎ、脇差を逆手に持ち、腹

切らうとする。この途端、倒れゐたる園生の前、むつくと起上る。與右衛門びつくりふり返り、

與右　ヤヽヽ園生樣。

園生　そなたは、與右衛門。

與右　スリヤ御身に、お怪我はござりませぬか。

ト合點の行かぬ思入。

園生　さればいの、自も肩先から、切らるゝと思うたが、その後は氣を失ひ、何事も知らなんだわいの。これといふも自が、日頃信心淺からぬ、祐天樣のお蔭でがなあらうわいの。ヲヽ、それ〳〵、最前そなたの家にて、御出家に貰うておいたこの御掛地。

ト懐より、以前の名號を出し、

自が災難を、お救ひなされたお禮のため、拜みませうわいなア。

ト掛地を開き見て、びつくりして、

ヤヽ、こりや名號は。

與右　何と致しました。

トずた〳〵に切れしを見て、びつくり、

ヤア、こりやずた〈〜に。さては常々御信心淺からぬ、祐天様のお蔭故、お身に邂ござりませぬか。ハヽア忝い。これにつけても早まつた、女房累。

トホロリとする。

園生　ヤヽ、お内儀は。

與右　不便ながらもあなたの仇、手にかけて殺しました。

園生　ニヽ、仕様模様もあらうのに、いぢらしいことぢやなう。

ト下手より、金五郎出て、土手の上へ駈上り、以前の[illegible]の下駄を持つて與右衛門が傍へつッ立ち、

金五　コレ與右衛門、お尋ね者の園生の前をかくまひ、女房累を手にかけた人殺し。どつちへ向いてものがれぬ所だ。連れて行つて褒美にする、サア來やれ。コレ見やれ、證據もこゝに持つてゐらア。何と褒美が欲しからう。

ト下駄を見せびらかす。與右衛門園生の前を圍み、

與右　金五郎、われにやア澤山、禮を言はにやアならぬ。

金五　イヽヤ、禮は聞きたくねえ、代官所へ連れて行く、きり〈〜うせう。

ト與右衛門へかゝるを、突退け、

與右　イヽヤ、われを連れて行く。

金五　イヽヤ、おのれを。

與右　イヤわれを。

兩人　何を小癪な。

ト双方入り烈しき合方になり、兩人花々しく立廻りある。この時後より、捕人一、二、鉢頭のなりにて出て、園生の前へかゝる。與右衛門支へ、四人、色々立廻りあつて、トヾ三人を上手へ追込む。金五郎かゝるをすかさず、與右衛門脇差を拔き金五郎を一かせ切る。金五郎、ウンを倒れる。とこの血潮、下の川へ流れ込む。薄ドロ〳〵になり、水氣立上り、累が投込みし稲妻の名鏡現れる。

與右衛門これへきつと目をつけ、

與右　ヤヽ、あれこそは、正しく稲妻の名鏡。最前累が破却なせしと思ひしに、水底に沈みゐて、血潮の穢れに現れしか。チエヽ、忝い。

ト土手を下り、鏡を取上げ悦ぶ思入あつて、押戴き、

エヽ、忝い。破却なせしと思ひしに、鏡は我手に入り、園生様には御安泰。いまだ、我運命も盡きざるか。エヽ、忝い。

ト又押戴き、土手を上り、園生の前に鏡を渡し、

園生　不思議に手に入る稻妻の名鏡、イザ、お受取りなされませう。

園生　ヲヽ、この鏡は足利家の寶。ヱヽ、忝い。

ト金五郎やう〳〵起上り、よろ〳〵しながらそれをとかゝる。與右衛門支へて、

與右　小癪な奴の。（ト突きのける。）

金五　ヱヽ、口惜しい。

ト又與右衛門へかゝる。與右衛門又一太刀切込む。

與右　人非人の惡人め、おのれがしやくつたばかりで、女房累は、非業の最期、恨みの程思ひ知れ。

ト思ふまゝに金五郎を殺し、刀の血糊を拭ひ、下駄を取上げ、

この下駄も手に入りました。お悦びなされませ。

ト園生の前悦び、

園生　ヲヽ、悦ばいでかいなう。何事もみんなそなたの心遣ひ。自らも恙なう、寶も殘らず手に入つたも、みんなそなたの忠義故。

與右　これも全く神佛の、加護でがなござりませう。

園生　それにつけても、いぢらしいは累とやら、自らゆゑにこのしだら、せめて未來の苦患など、晴るる樣にこの名號、載せてやらうわいなう。

ト名號を與右衛門へ渡す

與右　ハヽア、これは有難うござります。いかさま、苦患を助かりませう。どりや〳〵。

ト與右衛門、辻堂の前へ行き、以前載せたる流れ灌頂の切れを取る。累が醜き本首出る。與右衛門名號を持ちいたゞかせ、

そちをしやくつた金五郎めは、我手にかけ、殺したと思つた姫君は御安泰。不便なそちが最期、せめて未來は成佛してくれ。こりや、有難いお名號だぞ。

ト首の上を撫ふ。とパツト煙立つ。累が顏、以前の美しい面體になる。

ヤ、こりやこれ、累の俤の、元の如くになつたるは。

園生　ヤ、さては、この名號の功力によつて、高尾とやらの執念も、立去つたるかいなう。

與右　こりや累、魂この土を立去らずば、よつく聞け、最前、我を代官所へ呼び付けしは、園生樣の事、早訴人せし者あつて、首討つて渡せとある、山名左衛門が嚴しい言付け。元の面體となつたを幸ひ、そちが首を以てお身替りとなし、この場をすまして、園生樣を都へお供し、お館へ

入れ奉れば、足利のお家長久。さすれば、そちが非業の死も、天晴忠義となる。それを未来へ引導に、こりや、快く成佛せい。

ト累が額をぢつと見て、

ム、、うなづく如き面體は、成佛せしに疑ひなし。

園生　それ聞いて自らも、落着いたわいなう。

與右　サア、これからは足利の、お家は萬代不易。

園生　ヱ、、忝い。

トこの時下手より、捕人一、二出て、與右衛門を取捲き、

動くな。

トちよつと立廻りあつて、どつこいと宜しく見得。

與右　先づ、今日はこれぎり。

ト目出度打出し

累物語（終り）

碁太平記白石噺

（ごたいへいきしらいしばなし）

甲子楼

碁太平記白石噺（宮城野信夫＝＝三幕）

白坂鎮守祭禮の場
明神之森の場

序幕

役名　庄屋七郎兵衞、志賀臺七、臺七下部奥平、同丹助、百姓與茂作、金井谷五郎、宇治兵部介正雪、組頭佐次兵衞、運八、おのぶ。

本舞臺三間の間向う淺黄幕、上手石の鳥居、正面に鎮守明神と書きし額を掛け、七五三繩を張り、同じく石の玉垣、下の方松の大樹、日覆より同じく釣枝、すべて明神祭禮夜の體。立提灯に火をともし、篝など焚き、こゝに組頭佐次兵衞、百姓、一、二、三、四、五、他に百姓大勢立ちかゝりある見得、宮神樂にてよろしく幕あく。

佐次　サア／＼提灯は立つし、この明神樣のお祭り、一年に三度ぢやが、なんと賑やかな事ぢやない

か。

百姓　このやうに、賑やかな事はない、誠に、

皆々　めでたい事でござるなう。

百一　それ〳〵、めでたいと言や、年中の物なりを守つて下さるこの神樣、大事に祭らにやならぬてや。

二　イヤ又この白坂の明神樣は、鳥居はこゝにあつて御本社と言や山の麓、十町も向うにござる。

三　そこで祭には、いつも本社にかゝはらず、この鳥居先で禰宜殿が奉幣を捧げるぢや、なんと珍らしい事ぢやないか。

五　イヤ珍らしいといや、近年のやうに、豐年の續く事も珍らしい事ぢや。これといふもみな鎭守樣のお蔭ぢやぞや、なんと有難いぢやないか。

皆々　有難いとも〳〵。（ト銘々腰より火打袋を取出し、煙草をのみながら、）

百四　そりやさうと、この年の年行司はアノ與茂作、とも〴〵手傳はにやならぬのに、どうした事で來ぬぞいの。

五　さればいの、與茂作は常々からの信心者、一番に來る筈なれど、家の嚊がこの春からの煩ひ

で、いかい氣遣ひ、それでがな暇どるであらうわいの。

佐次　しかし、おのぶといふ娘もあり、嚊しゆの兄弟といや庄屋殿なり、何も案じられた身の上でもござらぬてや。

一　ヲヽさうとも／＼。（ト向うを見て、）あれ／＼噂をすれば影さすと、向うから來るはたしかに與茂作殿。

五人　ほんにそれ／＼、しかも娘のおのぶ女郎を連れて來るわ／＼。

皆々　ヲヽイ／＼。

ト皆々捨ゼリフにて向うへ思入、在郷唄になり、百姓與茂作木綿やつしのこしらへ、後よりおのぶ、同じく木綿やつし拵へにて、木具に備へ物を載せてこれを持ち、兩人とも花道に立留り。

與茂　ヲヽ、皆の衆揃うてか、何やらごて／＼して、ひまどつて遲うなつたわい。サアおのぶ、早う來い／＼。

のぶ　アイ／＼、明神樣のお備へをこしらへて居たうちに遲れました、皆さん堪忍して下さんせえ。

佐次　なんの／＼、斷るに及ぶ事か、サヽ年頭の與茂作殿、お娘殿を連れて早く／＼。

與茂　そんなら行かうかい。サアおのぶ來や／＼。（トおのぶ與茂作舞臺へ來る、皆々思入あつて、）

五　與茂作殿、こなたよい子持ちで、さぞ樂しみでござらうなう。

一　それ〳〵、おのぶ女郎は在所に稀な、よい器量。

四　今の今とてその噂、嚊しゆは庄屋殿の妹といひ、申分のない果報者。

皆々　ア、羨やましい身の上ぢやナア。

與茂　ハ、ア何を云はつしやるぞの、この與茂作も元は上方で、刀も差いた者なれど、不圖した事で浪人となり、侍やめてこの奥州路へ來ての百姓業、如在はせぬと思うても稼ぐに追付く貧乏神、身貧に追はれて八年あと、姉めは江戸へ勤め奉公、おのれやれ土に食ひついても稼ぎためて金拵へ、姉が身の上を取り返しませうと思ふ内、嚊は病氣人手はなし、それで年行司に當つても、勿體ない明神樣の飾りつけにも、今來るくらゐの仕儀、何の羨まれる事がござらう、皆の衆推量して下されいなう。

のぶ　今父さんの云はしやんす通り、私とても女の子、どこぞから男の子を貰うてなと、早う樂しみにして下さんせと、云うてゐる事でござんす。

佐次　成程、こりやお娘の云ふのが、尤もぢやわいの。

與茂　サ、その息子を貰ふのも當があるぢやて、ずつと前方侍の時分に、姉のおきのが生れると、

直に傍輩衆の男の子と許婚しておいたが、これもその後便りもきかず、この親御の在所が知れた所が、肝腎の姉といや、江戸の新吉原とやらに勤め奉公、そこでこのおのぶが大きうなつたら、これに親御を貰ひ受けうと、これが大きうなるを、苗のゝびるやうに、待ち兼ねて居りますわい。

五　ヲヽそれ〳〵、おのぶ女郎も、もう來年か再來年は、婿を貰うてもよい時分、嬶しゆの病氣もその内には直らうぞえ。

一　それに又何というても庄屋の七郎兵衛殿が控へてゐやれば、何もくよ〳〵と案じる事にないといふもの。

二　その上庄屋殿は慈悲深い結構なお人、それにひきかへいま〳〵しい、あの代官の臺七づら、根性の意地わるさ。

三　イヤ又あの 弟 の臺藏といひ、こちらが膏をしぼつて作るものを、ヤレ年貢だの村入用のと、その取り立てのむごさといひ。

四　ほんに面の憎い代官づら、アノ慈悲深い庄屋殿の爪の垢なと、なめさせてやりたいナア。

佐次　イヤ爪の垢より鋤の柄で、横面を打ちいがめてこましたいわえ。

與茂　ア、これ〳〵、あんまり大きい聲で云ふまいぞ、いまこゝへ來る道で代官の臺七殿が、年詣でにがな來られたぞや。

のぶ　アノ意地惡が久六樣の門口で、そこら中を睨み廻して居やしやんしたぞえ。

五。　よう〳〵出て失せたら又お目玉ぢや、テモひやいな事の。

與茂　時に明神樣のお宮へお備へをあげて、飾らうぢやござるまいか。

一　それ〳〵、こちらもとも〴〵手傳ひませう。

與茂　さうして下され、そんなら皆の衆、

皆々　與茂作殿。

與茂　おのぶも倶に、早うおじや。

皆々　サヽ、ござれ〳〵。

ト三味線入りの神樂になり、與茂作夫におのぶ皆々鳥居の内へはひる。引きかへて向うより志賀臺七、野袴大小、運八木綿大小にて出て花道にて、

臺七　エヽ、なんだやかましい、鎮守の祭禮太鼓の音が耳に障り、ろくに話もなる事ぢやないわえ。

運八　左樣でござりまする、村中のうぢ虫共めが囃し立てるので、氣のぼせが致しまする。シテ、か

ねての一儀は。

臺七　こゝは道中、アノ鳥居前にて申し合はさう。

運八　さやうならば、旦那樣。

臺七　運八來やれ。（ト右鳴物にて舞臺へ來り、あたりを見廻し）イヤなに運八、その方も知る通り、元この臺七は石堂家の家來、今は當所の代官なれど、かねて楠原普傳殿の叛逆に一味なし、五十四郡を横領なさんと味方を集むるその爲めに、普傳殿より預りし毒藥の秘書、天眼鏡。（ト懐中より鏡と一巻を取り出し、運八思入あつて、）

運八　その二品にて人をなづけ、大望成就なす時は、我々共まで立身出世。

臺七　云ふまでもないその時は、五十四郡の主人は身共、たゞにつくきは細川頼元、ひそかに詮議なすとの事、この一巻は懐中もなるが、天眼鏡をしばしの内、どこぞへ隠しておきたいものだ。

運八　その儀はお案じなされまするな、拙者がお預かり申しませう。

臺七　イヤ〳〵、その方に預けおくも、人目あれば心がゝり。イヤそれよりもその方に申し付ける仔細がある。今宵岩手の館へ忍び寶藏に秘めある所の、眠り獅子を奪ひくれ、首尾よく致さば骨はぬすまぬ、褒美は望み次第なるぞ。

運八　イヤモウ御褒美にさへなる事なら、まんまと御手に入れませう。シテその鏡は如何なされまするな。

臺七　ムヽ、よい隠し所を思ひついた、コレ。（ト運八に囁く。）

運八　スリヤ鎮守の社に飾りある、神鏡とすりかへて。

臺七　飾りおかば大丈夫、人の氣のつく事はない。これにつけても弟の大藏、四五日あとより行方が知れず、百平丹助兩人に在所を尋ねにやつたるが、今に便宜のないといふは心がゝりの事ぢやて。

運八　されば二人の者共も、諸々方々を尋ね申せど、かいくれ御行方が知れぬとの事。

臺七　神隠しにでも逢ひはせぬか。それはともあれ最早夕刻、その方は少しも早く。

運八　心得ました。旦那様にも御油断なく。

臺七　承知致した。

運八　さやうなれば、これより直ぐに。

臺七　急いで行きやれ。

運八　ハツ。

ト大拍子にて臺七は上手、運八は花道へ走りはひる、上手より以前の百姓皆々出て來り。

佐次　これ〳〵皆の衆や、例の御代官が、睨み廻して出て來たぞや。

一　その上、意地の惡い人でも、なんぞ願ひがあるかして、鎭守をゑらう拜んでゐたぞや。

二　アノ人の願ひなら、明神樣も知らぬ顏してござるであらうぞえ。

三　然し年行司ではあり、元が侍の與茂作殿だけ傍に居てぢや。

四　あんな奴には、よい加減につきあつておくがいゝぞ。かれこれする內、モウ夕暮ぢや。

皆々　ほんにさうぢや〳〵。

五　アノ與茂作殿も連れ立つて、いなうぢやあるまいかえ。

佐次　ヲヽそれがよいわい〳〵。

皆々　與茂作殿々々。

ト皆々上手へ思入して呼ぶ、在鄕唄宮神樂になり、與茂作先に、おのぶ三方を持ち出て來り、

與茂　ヲヽ皆の衆、さぞ待遠でござつたらう、いつもこの明神樣のしきたりで、祭禮の宵祭にはざつと神前に飾つておいたこの鏡を、年行司の家へ一晚とめるが毎年の吉例、そこへお代官がござつて、なんぢやむつかしい事を云うて拜んでゐられた故、しばらく見合せて、卽ち神鏡は袋と

のぶ　も、この與茂作が守護して來ました。今夜は家に飾つておいて、母さんの病氣の直るやうに願をかけ、明日は早う御神前へ持つて參りませう。

與茂　ヲ、さうとも〳〵、この三ヶ村の年行司といふも、なか〳〵三年や五年で廻つてこず、人間は老少不定と云うて、いま煩うてゐる嬶の病氣が直り、達者な俺が先へころりと死ぬまいものでもないぞ。さう思つてみると、鏡のお宿をするも、今年が名殘りであらうも知れぬ。ナウ皆の衆。

皆々　ヱ、心細い、何云はつしやるぞいの。

のぶ　又しても〳〵、そんな事云うて下さんすな、ゝゝ、あた緣起の惡い、ヱ、野へ行け、山へ行け〳〵。

ト　おのぶ袖を拂ひ思入。

與茂　ハ、ゝ、ゝ、こりや俺が惡かつた。神いさめの中で云うても云はいでもの事、ア、年寄ると兎角云ふ事が愚痴になるぢや。それはさうとこれ娘よ、俺はこれから皆の衆と例年の通り別當所で御神酒を開いて戻る程に、大切なその鏡は俺が持つていなうわいの、嬶が一人で困るであらうによつて、わが身は一走り先へ行て、藥でも世話してたも。

のぶ　アイ〳〵、そんなら父さん、この鏡はお前後から持つてござれや。

與茂　ヤレ〳〵、賢い者ぢやなう。（トおのぶより三方の鏡を受けとり、）こりや娘よ。云ふまではなけれど、嬶の病はことない大病ぢや、マア十が九ツあつちのもの、かてゝ加へて俺もこの節の持病のつかれ、もし嬶より俺が、ぽつこりいつたらどうするぞ。

のぶ　サア、その時は、わしや泣くわいナア。

與茂　ハヽヽヽ、皆の衆聞かつしやれ、子供といふものは他愛もない、こりや泣いたとてわめいたとて、死んだ者は返らぬわい。いつ何時か知れぬでもつた世の中ぢやわえ。

トこれより床にかゝる。

〽云ふも女房が煩ひを、今から云うて覺悟さす、心と見えて哀れなり、與茂作は心づき。

ほんに思ひ出した、家に藥を煎じかけておいた、いりつかぬ内われ一走りいんで、一番煎じを嬶に飲ましてくれぬか。

のぶ　アイ〳〵。

佐次　ヲヽ、そんなら、おのぶ女郎は先へいぬか。

一　家へいんだらお袋に。
皆々　よう云うて下されや。
のぶ　アイ〳〵。（ト行きかけ思入あつて）そんなら行くぞえ。
與茂　早う行かぬかえ。
のぶ　サア行くは行くけれど、必らず怪我して下さんすなえ。
與茂　ヱヽ何を案じる事があるぞ、俺よりもわれ又脇見して怪我するなよ。
のぶ　アイ〳〵、何ぢややらわしや去にともない。
與茂　ハテ何をうぢ〳〵、母への孝行忘れたか。
のぶ　イヱ、さうではなけれど。一緒に歸つて下さんせ。
與茂　これはしたり聞分けのない、俺は別當所へ廻つて行く故、わが身は藥のつまらぬ内、先へ去ね
といふに。
のぶ　それぢやと云うて。
二　アヽコレおのぶ女郎、與茂作殿はわし等が一緒に。
三　家へ送つて行く程に、必らず後を案じずと。

皆々　早う家へいんだがよい。（トこれにておのぶ是非なく）

のぶ　そんなら父さん、早う戻つて下さんせ、わしやモウ行くぞえ。

與茂　ヲヽ、さうしてくれ〳〵。

〽親と子が見送り見返り畔づたひ、これぞこの世の別れとは、後にぞ思ひ知られたり。

トおのぶ心を殘し、ふり返り〳〵花道へはひる、與茂作見送り。

ソレ市畑であぶないぞや、久六が畦を滑るぞよ、隱居の田へ廻つて行けよ。

佐次　ア、これ與茂作殿、案じさつしやる娘より、こなたの足許があぶないわいの。

四　サア〳〵、暮れぬ内に別當所へ。

皆々　早く行かうではござらぬか。

與茂　イヤ俺は年寄りの道はかどゆかねば、こなた衆と一緒では氣がいらくらと忙しない、後からゆるゆる行く程に、こなた衆は先へ行き、神酒を開いて待つてゐて下され。

一　そんならわし等は先へ行て、お神酒を開いて待つてゐよう。

與茂　ヲヽ、さうして下されや。

二　イヤモウ、酒と聞いては早いが勝ぢや。

皆々　サア／＼、ござれ／＼。

〽皆々打ちつれ急ぎ行く。（ト皆々花道へはひる。）

與茂　ア、若い者を先へやつたれば、これからゆる／＼別當所へ、ドレ鏡を守護して行きませう。

〽たち歸らんとする所へ。

ト鏡の三方を持ち行きかける、この時上手より臺七出て來り、この體を見てびつくり思入。

臺七　ヤイ／＼土ほぜりめ、その鏡を何とするのだ。

與茂　ヱ、年行司の與茂作が、今夜一よさ家で祭るは毎年定例、それをお前がどうぞしたかな。

臺七　ヤア事わきまへぬ老耄れ親仁め、うぬ等が持つて無用の物、きり／＼と返しをらう。

ト臺七鏡に手をかけるを、ちよつとつき廻し。

與茂　ハ、、、、。コリヤお代官樣、この鏡を渡せとは何をおつしやります、毎年廻り持ちの村役人が預かり、これはあなたもよう御存じでありながら、テモ事々しい御立腹、私はびつくり致しましたわいナウ。

臺七　ヱ、又しても口強情な土百姓め、その鏡には仔細がある、その方づれが持つ物でない、早く／＼こ

つちへ渡しをらう。

與茂　イヤ、そりやこなさんが無理といふもの、家例の通り持つて歸り、明日神前へ飾るまでは、こつちの役、なんぼお代官樣でも、さう無體にはなりますまい。

臺七　ヱ、面倒な土百姓め、明神樣の鏡ととりかへてそりやア大切な、イヤサ、大切なこの神鏡、身共が受け取るには云分あるまい。

與茂　イヤ云分がないでもござらぬ、へゝゝゝゝ、滅多無性に欲しがらさつしやるこの鏡、ハヽアこりや知れた事、今內陣に奴殿がごて〳〵してゐたが、その時に。

臺七　ナヽ何と。イヤサ、どう致した。

與茂　石堂樣の寶物の內に、何とやら云ふ鏡が紛失と聞いたが、こりや合點のゆかぬ代物、こつちから殿樣へ持つて出て伺ひまする、きり〳〵おはなしなされませ。

〽逃げ行く首筋引戻すを、放せやらじとせり合ふはずみ、鏡は飛んで流れの中。

トちよつと立廻りある中に、鏡は前なる溝の中へとり落す、臺七それをと取りに行くを、突き廻し與茂作又取りに行くを、臺七拔身にて與茂作の後から袈裟に切る。與茂作苦しみながら。

エヽ非道な〳〵臺七殿、こりやわしを殺さつしやるのか。

臺七　四の五のと面倒な、きり〳〵とくたばりをらう。

與茂　今わしが死んではの、嚊は明日をも知れぬ大煩ひ、なりや娘一人が路頭に迷ひます。わいの、それぢやによつて、命は助けて下さりませ、ヤイ娘ヤイ、おのぶヤイ。

ト呼びながら苦しむを、臺七思入あつて、トヾ乘つかゝり止めをさす、この時バタ〳〵にて下手よりおのぶ出る故、臺七この足音を聞きつけ、手早く刀を拭ひよろしくこなし、下手よりおのぶ出て來り、與茂作の死骸を見てびつくりこなしあつて。

のぶ　ヤア父樣を誰が殺した、父樣イなう〳〵、これ母樣はあのやうに煩うてなり、お前に別れて、わしや何とせう、どうせうぞいなア。

〽足摺りしたるいぢらしさ、涙ながらに四邊を見廻し。

ト與茂作の死骸にとりつき泣き落す、この內臺七そろ〳〵下手へ行かうとする、おのぶふと目をつけて、

お前樣は御代官の臺七樣、こゝにござるといひ、スリヤ父樣を殺したは、お前ぢやナア。

臺七　ヤア默らう、こいつ。身共は知らぬ覺えはない、慮外を申さばゆるさぬぞ。

〽そらさぬ顔でおどしても、いつかなこなたは耳にもかけず。

ト行かうとするを、おのぶきつととめて、

のぶ　イヤお前ぢや〳〵、コレ人殺しぢや、皆來て下さんせいナア。

〽ありあふ泥をうちつけ〳〵、ヤレ人殺しと呼ばゝる聲、よせ來る人々一村在所。

ト呼び立てる、臺七きつとなるを構はず呼びたてる、臺七刀を引拔き切り付けようとする、おのぶ見てあたりの土を投げつけながら立廻り、トゞ危き所へ下手より、以前の百姓皆々出て來り

佐次　ヤア、與茂作を殺したは臺七樣か。

一　なんぼ代官樣でも人を殺しては、めつたにやア濟むまい。

二　それ〳〵、この子の加勢は中々の事ぢやない、村中一統サア與茂作を、

三　もとのやうにして返しや。

四　なんで殺した、その譯聞かう。

佐次　サア臺七づらめ。いや、づらぢやない臺七樣、殺した譯を。

皆々　聞かうわいの〳〵。

ヘ田舍育ちの高調子、聞きつけ出て來る七郎兵衞、爭ふ中へ割つて入り。

トこの時バタ／＼になり、花道より七郎兵衞、羽織袴庄屋のこしらへにて出て來り、

七郎　コレ／＼村の衆、待つた／＼、庄屋の七郎兵衞が來たからは、惡うは計らはぬ程に、マア／＼待つた、待つた、待たつしやれ／＼。

皆々　ヤア庄屋殿か／＼。

佐次　コレ／＼七郎兵衞殿、與茂作が殺されてゐますわいナウ／＼。

七郎　サアその譯も、聞いてびつくり駈け付けたこの七郎兵衞。マア何にしろ俺に任して下され、任して下され。

五　庄屋殿が呑みこんだと云ふから、マア靜かにしろ／＼。

七郎　イヤモウシお代官樣、イヤサ臺七樣、どういふ譯で與茂作をむごたらしうお手討ちになされました、日頃から正直なあの男、無禮を致さうやうもなし、樣子によつたら願うても、きつと吟味をせにやなりませぬ。

臺七　ヤイ／＼／＼、默りをらう、與茂作とやらが殺されたるその場所へ、來かゝつた某、何ぢや身共が殺した、ヤイそれには何ぞ證據があるか、土ほぜりの分際で慮外の振舞、まつた女郎め

親の敵と譯をも云はず泥をうちつけ、こりや見よ、侍の面體へ泥をぬつたる慮外者、眞二つに討ちはなす。そこ退きをらう。

〽反打ちかければとゞむる庄屋、娘を圍ふ百姓共。

ト臺七刀へ手をかけきつとなる、百姓皆々おのぶを圍ふ。

佐次　ヤア、なんぼでも切らしはせぬぞ〳〵。

一　ヲヽそれ〳〵、非道な事に人が切られるか、切つて見や〳〵。

二　だいくわんでもせうくわんでも、こはい事は少しもないぞ。

皆々　ヲヽさうぢや〳〵、たゝきのめせ〳〵。（ト皆々立ちかゝるを、七郎兵衛よろしくとめて）

七郎　コレ〳〵皆の衆、待つた〳〵。靜かにさつしやれ〳〵。（ト皆々を制して七郎兵衛思入あつて）モシ臺七樣、娘の慮外とおつしやりますが、申さばこりやこれ子供の事、それにマアお手討ちなどゝは、あまり御人體に釣合ひませぬ、又與茂作が殺されてゐた所へ、おいでなされましたがあなたの不仕合せと申すもの、マアあなた樣もかゝり合ひ、この趣はこの通り、お屋敷樣へ村中一統訴へます。

〽理窟親仁に云ひこめられ、返答しがなのその折柄、貫平丹助兩人は臺藏が

死骸を戸板にのせ、息を切つて駈け來り。

ト この時バタ〳〵にて、上手より下部貫平丹助、戸板の上へ臺藏の死骸をのせ持ち出て來り、

臺七　お旦那、これにお越しなされましたか。

丹助　ヲヽ、丹助貫平、あわたゞしい何事ぢや。

貫平　モシ騷動でござりまする、御舍弟臺藏樣は、人手にかゝつてお果てなされました。

丹助　下郎めと丹助が參りかゝつた白坂の麓に、袈裟に切つたるこの死骸、うち棄てゝあるからは。

貫平　何でも泥坊の業に相違はござりますまい、それ故お死骸をこの所へ。

臺七　やう〳〵持參致しましてござります。

〽差しだす死骸に驚く臺七。（トこの內臺七死骸を見ていろ〳〵となし、）

誠に、こりやこれ弟臺藏、明神の森の內に殺されてをつたとは、チエヽヽヽ、何者の仕業なるぞ。

〽行かんとせしが庄屋にむかひ。（ト花道へ行かうとして思入あつて、）

コレ見よ、庄屋をはじめ百姓共、身が弟臺藏は今聞く通り森の內にて殺されしも今夜の事、これを思へば人をあやめしあぶれ者、この近邊に徘徊なすに疑ひなし、こりや輿茂作を殺した

も、大方同じ奴と思はるゝ、見れば數ヶ所の刀疵百姓づれが手際でない。浪人者など尾羽打枯らし、あばれ歩くに相違なし、何と與茂作は身が殺さぬといふ潔白は、これで疑ひはれたであらう。

ヘ頓智の佞姦辯舌に云ひ廻され、流石の庄屋も百姓も、理の當然に詞の一理。

七郎　サア、さう聞きますればお前樣とも思はれず。

のぶ　さうした時は父さんは、犬死かいナア、ハアー。（トおのぶ泣き落す。）

皆々　ヲ、悲しかろ、尤もぢや〳〵。

ヘ臺七はしすまし顏。

臺七　ア、思ひもよらぬこの災難、七郎兵衛身が心察してくりやれ、與茂作とやらも不便な最期、娘が歎きも思ひやらるゝ、これとても皆因縁づく。なに貫平丹助、弟が死骸を身が屋敷へ持ち歸れ。

兩人　かしこまりました。

ヘこの場をくろめる間に合ひ詞、善と惡とは紛はねど暫し曇りも天道の鏡に心殘れども家來引連れ立歸る、後に泣き入る娘のおのぶ。

トこの文句にて、臺七こなしあつてちよつと舌を出し、貫平丹助板に死骸を載せてこれを持ち、三人とも花道へはひる、後におのぶわつと泣き出し、

のぶ　伯父樣どうせう／＼、どうせうぞいナア。

ヘ庄屋も涙の目をこすり。（ト七郎兵衛百姓皆々おのぶを介抱して）

七郎　ヲヽ、尤もぢや／＼が、今臺七の云ひやうでは、萬更あの人でもない樣子、なりや達つてとも云はれもせず、というて皆の衆も知つての通り、與茂作の女房は俺が妹、この春からの大病、その中へ與茂作は切られて死んだと云ふたら、直ぐに泣き死するであらう、どうで一度は云はにやならぬ事ぢやが、一日半時でもまめでおいてやりたいが、こゝにかうしても居られまい、皆の衆御苦勞ながら、マアこの死骸、今夜はこちの家へかきこんで下され。サア／＼皆の衆、頼みます／＼。

ト皆々愁ひの思入、戸板の内へ與茂作の死骸をのせる。

これおのぶ女郎よ、今夜はこちの家へとめておいて、明日家へ去なうとも、與茂作が死んだ事

は、これぢや〳〵。（ト酒に醉うたる[illegible]をして見せる、おのぶ呑みこみ思入あつて）

〽庄屋が指圖に在所者、あたりの板を引きはなし、死骸をのせてかき上ぐれば。

ト戸板の上へ死骸をのせ、皆々にて舁き上げる。

皆々　そんなら死骸はこのまゝに。

七郎　御苦勞ながら庄屋の家まで。

皆々　合點でござる〳〵。

七郎　さうしておいて、今夜はたれぞ與茂作の家へやらにやなるまい。サア〳〵皆の衆。

皆々　サア〳〵去にませう〳〵。

〽まだいとけなき子心に、思ひつめたる孝行の、念力通す大磐石、敵は誰とも白石や石に立つ矢のためしとて、弓も引きかた在所中、田の面の蛙なきつれて、我家へこそはたち歸る。

トおのぶ泣き入るを介抱して、七郎兵衛先に、皆々付き添ひ花道へはひる。

〽はや黄昏の畦道をうそ〳〵戻る臺七が、あたり見廻し見覺えの、溝にきら

めく名鏡を忝しと押し戴く、後へぬつと忍びの曲者、鏡もぎとり臺七が脾腹を一當、逸散に跡を晦まし、

ト時の鐘、バタ〳〵になり花道より臺七、尻からげ大小にて忍び〳〵出て來り、以前の鏡をとり出し押し戴く、この時後より宇治兵部介正雪忍び姿好みのこしらへにて出て來り、臺七の鏡をかせに兩人立廻りよろしくあつて、正雪鏡をとり、ツカ〳〵と花道へ行く、臺七それをとたちかゝるを、正雪遠當に臺七をあてる、これにて臺七どうと下に居るを木の頭、正雪は鏡を持ち花道へはひる、これと一緒に時の鐘の送りよろしく、

ト時の鐘にてつなぎ、直ぐに引返す。

ひやうし幕

本舞臺正面上手へよせて二間常足の二重、さびたる明神の宮、藁屋根、本緣附き、狐格子の扉明けたてあり、眞中に楠の大樹、所々に杉の立木、石燈籠、日覆より杉の釣枝、すべて明神の森の體よろしく、山オロシにて幕あく。ト山オロシ夜神樂になり、花道より運八、尻はしをり大小頰冠りにて出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、懷中より袱紗包みを出して、

運八　御主人臺七樣と心を合せ、出世の種を盗みとり石堂家へ預かりの眠り獅子の御判、これを以て

人をなづけ、鎌倉表は御主人の心の儘、さすれば身共も立身出世、チヱ、忝い。

ト戴く、この内松の木の間より金井谷五郎、着流し大小、旅なり風呂敷包みを背負ひ窺ひ出て、この時後より右の御判をさぐりながらそつと取る、運八びつくりして、この時谷五郎を見て、

おのれ曲者。

ト切つてかゝるを、つけ廻して投げのけきつとかまへる。この時半月出る、右の御判を月影にすかし見て、

谷五　我が推量に違はず、ハテ、よくも贋せをつたわい。

ト右の御判を捨てる、この内運八隙を窺ひ、谷五郎の片膝をちよつと切る、谷五郎びつくりして直ぐに引捕へ。

だまし討ちとは卑怯な奴、コリヤこの所の首塚も、不便やうぬに極まつたわやい。

運八　何を。

ト又切りつけるを、立廻つて刀をもぎ取り、ポンと首を切る、この時明神の宮の扉左右に開き、内に宇治兵部介正雪達附ケ大小好みのこしらへにてこれを窺ひゐる、谷五郎はあたりを見廻し下の方よき所の岩臺へ右の首を載せ、立木の枝を切りとり、二つに割つて一國に一ケ所の首塚と書き記す。この内正雪思入あつて平舞臺へおり、右の首をそつと取つて來て、上手に首をさし出し、立身にてぢつとしてゐる。谷五郎これを知らず右の書き記したる枝を首の傍へ立てにゆく、首なき故合

點のゆかぬこなしにて、いろ〳〵尋ねる、正雪こなしあつて谷五郎の前へ右の首をさし出す、谷五郎探りながら、ふと右の首に探りあたり、宙にある故びつくりして、段々正雪が顔まで探り廻り、扨はといふこなしにて、むつとして直ぐに首をひつたくり、下の方へ行き穴を掘り、首を埋め、書附けしたる右の記しの枝を立て空を拝し、

谷五　某諸國武者修行の印しとして、一國に一ケ所の首塚をきづく、最早當國もこれにて相すんだり、大願成就、チエ、忝い。

ト手を合し、塵打ち拂ひ、こなしあつて靜々と花道へ行きかゝる、正雪始終を窺ひゐて、この時ツカ〳〵とよつて、後より谷五郎の刀の鐺を引きとめる、谷五郎振りはなし兩人きつと見得、誂への鳴物になり、上下より黒衣の忍び六人、鐵砲を持ちばら〳〵と出て、

六人　ヤア、御主人に手向ひなさば許さぬぞ。（ト鐵砲の筒先を向ける。）

谷五　ヤア妖術をもつて人をまどはし、歸伏させんとは傍いたし、その邪曲では、滅多に人はなづけられまい。（トこなし、正雪も思入あつて、）

正雪　ホヽヲ尤もの一言、我去る頃西國天草に於て、森宗意軒と云へる者に出逢ひ、師弟の契約をなし、我に傳へし呂洞賓が妖術なれども、誠の勇士のなさゞる所と、今までこれをば捨ておきしが、今用ひしは貴殿の器量試さんため、元へ返せば正路の奇術。（ト印を戻す、黒幕をふり落し、

忍びを消す、（正雪思入あつて〕イザ、この上は誠の武術、眞劍の勝負を試みん。

谷五　ヲヽサ、その儀は、この方にても望む所。

正雪　それ、用意のめされ。

ト谷五郎下緒にて襷をかけ用意する、この内正雪木の葉を集め摺火打にて火を打ちかけ、篝を焚く

谷五郎は支度して正雪の傍へ行き、刀を拔き、きつと構へる、正雪篝にてぢつと見て、

正雪　ハテ天晴の骨柄、日角月角かどだつて、山根に節あり、天帝に青雲の氣を含みしは自然と備はる智勇の相貌、その上段の太刀筋と云ひ、ホヽヲ見事。

ト感心のこなし、谷五郎これにかまはず切つてかゝる、正雪鐵扇にて立廻り、よき所にて正雪鐵扇を打ちつける、谷五郎これを切りとめる、誂への鳴物になり、双方拔きはなし、いろ〳〵面白き立廻りあつて、トゞ谷五郎太刀先の弱りしこなしあつてよろしくとまり、

谷五　ハヽア、かくまで御手練ありし其許樣、我が師匠と賴むとも恥かしからず、この上は何卒師弟のよしみ、且つは御姓名の程承はりたし。（ト兩人刀を引き鞘に納め、谷五郎正雪を敬ふ。）

正雪　アイヤ、語るに及ばぬ、我が俗姓は。

ト思入あつて、橘の枝を鐵扇にて打ち折り、谷五郎の前へ出す、谷五郎これを見て、

谷五　この橘を姓名とは。フム、さては楠家の。

正雪　ア、コレ。

ト押へ、懐中より菊水の白旗を出し、さらりと開く、谷五郎菅笠にて篝火を押へる、この途端一時に木の頭、正雪菊水を見せ、

よツく見られよ。

ト旗をさし上げる、谷五郎ハツとこなし、双方よろしく山オロシ、カケリにて、

ひやうし　幕

二幕目　逆井村の場

役名　庄屋七郎兵衛、志賀臺七、下部貫平、同丹助、百姓七助、金井谷五郎宇治兵部介正雪　妹信夫、母おさよ、日雇女お粂。

本舞臺三間の間二重舞臺、向う赤壁納戸口、上手一間の附け屋體、反古張り障子を立て、あけたてあり、下の方藪疊、いつもの所門口、すべて百姓家の體、幕の内より在所母おさよ病人のこしらへにて、病鉢卷をして蒲團によりかゝり、二枚折屏風引き廻し居る、この見得よろしく麥搗唄にて

幕あく。

〽陸奥の何國はあれど鹽釜の、煙りも細き白石の、城下に近き逆井村、妻は春よりぶら〳〵の枕も床も塵つもる、山田の畔は見晴らせど忍ぶ涙に六畝七畝、やせ百姓の氣もうかで、水に汗をやしぼるらん。

ト矢張り右の合方になり、下手より七助百姓のこしらへ、お兼同じく在所娘のなりにて、直ぐに内にはひり。

七助　どうぢやお内儀、チト氣合はようござんすかの。

かね　次手ながら、ちよつと見舞に來ましたぞえ。

〽云ふ聲聞いて女房おさよ、やう〳〵枕を上げながら、

さよ　ヲヽ誰かと思へば七助殿、おかね女郎も一緒に、ようマア親切に見舞つて下さつたの。

七助　サア、氣にかゝつてあれど、刈込時分で、思ふやうに尋ねもしませぬわいなう。

かね　サアわしも手すきには、せめて藥でも煎じて來うと思はぬではないが、折惡う刈込み、とんと暇がないわいなあ。そしてマア、この頃はどんな工合ぢやぞえ。

さよ　イヤモウ、果しのゆかぬこの病、別に變つた事はなけれど、昨日から頭痛も大分よい方でござ

んす。

かね　それは何よりようござんす、けふは母さんの代りに見舞に來ましたが、よいと聞いて嬉しいわいナア。

七助　わしも共々喜びますぞや、それはさうと與茂作殿は、野良にでも行かつしやつたかな。

さよ　イヱ／＼明神樣の祭禮で、昨夜から歸りませぬが、大方兄の七郎兵衛殿の家で、神鏡のお宿なとしたものであらう、それにしても、おのぶはなぜに歸らぬやら。

七助　案じさつしやるな、親子連れなり、兄御の家なり、氣遣ひもござるまい。

かね　したが、お前一人で、さぞ不自由であらうわいな。

さよ　イヤ／＼仕合せと、ふとした事でお泊め申したお侍樣、それは／＼親切なお方で、藥まで煎じて下され、それ故別に不自由な事もござらぬ。

〽話半へたち歸る、藥もとめて谷五郎、浪人姿捨扶持にして五千石、一萬石とは見えすく骨柄。

トやはり麥搗頭になり、花道より金井谷五郎、着流し大小にて出て來り、直ぐに門口へ來り内にはひり。

かや　ヤ、これは在所のお衆達、お見舞にお越しなされたか。イヤ御免下され。アイタヽヽ。（トこなし。）

七助　ハヽア、そんなら今こなたの話で聞いた御浪人樣か。さてはお足が痛むので、お氣の毒でござりますの。

谷五　これは御挨拶祝着に存ずる。某ことは諸國をへめぐる浪人者でござるが、不圖足踏み損じ、昨夜より當家に逗留、殊に御病人もある中へさしかゝつて、思はずお世話になり申す。近頃お氣の毒に存ずる、それは格別其許達にお尋ね申したきは、元は上方邊の御浪人、今はこの邊にて百姓を業となし、以前の名は杉本甚内と申すお人でござるが、もし御存じではござるまいか。

七助　されば、もと上方の浪人で、今は百姓してゐる人なら、ナウおさよ殿。

さよ　成程心當りがないでもなけれど。（トこなし。）

七助　とんと聞いた事がないわいなう。

谷五　御存じないとな。

七助　されば甚内は知らぬが、錢内ならこゝら一面、銀内ちやん内かく内お望み次第、内々尋ねても知れますが、甚内とは聞いた事がござりませぬ。

かね　もし隣り村ぢやござんせぬかえ。
谷五　イヤ〳〵この逆井村ぢやと承はつたが。
かね　イエ〳〵そりや大方村の名を、お忘れなすつたのでござりませうぞえ。
七助　イヤモウ、忘れたで思ひ出した肝腎の仕事をとんと忘れてのけた。
かね　ほんに私も、内にしさしの機を、織り上げてしまはうわいな。
七助　ドリヤ去にませう。サアござれ〳〵。
〽打ち連れ表へ急ぎゆく。（トやはり右の合方にて、兩人下手へはひる。）
谷五　アヽ、さすがは田舎氣質の正直一遍、したが、かほどに尋ねても、在所の知れぬとは、フム。（ト思入。）
〽ハテどうがなと思案の體、様子聞き居る女房おさよ靜々立つて傍により。
ト合方になり。
さよ　イヤ申し御浪人様、御足の痛みもおいとひなく藥までもとめて下さるお志し、忘れはおきませぬ、忝うござります。
谷五　ハテサテ、なにお禮に及ぶこと、一人旅の迷惑は迂濶に宿を許さず、ある時は野に伏し山に寢

たり、すでに昨夜も明神の森にて、一夜を明かさんと致せし所、足の悩みにこの家をたより、夜更けてよりお宿の無心、見受けますれば人手とても内證のお暮し、あまり見る目も笑止さに、介抱致すもありやうは、お宿をかりし心の返禮。

さよ　これはマア迷惑なそのお詞、そのやうに氣兼ねなされずとも、お心安うごゆるりと、御逗留なされませ。

谷五　それは近頃過分に存ずる。見らるゝ通りこの足の痛みでは、今一兩日逗留致したく、御宿の御無心申さずば相なりますまい。

さよ　ハテ幾日なりともお心任せに、御養生なさるゝがようござります。イヤ又それはさうと、唯今お話なされた杉本甚内とお尋ねなさるゝが、何ぞ御用でもあつての事でござりますか。

谷五　されば、かく申す拙者甚内殿の面は見知らねど、チト仔細あつて態々尋ね逢はんと、心を盡すその様子は、もと杉本甚内と申す人は河内の浪人、身が親共と至つて懇意の中、尤も幼少の砌りその甚内殿の娘と某と、夫婦になさんと云ふ契約、然るに不圖致した事より浪人致され、唯今にてはこのあたりにござるとの風聞、風の頼りに承はり、手前親共とても相果てかく流浪の拙者、何卒お目にかゝらんと、尋ね求むる甚内殿の在所、ほとんと相知れ申さぬての。

さよ　フム、さうおつしやる、あなたのお名は。
谷五　お尋ねの上は何をか包まん、某が身の上は、もと楠家の浪人、金井勘兵衛と申す者の忰、同名谷五郎と申す者。（トおさよこれを聞いて、）
さよ　エヽ、そんなら、あなたが谷五郎樣でござりましたか。
谷五　スリヤ、某の身の上を。
さよ　ヲヽ、知らいでなりませうか。コレ、申し、あなたがお尋ねなされる、杉本甚内といふのは私が夫、與茂作殿でござりますわいなう。
谷五　なに、スリヤ、アノ與茂作殿が舅甚内殿とな。
さよ　いかにも、いよ／＼お前樣が、谷五郎樣でござりましたか。
谷五　さうとは知らず昨夜より。
さよ　たゞ餘所ほかの他人あしらい。
谷五　思ひもよらず名乘り合ひ。
さよ　つきせぬ緣の婿舅。
谷五　まづは堅固で。

さよ　ようマア無事で。

谷五　不思議な對面。

兩人　これはしたり。

さよ　ほんにマア、よう尋ねて來て下さつたなう、ヤレ〱今にも夫與茂作殿が戻られて、この事を聞かしたら、さぞ喜ばれませうわいなう。

谷五　イヤモウ、身共とても尋ね當りし心の安堵、かやうな喜ばしい儀はござらぬて。

さよ　そりやこの方とても同じ事、今の話でどうやらいそ〱して、氣合ひもようなつた樣子にござるわいの。

谷五　誠に燈臺元暗しとやら、この家の主人與茂作殿が、舅殿であらうとは、今の今まで存ぜず、それは格別夜前より、かう見受けまする所、その以前某と言ひ約束致せし御息女が相見えぬが、何處にござるな。

へ尋ねられてハアハツと、吐胸をつきつめ、何と返事もどぎまぎと。

さよ　サア、その姉のおきのは。

谷五　いかゞ致されましたな。

さよ　アノ今は、家には居りませねど。
谷五　フム、スリヤ外々へ緣組みでも、いたされましたか。
さよ　何のマア、ムヽそれ〳〵、さるお屋敷に御奉公に遣はしました、これとてもおツつけお暇貰ひ、こな樣と目出たく祝言させませう。
谷五　それは重疊、然らば與茂作殿が歸られ次第、何かの事を打ち開けて。
さよ　そりや云ふまでもない、改めて婿舅のお杯、それにつけても折の悪いこの病氣、アヽ早うおのぶが戻つたら、何かの用意も。
谷五　アイヤ〳〵、その用意は入らぬ事、酒は身共が調へて參りませう程に、必ず氣をもまつしやらぬがようござる。
さよ　でも、それもあまり憚り。
谷五　ハテサテ、遠慮に及ばぬ。昨日までも旅の浪人。
さよ　今日からは、こちの花婿殿。
谷五　それもやう〳〵、たつた今。
さよ　程なら夫も戻られたら。

谷五　その時こそはちなみの杯。

さよ　目出度く納まる三々九度。

谷五　しからば姑御。

さよ　婿殿。

谷五　ドリヤ、行て参りませうか。

ヘ徳利とく／＼引提げて、酒屋へこそは急ぎ行く、後に女房うつとりと、暫し詞もなかりしが。

ト谷五郎徳利を提げ、こなしあつて花道へはひる、おさよ思入あつて、

さよ　世の中の苦は色かゆるならはしと、誰がいつの世に云ひ染めしぞ、もとは楠家譜代の家來杉本甚內とも云はれし侍、いかに時代といひながら浪々の身の世渡りに、百姓とまでなり下り本名包むその內にも、姉のおきのが許嫁、以前の傍輩、今井勘兵衛殿の御子息、谷五郎殿に廻り合ひ、どうぞ女夫にせんものと思ふ願ひもすぎにし年、水損日損のやせ百姓、仕なれぬ業の辛苦に迫り、未進のために君傾城の浮き勤め、谷五郎殿に義理立たねど、親の水牢助けんと、孝行故の勤め奉公、やう／＼未進の金調へ、地頭はそれで納まつても、納まりかねたる貧の病ひ、

さうとはしらず娘が心、さぞや案じてゐやらうが、今日や迎ひに來る事か、明日は身受けをせられるかと、待ちかねてがな居るであらう。思へば片時夜も寢られず、永の年月戀ひ焦れ來しう思うた婿殿に、たま〳〵廻り合ひながら、顏さへ見せぬ面目なさ、許嫁の娘はと聞かれし時の當惑さ、何と返事のなるものぞ、親のためとは云ひながら。

〽うき川竹の、

君傾城、多くの人に肌ふれて今ではかうとありていに、谷五郎殿へ聞かしたら、もしや愛想もつきようかと、思ひすごして間に合ひ詞、その場合はそれですんだれども、すまぬは私が心の中、どうぞ谷五郎殿の戻られぬうち、早う相談してともかうも、しやうもやうのない事か、アヽこれ早う與茂作殿が、戻られて下されぬ事かいなう、ヱヽ氣のもめる事ではあるぞ。

〽女心のやるせなさ、どうかかうかと、とつおひつ。

ヲヽさうぢや、姉の代りに妹の、アノおのぶでも勤め奉公に、イヤ〳〵年端もゆかぬ妹を、なんで手放しやられうぞ、いかに貧苦に迫ればとて、姉といひ妹まで、勤めにやるは不便さ可愛さ、あんまりむごい親心、唯さへ母が胸の內いぢらしいとも非道とも、辛苦艱苦の七重八重、何と命が續かうぞ、ヱヽコレ、折も折とて相談相手の與茂作殿は、いつにない戻りの

遲さ、何をしてゐさつしやる事やら、こちの思ふやうにもない、早う戻つたがよい事、から云ふうちも心がせく、こちの人、與茂作殿イなう。

〽病に弱る女氣に、夫はこの世を去りしとは、知らで焦るゝ胸の火に、涙の湯玉わきかへる。

與茂作殿イなう〳〵、こりや待遠な事ぢやわいなう、與茂作殿々々、々々。

〽さけびあこがれ泣き倒れ、病みつかれては泣き寢入り、果てなき夢や結ぶらん、たゞさへも秋は物うきものなるに、いとゞ哀れを身に知りて泣き入るおのぶが手を引いて、しを〳〵戻るわが家の內、後から戸板に空しくも與茂作が死骸をのせて在所者。

ト文句の通りよろしくある。やはり麥搗唄になり、七郎兵衞庄屋のなり、おのぶ在所娘のこしらへにて、泣きながら七郎兵衞に手をひかれ出る、後より百姓三人、戸板に與茂作が死骸をのせ、後より附き添ひ出て花道にて、

百姓　ア、南無阿彌陀佛〳〵。

百一　これ庄屋樣、この佛家へ入れたら、直ぐにお寺の坊樣を。

七郎　アヽコレ、シイ〳〵、聲が高いわいの、お寺や何やかやは、組頭の佐次兵衛に任しておいたれば、世話好きな男故よいやうにしておかう、こなた衆は昨夜から云ひ合はした通り嗜ますぞや、知つての通り與茂作が女房は俺が妹、春からの大煩ひ、この土用はもつまいと案じる程の病の中へ、與茂作が切られて死んだと聞いたら、一層直ぐに泣き死、どうせ云はにやならぬ事ぢやが、せめて一日半時なりと健でおきたい。こりやおのぶよう聞け、今家へ入つてもな、與茂作が死んだ事は、是ぢやで、酒に醉うて寝てゐると云ふ程に、必らずわれも母に泣顔見せなよ、サヽ、悲しいは道理ぢや、無理ぢやないわい。いま知らすと母はすぐに死んでのける。一時に兩親にはなれた後われが途方にくれ、うろ〳〵するであらうと思や、思ひすごしがせられて涙がはら〳〵。イヤなう皆の衆、一村のたばねもする者が、女子供のやうにめろ〳〵泣くと、笑うてばし下さるなや。したが又この佛のやうに不仕合な男はないわいの、そのくせ正直で神信心、これを思へば世上に神も佛もおりやないと思ひます。

〽くやみ涙にくれければ、おのぶも泣く〳〵目を拭ひ。

のぶ　姉様は遠い所へ行つてなり、唯さへたよりない上に、母さんの大煩ひ、杖柱とも思うてゐる父さんにはこのやうな、はかない別れ、またこの上に母さんがもしもの事があるならば、わしや

どうせう、どうせうぞいナア。

〽わつと泣き出す口に袖。

七郎　これはしたり、今も今とていうてきかすに、こりや第一母へ不孝ぢやぞよ。泣くも孝行泣かぬも孝行、ヲヽ賢い者ぢや聞き分けよ、アヽ親ぢやもの子ぢやもの、泣くが無理ではないわいやい。

〽可愛の者やと抱きしめて、庄屋が涙は一村の時雨にまさる貰ひ泣き、氣をとり直し涙を拂ひ。

アヽ泣くまい〳〵、もう〳〵泣かぬ、サア〳〵皆の衆、そんなら家へ舁き入れて貰ひませう貰ひませう。

〽泣き顔かくし内に入り。（ト百姓皆々戸板を持ち内へはひり、七郎兵衛おさよを見て、）

これ〳〵めつさうな、その大病で端近へ出てたまるものか、オヽ寝てゐるか、それも幸ひ、サアこの間に早う。

百一　ハイ〳〵、そんならお寺へ行て。

七郎　ハテさて、何も云はずと、いんだ〳〵。

〽云ふに皆々立歸る。（トこなしあつて云ふ、皆々捨ゼリフにて花道へはひる。）

コレおのぶ、蒲團を出して父に着せておくがいゝ、ヲヽさうぢや〳〵、そつと着せておかつしやれ。

〽とも〴〵うち着せ妹が寢姿、つく〴〵とうちまもり。

コリヤ〳〵おさよ、風吹きにめつそうな、サヽ床へはひつて夜着でも着やしやれ、こりやおさよ。

〽ゆり起されてふりあほむき。

さよ　ヤ、お前は兄さん。

七郎　ヲヽどうぢやの、大分氣色もよささうで、嬉しい〳〵。

さよ　アイ、さうしてお前はいつの間に。

七郎　イヤたつた今來たのぢや。さうしておのぶも、これこゝに。

さよ　ヲヽおのぶ、わが身は父さんと一緒に戻りやつたか。

のぶ　アイ、母さん精出して藥をのみ、どうぞ早う達者になり、いつまでも長生きして下さんせ、わしや便りなうござんすわナア。

ト　しやくり上ぐれば。

さよ　何でそのやうな事云ふぞいの、七郎兵衞殿と云ふ伯父樣もあり、なにたよりない事があるぞいの、そして父樣はどこにぢや。

のぶ　アイ。

さよ　エヽコレ、どこにぢやぞいの、急な用があるわいなう。

七郎　ヲヽ用もあらうが與茂作は、稻荷樣へ參つての南無阿彌陀。エヽ初午でめでたいと云うて、南無阿彌陀、アノお神酒に醉うて、それは〳〵よい機嫌で、あのやうに寢てゐるわいの、もうもうどんな急な用があつても、あれではもう間に合ふまい程に、俺に相談するがよからう、急な用とは何の事ぢや。

さよ　ヲヽ與茂作殿は酒に醉うて、寢てゐさつしやるかえ。

七郎　ヲヽ寢てゐるとも〳〵、百年たつても起きる事ぢやないわいの。

さよ　エヽ時も時とて、今日に限つて寢やしやるとは。アヽそんならお前に相談しませう、コレ最前

こちらの家へ見えた旅のお人は、婿殿の金井谷五郎殿でござるわいなう。
七郎　ヤア、ムウ、シテ〱それがどうした。
さよ　サア、そのお人もこちらを尋ねて、やう〱と今のさつき話し合ひ、廻り合うたその嬉しさ、酒取て來るとて隣り村へ。
七郎　ム丶、マアよし〱。
さよ　サアそれにつけても、お前も知つての通り、谷五郎殿と許嫁の、姉のおきのは八年以前勤め奉公。
七郎　ヲ丶サ、それも親のためぢやもの、大事ない〱。
さよ　イエ〱、それでも婿殿の手前はさうも云はれず、お屋敷へ奉公にと云ひくろめ、當分はそれですめども、ゆく〱は取り戻さねば婿殿はもとより、親達への聞えもあり。
七郎　ヲ丶、立たぬは尤もぢや。
さよ　と云うて金の出來るあてはなし、わしが思ふには、いつそあの妹のおのぶを、不便ながら代りにやつて。
七郎　ア丶モウ、そんな事いやんな、年端もゆかぬ者を可愛さうに。

さよ　イヱ〳〵それでも早う取り戻さにや、傾城に賣つた事がひよつと婿殿に聞えたら、日頃かたい與茂作殿の氣質では、谷五郎殿の手前を恥ぢ短氣な心でも起らうかと、百姓なれども以前は武士、姉を勤めにやる時さへ、腹切るのなんのとつきつめた侍氣質、わしが煩うてゐるその中へもしそのやうな事があつたら、わしから先へ死にまする。これ兄様〳〵、どうぞよい料簡つけて下さんせ。

七郎　ヲヽ合點ぢやが、俺ぢやというてどうならうぞい、マアこのやうな悲しい事の數々が、一時に出來るといふ因果な事の聞き役は、今日一日で百年の。

〽命がちゞみさうなわいの。

アヽ可愛や妹、何にもしらず。

さよ　これ〳〵兄さん、よい思案がついたかえ、サヽ、どうぞいな〳〵。」

七郎　ヲヽ尤もぢやがどうせうぞ。

さよ　お前の子でない故に、返事のないは尤もでござんす。これ〳〵親父殿、起きて下さんせ〳〵。

七郎　マア〳〵、起さずにおくがよい。

さよ　イヱ〳〵お前は何事も遠慮がある、親父殿には相談せにやならぬ、これ〳〵親父殿〳〵。

七郎　ハテさて寢かしておきやいなう。
〽一人氣をもむ七郎兵衞。
さよ　イヱ〳〵、今にでも婿殿が戻られたら、談合ができぬわいナア。
〽へだてる兄を押しのけ〳〵、よろぼひ立ちよる死骸の傍。
コリヤどうぢや、合點のゆかぬ。
〽ひきまくる蒲團の內。
コリヤ親父樣は、切られてゐますわいなう。切られてゐますわいなう。
〽うんと見つめる病人を、抱きかゝへて七郎兵衞。
七郎　コリヤ〳〵妹、氣をしつかり持つてくれ〳〵。
のぶ　母樣イナウ〳〵。
七郎　おさよヤアイ〳〵、てつきりかうであらうと思つた事、ヱヽどうせうぞい〳〵。おのぶよ、水を氣付けに、茶碗へ一口、早う〳〵。
〽何がうろたへ騷ぎ。

のぶ　母様イナウ〳〵。

七郎　おさよやい〳〵。

〽伯父姪聲のつゞくだけ、息を限りによびたつれば、やう〳〵に目を開き。

さよ　兄さんか。

七郎　ヲヽ兄ぢや、七郎兵衛ぢや、氣をしつかり持たつしやれ。

さよ　アイ、さうしておのぶは。

のぶ　アイ〳〵、こゝに居りますわいナ。

さよ　ヲヽおのぶか、そウよい〳〵、氣ははつきりとなりました。兄さん與茂作殿は誰が殺しました、コレおのぶ父様を誰が切つた、何で母に隠しやるぞ、これ〳〵七郎兵衛殿、敵はどこの何者ぞ、おのぶ知らぬか、知つてゐやるか、サヽどうぢや。どうぢやぞいやい。

のぶ　アイ、父さんはな。

〽云はんとすれど、ないじやくり。

さよ　なんで母に隠すのぢや、不孝者めッ。

のぶ　アイ〳〵、これ母様、最前父様を呼びに行けば、このやうに死んでゐやんす、その上誰が切つ

たとも、しつかりと知れませぬ。

さよ　ヤア、そんなら切人は知れぬのか、コレイナウ兄様、どうぞ早う詮議して敵をとつて下されいなう。

〽さてもいとしや與茂作殿、どういふ事でこのやうな、はかない死をさしやつたぞいの。

晝も晝とて行きしなに、茶飲めの何食へのとこなたの介抱、これわしや手を合せて拜んでばかりゐたわいなう、わしこそこのやうに病みほうけ、役にも立たぬ娑婆ふさげ、後に殘つて何とせう。

〽どうせうぞいの親父殿。

定めて最期のその時に、わしや子供が顔見たかろ、云ひたい事があつたであろ、口惜しかつたでござんせうなう、思へば晝の後影どうやらはかなう思うたも、知らせであつたかなさけなや。

〽むなしき死骸を押し動かし、歎けば娘はたゞうろ〳〵、見るにたまらず七

郎兵衛、怺へ怺へしため涙、思はずわつと聲をあげ、前後正體泣きさけぶは、目もあてられず哀れなり、兄はやうやく眼を拭ひ。

七郎　コレ〳〵マア待たつしやい、せかずと後を聞くがよい。俺も蔭で聞いて居たらおのぶが泣聲、行つて見ればこのしだら、臺七殿の氣質といひ、てつきり手打ちにやられたと、思へどそれといふ證據もなく、村の衆も一同におのぶが肩持つて、めつきしやつきのその所へ、臺七殿の弟の臺藏殿が隣り村の、明神の森で切り殺されてあつたと家來の注進、スリヤ與茂作を殺したも同じ切人にきはまると、臺七殿の詞も一理、何でもこの近邊に居るあぶれ者か、但し浪人者か又は武者修行といふやうな、奴の仕業と思はるゝわいなう。

噂の内に谷五郎が、以前の話に氣のつく母。

さよ　ム、、スリヤ隣り村の明神の森の中で、アノ昨夜。

七郎　ヲイナウ。

さよ　ヱ、嬉しや兄さん、敵が知れた、おのぶ喜びや。

七郎　ヤ、、敵が知れたとは、どゞどこのなにやつ。

さよ　イヤ外でもない、婿の谷五郎。

七郎　ヤア、とは又どうして。

さよ　最前話のうちに昨夜明神の森で一夜を明かしたと、ツイ云うた話も耳にとまり、今思ひ當りしもやつぱり佛の引合せ、その上に袖や褄先に血〇ついてあるも見付けおいた、わしがためには夫の敵、この子のためには親の敵、兄さんどうぞ二人が力となつて、敵を討たせて下さんせ、頼むはお前ばつかりぢやわいなあ。

〽手を合はすれば。

七郎　ヱヽ頼むとは何事ぢや、俺が身にもかゝつてあること、氣遣ひするな、おのれヤレ年こそよつたれ七郎兵衛、おのぶも必らず油斷すな、侍でも浪人でも擲すに手なし、ぢやがマア病人は危い〳〵、俺に任して奥へ行かつしやれ。（ト奥へおさよをやる）

〽サア、マア奥へとすゝめやり、障子をはたと引立てゝ。

サアこれからは身ごしらへ、おのぶ合點か、早う〳〵。

〽鉢巻しつかと身ごしらへ、百姓業はなま中に錆刀より棒ざんまい、娘は手

なれし草苅鎌、帶ひきしめて谷五郎が歸りを今やと納戸口、身をひそめたる心根は、けなげにも又。

ト七郎兵衛、おのぶ身ごしらへしてよろしく兩人奥へはひる。

へしほらしや、秋の入日のくれやすく。（トこの内暮六ッの鐘鳴る。）迷ふ山道谷五郎、やう〳〵戻る表口、後よりつけ來る忍びの武士、手ん手に十手拔足さし足とは知らずして内へ入り。

ト右の淨瑠璃にて、花道より谷五郎以前のなりにて戻つて來る。後より貫平丹助十手を持ち窺ひながら附き添ひ出る。次に志賀臺七着付け野袴ぶつ先大小、兜頭巾にて同じく窺ひながら附き添ひ出る、谷五郎これに氣のつかぬこなしにて何心なく内へはひる、三人は表に窺うてゐる。

谷五　イヤ唯今歸りました。不知案内の道に迷ひその上足は痛む、思ひの外暇取りました、さぞお待ちかねでござらう、與茂作殿も最早お歸りでござらう。これはしたり、日も暮れしに火もともさず、何事でござるな、ドレ〳〵拙者が火をともして進ぜうか。

へ探りよる後へぬつと七郎兵衛、なぎ倒さんとよる棒の早速をきかして蹴飛ばすこなた、親の敵と打ちかくる娘の小腕ねぐり鎌、こは心得ずと谷五

郎、身をかはしてぐつと引寄すれば、わつと泣く聲女房が、差し出す行燈、七郎兵衛、肝を冷して力み居る。

トこの時奥より、七郎兵衛以前のなりにて六尺棒を持ち、おのぶ草苅鎌を持ち、窺ひ〳〵出て、いきなり谷五郎へ打つてかゝり、文句通りの立廻り、この内よき程に、おさよ行燈を持ち出て來り明りをさし出す、立廻りの内七郎兵衛の棒をふまへ、おのぶを引きつける。

谷五　ヤア某を、親の敵とは仔細ぞあらん、樣子を語れ、なゝ何と。

七郎　ヲヽ云はいでならうか、樣子といふは外でもない、昨夜明神の鳥居先にて與茂作を殺したは、おのれであらうがな。

谷五　ナニ與茂作殿を殺したとは、何をもつてこの谷五郎が。

さよ　ヤア知らぬとは白々しい、のつぴきならぬ證據といふは、それ〳〵こなたの小袖褄先血潮のよごれ、二つには昨夜明神の森の中で、一夜を明かしたと、最前こなたの物語。

七郎　サアその森の中で侍を殺したも、おのれが仕業であらうがな、なりや遁れぬ與茂作が敵、武士に似合はぬ卑怯の爭ひ。

さよ　サアこの上は尋常に。

のぶ　父様の敵。
七郎　一家の助太刀。
さよ　サア、名乘つて勝負するか。
のぶ　サア。
七郎　サア。
さよ　サア。
三人　サア〱〱。なんと〱。
谷五　ホヽウ天晴の志し、この場に於て云譯は未練には似たれども、與茂作殿の儀は眞もつて覺えなし、尤も昨日夕暮に白坂のほとりにて一人を害し、まつた夜に入り明神の森にて今一人あやめしはかくいふ金井谷五郎。
臺七　家來、そりや。
丹助　ハヽア。（トこの時ばら〱と、臺七先に貫平丹助、谷五郎を取り卷く。）
谷五　ヤア、何奴なればこの狼籍。
〽云はせも立てず。

臺七　ヤア狼籍とは何のたわ言、今うぬが口から自身の白状、昨日白坂のほとりにて我が弟臺藏、まつた昨夜明神の森にて家來運八を手にかけし、金井谷五郎とやら、かく云ふ我は志賀臺七といふ者、弟の敵家來の仇、のがれぬ所ぢや、覺悟致せ。

〽覺悟せよとつめかゝれば、谷五郎かんら〳〵とうち笑ひ。

谷五　與茂作殿の敵と切りかけしは、女童の健氣な働き、それにひきかへ臺七とやらんが敵呼ばゝり、相手にとつて面白し、我武者修業の願ひをたて、あまねく日本六十餘州を經廻り、我に勝りし者に出會はんと一國に一ケ所の首塚を立て、殘らず手に合ふ者に出會はず、然るに昨夜森の中にて一人を手にかけ、首を手向けし感應にや、天晴ゆゝしき武士に出會ひ師弟の約をなしたり、かく一人を切りとれば意趣遺恨なきこの家の主人、與茂作殿を何のために害すべき、卑怯未練に包みかくす谷五郎ならず、まつたうぬらが如きへろ〳〵武士、この谷五郎を相手にとり、敵呼ばゝり事をかしや、ならば手柄に打つて見よ、何を小癪な。

〽一度にかゝれと身構へたり。

臺七　ヤア、人もなげなるにつくい廣言、物な云はせそ討つてとれ。

貫平
丹助　心得ました。うぬ動くな。

〽下知に從ひ一二のかけ聲、左右に組みつく丹助貫平、首つかんでゐのころ投げ、手練の手なみにさしもの臺七、欺し討たんと引きかへす、逃さじ物と駈け出す谷五郎、どつこいさうはと帶際しつかり、とりつく貫平丹助を、けとばす金井が金ずねに、叶はぬゆるせと逃げ出す二人が、襟ぎはぐつと引きすゑて。

トこの立廻りの内よろしき時分、臺七門口へ忍び出で、拔足にて花道へ引返してはひる、トゞ立廻りあつて兩人を引きつけ、

谷五　察する所この家の主人與茂作殿を殺害せしは、うぬらが主と賴む志賀臺七であらうがな。

兩人　イヤサ、その儀は。

谷五　ヤア知らぬとは云はれまい、何科あつて手にかけた、サア眞直に白狀せよ。

兩人　イヤ知らぬ、覺えはない。

谷五　ヤアしぶとい下郎め、これでも云はぬか。

兩人　アヽ申します／＼、どうぞゆるめて下され／＼。

谷五　サア／＼、きり／＼ぬかせ。

貫平　この上は何をか隠しませう、臺七様が盗み取らつしやりました寶の鏡、餘り詮議がきびしさに明神の神鏡とすりかへたを、こゝな與茂作に見付けられてのこのしだら。
丹助　私共は何にも知らぬ事、どうぞ命ばかりお助けなされて、
兩人　下さりませ、御慈悲々々。
〽泣きわめくこそ道理なり。
谷五　ヲヽよくぬかした。何といづれも、モウこの上は某に疑ひは。
さよ　ヲヽ晴れましたとも〳〵、さうとはしらず片時でも、こなた様を疑うたは女子の淺はか。
七郎　さうとは知らず最前よりの無禮。
のぶ　おゆるしなされて下さりませ。
さよ　ヲヽよう云うた、必らず〳〵氣にさへて下さりますな、與茂作殿の敵といふは、志賀臺七とやらいふ今の侍。
七郎　敵の知れしもあなたのおかげ。
三人　ヱヽ有難う存じまする。
谷五　イデこの上は常座の腹いせ、敵につらなる二人の下郎、この谷五郎が舅殿へ、とりも直さず追

善供養。

〽ぐつと一しめ目をむき出し、手足をもがき死んでけり。

なほこの上は志賀臺七、遠くは行くまじ後ぼつかけて、イデ本望のとげさしくれん、ヲヽそれ。

〽追駈け出づる向ふに臺七。

トこの時臺七鐵砲を持ち花道へ窺ひ出る、下手の藪疊より、宇治兵部介正雪忍び裝束にて出かけ、窺ひゐて印を結ぶ、これにてドロ〳〵になり、臺七が持つたる鐵砲空へ上がる、臺七びつくりして空へ目を付けるうち、正雪出て前幕の鏡を臺七の手にしつかりと渡す、これにてまたびつくりして鏡を押し戴き、こなしあつて引返してはひる、よき所へ谷五郎出て臺七を追駈け行かうとする。この時。

正雪　ヤレ待たれよ、金井谷五郎。

〽覆面頭巾投げ捨つれば。

谷五　ヤア、貴殿は昨夜明神の森において。

正雪　いかにも、義を鐵石と結びたる、宇治兵部之介正雪。

谷五　フム、シテ又何故臺七を、見逃しめされしその仔細は。

正雪　ホヽウ、不審な尤も、さりながら貴殿のためには眼前舅の仇敵とは云ひながら、勢ひ盛んなる北朝を打滅し、南朝の御世をとりたてんと義兵の大義思ひ立つ者が、か程の小事にかゝはらんや、卑怯未練の臺七なれども、アレ今の如く飛道具にて取圍めば、貴殿に孫呉の術ありとも、などかこれに敵すべきか、大功は細瑾をかへり見ず、殊に臺七には楠原普傳が秘法の毒藥、傳授の一卷所持すれば、何卒それを聞き傳へんため、我が手に入りし天眼鏡も、思へば邪宗不祥の器、天下を治める寶にあらず、夫故わざと彼に返して恩を見せ、この場を無事に見のがしたり、たゞこの上は與茂作が娘どもに力を添へて、敵を討たすが肝要ならん、まつた敵臺七とても當所に居がたく、鎌倉へ逃げ行かんは必定ならん、我もこれより由井ヶ濱にたち歸り、猶も味方と牒し合はさん。七郎兵衞殿とやら、何かの樣子はあれにて聞く、愁傷の段察し入る、中陰事なう相濟まば必ず訪ね來るべし、姉娘も江戸にとあれば何かの用事も承はらん、必ず心おかれなよ。

〽慈悲の詞寛仁大度。

七郎　ヱヽ、重々のお志し、有難う。

三人　存じまする。

〽ハッと兄妹添け涙、谷五郎も理に服し。

谷五　ハヽア誤つたり〱、臺七如きが鼠賊を相手にとるは大人氣なし、敵討ちは兄妹の娘、お頼み申すは兵部之介殿、まつた某事はこの程の一儀、貴殿の下知に從うて浪花浦の總大將、四天王寺の東門に陣を構へ、よせ來る諸軍。

〽仁木細川吉良石堂、北朝無二の賊臣ども、三津の濱邊の眞砂の數や、潮の如く起るとも。

習ひ覺えし諸家の軍法。

〽魚鱗鶴翼龍虎破軍、進戰退闘利變の術。

堅きを碎き鋭きを取り挫き、奇正突衝立花八陣、五位の兼備、四十八ケ條七十二種、

〽二百八十四條の兵略、こゝに亂れかしこより寄せ、變に應じ奇にのぞみ、時に大江の岸打つ浪、浪花の葦の浦千鳥、むら〱ぱつとまくり立て、名を高天に輝かさん。

もし天運至らずば、圍みの場所を一足去らず、腹。

〽かつさばき討死の、末世に手本を見せ申さん、詞も正に當れるかな、反逆露顯の時至り、四天王寺の東門に骸はさらせど名は朽ちぬ、金井が義心ぞいさましき。

正雪　ホヽウ面白し〳〵、某も鎌倉にて志賀臺七に廻り逢ひ、楠原普傳が祕法の毒藥、手段を以て受け傳へ、その後二人に力を合せ。

〽姉は長刀妹は、田舍に育てば手馴れし八重鎌。

晝夜鍛練修行をつみ、親の敵を討たせん事、この兵部之介が方寸にあり、必ず氣遣ひ致されなよ。

〽げにたのもしき武士の、花は三吉野南朝に二代の忠臣菊水の、流れは代々にかんばしき、涙拂うて七郎兵衛。

七郎　ハヽア勇ましきお話を、聞くにつけてもはかないは與茂作殿、もとはやつはり楠家の浪人、谷五郎への許嫁の姉のおきのは吉原へ、傾城奉公のうき勤め、これもやつはり親への孝行、必ず

ずお見捨てなう、お頼み申し上げまする。

さよ　また兵部之介様にもこの娘、姉と一緒に親の敵、お討たせなされて下さりませ。

〽目には涙の陸奥や、末の松山千代かけて女夫の固め經陀羅尼、願ひを金井谷五郎。

谷五　今日より父の名を繼いで、金井勘兵衛正國と名乘るべし。

正雪　ホヽウ、我もこれより諸國を廻り、鎌倉へたち越えて姿をかゆる一つの手段、宇治の常悦正雪と、

〽尋ねられよと互の誓ひ、

谷五　スリヤ萬事の手はずは、鎌倉にて。

正雪　何れも、その亡骸野邊送りの營み致されよ、この正雪も心ばかりの弔ひは。

〽云はぬ色なる一包み、黄金花咲く山おろし。

と袱紗に包みし金を七郎兵衛に渡す、この時本釣鐘鳴る、皆々こなし。

七郎　夜もしら〴〵と白石の。

さよ　親の敵の。

谷五　孝行一心。

正雪　五十四郡や。

皆々　六十餘州。

へ旭の勢由井ヶ濱、一天四海に菊水の、武勇の旗を。

正雪　さらば。（ト正雪、谷五郎兩人靜々行きかゝる。）

皆々　おさらば。

と皆々こなし、よき所にて七郎兵衞死骸を抱き起して見せると、正雪、谷五郎ふりかへり見て、おさよ、おのぶ顔見合せ、思はずハアヽと泣き落す。この見得よろしく。

へなびかせり。

ト段切れにて皆々愁ひの思入にて、

幕

大詰　新吉原大黒屋の場

役名　傾城宮城野、同妹おのぶ、新造宮里、同宮芝、やり手おまき、禿しげり、同たより、大黒屋惣六。

本舞臺一面の二階、上手の屋體葭戸たてあり、この内をすかし見える屋體、正面は箪笥黒塗り金物打ち、この上夜具棚にして友禪見事なる夜具を飾り宮城野の紋つきし油單をかけ、この次床の間、花生け軸をかけ、違ひ棚に地袋佛檀しこみある事、よき所に衣桁に打掛けかけてあり、いつもの所にへだての綟張り障子、下手は廊下奥深に見す奥より出て來る事あり、花道際に二階の上り口、手摺りをとりつけ、すべて大黒屋二階の體、石橋の切にて幕あく。

〽はや晝見世も入相に、二階座敷は身ごしらへ新造禿てん〴〵に、運ぶ櫛箱鏡臺に、その面影を寫しては、花の姿を宮城野とて、本原の萩の露おもみ障らば落ちん愛敬は、廓に名高き情知り、紋日もよそに宮里が。

ト二階の上り口より宮里宮芝新造のこしらへにて、禿の兩人も附き出て來り。

宮里　モシ花魁え、さつき本屋の金さんがこの間お借りなんした、曾我物語の後ぢやと云うて置きなんしたぞえ、イヤほんに宮芝さん、今日の客人は仲の町の蔦屋から、二人一座で身ごしらへし

てお出でなんしたとやら、遣手衆が云うたぞえ。

宮芝　ヲ、忙しない、今身ごしらへして行きんす、したが知つた顏でもありんすまい。

宮里　イヱ〳〵、どれも〳〵侍衆さ、一人はよいが外の一人は憎てらしい侍、目玉の大きい菩面のが客ぢやと、吉野屋の兄さんが云ひなんした。

宮芝　そりやマア、すかぬ客人でござんすナア。

　〽惡う云ふのも褒めるのも、にべなき新造の後生樂。（トこの時葭障子の内にて、）

宮城　これ〳〵そんな事云うて、遣手衆に叱られうぞえ、お前方はマア、座敷へ行きなんし。

宮里　イヱ〳〵、お前と一緒に參りんす、座敷では幇間の五町さんがおどけ、ほんにをかしうありんす。

宮芝　ヲ、をかしい次手に宮里さん、今日旦那さんの連れてお出でなんした奉公人は、をかしい物の云ひやうぢやないかいナ。

宮里　サイナア、遠い國から來たと云うて、仲居衆が尋ねれば、姉を尋ねて來た者だと、あねえを知らせてくんせえと、云うては泣かんす。

宮芝　モシ花魁、いまちよつと呼んで來て、お聞かせ申しんす。

宮里　それ／＼花魁にはよい慰み、宮芝さんござんせいナア。

〽うち連れ下へ立つて行く、宮城野はうち笑ひ。

ト新造兩人こなしあつて下へおりる、この内上より宮城野、打掛け衣裳にて出て、文臺の片脇へ住ひ見送りこなし。

宮城　ほんにあの衆とした事が、ひよこすかと苦勞のない、よい機嫌ではあるわいなう。コレしげりやこの手拭ひも絞つておきや、半挿も櫺子へ出しや。

禿　アイ。

〽アイと禿がまめやかに、とり片付けるその所へ。

ト禿兩人半挿手拭ひを片付ける、とこの時階段の下にて、

宮里
宮芝　サア／＼、こちへ來やいなう。

ト踊り地になり、宮里宮芝、いやがる信夫を二階の上り口より石持ち田舍染の賤の女にて引連れ出て來る、信夫あたりを見てびつくりして、逃げて下へはひるを、新造兩人こなしあつて、階段の口へはひり、直ぐに引連れ出て、宮城野の傍へ無理に座らせこなし、

〽新造二人が伴なうて、いやがる者を無理無體、つき出されたる田舍の娘、

あたりきよろ〳〵ついに見ぬ、錦の小べり三つ蒲團。

のぶ　コレめろサア達、人の寢そべつて居る所を、用サアあるから早く來いと、二階サアぶち上げて、コリヤマアあんたる所チヤア、どこもかしこも光りもをして、おしやらくの櫛サア見えやうにぬりこべつた簞笥サア、その上に夜の物もコリヤハア金切だア、わしらア蒲團と違うて蘇芳染の色のよさ、わしらア寢まつたらあくとの 脂 サア引かゝつて、うつきれべいチヤア、おやつかな、たまげ申したア。

〽魂消申すと云ひければ。

宮芝　コレその子や、年は幾つになる。

宮里　國は何處でどうして、サアそれを話して、

兩人　聞かしやいナウ。

〽なぶると見えてしぶ〳〵泣き。

のぶ　ヲ、わしらア國さア奥州、だどあやがあまに別れて、江戸サアはえらく盛る所だアと聞き、その上姉サアは吉原で名の高い 女郎サアなつてゐさる との事、童子の身として 出來ない思ひをして、尋ねて來るも、海山の物語のある事よ。

〽聞いて哀れを添へてたべ。

宮芝　ヲヤ馬鹿らしい、あんだかねつから知れんせんよ。

宮里　その上吉原で名の高い、女郎衆が姉さんとは、マアめつさうな尋ね物。

のぶ　サアそれだから頼み申すわ、昨日観音サアで目まなこの強い人が連れて行つて、逢はしてやらうと駕籠サアにぶち乗せて来申す所を、此家の御方の世話になり申して、昨夜からゐ申す、厭かけ申すも他生の縁、ほんに赤はらはたれ申さぬチヤア。

宮芝　ヲヤちよつと聞きなんし、チヤアと云うたわいなア。

宮里　ホヽヽ、そして赤はらはたれぬとは、マアをかしい話ぢやないかいナア。

〽皆々どつとうち笑ふ、宮城野は気の毒さ。

宮城　コレそのやうに笑はぬもの、誰も目見得のその時は恥かしい事ばかり、いまあの子の云うた、だどあやがあまといふは父さん母さんといふ事、赤はらはたれぬとは嘘をつかぬと云ふ事ぢやわいなア。

のぶ　さうでがアス。

宮里　さつてもがをれ、その譯を、お前はどうして知つて居なんすえ。

宮城　サアそれは、ヲ、毎度私が所へ旅の客衆がお出でなんしたから。
　〽それでよう覺えてゐるわいナアッ
イヤ客衆で思ひ出した、奥の客衆もさぞ待ち兼ねてゞあらう、私もいま行く程にお前方は皆さん連れてよいやうに、コリヤしげりも仲の町の蔦屋へ行つて、彌次さんにさつきの返事は來たか聞いてきや。
まき　〽皆さん早うといふ所へ、遣手のまきが例のしやべり。
もし宮里さん、宮芝さん、奥のお客が呼んでおいでなされる。早う〳〵。
　ト階段の口より遣手まき出て來り、踊り地いけころし、
　ト云ひ捨てゝ階段下へはひる、新造こなしあつて、
宮芝　ほんに勤めといふものは、いづくの人にも逢はねばならぬ。
宮里　それ〳〵、花魁のお話でこの子の話が分かりました、私等とても外ではない、たゞあやがあまのために賣られて、この勤めをするからは客衆と寢そべる度ごとに。
宮芝　ヲ、それ〳〵。
　〽赤はらたれて氣に入つて、紋日頼むと口々に云うて座敷へ走り行く、後う

ち眺め宮城野は、おのぶが傍にさしよつて。

トこの白新造よろしくあつて、禿附いて二階を下りてはひる、こゝに宮城野、おのぶの傍へよつて、

宮城　コレその子や、先からの話には、姉を尋ねてこの廓へ来たと云やるが、マアそなたの國は何處でなんと云ふ所ぢやぞいの。

のぶ　ヲヽ、わしらア國サア奥州で、白坂の近在逆井村といふ所サア。

宮城　そんならその逆井村に、與茂作様といふ人を知つてかいナア。

のぶ　その與茂作といふは、めらがだゞあサ。

宮城　ヤ、そんならそなたは、わしが妹ぢやや。

〽すがりよるをつきのけて。

のぶ　アヽコレ／＼、待たつしやれ／＼／＼。（ト下手へ飛びのき、こなし）イヤ／＼／＼、があまが常に云はツしやるには、姉サアの方にもきつとした印しがある。それを互ひに合はせた上、心サアをぶちあけろと云ひめした、印しがあらば早う見せてくんさいなう、コレ姉サア。

〽なつかしながら油断なき。

宮城　ヲヽ、常々大事にかけておく、その證據を見せうぞや。

〽立つにも急ぎそこ〳〵に、箪笥の上にうや〳〵しく、淺草寺の觀世音あけて中より取り出す、守袋を見るよりも、こなたも首にかけまくも、思ふ壺井の御守り。

ト宮城野違ひ棚の袋戸の内より、護への守りを持ち來り思入。

のぶ　ドレ、見せてくんせい。（ト襟にかけし守り袋を出しひき合はせ見て）この守ヤ、りが合ふからは、國を出る時母さんの話、父さんはもと楠家の浪人、河内の國壺井とやらの御守り。

そんならほんの姉サアでござんすか。

宮城　ヲ、妹か。

のぶ　逢ひたかつた、逢ひたかつた、逢ひたかつたわいなう。

〽すがりつき外に詞も泣くばかり、折りふし亭主惣六が、のぞけば内に泣きゐる二人、仔細あらんと襖のかげ身をひそめてぞ窺ひゐる、存なでさすり宮城野は、顏つく〴〵と打ち守り。

トよき程に二階の口より、大黒屋惣六着流し平ぐけ帶、つるべなりの煙草盆を提げ出て來り、この體を見て、ぬき足に上手の屋體へはひり、襖戸を引立て窺ひゐる、宮城野思入あつて、

宮城　ヲヽ、妹よう尋ねて來てたもつたなう、年端もゆかぬそなた、よもや一人來はせまい、父樣か母樣が、ついてお出でなされたか、モシ道ではぐれでもしやつたか、サアちやつと云うて聞かしやいなう。

〽云へば妹はしやくり上げ、わつとばかりに泣きしづむ。

これ〳〵から廻り逢ふからは、悲しい事もなんにもない、泣いてはわからぬ、なんとぢやぞいなう。

〽尋ねる姉の心はそゞろ。

のぶ　そんなら遠國隔てゝ、こなたは何にも知らぬの。

宮城　コリヤ知らぬとは、どうなされた〳〵、どうぢやぞいなう。

のぶ　コレ、だゞあは鎭守の明神の祭禮の時、代官の志賀臺七といふ惡でくな侍に、切られてお死にやり申したわいなう。

宮城　エヽ。

〽はつとばかりにさしてむ癪。

のぶ　姉サアイなう／＼。

ト　おのぶはびつくりする、宮城野癪のさし込た思入にてウンとのる、おのぶ仰天して有合ふしごきにて宮城野の胸をしめる、この時上手の屋體の惣六そつと薬包をほうりやる、おのぶ不圖薬包みを見つけ、思入あつて宮城野に飲ませ、あわてゝ湯沸しの湯を茶碗に汲み持ち出し、飲ませて呼びいける、やう／＼宮城野心付き、この内いけ殺しの踊り地、宮城野あたりを見ておのぶの手を取り上げ、愁ひの仕組み。

コレ姉サア、心がついたか。

宮城　ヲヽ、妹。

のぶ　姉サア。

宮城　どうせう。

のぶ　尤もだ。

宮城　どうせう／＼ぞいなう。

のぶ　アヽ、これ／＼そのやうに云はつしやると、胸元がつッぱり申して、一つも口へ出申さぬ、まだ悲しい事があるチヤア。わしもそんでに殺さるゝ所、庄屋の伯父御が駈けつけて力んで見ても何のマア、正銘證據がござないから、きつと敵といふ事もなけれど、そんたの許婚の御亭

宮城　にも尋ね逢ひ、この江戸へ歸り申した後は、わしとがあまばかり、便りない身に下地の大病。

のぶ　シテ／＼母様は、御本復あつたか。

宮城　重り／＼てがあまは六月十六日、悲しやつひにお死やり申したわいの。

のぶ　ヤヽヽ、そんなら母様もお果てなされたかいなう、ハ――。

宮城　話を聞いてさへ、そんなに歎かつしやるがの、直ぐに見とらへたおらだけが心、コレヱ、泣かつしやるな、道理だけれど便りに思ふ姉サア、又病氣起してはなほすまないわいなう。

のぶ　イヤ／＼案じやんな、モウ／＼煩らふ事ぢやない。さうしてどうぢや。

宮城　サアなじよにもかじよにも仕やうはなし、おらだけ一人を庄屋の伯父御が引きとつて、福島の町へ出ばつて奉公しろと云ひめすけれど。

　へなんの奉公どころかい。

口惜しいとくやしいとで、後先かまはず。

　へ檀那寺へ驅けこんで。

坂東巡禮すると云つて、お寺で笈摺こしらへて貰ひ、國許をつッ走り、そんたに逢うて姉妹一致に心を合はせ、だゝあの敵が討ちたいばつかり。

〽道中すがらの艱難も、そんたに逢ふを樂しみに。人の軒下、ヤンまの中。

〽ほんに出來ない思ひして、尋ねてきたる甲斐あつて。この姉サアに逢うたれば、がつくりとしよろツ骨がぬけたやうな。コレそないに歎かつしやる手間で、妹がはる〴〵と尋ねてよう來た、めこがめらしと云つてくれめせ、コレ姉サア。

〽あやも泣き入る稚氣に、永の旅路の憂き苦勞、思ひやる瀬も宮城野に、つづけば末の松山を袖に波こそ涙なり、宮城野始終聞く内にも、悲しさつらさせき來る涙おしさげて。

宮城　そのやうに思やるも尤も、然しそなたは父母に永う添やつた果報、この姉を見やいなう、年貢に迫つて父樣は水牢、その苦を助けうばつかり、コレこの廓へ身を賣つたは、思ひ廻せば十二の歲、そなたは五ツ、顏見知らず、父樣の御最期や母樣の死目にも、逢はぬと云ふ悲しい不孝な。

〽はかない事があらうかいなう。

かうした事とは露しらず。

〽この妹はまめなかしらぬ、父樣母樣お煩ひでもあらうなら、よもや知らしてたもらうもの。

つらい苦界のその中に、傍輩衆の母さんが問ひ音便の度々に、悲しい話聞かせたり、又仕合せのよい時は嬉しさうな顏をして、モウ何年で年が明く、便りのないさ。

〽杖柱首尾よう年を勤めたら、國へ歸つてお二人に、樂させましてと泣いて苦界のわが身の上。

廻る紋日も松の內、桃の節句に菖蒲ふく軒の燈籠二度の月、菊の節句や俄の時。

〽仲の町へ出て居ても。

モシ父樣に似た人のあると思へば心ぜき、又は役所の勤めにて田舍ぞめきの見物が、のぞく見世先格子先、見るのも若しや父さんが、尋ねて逢ひにござんしてもそれぞと知れる種にもと、思うて暮せばあぢやらにも。

〽色や浮氣をたしなんで、勤め大事と許婚の殿御の事やそなたの事も、戀し

なつかし思ふのを、樂しみ暮した甲斐もなう。
思ひ掛けない父樣は、人手にかゝつてはかない御最期、まだその上にこの姉を尋ねんばかりにそなたまで、又この廓へ身を賣るとは、なんの因果か情ない。
〽手をとりかはす姉妹が、涙々を立ち聞くも貰ひ泣きして立わけの、暖簾も濡るゝばかりなり、歎きのうちに宮城野は、氣を取り直し泣く目を拂ひ。
コレ妹、最前そなたの話の中、許婚の夫もこの江戸へとやら、そのお人の名所は。

のぶ　その名も所も知り申さぬ。

宮城　シテ敵臺七とやらの、顏は覺えてか。

のぶ　ア、そりやよう覺えてゐ申す、眼のでツかい鼻のひらいた男サ。

宮城　モウヨイ云やんな、壁に耳、父樣は武士のはて、スリヤそなたとてもこの姉も。

のぶ　侍の筋なれば、少しも早う敵が討ちたうござるわいなう。

宮城　ア、コレ。（ト踊り地へ騷ぎの鳴物になる、互ひにこなしあつて、）ヲヽよう云やつた、出かしやつた、コレ親の敵は倶に天を戴かぬとやら、幸ひ奥の大一座、騷ぎにまぎれこの廓を駈落ちするより外はない、何かの事は一時も早うたち退き、田甫の方から私と一緒に、サアおぢや。

ト兩人身ごしらへして鏡臺の剃刀を二挺出し、これを兩人隱し持ち、
へ小褄りゝしく身づくろひ、たち出でんとする所へ。

惣六 花魁どこへ。(ト惣六ずつと煙草盆を提げ前へ出る。)

宮城 ヤア旦那さん、いつの間に。

惣六 イヤおりやたつた今、びつくりせいでもよい事を。これは花魁、マア下にゐや、ハテマア下に居やれさ。(ト宮城野しのぶ上下へ別れ下に居て、惣六眞中に住ふ。)マア〳〵一服のみやれ、俺もこゝで一服のむ。アヽ悪いぞえ、そなたはマアアノ敵、イヤサ堅い約束した男がある故、こゝを斷落ち、ハテさうであらう〳〵、アヽさりとては悪いぞや、又その子はそなた知つてゐやるか。

宮城 アイ、さつき新造衆が昨日から來たと云うて、連れてきてぢやによつて、あまり不便さ。

惣六 ムウそれで呼んでお聞きやつたか、これも尤も、サア二人ともに用がある、ちよつとマアこゝへ來やれ。

へ云はれてなんと詮方も、さすが小さき女の魂。

宮城 旦那さん、堪忍して下さりませ。

〽つツかくる刃物かひくり傍にあり合ふ鏡臺の、鏡おつとり打ち落し。

ト宮城野剃刀にてついてかゝるを、惣六突廻し、しのぶ曾我物語の本を打ちつける、又宮城野つきかける、しのぶ鏡にて打つてかゝる、惣六鏡を引たくり剃刀を落し、兩人を引きつけ、

惣六 コリヤ早まるな、せく所でない程に、氣をせかずともマア俺が云ふ事、マアとつくりと聞きや、コレ姉妹。

兩人 エヽ。（ト兩人下にゐる、惣六二人の顏を見て）

惣六 イヤサこれは鏡臺。（ト謎への對面三重模樣の合方になり、）ナ、鏡に寫る二人が顏、似たりや似たり杜若花菖蒲、その五月雨の暗き夜に敵を討つたは曾我兄弟。イヤアノ鏡臺が。（ト後の鏡臺へとなし、前なる曾我物語の本を見て、これをとり上げ、）アヽコリヤ假名本の曾我物語、第廿四の巻、コリヤよい物があつた、幸ひ俺が面白くなくとも讀んで聞かさう、二人ともに聞きやれさ。（ト本を開き見て、）「光陰惜しむべし時人を待たざるの理り、隙行く駒繫がぬ月日重なつて一萬は十三歳になりけり、身の不肖なるにつけても又公方を憚る事なれば ひそかに元服して繼父の名字をとり、曾我の十郎祐成と名乘りけり、コリヤ十郎元服の事、又この末弟箱王丸は實父祐康の菩提のためとて、母滿江の敎へにて箱根山へ上せしを、出家を嫌ひ下山して北條

殿といふ結構な烏帽子親をとりて、曾我の五郎時致と名乘りけり。」マアかういふとあぢな所へ曾我物語一つも理窟がわからねえ、木へ竹をついだやうだが、よく推量してみやれ、アレ河津殿の胤でせえ親のない身はあれこれと、繼親のヤレ烏帽子親のと賴み、サアその內憂き艱難も我が一存では行かぬぞや、そなたもこゝを駈落ちして。（ト大きく云ひ、あたりを見て氣をかへ）イヤサ、その堅く約束した男を尋ねても、いはゞ女の身の上、しつかりとした北條殿かなんかといふやうな、えい後立てがなければ中々思ひは晴らされぬ、その內には惡い魔がさして、むざ〳〵月日を送る事もある、もしやハテ、曾我殿原でさへ大磯化粧坂の傾城に、心を奪はれいろ〳〵との艱難辛苦、コリヤ春狂言に芝居でよくある事だ。モシこの廓を逃げおほせてから、腹を立ちやるな、遠國生れのそちが事、當分先の當もなくうろ〳〵する內には、內外の者が見附けて、イヤモシ親方、あの子は地內にかうやつて居ります、ヤレ田町に人の世話になつて居ります、根岸に街妻前髮まで落して居ります、あんまりふみつけた仕末ぢやアござりませぬかと、それを聞いて、えいわい、うつちやつておけとはどうしても主人の身では云はれぬ、そなたばかりが親に孝行ではない、勤めする者はみんな孝行、それだによつてあれも孝行、これも孝行孝行〳〵と、孝行づくめで取りまかれた日にやア、女郎屋生業やめにやアならぬ。これも

浮世の身すぎ世すぎだア。又たとへた話がおらア家の野郎が、四五日見えねえわ、若イ者呼びつけて野郎が見えぬがどうした何所へ行た、十日あまりも外を内にして遊び所は何所だ、首玉へ繩つけて引ずつてこいと云ふわ、左樣でござります、有やうは新宿イヤ品川へ參つて居ります、どうぞ連れて參りますから大目に御覽じませと、野郎を連れて歸つて來るわ、そりや伜が我が家の敷居が山のやうになつて入りかねるわ、コリヤヤイ野郎め、うぬはどうした者だ、十日も家を明けて、少し二階のとり廻し、家の始末を覺えておかねえか、勘當するぞ、久離帳につけるぞと叱りつけるわ、又人樣の大事の息子達が家へござると、イヤ花魁アノ客人は猿になる隨分大事にしなせえ、外に遊びに行かぬやうに足を近く來るやうに、面白く遊ばせるがいゝ、外へ行かれちやア外聞が惡いぞ、大事にせいと女郎子供に云ひつける、こんな得手勝手な生業はねえ、その生業はしてゐれど慈悲と情といふ事は、不斷心に忘れやアしねえ、昨日不思議に淺草で廻り逢うた奧州者。姉を尋ねるばかりにこの身を賣るとの事、直ぐに金を渡して連れて來たのも、二人して最前から何やら話、さてこそと隣りの部屋で煙草のみながらせつねえ哀れな話を聞き、悲しうて淚がこぼれ、手に持つてゐる煙管の雁首上りをうち忘れ、火皿で口を火傷したわえ。もとより浮氣な事もなく、勤め大事にしてくれたそなたの事。何の惡く思は

うぞ。まして何にも知らぬ女の身、今つツかけたこの剃刀、俺にせえ打ち落される位で、どうして相手は侍ぢやねえか、モシ返り討に、サア、内へ歸つても手前の恥は俺の恥になる事、それぢやによつて許婚の夫か、北條殿といふやうなきつとした後立てになる人が、出來た時にやアハテ惣六は男だ、證文の金高はたゞ表向き、たゞでも呉れてやるわえ、必らず俺を人に笑はせぬやうにしてくれろ。向後、芝居の積物や俄の世話もせぬ法もあれ、眞實誓文嘘ぢやアない、曾我殿原の兄弟は五つや六つの頃よりも、十八年の憂き艱難、それ程には行くまいが、アレ天道様の恵みにて、今にもよい幸ひはあるめえか、コレ、身の上大事に時節を待つが上分別、とかく時節を待つものだア。

〽曾我に比へて姉妹に。道を教へる通り者、宮城野はたゞ泣いじやくり。

ト惣六よろしく異見あつて、

宮城　旦那さんの常からの御氣質を知りながら、親の別れに氣も亂れ、手向ひました私を、憎いともおつしやらず、お慈悲深いそのお詞、有難いとも忝いとも、冥加の程が恐ろしい。

のぶ　御亭怺へて、くれめせチヤア。

宮城　堪忍なされて下さりませ。

へ妹も倶に手を合せ、たゞふし拜む嬉し泣き。

惣六　ア、これ〳〵、その禮には及ばぬ事、聞分けてさへくれりや、俺も嬉しいわい。

へ義理をたてぬく男達、通も不通も涙なり、下座敷より遣手のまき。

ト二階の口より遣手出て來り。

まき　モシ〳〵宮城野さん、先から客人がお待ちかね、コリヤ誰ぢやと思うたら旦那さん、こなたは新參の田舍者、そこに居ずと下へ行きや。

惣六　ア、コレおまき、俺が今花魁へ假名よみの曾我物語を、二人に讀んで聞かして居た、この新參者は今二ツ三ツ、物の云ひざまがをかしいといつて、俺が呼びとめて話をしてゐた、宮城野は後からやらう、手前先へ行きやれ。

まき　アイ、そんならお客さんへはよいやうに申しますが、コレそなたも用事がすんだら、下りるのぢやぞや。（ト云ひながら下りかける、惣六思入あつて、）

惣六　ア、コレ〳〵。（ト手招きして遣手傍へ來る、惣六囁く、遣手思入あつて）

まき　アイ承知致しました。そんなら早う宮城野さん、支度がよくば早うお出でなんし。

へ遣手はとつかは走りゆく。（ト二階を下りてはひる、）

宮城　ドレ、ちよつと顔を直して。

惣六　ア丶直さずとも、美しいものだ。

〽ほめるも贔屓賣物に、花も實もある廓の惣六、生粹の淀まぬ座敷は大騒ぎ。

トこの時二挺鼓太鼓入り座敷の騒ぎでうの、賑やかなる鳴物聞える、おのぶびつくりする、惣六宮城野の客騒ぐのだと教へる、おのぶうろ〳〵こなしあつて。

〽幇間末社が浮氣にのつて、飲むやら唄ふやら、現たわいの喜見城。

トこの間宮城野鏡臺にて顔を直し、衣桁に掛けある打掛けをとつて宮城野に着せる、おのぶいろいろこなしあつて、見とれる事よろしくあつて宮城野立上り。

宮城　そんなら旦那さん、行て參ります。

惣六　花魁御苦勞。（ト煙草盆を持ち、立上つてこなし、）

〽異見上手の親方が、餘る情に宮城野が、妹を部屋に奥座敷。

ト惣六は上手へ宮城野しのぶは下手へ行き違ふ、この時禿手箱を持ち、二階上り口より出て上手の惣六の前へ持ち行き、直ぐに奥へはひる、この間騒ぎの鳴物、三味線次第におさめて、

宮城　旦那さん、行て參ります。
惣六　アヽコレ、行くならこれを持つて行きやれ。
　　　ト文庫より證文二通を改め出して、兩人が前へ投げてやる、證文故宮城野おのぶ不思議さうに證文を取つてよく見て、
宮城　ヤ、二人が年季證文。
惣六　アヽコレ、念には念の俺が異見、曾我兄弟の本望の、いはゞ狩場の切手代り。
宮城　お禮は詞に盡くせぬ御恩。
のぶ　そんなら姉サア。
宮城　妹おぢや。
惣六　アヽコレ、必らずせくな、まだ早い。
宮城　マダ早いとは。
惣六　ハテ、間夫に逢ふのは。
兩人　エ。（ト兩人下に居る、惣六煙管にて灰吹きをたゝくを、木の頭〕
惣六　引けすぎがよからう。

ト土手の提灯の唄にて、これをキザミにて、よろしく、

ひやうし　幕

白石噺（終り）

百千鳥沖津白浪

（もゝちどりおきつしらなみ）

大當

百千鳥沖津白浪（鬼神のお松――三幕）

序幕　駿河由井河原の場

役名　夏目四郎太郎、同下部柴平、茶屋男實は手下竹箆太郎兵衛、盗人鰍のがん藏、同曲り鐵ぐれ八、同鰤の佐九郎。鬼神お松、其他。

本舞臺、一面淺黄幕、下手葦簀張りの出茶屋。樹付きの土手に腰掛。土竈、松の立木より繩を下げ、土瓶を釣し、上下植込みにて見切る。松の釣枝、こゝに仕出しの旅人、○△□の三人、休みゐる。茶屋男、盆に茶碗をのせ運びゐる。馬士唄にて幕明く。

茶屋　是れはどなた樣も、お早うございました。サア、お茶をお一つ召し上りませ。

ト茶をめい〳〵に出すことあつて、

○　御亭主、昨夜の降りは、强かつたではないか。

茶屋　左樣にござります、降りがきびしかつたので、今日は天氣になりました。
□　今日も、降りと思つたが、天氣とは、儲け日和と言ふものであらうテ。
△　モシ、あなたは旅御生業の御樣子ぢやが、お上りか、お下りでござりまするか。
○　左樣さ、旅商人でござるが、暮から春へかけて、雪のないので、道中が樂でござりますて。
△　イヤ、お互ひ樣に降られては、道が捗りませぬて。それはさうと春のせゐか、お道筋は格別賑はひますてなう。
□　イヤモ、三四年此方は、宿々は何となく繁昌でござります。
茶屋　その內にも宿などは、よけいに賑はひまして、朝晩はめつぽふでござります。
○　めつぽふと言へば、昨夜聞いたが、薩唾峠に住んでゐる鬼神とか、おにがみとかいふ盜賊は、男か女か知れぬが、此街道を騷がすさうだが、御亭主、噂はどんなでござるの。
茶屋　左樣さ、この邊でも話はござりますが、私共は取られる物はござりませぬから、安心な物でござります。
□　イヤ、それに就いて變な話があります、泥棒で侍と見れば金銀に拘はらず、大小を取るとの事、いつたい何にする積りであらう。

△　それは、刀屋でもするのではあるまいか。

茶屋　あなた、御常談ばかり。

皆々　ハヽヽヽ。

○　是れは長話で、大分遅くなりました、是から江尻の本陣まで、お屆け申す品を、持つて行かねばなりませぬ。

□　モシ〳〵、私も、遅くも駿府泊りとせねば、都合が悪うござります。御一緒に話しながら參りませう。

○　旅は道連れ、そんなら御一緒に。

□△　サア、行きませう。

ト銘々、茶代を拂ひ、捨ゼリフにて上手へはひる。

茶屋　マア、御ゆるりといらつしやいまし。又、お下りにお願ひ申します。

ト此時、花道より長持唄になり、雲助兩人「斯波左藏門荷物」と記せし長持を擔ぎ、出て來り、直に舞臺へ來り荷物をおろし、

是は精が出ますの。マア茶でも呑まつしやい。

雲一　ヲヽ、立て行から、棒組。

雲二　ヲヽ、よからう。

ト件の荷物を下し、休む事あつて、亭主、茶を出す。

雲一　明日の事は分らぬが、今日は朝からまんがよく、仕事が多く、あるわえ。賭場へ行けば、受口よし。

茶屋　そいつはお羨しい。何にしても結構だ。辛抱しなさいよ。

雲一　所が、いくら儲けても。

雲二　宵越しの錢は、持たぬのよ。

兩人　サアやらうか。

ト馬士唄になり、兩人になひ上手へはひる。此鳴物を借り、花道より、夏目四郎太郎、ぶつさき羽織、小紋の股引、大小、きれ草鞋のなり、中間兩掛を擔ぎ出て來り、花道にて、

四郎　鎌倉までは最早僅かの里數、滯りなく着致し、御用向き首尾よくすまし、鎌倉の名所を見物致したいわえ。コリヤ、作內。

中間　御用でござりまするか。

四郎　最前、休息せし處へ、矢立を忘れた。身共はあれなる茶屋で待つてをる。大儀ながら取つて來てくれ。

中間　ハツ。直に、行つて參りまする。（ト荷物舁ぎの中間引返しはひる。）

四郎　ドリヤ、あれにて待合さうか。

ト本舞臺へ來り、樹の腰掛へ休息する。茶屋男、扨はと思入あつて、

茶屋　是れは殿樣、お早ういらつしやいました。ヘイ、お茶を召上りませ。

ト盆に茶を汲み、四郎太郎へ出す。

四郎　コレ亭主、モウ、何時に相成るな。

茶屋　左樣にござります。モウ、七つ過ぎでござりませう。

四郎　シテ、蒲原迄は何程あるな。

茶屋　ヘイ、是よりは二里、近うござります。

四郎　然らば今宵は、蒲原に止宿致さうか。

ト此時ぐれ八出て四郎太郎の傍へ來り、

ぐれ　モシ、旦那。一挺、駕籠召して下さりませ。

四郎　イヤ、身共は駕籠は嫌ひぢや。

ぐれ　お駕籠が嫌ひなら、馬でお供さして下さりませ。

四郎　馬も嫌ひぢや。

ぐれ　モシ、そんな事おつしやらずと、どちらか定めて乘つておくんなせえ。

四郎　ヱヽ、此男はひつこい。望みではないわえ。

ぐれ　何も、そんなに聲高におつしやつても、びつくりして後へ下る樣な男ぢやねえ。憚りながら此街道ぢや、人に面を見知られた曲り鐵のぐれ八だ。五街道を股にかけ、體に傷は絕えねえのだ。サア、かう言ひ出したからにやア、厭でも應でも、乘つて貰はにやアならねえのだ。

ト是にて茶屋の亭主こなしあつて、

茶屋　これ〳〵、ぐれ八、どうしたものだ、俺が店へ、休息なされたお武家樣へ、無法な事を言はしつては、第一私がすまねえ。マア、靜かにさつせえ。

ぐれ　イヤ、すむもすまねえもあるものか。かう言ひ出したから、乘つて貰はにやアならねえのだ。

四郎　おのれ、慮外を致さば、手は見せぬ。（トきつと言ふ。ぐれ八思入あつて、）

ぐれ　なに、手は見せねえ。面白い。切られるものなら、サア、切りやがれ。

ト からだを突付ける。四郎太郎ぅぬと刀へ手をかける。

と言つて、逃げるのだ。

ト下手へ逃げてはひる。四郎太郎思入あつて、

四郎　ハテ、たわいもないやつぢや。

茶屋　イヤモウ、旅のお方を見ますれば、あの様な無法ばかり申しまして、悪い奴でござりまする。

ト邊りへこなしあつて、

モシお武家様、今方庄屋殿から、言渡す事があると申して参りましたが、ちよつと行つて参りまする間、店をお頼み申したうござります。

四郎　ムウ左様か、拙者も供の者を待合はす程に、行つて來るがよい。

茶屋　それは幸ひ、左様なら何分お頼み申しまする。

ト思入あつて、下手へはひる。四郎太郎こなしあつて、

四郎　作内めは、モウ、戻りさうなものぢやが。（ト此時下手にて）

二人　サア、うしやアぶれ〳〵。

ト禪の勤めになり、お松田舎娘やつしなり、そぼろなるこしらへ、是れを輿の佐九郎、鍬のがん蔵

引立て出来り、

お松　コリヤ、私をどうなされるのでございまする。

佐九　何もそんなに、怖がる事はねえ。

がん　おいら二人が、よい女と見込んだからは。

佐九　厭でも應でも。

がん　手籠めにするのだ。

お松　エ、。

二人　うんと言つて、言ふ事を聞け。

ト寄添ふを、お松驚き、二人を突退け、

お松　穢はしい。假令どのやうに威しても、此事ばかりは堪忍して下さんせい。

がん　さう性根が座りやア、是非がねえ。ふんじばつても、言條を立てるのだ。

佐九　擧句の果は、

二人　金にするのだ。

お松　エ、、アノ、わたしをば。

佐九　うんと言つて、自由になるか。

お松　サア、それは。

がん　金に、しようか。

お松　サア、

二人　サア、

三人　サア〳〵。

佐九　面倒だ。

二人　やツ付けろ。

ト お松を蘆間へ引立てはひらんとする。この時四郎太郎ツカ〳〵と割つて入り、兩人を投退け、お松を後へ圍ひ、きつとなる。

アイタヽヽ、べらぼうに、強い奴だ。（ト兩人立上り、四郎太郎を見て、）

がん　ヤア、わりやア三ぴん。

佐九　何で、おらツちを。

二人　投げたのだ。

四郎　ヲヽ投げて構はぬ。女を捕へ無法な奴等。察する處此街道に徘徊致す、胡麻の蠅に等しき奴等。

がん　ヲヽそれ、氣取つたら。

二人　うぬから、先へ。

ト兩人薪ざつぽにて打つてかゝる。ちよつと立廻り、かなはじと下手へ逃げてはひる。

四郎　ヱヽ命冥加な、惡者めら。

トきつとこなし。此以前よりお松、癪の差込む苦痛のこなし。

お松　アイタヽヽヽ。

と替りし合方になり、四郎太郎是を見て、

四郎　娘御には、癪氣と見える。アヽコレ、困つたものぢや。ドレ、抑へて遣はさう。

と捨ゼリフにて、印籠より藥を出し、呑ませ、介抱する事よろしくあつて、トヾお松癪のなほりし思入あつて、

お松　是は〱いづれのお方樣か、難儀をお助け下さるのみならず、御介抱迄受けまして、何とお禮を申してよろしいやら、有難う存じまする。

四郎　何のその禮には及ばぬ事。シテ、此邊の者なるか。日暮れとい丶只一人、嘸親が案じてをるであらう。何用あつて女中には。

お松　御親切なるそのお尋ねに、お話し申上げますが、私は此先の蒲原在、厚原村と申す所の、百姓の娘でござりまするが、と丶さんの永の病氣、藥代にもせんじつめ、遂に田地も賣代なし、その日の烟りも立つや立てずに暮す內、又母さんの急病との報せにより、夜道も厭はず戻りまする途中、只今の災難をお助けなされて下さりまして、有難う存じまする。

四郎　それは定めし心急きであらう。シテ、厚原村と申すそちが家は、どの邊ぢや。

お松　ハイ、此河原を越し、北へ半道餘り參りますれば、そこでござりまする。

四郎　今宵は蒲原へ泊らねばならぬ、半道位の事なれば、宅へ送つて遣はさう。此街道は始めて故、道を敎へてくりやれ。

お松　そんならあなた、村迄送つて下さりますか。

四郎　いかにも。

お松　左樣なら、今のお禮かた〴〵御案內致しませうわいなア。」

四郎　それは忝い。シテ、河原迄は餘程あるか。

お松　ハイ、渡し場迄は、二町あまりもござりませう。
四郎　シテ、娘御には、癪はさつぱりよいか。
お松　ハイ、お蔭様で、忘れた様に直りました。
四郎　それはよかつた、夜道に幸ひ。案内を頼んだぞ。
お松　宵月なれば、
四郎　サ、先へ行きやれ。
お松　から、お出でなされませ。

ト謎への合方。お松先に立ち、四郎太郎後に付き上手へはひる。知らせなし、鳴子廻しにて、ぶん廻す。

本舞臺、向う一面の急流、興津川の遠見。朧夜。在體を見せ、此前三段の早瀬の張物。人通る事あり、上下は生ひ茂りたる蘆原。松の立木、由井河原と記せし榜示杭、仕掛ある事。朧月を切出しに見せ、すべて河原の模樣。水の音にて道具納まる。ト砧入りの合方、水の音にて、花道より、お松先に四郎太郎出て來り、

お松　モシ旦那樣、爰が河原、向うが渡し場でござりまする。

四郎　思つたよりは近くあつた。

ト四郎太郎、向うを夜目に見透し、

薄月にしかと分らねど、早瀬のやうぢやが、シテ渡舟はいづれにあるな。

お松　サア、常は船渡しでござりまするが、一昨夜の大雨で渡しが止り、歩行越で越さねばなりませぬ。惡い瀬がありまして、出水の節は度々間違ひがあるさうでござりまする。

ト是迄に兩人舞臺へ來り、

四郎　不案內故分らぬが、渡し守を呼んでくりやれ。

お松　川留故在の者は、自身に川を越して通行致します。川の瀬は存じて知つてをります。私と御一緒にお越しなされませ、とは言ふものゝ、水にて體を冷しなば、又もや持病が。

四郎　川中で起つてはわしが困る。アヽ、かやうにせい。身が脊負つてやるほどに、淺瀬を敎へてくりやれ。

お松　イヤ〳〵、勿體ない、却つて罰が當りまする。

四郎　ハテ、いらぬ遠慮。そちが蔭で無難に越されると申すもの、サヽ、早う。

と捨石へ腰を掛け、背中を向けてこなし。お松思入あつて、

お松　それぢやと申して。

四郎　ハテ、大事ないと申すに。（トきつとこなし、お松こなしあつて、）

お松　左様なら、お詞に甘へて。

四郎　何の、遠慮致すな。

お松　有難う存じまする。

ト四郎太郎、よろしくあつてお松を背負ふ。供の者の事思入あつて、上手蛇籠の間へはひる。水の音にて、一の手摺へ四郎太郎、背負ひしまゝ、捨ぜりフにて出て來り、

四郎　よきに指圖をしてくりやれ。

お松　私の申す方へ、お出でなさればよろしうございます。

トよき程に砧入りの合方。驛路。水の音をあしらひ。

左りの方が、淺瀬でございます。

四郎　アノ、左りぢやな。

お松　左様でございます。

トこんな事を言ひながら、一の手摺をば通り、二の手摺へかゝり、深くなる仕組。四郎太郎こなしあつて、

四郎　大分深うなつて參つたな。

お松　ナニ、此瀬を右の方へ參りますと、淺い所へ行きます。

ト水音よろしく、二の手より三の手へかゝる。

四郎　是は尙々、深うなつたやうぢや。

お松　サア、爰が冥土の。（トきつとこなしあつて言ふ。）

四郎　ヤア。（トお松、氣をかへて。）

お松　深うござりますか。

四郎　深いとも〳〵。

お松　ヲヽ、深い筈。

ト本釣鐘。お松、きつとこなしあつて、

不便や何にも白波の、劍を持つたが身の不運。覺悟極めて。

ト此內、懷より匕首を出し、四郎太郎の背中首へかけ切り上げる。

往生しねえ。

ト是にて四郎太郎、背負ひし手を放す。お松は淺瀨の方へ飛びおり、匕首にて足をかく　四郎太郎、取押へんとする。お松深みへ突きやり、立廻りちよつとあつて、四郎太郎は深みへ沈む。お松、守り袋の摑みし刀を持つて、二の手摺へ泳ぎ出で、段々と一の手摺、浪打際へ泳ぎ付き、トゞ蛇籠へ這ひ上り、水を吐き、浪際の杭に取付き、ホツト思入。本釣鐘。是と一時に、二役替りて下部柴平、荒き瀧縞、捻切り、一本差し、脚絆草鞋旅なり、菅笠をかざし、下の蘆原を破り出て、きつと見得。柴平、下に伺ひ居る。お松は蛇籠より下りて、四邊へこなしあつて、朧月に件の四郎太郎の刀を透し見て、拔き拂ひ尺を取り、さうではないと投捨て、又我が匕首なき故拾ひ取り、鞘へ納め腰へさし、濡れたる兩袖をしぼり、又裾をしぼり、よき程に月雲がくれする。お松こなしあつて、向うへ行きかゝる。柴平つか／＼と後より引戻しさゝへる。兩人きつと見得　双盤入り凄き合方。水音をあしらひ、誂への鳴物になり、世話だんまり樣の立廻りあつて、花道にて小尻當しあつて、舞臺へお松を突きやる。是にてたぢ／＼と小戻りし、柴平も續いて來り、又ちよつと立廻つて守袋を落し、お松はのがれて、花道へツカ／＼と行く。

柴平　泥ぼう。

ト お松、腰に差してゐる刀を、手裏劍に打ち付ける。上手の榜示杭へ刀立つ。柴平は拔取つて刀を見る。お松は柴平の菅笠を拾ひ取り冠る。双方、此仕組よろしく、木の頭。柴平、向うを見込む。

お松笠を冠りしまゝ、逸散に向うへ走りはひる。双盤にて、是をいつぱいにきざみ、

ひやうし　幕

二　幕　目　　雪の下稽古所の場

役名　夏目四郎次郎、下部柴平、牧村主水、稽古所下部小助實は盗賊小猿の小助、修驗者天狗坊、堂守鐵願和尚、鞠ケ瀨兵衞、庄屋豐六、大黑屋德右衞門、實は非人のぐれ八、古鐵買三五兵衞、庵主西念、惡者土田八、丁稚三吉。豐後節師匠小松實は女盗賊鬼神のお松、主水妹藤浪、稽古女お榮、同おたき、其他。

本舞臺、上手九尺の障子屋體、折廻して、正面押入れ、次へ三尺地袋付き床の間。眞農の掛物、三方、神棚德利、備へなど飾りあり。眞中一間、障子の出はひり。下手の茶壁に門弟の掛札、稽古三味線二挺かけあり。いつもの所門口。此外に、栗丸太の井筒井戸。後、四つ目垣、春の下草をあし

らひ、栗丸太の枝折門。庵主の表札を下げ、一間の茅屋、板羽目、嵌込み障子立切り、庵室の模様、裏竹の垣根にて見切り、すべて鎌倉雪の下稽古所の體。爰に庄屋の小旦那、着付け石餅の羽織なり、稽古本箱の上に稽古本を置き、豊後節を語りゐる。内弟子娘お榮、三味線を彈いてゐる。小助、廣袖厚綿三尺帶、根ツこの臺の上にて鴨を叩きゐる。門の外に、屑屋、やつし股引袢天なり、鐵砲笊に秤を入れ、立ちかゝりゐる。この仕組よろしく、鎌倉見たかの唄へ、通り神樂を冠せ幕あく。

屑屋　モシ〳〵、親方、モウ五十買つておくんなさい。

小助　イヤ、それでよくば買ふが、さもなくば、こつちも氣がねえ。外へ賣るがよい。

屑屋　ハテ、さう云はずと買つておくんなせえ。今日は年越しだ。早くしまつて歸りたうございます。一服吸はして下さりませ。

小助　サア〳〵、遠慮なしに、はひつて付けなせえ。

ト此内小旦那、端物を語り居る。

お榮　モシ、もつと節に愁ひを、付けねばいけません。

ト釜入りを語り、無暗に小旦那首を振廻す。小助ツカ〳〵と行き首を押へる。

旦那　コレ〳〵此男は、何でわしが首を、捕へるのだ。

お榮　それ〳〵、それは今、我子の五郎市を五右衞門が差上げる、肝腎の節の處で、ござんすぞえ。

小助　それ見なせえ肝腎の旨い節の所迄語ると、小旦那の首が振り落ちます。そこで、わしがしつかり、首を捉まへてゐるのだ。

旦那　何で淨瑠璃で首が落ちるものか、盜人でもしはしまいし。

小助　イヤ〳〵、首ではない。お駒才三や五右衞門の淨瑠璃は、義太夫でも常盤津でも、釜入りか引廻しが當り前だ。

お榮　ほんに私や、五右衞門と言ふは、昔の事かと思つてゐたに、今でも、そんな盜人がござんすかえ。

旦那　なに、そりや五右衞門ぢやねえ。鬼神太郎と云ふ盜人だ。此の通り、人相書が廻つた。（ト懷中より盜賊の繪姿を出して、）コレ〳〵、まだ年若なよい人だが、此通り嚴しい御詮議、コレ、お前も見附けたら、訴へさつせへ。褒美が貰へますわえ。（ト人相書を見せる。）

屑屋　どう致しまして、手馴れた生業さへ、渡世になり兼ねますもの肩書のある賊が、どうして齒に合ひますものか。それより此の刄物を、五十くれたと思つて、買つて下さい。

小助　何さ、此の替りにするだ。負からずば、マア、いゝよ。

屑屋　ヱヽ、安いものだが、賣つて行きませう。

小助　ソレ、當百よ。（ト天保三枚やり、件の白鞘と引替にする。）

屑屋　コリヤ、有難うございます。又何ぞ賴みます。

小助　茶でも吞んで、行きなせえ。（ト屑屋、鐵砲笊を肩に掛け、下手へはひる。小助白鞘を拔き見て）なかなか、骨を叩くには、惜しいものだ。

旦那　モシ、此掛物は大分赤い顏で、髭の生へた男でござるの。

小助　小旦那、そりやア爲朝といふ八丈の鎭守樣ぢや。

旦那　イヤ／＼、髭の鹽梅では、關羽といふ唐人だ／＼。

小助　ヱヽ、爲朝と關羽と取違へるものがあるものか。それで村の束ねが勤まるのか。ハヽヽヽ大笑ひだ／＼。

旦那　よくさげすんで、笑ひをつたな。（トだしぬけになぐる。）

小助　ヲヽ、ぶちをつたナ。俺もかうするわえ。

ト互にくらはし、兩人摑みかゝらうとする。お榮は兩人を留める。此内小旦那、あり合せの鉈を取上げ、小助も白鞘を持つ、お榮留める。兩人爭ふはずみに、鉈は飛んで、爲朝の軸に當り引裂け

る。

お榮　マア〳〵、待たしやんせ。此樣に鎭守樣の掛物が、破れたわいなア、坊ちやんの祝ひなれば、氣にかけませう。コリヤ、此まゝにしてはおかれませぬ。

旦那　サア〳〵、破つては大變だ〳〵。

小助　おいらは、知らぬぞ〳〵。

旦那　イヤ〳〵、われが破つた〳〵。

小助　モシ〳〵、小旦那が鉈を振廻し飛んだのだ。元の起りは、小旦那だ〳〵。

旦那　マア、さう言うては、どうやら科人らしい。マア〳〵何にしろ、どうか仕樣が。ヲヽある〳〵此繪姿をうら返しに張つて置かう。

ト以前の鬼神太郎の人相書を出す。

小助　小旦那は智惠をふるつたと見えるわえ。わしも、手傳つて進ぜよう。

旦那　賴むわ〳〵。

ト兩人立寄り、飯櫃よりそくいを出し、以前の人相書を掛物へ張付ける。

サア〳〵是で上々、直しが出來た、知らぬ顏〳〵。

ト通り神樂、一中節の合方になり、花道より西念、黒衣、百萬遍の珠數を肩に掛け、鉦を持ち、栗下駄にて先へ出る。後よりお松、島田髷、稽古師匠のこしらへ、高からげ、腰帶、吾妻下駄にて、三吉山出しの下部、木綿やつし尻からげ、抱子を背負ひ、金魚の弓張提灯を持ち、稽古娘付添ひ出て來り、

お松　それへお出でなされるは、お隣りの西念樣ではござりませぬか。

西念　これは〳〵、お松さん、どれへお出でなされたな。

お松　ハイ、眞鶴の鎭守樣へ參詣がてら、子供の疱瘡の願籠めやら、殊には誕生日の買物旁々出ましたが、子供がござりますから、嘸おやかましうござりませうな。

西念　イヤ〳〵、此方こそ、毎日百萬遍の講中が寄り集まつて、四邊構はぬ大念佛。それが止めば笛の稽古で、喧ましいことでござりませう、

三吉　マア、お前は、笛の稽古をさつしやりますか。わしは又坊さん故、鉦の稽古と思ひました。モシ、笛をぴい〳〵吹いても、弟子がありますか。

お松　これはしたり、阿呆のくせに。

三吉　阿呆は寢て待て。

お松　まだかいな。お前、先へ歸つて下さんせ。

娘　アイ／＼。

お松　サ、西念さん。

ト右の鳴物にて、西念、お松捨ゼリフあつて、皆々舞臺へ來る、稽古娘皆拔け、門口へ來り。

娘　お師匠さんが、歸りましたぞえ。

ト娘内へはひる。西念はこなしあつて下手の庵室切戸の内へはひる、お榮皆々も見て、

お榮 旦那　是れはお師匠様。今、お歸りなされましたか。

ト皆々内へはひる。三吉は背負ひし抱兒をおろし、お松に渡す。お榮湯呑みに茶を汲みて出し。

お榮　サ、お茶一つ、召上れ。

お松　是は憚り。お榮さん、有難うございました。早う歸らうと思ひましたが、眞鶴が惠方に當り、夥しい參詣で、その上、阿呆が道々も。

娘　食べたがつてばかりで、たいてい世話を燒かした事ではない。

旦那　誠に、おのれは愚かなやつだ。そんな阿呆でも、親は子だけに内からは、どうぞ正月は藪入りに、暇を貰うてくれとわしが親父へ頼み。それでわざ／＼來たのぢや。

お松　それは、お安い事でござんす。コレ三吉。お前は庄屋様と、同道して行きや。
三吉　アイ〳〵。有難い〳〵。
旦那　それでは是から、小僧を連れ。
お松　ア、モシ、今日は此子の祝ひ日なり稽古始めに御酒一つ。
小助　丁度鴨も料理ました。是れを肴にお師匠さん。
お松　ヲヽ、よう氣が付きました。そこへ宜しうお榮さんお前も一緒に。
お榮　アイ〳〵、先刻の喧嘩の、仲直りに。
小助　ても仰山な。然し喰い氣では、引けは取らぬ。
旦那　お辭儀なしに、御馳走に。
お榮　そんなら、お師匠さん。
お松　マア、ゆつくりと、上つて下さんせ。
三人　どりや、御馳走に、あづかりませうか。
ト唄になり、皆々わや〳〵言って奥へはひる。お松殘り、
お松　アヽ、今日はいつそ草臥れました。然し此子の誕生日、行末願ふ神詣で、お參りした後の氣持

と云ふものは、ほんに灸をすえたと同じ事。

と寝入りたる抱兒を見て思入。しんみりしたる合方

是に付けても四郎次郎様、アノ静岡の彌勒町、抱へ藝者の其内に、互ひに馴染み二世三世、情も籠り懐姙し、安々此子をば産み落し、この身は輕くなるものゝ、ぬしの越度の寶の行方が知れねば何時マア女夫に成られうぞ。併しこの身は强盗に、世渡る道も恐ろしい、人をあやめて頭分。これも夫へ立つる義理。今は夫が東路と、便りに足を止めたれども、煙りも細き一人住み、身過ぎのための藝は身を、助くる爲めの不仕合せ、琴三味線も表向き、我身を知らぬ白浪の。

ト以前稽古したる、五右衛門の淨瑠璃本を見て取り上げ、

此五右衛門も親子連、釜ケ淵瀬のこの苦勞、苦患も云はゞ夫のため、末は是なる淨瑠璃の、双紋巴がよい手本。やがて我身も憂目の恥。

ト思入にて本を取落し、抱兒の顔へ當り、泣出すをいぶり付け、

どりや、添乳して、寝さしませうか。

ト竹笛入り安らかなる唄になり、お松、上の方へ小蒲團を敷き、抱兒を寝かし付け、二枚折屏風を立廻し、添乳をする。花道より四郎次郎、深編笠、大小、肩入りの切つぎ、浪人なりにて、百姓、

やつしなり、尻捲げ、半股引、草鞋、鍬を持ちたるが、四郎次郎の手を持ち添へ、四郎次郎盲目の體にて、兩人出て來り、

四郎　これはどなた樣か、御親切にお世話忝うござりまする。

百姓　何の〳〵、わしは向うの庵へ、笛の稽古に行きますが、年毎の道祖祭りには、里の子が繩ひつぱつて、惡戯を致します。マア〳〵、杖の折れたばかりで、怪我もさつしやれぬで、よかつた。

四郎　イヤモ、お蔭樣で是れ迄助かりました。モウ〳〵宜しうござります、往還へ出ますると、たどりたどり歩けます。サヽ、お構ひなく、おいでなされませ。

百姓　それでは、そろ〳〵氣を付けて行かつしやれ。アヽ、目病みといふものは、不自由なものでござる。

ト百姓は鍬をかつぎ、下の庵の内へはひる。四郎次郎門口に佇み、袖乞ひのこなし。扇を出し謠を唄ふ。

四郎　「東遊びの數々に、其名も月の色人は」。永々の浪人もの。憐憫お願ひ申しまする。

ト是れにて、添乳してゐるお松、聞耳を立て、

お松　どなたでござんす。

四郎　永々の浪人もの、御憐憫に預かりたうござります。

お松　門口に、袖乞さうながゝ、ドレ、手の内を上げませう。

ト立上り、巾着より銭を出し、紙に捻りて塗盆へのせ、

サ、手の内を、上げませう。

四郎　有難うござりまする。

お松　坊の祝ひ日、ドレ〳〵上げませう。

ト門口をあけ、こなしあつて、

卑しからざる御浪人。

ト宜しく手の内を遣ることあつて、

四郎　お女中さうながゝ、是より小袋坂へは余程ござりますかな。

お松　ハイ、まだ一里あまりもありませう。

四郎　イヤモ、俄盲で、道はか行かず。それ故、故郷の小袋坂へ。

ト屈托の思入。お松も思入あつて、

お松　どうやら物腰恰好が、心の迷ひか。

ト持つてゐる塗盆へ、移るを目につけて、

四郎　そりや又、何が。

お松　四郎次郎様に詞遣ひが。

四郎　我名を知りし、こなた様は。

お松　駿府で別れし、お松でござんす。

四郎　アノ、笠松屋のお松であつたか。

お松　アイなア。

四郎　そなたも無事で。

お松　ようマア、尋ねてござんしたなア。

ト互ひにこなしあつて、四郎次郎笠を取り内へはひる。お松捨ゼリフにて介抱して、よき所へ連れ来り、住ひて、

お松　嬉しや／＼、今日も今日とて、産土様へ、お前の事をお願ひ申し、思ひがけなう逢ひしも、神のお蔭であつたか。有難い／＼。（トこなしあつて、四郎次郎を見やり、）悦ぶ内にもお前の様子、い

つの間にやら、お前のお眼が。

四郎　世に落ちぶれて盲目同然。いつぞやそなたへ遣はせし去状。あらまし聞いたであらう、御主人より預かり置いたる曉丸に、所持の金迄奪ひ取られ、おのれやみ〳〵渡さうかと、群がりかゝる強盗を、只一打にと切付けしに、用意なしたる目つぶしを、我に打ちかけ迯去る曲者。その場で直に目の痛み、一日々々たつにつけ、自然と重る此の眼病。生れもつかぬ盲目同然。シテ其方は、彌勒町にて。

お松　いつぞやお別れ申してより、お前の胤を身に宿し、一方ならぬ私が懐姙、その時お文に、我子頼むとある文言。それを守りて安々と、産落したは、コレ、(ト抱子を抱へ来り、こなしあつて、)これ〳〵、これがお前の御總領。殊には御男子、成長するに随つて、お前のお顔によう似た事わいなア。

四郎　此の稚子は、身が胤であつたるか。殊に男を安々と。

お松　久し振りの女房といひ、初めて逢つた、親子の喜び。

四郎　喜びあれば悲しみと、寶詮議の日延べの願ひも、モウわづか。某より差上げねば、親人には切腹なされん、その今日となり不思議にも、廻り逢ひたる女房悴、顔見る事も叶はぬ盲目、弓矢

お松　神にも見放されたか、チエ、、、、。

道理でござんす、女子の身でさへその品を、尋ね出してお前へ少しは手助けと、晝は覺えた唄三味線、稽古の人をば引入れ、夜は星をば頂いて、雨の降る夜も厭はゞこそ。可愛や此子を肌に添へ。

四郎　シテ、そりやいづくへ。

ト是にてお松ぎつくりして心付き、ちやつと氣を替へ、合方になり、

お松　サア、神々樣へ願籠めに、行けども知れぬ。アノ寶。

四郎　思ひがけなく知れたるそなた、身が事は。

お松　何のマア、忘れぬ印し鎌倉に、二年此方侘び住ひ、年たけし身も此樣に、眉も落さず齒も染めず、髪には油氣ない同然、嘘僞りのない證據。

四郎　それが嘘やら誠やら、知れぬ盲目の今の身を、もしや、外に世話する人が。

お松　何のマア、お前をのけて、そんな浮氣が。

ト兩人段々氣味合ひのこなし。

四郎　口綺麗には言ふものゝ、變り易きは女の心。

お松　エヽ憎らしい。（トつめる。）
四郎　アイタヽヽヽ。
お松　痛いかえ。
四郎　顔が、見たい。
お松　こちの人。
四郎　女房ども。
お松　ゆるりと、今宵は。
兩人　話しませう。

ト抱子を眞中に置き、安堵せし體。合方になり、花道よりばた〳〵にて、主水妹藤浪、屋敷娘、振袖島田なりにて走り出て來り、門口を明け內へ駈け込み、戸を立切る。兩人びつくりして呆れたるこなしにて、思入。引續いて柴平、旗なり奴、一本差し下部のこしらへ、川越の八、松、丸褌、襦袢、三尺、縫ぐるみにて立廻り乍ら出來り、花道にてちよつと立廻りあつて、トヾ追散らし、川越兩人は逃げて、花道へ引返す。柴平は、舞臺へ來り、門口を叩き明けんとする。內には藤浪、門を押へてゐる。

柴平　モシ〱、爰を明けて下さりませ〱。

藤浪　イヱ〱、明ける事はならぬ〱。

柴平　お聲はどうやら、モシ、私でござります。

藤浪　イヱ〱、なりませぬ〱。

ト兩人門口を押へ爭ふ。此時お松、四郎太郎、心付かぬこなしにて、

お松　モシ〱、女中さん。何でござんす。斷り無しにはひらしやんして、誰が來ましたか。早う出て行きなさんせ。

藤浪　ハイ、御免なされて下さりませ。

ト藤浪心付き、氣の毒なる思入。

ト門の戸をおさへし手を放す。是にて柴平内へはひり、思入。花道より天狗坊、そぼろなるこしらへ、頰冠りにて出て、舞臺の體を見て頷き、引返してはひる。藤浪は下手に手を突き、こなし。合方になり、

柴平　へイ〱、その者共を支へまするその内に、あなたのお宅へ駈込みましたばかりに、その者わたくしは、今來る道にて、狼藉者に逢ひましてな。

共はどちらへか、行つたと見えまする。誠に不調法千萬な。

ト兩人手を突き詫びる。

お松 その樣におつしやつては、却つてこちらが、お氣の毒でござります。マアく御安心なされて、お煙草でも。（ト煙草盆を突出し、こなし。）

四郎 ヲヽ、それく。お煮花など入れて進ぜたがよい。然し、惡者に逢ひ、怪我でもなされはせぬか。

藤浪 イヱく、怪我は致しませぬが、怖うてく。（ト藤浪、此内四郎次郎の顏を見て、）ヤア、お前は、四郎次郎さま、四郎次郎さまぢやわいなア。

四郎 さういふ、こなたは。

藤浪 アイ、許嫁の主水が妹、藤浪でござりまする。

四郎 惡い所へ。ようマア、尋ねてござつたなア。

藤浪 お懷しうござりまする。此末とも、お目かけられて下さりませ。

ト傍へ寄り、藤浪こなし。お松少し悋氣のこなしにて　引きのけて中へ入り、

お松 モシ、女中さん。お前も、マア、なめ過ぎた物の言ひやう。人の内へ、押付け業にござんした

を、親切に世話すれば、よいことぢやと思うて、お目掛けられても、果れが禮に來るわいなア。それ程大事の男なら、なぜ見捨てなさんした。出雲の神樣が結んだ四郎次郎樣は、私の夫ぢやわいなア。モシ、四郎次郎樣、お前はなア〳〵、二世も三世も契約して、今逢うて嬉しやと思ふ内、此樣な女中さんが飛込んで來て、許嫁の何ぢやの、聞きたらもござんせぬ。わたしや、正眞正銘の、女房でござんす。その證據には、これ〳〵〳〵、此樣な子があるんだえ。サア、お前にも子があるなら、出して見せなさんせ。よもやあるまい。そんなら嘘ぢや。サヽ、早う歸つて下さんせ〳〵。モシ、お前はこゝへござんせ。

ト四郎次郎を引張り、上手へ連れ行く。

藤浪　ハヽア、そんなら噂に聞きました、馴染重ねし。

四郎　此樣に落合うては、面目次第も。

藤浪　モシ、四郎次郎樣、聞えませぬ。そりやあんまりぢや〳〵。胴慾ぢやわいなア。

ト藤浪四郎次郎の胸づくしを取りてこなし。この中へお松割つて入り、

お松　これ〳〵、大切の男をその樣に、揉みくちやにして貰ひますまい。ホンニ、厚かましい女中さんぢやわいなア。

ト　きつと言ふ。此時柴平きつとこなしあつて、此中へ割つて入り、

柴平　ヤイ、最前から聞いてゐれば、四郎次郎樣を、亭主ぢやとぬかすが、誰に斷つて貰つたのだ。御主人よりお指圖で、天下晴れての御夫婦だ。それを餘所から取らうとは、そつちは間男、ではない間女ぢや。藤浪樣、お氣遣ひなされますな。うしろには此の柴平が、控へて居りまするぞ。

ト　きつとこなし。四郎次郎面目なき思入。お松つんとして、

お松　何ぢや、奴さん、そつちへ寄らしやんせ。こちらには千太郎といふ、子があるわいなア。

ト　抱子を見せ、きつとこなし。

藤浪　いよ〳〵、その子が。

柴平　四郎次郎樣の御總領でござりますか。

お松　何と、よい證據でござんせうが。

藤浪　ヽヽやゝ迄なしたる上からは、許嫁とはいふものゝ、私の方が却つて、今では。ソレ、南無阿彌陀佛。

ト　四郎次郎が刀にて、自害せんとする。柴平留めて、

柴平　是れはしたり。早まつて、何であなたは。

藤浪　添はれぬ事なら、自害して。

四郎　ア、、めつたな事を。

お松　うつちやつておきなさんせ。

　ト探りよつて留める、その手を拂ひのけて、

藤浪　それぢやというて。

柴平　サア。

藤浪　サア。

柴平　イヱ〳〵、お氣遣ひなされまするな、私が濟みませぬ。

お松　イヱ〳〵、どう言はしやんしても、私も意地ぢや、添はさぬ〳〵。たつてお前が添はさんすりや、私もお前の邪魔するぞえ。

柴平　そつちで邪魔すりや、俺の方でも邪魔する。

お松　どうして、お前が。

柴平　ムウ、かうして邪魔するわえ。

ト柴平、煙草盆を投げる。

藤浪　そりや、あぶないわいの。

四郎　マア／＼、靜かにしやいなう。（ト探り／＼留める。）

お松　何ぢや、こちの道具を、投打ちかえ。餘所から來てさへ、その我儘。私も負けてよいものか。かう／＼／＼。

ト お松、床の間の活花、件の爲朝の軸を、四邊へ打付ける。

四郎　投打ちは、危ない／＼。

柴平　モシ／＼、藤浪樣。是を打付けておやりなされ。ソレ、かう打付けておやりなされませ。

ト傍にある二枚折屏風を、打付ける。

お松　さうすりや、こつちもかうして。（ト以前の道具を、投返す。）

柴平　ヲヽ、俺が方でも、かうするわえ。

ト双方、有合ふ道具を投付ける事よろしくあつて、此内、爲朝の掛物破れる。此物音に奥より、以前の小旦那、小助、お榮の三人出てよろしく留める。

マア／＼、靜かにさつしやれ／＼。あぶない／＼／＼。

ト双方へ別れ留める事。

旦那　然し、このもや〳〵は、どうして始まりました。

ト是にてお松　小旦那を捉へ、

お松　モシ〳〵、小旦那様、聞いて下さりませ。常々話しました、私の亭主が戻りました。

旦那　それは目出度い〳〵。

お松　イエ〳〵、あんまり目出たうもござんせぬ。アレ、見やしやんせ。（ト藤浪へこなし、）アノ女中が駈込んで、私の亭主ぢや、女房ぢやと言ふ故に、それで私が腹が立つて〳〵、腹が立つてならぬわいなア。

旦那　成程々々。是は尤もだ〳〵。

ト四郎次郎探り〳〵小旦那をとらへて、

四郎　モシ〳〵、あなた、聞いて下さりませ。私はお松の亭主でござりますが、只今では浪人、殊にはそこひの病ひ。それにござる女中も、少々顔のある者故、どちらへどうとも申されませぬ。何分宜しう、お扱ひを頼みます。

旦那　是れは〳〵、お初にお目にかゝりました。然し、私が親父の支配内に、亭主一人に女房二人あ

るものは、第一處の外聞。是れ〳〵御亭主、サ、お手上げれられい〳〵。

四郎　何分宜しう、お頼み申しまする。

ト兩人、三つ指にて禮儀あつて、柴平は小助を下手へ連れ行き下にゐて、

柴平　モシ〳〵、ちよつと聞いて下さりませ。爰にござるお女中は、四郎次郎樣の許嫁、それには挨拶も無く、どこの國にか先へ子を拵へ、その亭主迄取らうとは、あんまり人を蹈付けにした話し。そこで私が名代に、悋氣喧嘩をするのだが、何と無理ではござりますまいが。

小助　成程〳〵。さう聞けば、お前の悋氣しなさるも、尤もでござる〳〵。

お松　イヱ〳〵、私が尤もでありませうがナ。

小助　ほんにお前の方が、尤もだ。

お榮　お松さんが、尤もだ。

藤浪　私のが尤もで、ござんせうがナ。

お松　女房の言ふのが、尤もで。

小助　仲人が、尤もだ〳〵。

柴平　これ〳〵、まぜツ返しなさんな。

ト小助あちらこちらへ引張り、段々と縶がり合ふ。小助、眞中にて双方へ引かれ、是にて小助、氣のぼせ、氣絶してうんと倒れる。皆々びつくりこなし、

皆々　イヤア――大變だ〳〵。

藤浪　爰に、氣附が。

ト藤浪の出すを、小旦那、手早く取つて小助の口へ入れ、

旦那　ドレ〳〵、よこさつしやい〳〵。白湯だ〳〵。

ト お粂「アイ〳〵」と白湯を汲みに行く。皆々立寄り介抱する。小旦那白湯を呑ませる。

皆々　小助どのイなう〳〵〳〵。

トロ々に呼び生ける。小助心付き、

小助　ア丶、苦しや〳〵。やうやく心は、確になつた〳〵。

旦那　これ〳〵、心が付いたらこの捌きは、わしが扱ひませう。どちらがどうとも、片手落ちにもなるない。何と、一同替り〳〵に亭主定め、さうなる時は双方とも、妾でなければ損徳なし。四郎次郎殿もその積りで、得心するが即ち仲ざみ。是より外に扱ひはござらぬ。何と此の扱ひで

相談は、極るまいかな。

小助　シタリ、成程、是れは上分別だわえ。

旦那　コレ、二人の衆は、どうでござるナ。

お松　それで濟むなら、私はどうなと。

小助　さうして、お前は、

柴平　そちらは承知か。シテ、お前樣は。

藤浪　わしぢやと言うて、何の否やが。

旦那　サア〳〵、それであらまし濟みました。何事も善は急げぢや。ちつとも早く仲直り。

小助　それがよい〳〵。兩方ともにその氣なら、目出度く一つしめませう。

皆々　アヽ、ヨイ〳〵〳〵〳〵。

ト皆々、手を打つ事宜しくあつて、

旦那　サア〳〵、是で納まつた。イヤモ、仲人やら媒人で、兩方持込んでがつかりした。

お紫　媒人は宵の內、首尾のよい內、私は內へ。

小助　開くといふのか。そんならおいらも、小旦那も。

旦那　ヲヽ、開きませう〳〵。これ〳〵、三吉々々、一緒に來い。（ト奥より三吉出る。）

三吉　ヲツト、承知々々、あふゝ。

ト捨ぜリフあつて、両人は門口へ出かける。

四郎　是は皆様、お世話でござりました。

お松　是れに懲りずに、晩に又、話しに來て下さんせ。

柴平　イヤモ、小旦那様に御苦勞かけまして、お氣の毒でござりました。

旦那　何の〳〵、心遣ひ決して御無用。

小助　然し、二人のかみさんでは、四郎次郎殿には、毎晩々々。

お松　エ。

小助　御苦勞なのはお庄屋様。サア、參りませう。

ト稽古唄になり、小旦那先に小助、お柴、三吉わや〳〵と花道へはひる。柴平は下、四郎次郎は上に、藤浪下に、お松、柴平後を見送りて、

柴平　ヤレ〳〵、大風の吹いた後のやうだ。（トこちらへ來て、四郎次郎にこなしあつて、）イヤモ、はたと失念致して居りましたが、兄御様の事、御存じでござりますかナ。

四郎　ナニ、兄上がどうぞなされたか。

柴平　最前より申さうと思ひましたが、言うてよいやら惡いやら、それ故控へてをりました。女中を連れての長旅故、人足どもがうるさい故間道を參りしが、由井の河原の川下を、通りかゝれば、耳姦しき村烏。あたりに何ぞ事こそと、心せわしく來て見れば渦卷く早瀨に打上げられ、岩の狹間に旅人の死骸、持病の業と介抱致し、よく〳〵見れば四郎太郎樣、數ケ所の傷に、ハヤ事切れ。

藤浪　後に二人は泣く〳〵も、打捨ておかれぬあなたの兄御。せめて亡骸葬はんと、あたりの庵へ假の葬ひ。

ト お松こなしあつて、

お松　何とおつしやりまする。

四郎　シテ、殺せし者の手がゝりは。

柴平　是だと申す、手がゝりはござらねど、由井の河原へかゝりし時は、廿日の宵闇、急いで來かゝる河原道、すれ違ひたる一人の曲者、怪しき奴と見た故に引捕へんと挑みしが、先もしれもの取遁せしが、その時手に入る一品を、探つて見れば守袋、宿へ戻つて開いて見れば、四郎太郎

樣の臍の緒書を入れたる守袋、心ならずと思ひしが、是非もなくたゞ手に入りしは、是れなる守り。

ト前幕の守りを差出す。お松取つて見て、ぎつくりこなし。

お松　ドレ、見せなさんせ。アノ是れが、由井の河原で、お前のお手へ。

柴平　ハイ。

お松　その由縁とも露知らず、現在嫁が。

四郎　ヤ。

お松　サ、夜目にもそれと、手に入る守り。そら恐ろしき。サ、恐ろしい昨夜の夢見の惡さ。

四郎　夢と浮世を闇き目に、兄はアノ世の旅路にて。

藤浪　水の流れと、身の末は。

お松　いつかは報いて、木の空へ。

四郎
柴平　や。

お松　木にも茅にも、明暮れ寶の事が胸支へ。〈ト守りを持ち、愁ひのこなし。柴平見て〉

柴平　ア、モシ〱、そんなに御苦勞なされるな。御酒でも上つて浮々と。

四郎　ア、ほんに、私よりそなたの旅の疲れが。サ、奥へ行つて休息を。

お松　ほんに此子の祝ひ日なれば、肴もあれば御酒を奥にて、ゆるりと上つて下さりませ。

柴平　左様なれば詞に甘へ、奥底なしに罷り手酌でやりませう。イヤアお松様、くどいやうぢやが藤浪様と、必ず仲ようなされて下さりませ。

藤浪　そりや、案じぬがよいわえ。

柴平　どりや、馳走になりませうか。　ト唄になり、柴平、奥へはひる。

四郎　それはさうと、春とは言へどまだ正月。火鉢へ火なと澤山に。

お松　アイ、おこしませうわい。

ト　なまめきし合方、お松甚あきの淨瑠璃本にて、火を焼き炭をつぎ、よろしくあつて、

藤浪　ほんに思へば、お氣の毒やら何やらで、見れば見る程、此子の面ざし、幾つになりますえ。

お松　ハイ、千太郎は、二つになります。

四郎　ハテ、月日の立つは早いもの。

お松　今日が此子の誕生日でござります。

藤浪　道理で床に蝶衛の、掛地の切れしは何様やら、

お松　爲朝樣が、此子の產土神、

藤浪　イヱ〳〵、爲朝樣ではござんせぬ。黑い小袖に大小差して、傍に何やら斷り書が、

四郎　何と書いてありますな。

藤浪　アイ、色白にして目の內涼しく、面體恰好柔和にて、女とも見まがふその出たち、左りの目尻に一つの疵、

ト讀む內、四郎次郎思入あつて、

四郎　ハテ、優しげなるお松が目尻に。

お松　ヤ。

四郎　ハテなア。

お松　モシ、それを、ちよつと見せて下さんせ。（ト藤浪一軸を取つて渡す。お松取りてひろげ、）アノ、是れが、鬼神太郎とやらが、

藤浪　人相書。

お松　アノ、是が。

藤浪　アイ。

ト両人こなし。お松人相書を火鉢へ打込む。

ヤ、その繪姿を火鉢の中へ。

四郎　何で、そなたは。

お松　初春からの喜びに、テモ、忌はしき人相書それ故に私が。

四郎　阿鼻焦熱の苦しみを。

お松　受ける最期は、（ト五右衛門の淨瑠璃本を取上げて、）双紋巴の鐘ケ淵、五右衛門親子の苦しみを、書綴りたる淨瑠璃の、文句も同じ親と子が、やがて捕はれこの如く。

四郎　盗みをすれば天の罰、身共もそれと目ざせども。

藤浪　人相書と、お前の面差し。

お松　ヤ。思違へて、鬼神とは。

四郎　誠を糺して、二人の女房。

藤浪　褄を重ねし恨の數々。

お松　テモ、憎らしい。

藤浪
お松　殿御ぢやなア。

ト双方氣味合。ぢつとこなし。此時抱子足にさはり、赤子泣き出す、四郎次郎聲を知るべに抱上げ、あやし、

四郎　ヲヽ、たがよ〳〵。

ト宜しく、奥より以前の稽古娘出て來り、

娘　モシお師匠樣、御用が濟めばお稽古を。

お松　ほんにマア、今迄待たして氣の毒な、直に稽古して上げませう。

ト立上り、四郎次郎と藤浪へこなしあつて、

私しや奥へ行て、稽古してやる程に、後で話をゆつくりと、

四郎　何を言ふやら、外に話があらうぞい。大事を抱へし身は眼病、かてゝ加へて兄の仇。

トきつとなる。お松ちやつと抱子を抱取り、たまりかねて、

お松　いつそ名乘つて。

四郎　ヤ。

お松　サ、名さへも知れぬ敵の事、せめて寶を手に入れて、それをお詫びに。

四郎　旅寢の憂にかせかけて、泣くに泣かれぬ忍び駒。

お松　ひく三絃の糸巻を、廻る因果は忽ちに、やがて此身にあたる撥。

四郎　罰も利生も神佛。

藤浪　天道樣が、見てござれば。

お松　どうで報いは。

ト四郎次郎藤浪顏見合せる、お松氣を替へて、

サ、行からわいなア。

ト合方にて、お松子を抱き、思入あつて稽古娘三絃を持ち、兩人奧へはひる。

四郎　アヽ、子持といふものは、心せわしきものぢやなア。

ト此時隣りの庵室にて、一つ鉦を打込む、四郎次郎こなしあつて。

音澄み渡る新鉦の、誰が回向やら知らねども、草葉にござる兄上の。

藤浪　せめて、あの世の助かる樣に御回向を。

四郎　後世の營み申さうか。

藤浪　私は灯しの支度をば。

四郎　少しも、早う。

ト時古笛、浮いたる鳴物になる。四郎次郎は探り〳〵、上手の屋體へはひる。藤浪は角行燈を出し、あかりを付け、表の草井戸の水を汲み、土手拔の草花を手折り來る。此内花道より天狗坊、すいの張りの坊主、そぼろなる法師、頬冠りにて、宿駕籠を舁き、後棒を雲助かつぎ、後より惡者ぐれ八、半合羽裝なり、一本差し、判人のこしらへにて出て來り、

天狗　コレ、ぐれ八も鐵顔も、首尾よくやつてくれ、何でも曉丸の事を機會にして、アノ娘さへ、引つさらへば、手前も足が洗へるといふものだ。

雲助　コレ、俺にも、しつかりであらうな。

ぐれ　幾らいゝ事があつたつて、乞食をした境涯が、忘れられるものか。しかしお菰が、女郎の亭主とは、山の芋が鰻のたとへだ。

天狗　無駄を言ふな。向うのうちだ。

ぐれ　そんなら、尋ねて見ませう。

ト皆々よろしく舞臺へ來て、門口にて、

モシ、お頼み申します。お松樣と申しますは、こちらでござりますか。

藤浪　ハイ〳〵、左樣ぢやさうにござります。

ぐれ　左樣なら、御免なされませ。（ト是にて駕籠に向ひ）

モシ、こゝだよ。

ト是にて駕籠の垂れを上げ、内より鐵頤和尚、羽織小袖、一本差し、醫者のこしらへにて、駕籠の内より出る。

鐵頤　御免なされませ。愚老は卜庵と申して、少々お頼みの筋あつて、參つてござるが。コレ〳〵駕籠屋。少しの間待つてゐてくれ。

天狗　ヘイ〳〵、畏まりました。

ト兩人駕籠舁のこなしにて、門口の脇に休み居る。藤浪心得ぬこなしにて、

藤浪　アモシ、私はお尋ねなさる、お松ではござりませぬが、奥にござれば呼んであげませう。

ト立ちかゝり、奥へ行きかゝるを引き留めて、

鐵頤　ア、コレ〳〵、呼ぶには及びませぬ。お前樣のお耳へ入れておけばいゝのだ。愚老は桐ケ谷三角で、町醫卜庵と申す者、ふとした事で曉丸が、手に入りましたが、お松さんにちよつと話があつた故、それで大急ぎにちよつと尋ねによりました。

ぐれ　イヤモ、私は大福屋徳右衛門と申しまして、化粧坂の遊女屋でありますが、代物を捜す御手間

に、お尋ね申してまゐつたんでござります。

ト是にてさてはとこなしあつて、

藤浪　それは、マア〱、ようお出でなされました。シテ、その曉丸をあなた樣が。
鐵願　持つて參りました。
藤浪　モシ、今おつしやつた曉丸、お松樣はともあれ、お賣りなされては下さりませぬか。
鐵願　賣りますとも〱。イヤモ、金との相談でござりますれば、外へも隨分賣れ口がありますが、價は五十兩、それが一分かけても、お話が致し難うござります。
藤浪　そんなら價は五十兩、そりやモウ、誠の品に相違なくば、私がお貰ひ申しませうが、その代り、チト、お賴みが。（トぐれ八を見て、恥しき思入。）今、おつしやるには、化粧坂の遊女屋樣とおつしやりましたが、次第によりましては、勤め奉公致しても、金拵へねばならぬ者がござりますが、その相談が出來ませうならば。
ぐれ　そりや、生業づくの事なれば、奉公人を見た上で。
藤浪　その奉公人は、私で。（ト恥しきこなし。）
ぐれ　ア、、お前が勤めに出なさるなら、五十兩には抱へませう。

藤浪　いよ〳〵、抱へて下さんすか。

鐵願　モシ、此人も生業づく。金の耳の揃つた上では、愚老が持參の曉丸と引替にしてやりませう。

ト鐵願こなしあつて、袱紗包みの棒鞘の一腰を出し見せる、藤浪こなしあつて、

藤浪　ヱヽ、有難うござりまする。（ト此時上手にて）

四郎　藤浪〳〵、何をしてゐやるぞ。（ト呼立てる。是にて藤浪上の屋體へこなしあつて）

藤浪　アイ〳〵、今爰で用事が。

ト氣扱ひする。合方替つて、四郎次郎探り〳〵出て來り、

四郎　これはしたり。わし一人待たせておいて、そなたはそこに。

藤浪　ちつと、爰に。

トもぢ〳〵思入、四郎次郎傍へ寄り、

四郎　して、そりや、何の用事か。

藤浪　その用事は。モシ、こちの人、私やお前に。

四郎　用事と言やるは、定めし暇の狀を、くれと言ふのであらう。」

藤浪　スリヤ、私の心を推量して。

ト思入。此時奥より楽平出かゝり窺ひ居る。四郎次郎是れを知らず、愁ひのこなし。

四郎　思ひがけなう實の手懸り、それ故その身を奉公に、コレ、忝い、過分な事ぢやが、それてはどうも、そなたの兄御へ。

藤浪　サ、その義理立は聞えてあれど、私やお前の世に出ること、假令命を捨てるとも。

ト思入。四郎次郎もこなしあつて呑込み、

四郎　いかにも去つた。暇くれよう。

と藤浪しめ泣きに泣きに泣き。四郎次郎も身を背け、愁ひのこなし。

ぐれ　サ、御亭主が立派に言ふからは、此場で抱へる奉公人。しかし目の不自由なに、去り状書くも暇が入らう。又明日にでも出直さう。ソレ、身の代の五十兩。

ト胴巻より五十兩を出し、藤浪に渡す。

藤浪　是で手切の、お金を、もし。

ト四郎次郎に手渡しする。

四郎　嘘か誠か見えねども、手詰の日限り此場の仕儀。然らば是れにて。

鐵眼　價の金の五十兩。それが出來れば曉丸、直にそつちへ、金と引替へ。

トと是にて四郎次郎、鐵願に件の金を渡し鐵眼曉丸を四郎次郎に渡す。

是で双方。

四郎　手に入るからは。

藤浪　必ず變つて下さんすなえ。

ト言捨て、藤浪ツカ〳〵と駕籠の所へ行く。柴平是にて前へ出て、

柴平　それでは、あなたは。（ト行きかゝるを四郎次郎、採り留め、）

四郎　是れも忠義と、

藤浪　貞女の鑑。

柴平　操を破つて、

藤浪　大磯へ。

四郎　是から、ぬしらに。

藤浪　そちも、あなたを。

柴平　頼みましたぞ。

鐵願　サア、行きませう。

ト稽古鐘、浮いた合方にて、四郎次郎に愁ひの思入。柴平は門口をしめる。鐵願、ぐれ八、顏見合せ、天狗坊、雲助、頷き合ひ、駕籠を舁き、合方早めて花道へ走りはひる。後合方、四郎次郎思入あつて、

四郎　ア、、思ふまい〳〵、これ程迄に藤浪が、心を盡せし曉丸。

柴平　片時も早う、お屋敷へ。

四郎　こちの手に入る、一腰を持參なし、少しも早く。（ト曉丸を渡す。）

柴平　心得ました。

四郎　父上が御難儀、救ふが専一。

柴平　然らば下郎は、是れより。

四郎　行け〳〵。

トのり、早き合方になり、四郎次郎急き立てる。柴平は曉丸をぼつこみ、身ごしらへして、花道へツカツカとかゝる。是れと一時に花道より、中間、手丸弓張提灯を持ち先に立ち、次に牧村主水、羽織袴、大小のなり、物ケ瀬兵馬、ぶつさき羽織、紐付き股引、大小、役人の體にて、中間付添ひ出て來り、花道にて柴平とすれ違ひ、入替りて心付きしこなしあつて、

柴平　や、あなたはお旦那、主水樣ではござりませぬか。

主水　左いふ、そちは。
柴平　ヘイ、家來の柴平めでござりまする。四郎次郎樣より至急の御用、卽ち紛失の曉丸が、手に入りましてござりまする。
主水　な、紛失の寳、手に入りしとな。それは重疊。兵馬殿、お聞きなされたか。
兵馬　合點のまゐらぬ事ながら、內見するも主人の名代。
主水　シテ、四郞次郎はいづれにをる。
柴平　茅屋なれども、あれなる寓居に。
兵馬　一まづ、あれへ。
主水　案內いたせ。
柴平　ハツ。

ト合方早め、柴平、入替り引返して先に立ち、內へはひる。續いて主水、兵馬、中間舞臺へ來り、

柴平せいて、

モシ〳〵、旦那樣、只今主水樣にお目にかゝり、此所へ御同道仕りましてござりまする。
四郎　ナニ、主水殿が入來とや。サヽ、是へ〳〵。

主水　夏目氏、主水でござる。
兵馬　某は、劔澤が名代、鞠ケ瀨兵馬と申す者。只今下部が案内により、思はず是れへ。イザ、主水殿。
主水　先づ〳〵。
兵馬　失禮ながら、お先へ。
ト是にて兵馬、主水上手へ通る。四郞次郞、探り〳〵兩人に會釋のこなしあつて、
主水　イヤナニ四郞次郞殿、見受けし處打絕え申すその內に、兩眼ともに不自由な御樣子。
四郞　左樣でもござらぬが、此程より底翳出で、甚だ難儀仕る。
主水　それは嘸かし。某始め一學殿、名代として兵馬殿、斯くの如く夜廻り致すも、盜賊鬼神太郞を詮議の爲め。それと申すも紛失の曉丸。只今あれなる下郞が申すには、曉丸の行方、相知れしとな。
四郞　如何にも、その品仔細あつて、手に入りましたる故、早速持參させたる處、何卒親共のお咎め、赦免の願ひ、取る物も取りあへず、心はせけど不眼により、持參致さす所に早入來あり、此上も無き身の大慶。柴平、その品早く。

柴平　ハツ。暁丸、イザ、お改め下されませう。

ト件の棒鞘の刀を主水に差出す。主水受取つて、

主水　スリヤ、是れが斯波家の重寶、暁丸とナ。

兵馬　容易ならざる銘刀が、滅多には。サ、目出度く手に入り安堵でござらう。

主水　然らば是れにて、内見仕らう。

ト主水、件の袱紗を取りのけ、暁丸を拔放し、とくと改め見ることあつて驚きし體にて、

コリヤ、似寄りなれども、中身は似ても似つかぬ贋物。

四郎　なに、暁丸が、贋物とや。

柴平　ヤ、ヽヽヽホイ。（ト兩人當惑の思入。）

四郎　偖は、今の族は衒であつたか。さうとは知らず、可愛や藤浪。

柴平　不眼の旦那と侮つて、甘々彼奴等が拵へ事にかゝりしか。さはさりながら、遠くは行くまい。

ソレ。

ト柴平、きつとなつて立上り行きかゝるを、四郎次郎物音にツカ〳〵と探り留めて、

四郎　コレ、きつさうするな、今の衒りを捕へる心か。

柴平　引捕まへしその上に、藤浪様を、ム、、さうだ。

ト四郎次郎を振拂ひ、追散に柴平花道へはひる、四郎次郎當惑の思入あつて。

四郎　ヱ、、コレ、目の惡いのを付け込んで、贋物渡したその上に、藤浪まで衒りのためにうま〳〵と、寶の價と身を賣つて、夫のためとて奪はれしか。チエ、、、口惜しい。

と無念の思入。主水、四郎次郎を引付けて、

主水　ヤイ、こゝなうろたへものめが。（トきつぱり、早き合方になり、）曉丸を奪ひ取られ、詮議の爲めに今の流浪。やう〳〵尋ね求めしを、又ぞろ贋物突付けて、衒りに逢うたとばかりでは、コリヤ、武士道が立つまいが。鎌倉殿へ御主君が何と言譯あるべきぞ。斯波家にかゝはる一大事。アノこゝな大たはけめが。

ト扇にて打据へ、きつとこなしあつて、四郎次郎を突放す。兵馬詰めかけて、

兵藏　イヤサ四郎次郎。コリヤ何だな、最早日延べも明日限り、明六つには、由井河原の本陣にて、親の主膳が切腹を、助けん爲めに贋物を拵へて、暫く事を濟ます心か。たゞさへ死罪の親主膳、縛り首か磔に、成らうも知れぬ。よし〳〵此上は諸役人へ此由を申達して、汝等親子に吠面かゝせくれん。

ト兵馬逸散に花道へはひる、四郎次郎兵馬を留めんとして主水に縋る。此時奥よりお松、ちよつと暖簾口より窺ふ事。

主水　エヽ、留立て致すな、讒者に與する一學兵馬、彼れを遣つては、主膳殿の身の妨げ。

ト主水行きかけるを、しつかと縋り留める、

四郎　詞交すもむやくしいわえ、そこ退け。

主水　御立腹はさる事ながら、爰が縁者のつながるよしみなれば、今一應、父が助命を。

四郎　千萬言うても返らぬ事。今宵の内に寶の出ぬその時は、老木を折るか、若木を切るか。

主水　サ、腹一つぞと、胸を据え。

四郎　花は櫻木、武士の。

主水　散るか、散らぬか。

四郎　コリヤ、雪迄保つ花は無いぞよ。

主水　御恩はあの世で。（と主水、ホロリとこなし、氣を替へて〕

四郎　首尾よう尋ね、本陣迄。（ト思入あつて〕エヽ、提灯やれ。

トのりヽ、早き合方にて、中間先きに提灯を持ち、主水思入あつて、花道へはひる。後に四郎次郎泣

伏し、こなし。時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽跡に詮方とつおいつ　忠義に眩む目無し鳥、あても涙にくれけるが、

四郎　今宵につゞまる資の詮議。出ねば存命叶はぬそれがし。

〽老少不定と言ひながら、曉丸を失ひしより、

此身の越度、漂泊のその年月も二年越し、廻る忌日か、アノ柴平が、先刻話しのその内に、由井の河原に兄上が、横死なされしを詳しく聞かんと思ふ内、倅が泣くので取り紛れ。アヽ、かういふ事のある端か、過越し方の夢見の惡さ。

〽五臟の破れに、兩眼叶はず、

又柴平や藤浪が、心盡せし曉丸。惡事の爲めにたばかられ、生死分らぬ藤浪が、涙の哀れを乾かす方も。コレ厄難の二十五の、最期を急ぐ曉が、我々親子の知死期時、アヽ心は矢竹に逸れども、生甲斐も無き、此の眼病。世に薄命な身の果ぢやなア。

〽我身を憎み世を恨み、拳を握り身を掻きむしり、男泣きにぞ泣きゐたる。

アヽ、我ながら後れたり、妨げ無き内、さうぢや〳〵。

〽涙を拂ひ胸を据ゑ、今はあの世へ亡き魂と、鰐口寛げ一腰を、取る間遅しと一間より、お松は駈け出で縋り留め、

ト四郎太郎、觀念のこなし。此時よりお松、抱兒を抱き、始終見て取り、此時ツカ〳〵と出、刀へ取り縋り、

お松　ア、モシ〳〵、短氣な事をなさんすな。

四郎　こなたはお松、いつの間に。

お松　先にから、樣子を聞いて。如何に親御の身の上や、兄御樣の御最期で、氣がのぼせてゐるとても、死ぬるはいつでも死なれまする。ハテマア、危ない。

四郎　父の今際に兄が橫死、世に腑甲斐なきも底翳病み、身は風前の燈ぢや。

お松　ハテ、お前も、男の樣にもない。愚痴は取置き此子不便と思ふなら、思ひ留つて下さりませ。

〽夫を諫むる眞實も、明けて言はれぬ胸の內。

トお松抱兒をかせによろしく留めて、

ほんにマア、大事の夫を預けたに、このマア藤浪さん、お前を捨て置き、どこへ行かしやんしたやら。

四郎　今、柴平と、どこへやら。
お松　アノ、藤浪さんは。
四郎　ヲイナウ。
お松　そりや、私が思ふ樣にもない。それに付けても、お前に無心が。
四郎　亭主へ女房が、無心とは。
お松　アイ、是れ迄は此子を、お前に見せたさ、私も逢ひたさに、鎭守樣へ願籠めしたも百日餘り。
その御禮參りに、今宵は行かねばならぬ。
四郎　アノ無心といふは、その事か。
お松　アイナア。
四郎　何のそれに、改まつた事。早う行つて來たがよい。
お松　それが實なら、嬉しうござんす。
へ知らぬ心のいぢらしさ。
ドレ、後れ髮なと、取上げて。
四郎　でも夜歩きに、髮かたち。

お松　神は非禮を、受けぬとやら。
　　へ子を思ふ身は夜の鶴。
萬に一つは、親々が。
四郎　先立ち行くが道なるに。
お松　道に違ひて、親よりも。
四郎　何にも知らぬ、白浪の。
お松　浪と消え行く。
四郎　ヤ。
お松　白浪ぢやなア。
　　へ恩愛迫り、せきくる涙見えぬ目に、止め兼ねたるばかりにて、虫が知らす
か稚兒が、
ア、、泣きやんな〳〵。わが身の好きな、コレ、此笛を。
　へ我子に紛らし手遊びの、内や床しき白浪の、友呼び交す忍びの曲者。
ト抱兒泣き立てる故、目宗の内の手遊びを引き寄せ、千鳥の付きし笛を取出し、振つて見せ、又笛

を外へ吹立てる。

四郎　ヲヽ、よい子ぢや〳〵。
虫が出るぞや、泣かせまい〳〵。
お松　ヲヽ、犬の子〳〵。（ト是にて泣きやむ。四郎次郎こなしあつて）
四郎　泣き止んだか。
お松　アイ。
四郎　默つたら、早う行きや。
お松　さう仕りませう。
で。

ト表へ向ひ、千鳥の付きし笛を吹立てる。

〽又吹立つる合圖の笛、夜風に連れて賊徒の木鼠、井戸よりぬつと、忍び出

ト風の音、蟲笛、是にて門口の井戸より、木鼠、いが栗鬘、大形の丹前を着込み、達付け袖なし、一本差し、手下のこしらへにて、がんどうを持ち、窺ひ出て、

木鼠　かしら。（ト門口へ來り、內へこなし）

お松　來たか。

木鼠　來やんした。

お松　皆を呼べ。

木鼠　ヲヽイ。

ト以前の千鳥の付きし笛を投げやる。木鼠取つて向うへこなしあつて、吹き立てる。

〽しめし合せて手下のめん〳〵、忍びのがんどう、思ひ〳〵に獲物携へ、次第々々に寄り來る、

ト是にて、知らせなしに此道具上手へ引く。四つ目垣、つゝじの下草、降り庵室、庭口の外になる。

本釣鐘、謡へ床の合方にて、花道よりがんどう、山刀、鐵棒、かけや、鋸、鍵縄、槍等思ひ〳〵の獲物を携へ、ずつと後より、以前の小助、一本差し、達付筒袖、着込みのこしらへ、がんどうを持ち、三階[illegible]出にて、花道より舞臺へ立並ぶ。お松見やる。手下の一、二こなしあつて、

一　合圖の知らせは。

お松　支度をする內。

二　邊りへ、心を。

皆々　ヲイ。

ト此内、床メリヤスへ鳴物をあしらふ。手下六七人、内へはひり、角行燈へ風呂敷を冠せる。木鼠、行燈をよき處へ持ち來る。四郎次郎は是を知らず。

四郎　コレお松、何をしてゐる。

お松　ちよつと出るさへ子持故、支度多うて。モシお前、灯しがまぶしいかえ。

ト長煙管を目先へ突付け、こなし、見えぬに安心して、

四郎　イヽヤ。

お松　アノ、眞實に。

四郎　遲なはらぬ内、行きやらぬか。

お松　アイ、なア。（ト門口へこなし、皆々、小聲にて）

手下皆々　小田原の本陣へ。

お松　時刻も丁度。

木鼠　出かけやんせう。

お松　コレ、皆揃つたか。
皆々　ヲヽイ。（ト四郎次郎、聞耳立てゝこなし。）
四郎　アノ聲は。
お松　講中、揃うて。
ト手遊びの團扇太鼓を叩き立てる。
三四　迎ひに來ました。
四郎　是は皆さん、御苦勞にござりまする。
お松　皆さんの手前、ちよつと着替へて。
五六　サア、さうなされませ。
〽目配せなせば頷く手下、氣轉の者ども、抜き足差し足窺ひゐる。
トやはり打合せメリヤス。此内三四人、暖簾口へはひり、半櫃、三絃箱を出し、箱の内、太綿好みの縫物の盗賊の着付、素綱、丸ぐけ好みのこしらへになる。手下はいそ〳〵とお松に手傳ひ、着替
〽させる事よろしくあつて、
四郎　コレ、お松や、流石に女子、嗜みあれば遠慮なう、女子やもめに花咲くたとへ、よう言つた事

ぢやなア。支度する內、坊はわしが守してやりませう。

お松　サ、手替りに、少しの內、着替へますれば。（ト手下へこなし。）

木鼠　さうなされませ。

ト抱兒を四郎次郎に渡す。

四郎　然し、マア、講中のお方々、皆連れ立つてござれば、心丈夫に思ひます。然し、御挨拶せずばなりますまい。（トこなしあるを留めて。）

お松　イエ〳〵皆お年寄りで耳が遠うて、却て迷惑。

四郎　それはマア〳〵親切な方ぢやなア。

お松　早う〳〵と心は急けど、目の惡い事故に、不自由であらうと、後の事で案じられ、ツイ久し振りのお前故、世話が燒きたうござんすわいなア。

ト木鼠中へはひり、お松の心得にて、四郎次郎の背中を叩く。お松こなし。

さうしてマア、今日は何のかんのと、人出入りが多い故、夕飯もまだ上らず、火鉢の傍へ膳拵らへしておきますぞえ。

ト以前の小助、勝手から、種々並べある蝶足の膳、飯櫃とも持出で、四郎次郎の傍へ、お松の心得

にて置く事。

四郎　まだ、わしは欲しうない。定めしそれは御馳走か。

お松　その子の祝ひ日、わざツと爰にお頭付き、お茶もわいてありますぞえ。

ト木鼠、四郎次郎の手を持添へ、土瓶を数へる。又皿の頭付、膳を音をさしてこなし、手下よろしく。

しかし、火の用心は尚の事、まだ〳〵目の悪いのを付込んで、押入の雑物へ、アノ泥坊が。

木鼠
皆々　ハツクサメ。

お松　取られると悪いによつてな。合點かえ。

皆々　ハツクサメ。

ト木鼠又くさめをし、段々に移りくさめをする、お松静かにしろと制す。木鼠と小助、皆々を静める。

お松　さうして、飯を上がらずば、お膳を引いて、置きますぞえ。

ト手下の一膳を引いて勝手へやる。

押入の蒲團を敷いて、ナ、ソレ。

ト手下へこなし、是にて手下三四人、ひそ〳〵と押入より夜具枕を出し、上手へ宜しく敷く事。

ソレ、枕もちやんと出して置きます程に、風引かぬ内寢やしやんせ。

ト手下一、枕二つ合せ、音をさして並べ置く。

四郎　これ〳〵その樣に世話燒かずと、早う行きや。

お松　そんなら、詣つて來る程に、然し夜道は女子でも、犬脅しを持つて行きませうかえ。

手下
皆々　それが宜しうござります。

へ豫て用意の箱の内、手傳ふ手下が草鞋のしめくゝり、夜の宿直の忍びの出立ち、綠の林柳の黑髮、姿鬼神に橫道内儀のお松、變生男子のその出立。

ト是迄にお松、髮を亂し、誂への髮、盜賊のこしらへになる。三絃箱より大小を出し、是をさし、火燵櫓へ腰をかけ、草鞋を手下に履かせる事、宜しくあつて、

木鼠　サア〳〵、支度が出來ました。

四郎　坊を渡しませう。

お松　こちの人、着替へました。坊をこちらへ下さんせ。

木鼠　サア〳〵、おツかちやんとお詣りだ〳〵。

ト木鼠、そやしながら、四郎次郎より抱兒を取り、お松に渡す。

お松　おとなしう待つてゐやつたなア。

ト、お松、抱兒を懐へ入れ、火燵櫓にかゝり、四郎次郎にこなし、

アヽ、かうしては行くものゝ、ひよつと誰ぞか可愛い人に、ちよつと一服袖引き煙草。

ト自身に取付けて、大小ある故行き兼ねて、木鼠にこなし。木鼠いやらしきこなし、取次いで煙管を渡す。

四郎　ハテ、よい機嫌ナ。此マア苦勞の多い、その中で。

お松　事によつたら、今宵命の。

四郎　ヱ。

お松　ハイ、行つて、參りませう。（ト門口へ宜しく出る。）

〽出る折しも表口、妖魔もかくや嚇々と、星の光りを打見やり、

ト、お松始め皆々門口へ出る。ドロ〳〵になり、花道付際へ七星顯れる。皆々目を付ける。小太鼓樂になる。

お松　今宵も最早、亥の刻過ぎ、朧に衆星光りを失ひ、八つ七郷は戌亥の方。

ト指を折り、星をくるこなし。

四郎　八つ七つ迄、手間取らば。

お松　赴く先は由井ケ濱、破軍に當り、時に取つての此占かた

四郎　一心こめて、身の吉凶。

お松　舅御樣の、別條なきやう。

四郎　それを願ひに、神頼み。

お松　こちの人。（ト氣味合あつて言ふ。）

四郎　女房ども。

皆々　そんなら、頭。（トシイと制し、氣を變へきつとなり）

お松　サ、行かうかい。

へ操正しき夜稼ぎも、善と惡との鬼神のお松、女心の一筋に、子故の闇路打

連れて、

ト　お松きつとなり、花道よき所へ行き、

皆々　そんなら、頭。

お松　コレ。（ト抱兒泣くをいぶり付け、）おびへるわえ。
〽道は曇らぬ十寸鏡、南郷さして出て行く。
ト大小竹笛入り謡への鳴物になり、男女のこなし、抱兒を愛する事あつて、手下殘らず付いて花道へはひる。
〽後には一人四郎次郎、見えぬ目ながらのび上り、
四郎　今別れしが一生の、名殘とも露知らず親子の者を助けんと、夜道を厭はず神詣で、戻つて此身の有様を見たならば、ア、、亡き兒上に只一滴の水だにも、手向けの香さへ眼病故、心に任せぬ不幸者。嘸や草葉の蔭で迷うてござりませう。南無阿彌陀佛〳〵。
〽恨み涙にくれゐたる、柴平非人と挑み合ひ、道を早めて駈け來り、
ト以前のぐれ八、非人のなり、縫ひぐるみにて、柴平、拔身にて、立廻りながら出て來り、直に舞臺へ來り、投げのけて、内へつか〳〵とはひる。
柴平　旦那樣、無念、口惜しうござりまする。
四郎　柴平が五音の狂ひ、是には仔細があらう。
ト探り〳〵氣遣ふ。柴平、非人と立廻つて、

柴平　返す〴〵も殘念な。最前來りし、二人の相ずり。

ぐれ　何を。（トちよつと立廻つて、）

柴平　彼等に荷擔の此の非人、遊女屋なりと僞つて、藤浪樣を釣り出したる、その惡企みを法印めが、後追斷けしに、腰越にて追付いて、藤浪樣を、取り返さんと爭ふ折、群がりうせたる荷擔のもの、ツイに、多勢に此深手、藤浪樣には奪ひ取られし我不覺、此事お知せ申さんと、卑怯ながらも、立歸りましてござりまする。

四郎　ヤヽヽヽ、扨は藤浪は、奪はれしか。ム――。

柴平　我は存命、思ひもよらず、是にて下部は申譯、ア、ハア――。

ト件の刀を我が腹へ突立てる。

四郎　ヤヽヽ、思ひ切つたる、此の最期。

ト探り寄るを制して、

柴平　ハテ、下部に構はず、藤浪樣をお救ひ下され。

四郎　目は見えずとも刀の手前、取戻さいで置くべきぞ。ソレ。

ト四郎次郎、ソレとツカ〳〵行きかゝるを、ぐれ八後より抱き留める。たぢろぐはずみに後に番傘

あつたを、四郎次郎是れへ手さはり取上げて身支度する。ぐれ八立廻るはずみに、柴平の方へ突きやられ、柴平と立廻り、ぐれ八を引きつける。此隙に四郎次郎、傘を持ちしまゝ、ツカ〳〵と門口外へ踏み留る。

四郎　歩行を助くる、コレ、幸ひ。

柴平　是が此の世の。

四郎　さはさりながら。（ト心殘りのこなし。）

柴平　こゝ構はずと。

ト柴平は四郎次郎へこなし。四郎次郎は心殘りのこなし、ぐれ八は柴平に打つてかゝるを、立廻りて投げのけ、此上に跨がり、刀を腹へ突込み、苦痛のこなし。四郎次郎は宜しく向うへこなし。

〽哀れを後に腰越へ、道をたどりて出て行く。

ト早手風の音烈しく、柴平、刀を腹に引廻し苦痛の體、四郎次郎はツカ〳〵と花道へ行き、取付き轉ぶはずみに傘の柄拔けて、竹のみとなるを杖にして、床の三重、風の音になり、花道へたどりたどりてはひる。柴平は次第に落入る。双方一ばいによろしく。

幕

ト引き付ると、後波の音にてツナギ引返す。

三幕目大切　腰越問注所の場

役名　夏目主膳、同四郎次郎、牧村主水、篠原一學、番士、左喜太、同、右中次、盜賊統領鬼神太郎實は女盜賊鬼神のお松、其他。

本舞臺四間廻り緣の高二重、軒先に濱名家の紋付きし幕張り、しぼり上げてある、正面、銀地大紗綾形の襖、上手に鐵砲、槍などを飾りあり、上手へ寄せて、石の井筒、下手草土手の上に練塀の門側を見せ、白洲の體、二重上に一學、麻上下、眞中に主水、大小の拵へ、緣側に主膳、麻上下、大小四郎次郎同じ拵へにて左右に放れ控へ居る。二重下に、左源太右中次、上下、袴、股立、黒羽織、一本差しにて控へ居る。時の太鼓にて幕あく。

右中　日限切れし主膳親子、

左源　押しての推參、下りをれ。

主水　コリヤ、侍、兩人。

　ト侍兩人、ハアー―と控へる。主水思入あつて、

今朝六つ時迄に、二品の詮議。

一學　然るにその日延も、言はゞ延引。殊にお寶、曉丸の劍はなく、薬師の尊像ばかり持參致し、それにて殿より將軍家へ、申譯立つべきか、馬鹿な事を。

主膳　ハヽア、その仰せは御尤も至極。然し此度尋ある鬼神太郎、切腹の場所へ込み入り、狼藉致せし故、寶の詮議にと召取りあり。

四郎　その盗賊の手よりして、不思議に我手に入る。（ト懐中より尊像を出し）此尊像持參の途中、親人の召捕りありし鬼神太郎きつと詮議致さば、曉丸の行方も知れん。殊には先達て、奪ひ取られし路用の金子。持參致してござりまする。

ト百兩包みを二つ、緣側へ並べる。

主膳
四郎　何卒、曉丸詮議日延べの儀を、願ひ上げまする。

一學　イヤ、日限切れたる上は、叶はぬわえ。

四郎　スリヤ、如何ほどに。

主膳　願ひましても。

四郎　いツかな叶はぬ。お上の申譯、夏目主膳、切腹と申した上は。

主膳　期を延ばす程、殿へのおそれ。此場に於て。（トこなしあつて刀へ手をかけるを、四郎次郎留めて、）

四郎　イヤ、失ひましたは、かく言ふ四郎次郎。それ故拙者が。（ト刀へ手をかけるを、留めて）

主水　兩人、待て。

主膳　イヽヤ、上意とござれば。

四郎
主膳　此場に於て。（ト兩人刀へ手をかけ、死を爭ふ。）

主水　こりや、早まるな。兩人待て。今相果てなば、いよ／＼以て寶の行方知れざる道理。殊には永々御病氣たる事、上へも達しあれば、當家へ不忠此上もなし、急く所ではござるまい。心を鎭めて兩人共。詮議致すが忠義の道。

ト思入あつて兩人とも、こなしあつて控へ、

一學　これサ／＼、主水殿、日限切れし曉丸、出でざる時は預かりの、アノ主膳、切腹致させ首を以て、上へ日延べの願ひと大殿より仰せあるを、其許には。

主水　それ故暫く自害を留め、助け置くはお家のため。

一學　そりや又、何ゆゑ。

主水　さればサ、劍に心をかくる鬼神太郎、國を騷がす盜賊を召捕りしは主膳が手柄。それを當座の功となし、正に只今八つなれば、今一時の刻延べに、命を延ばすその内に、夏目四郎次郎を訊

問なし、白狀させなば大殿にも、上へ對し申譯相立つ道理。それ故、暫く猶豫致す身が計ひ。

一學　シテ又、聞濟なき時は。

主水　言ふに及ばぬ。親の主膳は切腹致させ申譯。殘る悴に曉丸の、詮議させるが殿の上意。主膳殿には召取りし、その盜賊を引出して、拷問なして白狀させい。

四郎　その身の疑ひ晴るゝの道理。親人、お計ひ下さるべし。

主膳　言ふ迄もない。親子の者の越度の起りは、實の紛失、かの曲者の申しゝには、知らぬとばかりあらがへど、よし外にありとても、蛇の道は蛇、彼れを嚴しく拷問致さば、

四郎　その手續より知るゝの道理。手前共々彼れが詮議を。

一學　イヤ、そりやならぬ。扶持放れの夏目四郎次郎、親主膳とは事變り、誰が許して詮議の役目を。

四郎　ぢやと申して。

一學　殊には眼病、盲目同然、盲目に詮議は及ばぬ事だわ。

ト是にて四郎次郎、身をくやみ、無念の思入。

四郎　然らば親人、拷問さるゝその間。

主水　蟄居の一間に、控へて居やれ。
主膳　殊更、手强き鬼神太郎、身が安否を相待て居れ。
四郎　お次ぎへ控へて、事の樣子を。ア、何につけても眼病にて。」
主膳　七つの鐘の鳴る迄に、白狀させて劍の在所を。
主水　容赦致さず、きつと、詮議を。
一學　四郎次郎には、次へ立たぬか。
四郎　ハツ。

ト思入にて立上る。兩人の侍、前後を圍ひ、眼病みを案内して、上手へはひる。

主水　イヤナニ主膳殿、詮議の間は我々と同席にて。
主膳　然らば、それへ。
主水　サヽ、是へ〳〵。（ト緣側より正面へ通り、三人共並ぶ事。）
主膳　拙者が吟味に、事明かに劍の白狀、彼れが樣子で、身が助命。
一學　又、切腹と相なるか。生死の境も、今一時。
主膳　サ、猶豫をせずと、盜賊鬼神太郎を、是へ引け。（ト下手へこなし。）

皆々　ハア、、、。

ト下手の内にて役人答へる。時の大鼓になり、中間なり四人にて網乗物を舁き、袢纒、一本差しの侍四人、乗物を警護し、一人抱兒を懐へ入れ、○は盗賊の大小を持ち、出て來り、下手よき處へ乗物をおろし

○　ハツ。仰せに隨ひ、鬼神太郎並びに幼兒、所持の大小。

皆々　警護致しましてござります。

一學　シテ、その餓鬼めは鬼神太郎が。

主膳　倅と相見え、此頃より抱きをつたる子に引かされて、その働きも中々に、それ故拙者が何の苦もなく。

一學　盗賊、早々引出せ。

皆々　ハア。出ませい。

ト讀經がゝりの合方になり、野伴天の侍立ちかゝり、網乗物の扉をあける。内より前幕のお松、前髪を百日やうに分け、淺黄地大縞切りつぎ時代衣裳、廣口藤色しごきを横にしめ、繩にかゝり、侍四人付添ひ、眞中へ引き出し、宜しく住ふ。

下にをらう。

主膳　コリヤ、その方は當地の盜賊、鬼神太郎と申すものか。身共昨夜切腹の場所へ忍び入り、かゝる旅籠へ何を見かけて盜みに入りしや、身が蟄居にて辛き命も、汝を召取りし故、今一時生き延ばゝりしも、そちが蔭なれども、國家に拘る詮議の筋。

お松　スリヤ、昨夜お目にかゝりしが、主膳樣でござりまするか、それにて念願。

ト思はず女の五音になり、ふつと心付き氣を替へ、

存じ寄らずもアノ本陣へ、込み入りしも、よき仕事もあらうかと、思ふに違ひて、却つて此身の繩目の恥。(トうつむきこなし。)

主膳　然らば問はん、當家の重寶暁丸と藥師の尊像盜み取つたも、そちが仕業であらうがな。

お松　存じませぬ。毛頭盜まぬその寶。ならう事なら盜みたく、此艱難も。(ト思入あつて) 手下の者の手に入れば、廻り〳〵て來ませうに、盜賊ならぬ素人の、手にはひつたと存じまする。ハイ、今にその品。(ト思入あつて、一學に目を付ける。) 盜んだ覺えはござりませぬ。

ト是にて一學ぎつくりせしが、こなしあつて、

一學　ヤイ〳〵盜賊、素人の手にはひりしとは、いかゞなる申し分。

主膳　是はしたり、其許の御立腹、先づ〳〵お下に。

ト宜しくあつて主膳、二重に下り、お松の傍へ來り、

コリヤ、よく聞けよ。曉丸の盜賊が知れざる内は、不便や身が悴四郎次郎と申すもの、遊里へ入り込み、小松と申す女に遣ひ捨て、曉丸を責代になせしと、家中の取沙汰。サ、爰の道理を辨へて、寶の行方存じをらば、サ、包まず隱さず、申してくりやれ。コレ、血筋の悴も出ぬ時には切腹する、末代迄の家名の穢れ。サ、少しなりとも手がゝりを存じをらば。コレ、賴み入る。サ、在處を言へ、申せ、ヱ、、是れでも言はぬか、しぶとい奴め。

ト種々に賴むこなしあつて、きつと言ふ。

お松　サ、、その行方知つてをれば、あなたの御難、殊には夫の。

ト言はうとして、氣を替へ、

イヤ、存じてをつたら申しませうに、夢更知らぬ白浪の、綠の林のアノ小悴、盜みする身も迷ふ我子に引かされ、闇々と。ト思入あつて〔〕召捕られたる身の因果。成程寶はその以前、私が。イヤ、わしが盜んだが、今は何れへ渡りしか、その行先は存じませぬ。必ず夏目の御親子が、なされた業ではござりませぬ。今こそ申上げますが、あり樣はわしが仕業でござります る。

一學　扨こそ、おのれが仕業よナ。

主膳　サ、寶の行方存じてをらう。それを言へ。

お松　それを言はぬが賊の法。

ト苦しき思入。此時分上手より、そろ／＼探り出て四郎次郎窺ひゐる。

主膳　エヽ、白狀せねば身が糺明。

トきつとこなしある。此聲を知邊に、四郎次郎走りより、

四郎　イヤ親人、お手下さるゝ迄もなく、拙者が替つて、

お松　ヤ、

ト四郎次郎を見て、びつくり思入。四郎次郎は眼病故心付かぬ體、探り寄り、お松を引付け、

四郎　扨はおのれが、刀の盗賊。此年月の艱難もおのれ故であつたよナ。

ト引付けて扇にて打つ。お松せつなきこなし。

主膳　こりや、ヤイ倅、盗賊詮議は主人殿。我々二人は、蟄居の此身。

一學　ヤア、科人なれども我々が、詞も待たず尾籠の振舞。

トきつとなるを、主水留めて、

主水　イヤ、その儀は苦しうござるまい。今盜賊が申すには、齎は盜めどその行方、知れぬと申すが一つの手がゝり、殊に尊像は詮とあれば、是にて疑ひ少しは晴るゝ、詮議は夏目親子の者へ、身が申付くるぞ。

四郎　スリヤ、こやつが吟味を。

主水　情を見せず、拷問しやれ。

四郎　心得ました。

一學　親子の者が手ぬるい詮議。まぢ〳〵傍で聞くも大儀、暫く次で休息致す。

主水　然らば、一學殿。

一學　御容赦下され。

主水
二人　先づ〳〵。

ト思入あつて一學奥へはひる。緣先にお松の大小殘しあり。

四郎　サア盜賊、何遺恨あつて我々親子へ、かゝる難儀をかけるか。サ、劍の行方も汝が仕業か。それぬかせ〳〵。言ひをらぬか。

ト引付けて、鐺にて繩をこじる。お松言はうとして言はぬ思入。

主膳　ヤイ盗賊、おのれ在處を白狀なさずば　今にも時切れと相なれば、我々親子は落命。忰その方の一腰を。

四郎　エ、、盗賊に刄物は、何故。

ト腹切るふりをして心遣ひの思入。四郎次郎一腰を渡す。

主膳　コリヤ、ヤイおのれ、在處を申さぬと、不便ながらも此の小忰此場に於てその餓鬼と。

ト主膳、抱兒を寄せんとする、是にて赤子笛、お松思はず、主膳の傍へ寄る。主膳お松を蹴飛ばしきつとなる。

忰はそれなる、盗賊めを、命取らずに拷問せよ。その責道具は。

ト緣先にあるお松が小刀殘りあるを取つて、

心穢れし盗賊の、穢れし魂。是にてきやつを打据ゑて。

ト件の小刀を出す。四郎次郎操り取つて、

四郎　親人にも拙者にも、難儀をかけしはおのれが業。重罪人の身を持つて、小兒を連れて非道の働き。コリヤヤイ、小兒不便に思はど、我にも一人の小兒あり、久々にて逢ふと間もなく、その母も忰を連れて、行方も分らず。

ト　お松をあんじる思入。お松は詞交したきを、こらへる思入。

それは外事。サア、存じてをらば、劍の行方を白狀致せ。サアぬかせ。ぬかさにや、かうして。

ト　刀を鞘のまゝ、お松を打つ。

主膳　サア、白狀致せ。サア、陳じだてすりや、餓鬼めは眼前。

ト　白刄をさし付ける。

お松　アヽモシ。

主膳　サア、言はぬか。ぬかさにや拷問。餓鬼めが一命。

四郎　サア〳〵〳〵。（ト双方より詰寄り。）なゝなんと、

ト　きつと詰寄る。お松、身を震はして、せつなき思入　此時奥にて、七つの時計鳴る。三人思入あつて、

時計の七つ。（ト主膳思入。）

主膳　淸く切腹。（ト立上る

四郎　アヽモシ。（ト主膳へ思入。）

主膳　時刻來れば、身共が一命。

四郎　落命あるも、おのれ故。（トお松を手荒く引付ける。）最期のねざしは鬼神太郎。助け置くのも天下の囚人。サア白狀致せ、おのれはなあ。

主膳　科ならぬ身の切腹も、盜賊故に捨つるの道理、それなる小兒何の一人。

四郎　東西知らぬ小兒ながらも、胤を殘さば後々に。

主膳　國に禍ひ生ずる道理、不便ながらも。

ト件の白刄を、抱兒へさし付ける。お松は駈けより、

四郎　おのれ白狀せぬか。言はねば、かう〳〵。

ト抱子の胸先を貫く。驚くお松を四郎次郎引付ける。此折思はず鞘割れて、お松が縛せし繩切れ、よき所をしたゝかに切込む。お松アツと悶絕する。主膳見て、

主膳　大惡人の、血筋を絕すわ。

ヤヽ、咎極らぬ囚人を。

四郎　エヽ。

ト主膳貫きし抱兒の血潮、下にありし畫像にかゝりし體。薄ドロ〳〵になり、所々にて鷄の聲する

三人はきつと氣味合の見得。

主膳　穢れし劒で、餓鬼めが成敗、末期に泣きし一聲と、共に數多の鷄の、

主水　宵鳴き告ぐる、此珍事。

四郎　殊に是なる、劒の刄おもて。

主膳　ドレ。（ト四郎次郎、ツカ〳〵と寄り白刄を見て）

四郎　ヤヽ、燒刄に星の影あるは。

主膳　扨は尋ぬる曉丸、廻り〳〵て鬼神太郎が。

主水　コリヤ、此兩刀は囚人が帶せしか。（ト是にて四郎次郎に目を付けて）ヤヽ、四郎次郎には兩眼明らかなるか。

四郎　そのお詞に我ながら、思はず開く我が兩眼、酉の年度の血をあやせば、忽ち平癒と聞きつるが。

主膳　もしや、それにて貫きし、その小兒は。

主水　酉の年度で。

お松　お前の、實の。

ト　お松心付き、よろぼひ寄つて　小兒の死骸を抱上げる。此時お松が百日と見えし髷元結切れてか

き上げ、さらげ洗髪の様になり、血に染みし女の、襦袢の肌脱ぎになる、腰からげをりて、女奴になる。四郎次郎見てびつくり。

四郎 ヤ、、鬼神太郎と言ひしは、女房お松。

主膳 スリヤ、盗賊と申せしは、そちが馴染の、女でありしか。

主水 思ひがけなき、捕はれの。

四郎 捕縛につきて、對面せしか。

三人 ホ、ホイ。(ト呆れし體、お松苦痛の體にて起上り、)

お松 始めて逢うても此の姿、舅御様、お許しなされて下さりませ。」

三人 ヤ、、何と。(ト草笛入りの合方になる。)

お松 女子の身にて怖ろしい、人も恐るゝ異名つき、鬼神太郎と變名して、世に夜稼ぎの世渡りも、晝は浮れし左り褄、三絃指南の身のばちは、、類ひ稀なる恥かしさ、鬼一口と人呼べど、心は操、立つ年月、變生男子と人目を眩し、いつかは顯はれ天の網、捕へらるれば言譯の、そのあらましは具に認め、常に放さぬ此の書物、是にて疑ひ。

ト懐中より認めし書置を出す。主膳取つて開き見て、

主膳　「何々、私事四郎次郎様のお情受け、懐胎致し身籠り、御家の重寶二品の寶を預かり、所持して上京の途中、賤機山の麓にて盗難に出會ひ、御家の寶を奪ひ取られ、親御の御葬儀御家の大事。かやう〳〵の品なりと、劍の寸尺拵へ迄、委しく認めし御状到來。それより都を忍び出で、まだその頃は懐胎にて、さまよひ來りし街道筋。」

ト思入あつて讀む。四郎次郎取つて、

四郎　遠州岸ケ峠に隠れ住ひ、鬼神太郎と言へる盗賊に出逢ひ、その家へ伴はれ、無體の所行、さりながら言交せし男へ立たず、安産致すそれまではと、欺しすかしてその家にある内手下の盗賊、さま〴〵に盗みし品を分配なす。もし此内に尋ぬる品のありもやせぬかと、見覺えるともなう見習ふ悪事。程なう平産致せし故、盗賊の統領、鬼神太郎に約せし事故、枕を交せと手詰の難儀、得心なしたる體に見せかけ、酒を進めて熟睡の折を窺ひ、臥したる鬼神を刺し殺し、抱兒連れてその場を逐電、今迄付添ふ悪黨原、猛き女と心に怖れ、我に從ひ手下となつて、尋ぬる寶の詮議には、盗みせよとの指圖に任せ、實に尤もと同心なし、武家方寺院に忍び入り、金銀衣服は仲間の働き、私は尋ぬる二品ばかり、外の品へは目もかけず、心を盡す甲斐もなう、お顔も知らぬ舅御樣の、小田原の御本陣にて御切腹と事極まり、それぞ夫へ貞節と、仲間を催

ほし込み入つて、舅御様を盗み出さん爲めばかり。モシ、召捕られ引かるゝとも、決して連合ふ四郎次郎殿、實の倅は未だ幼少、夫に咎は之無く候。我等一人御成敗願上候。御家の長久祈り上候、かしこ。盗賊鬼神太郎。ヤ』、、、扨は男と思ふが故。

主膳　スリヤ、我殺せし小兒こそ、倅が胤であつたるか。さすれば一人の初孫なるに、知らぬ事とてホヽホイ。

お松　さはさりながら、不便なる我子の成行き。眼前に、親御は傍にありながら。

主膳　ぢいよ孫とも、えい言はず。

お松　私しや嫁とも、女房とも、言ふに言はれぬ、淺ましさ。

主水　その世渡りも、何故ぞ。

四郎　女の操、盗賊夜盗。

主膳　嫁とも知らぬ、舅親。

主水　夫婦妹脊と、しがらみし。

四郎　變つた縁で、

四人　あつたよなア。

四郎　さるにても、我許嫁せし藤浪どの、悪者の仕業より、夫へ立たずとその身は入水。
主水　スリヤ、藤浪は身を投じ、
お松　いとしや、あなたも、
主膳　それも正しく近郷に、今噂ある確に法印、きやつらが仕業に相違あるまい。心得難きは是なる劍、如何致して所持なしをつた。
お松　委しき事は知らねども、念佛寺へ込み入りし、その夜に住持の樣子といひ、何か劍に心をかけ、付きまとひしがその時に。
主水　扨こそ、住持が劍を預かり、寺院に隱し置いたるか。何は兎もあれ二品を急いでお上へ。
主膳　然らば二品、忰も共に。
ト互ひにこなし、此時凧の音烈しく、空より凧糸目切れて、下手の松の枝に落ちかかりあるを皆々見て、
折も折とて大空より、風に誘はれ落來る凧。
お松　ア、見覺えのある、アノ凧に、何やら認め。
四郎　裏張りせしは、手紙の文面、怪しの密書。

ト四郎次郎ツカ〳〵と引つかゝりし凧を引下し、

コリヤこれ正しく、手跡は一學。

ト怪しみゐる。此時一學、後へ出て窺ひゐる

主水　ヤ、、、、コリヤ法印へ、褒美の金子の預かり、惡事の密書で裏張りしたるは心得ぬ。

お松　それにて思ひ當りしは、内で思はず、女同士のいさかいに、ちぎれた凧へ裏張りの、内の阿呆が、氣も付かず。

四郎　確に手紙は見えぬ目で、犀ケ崖で拾ひし密書、裏の切り張り思はずも。

主膳　凧の文字は調ふと、書きしに違はぬ此場にて、劍と尊像戻るといひ。

四郎　まだその上に佞人輩が、證據の密書が手に入れば、御家も整ひ此身もやがて。

主水　歸參も調ひ、幸先よし、手柄始めに一學を。

ト件の凧へ手かけ、裏張りの密書を取らうとする、窺ふ一學ツカ〳〵と出て、凧へ手をかける、兩人氣味合。

一學　身が詮議する、その凧、こつちへ。

主水　御家を窺ふ篠原一學、覺えがあらう、覺悟なせ。

一學　何を小積な

ト切つてかゝる。ちよつと立廻り、一學上手の井筒へ飛込む。

四郎　ヤ、、、、詮議の手がゝり、一學を。

主水　取り逃しても氣遣ひない。水門口には番士數多見張りをれば、怪しと思はゞ取押へん。氣遣ひめさるな

主膳　此程船にて捕へし二人の同類、白狀いたさせ、一學が。

四郎　惡事の根を斷ち、御家の榮

お松　目出度き折を幸ひに、夫の首途、此身はアノ世へ。

四郎　悴諸共、死出三途

主膳　可愛や、孫めは。（ト死骸へこなし。）

主水　臨終稱念。

お松　南無阿彌陀佛

皆々　南無阿彌陀佛。

トお松は合掌。各々も回向の仕組。トヾお松うつ伏せに落入る。皆々愁ひのこなし。

有爲轉變の。

三人　世の中ぢやなア。

ト顔をそむけ思入。暮六つの鐘。時の太鼓。双方よろしく、此道具ぶん廻す。

本舞臺一面上下草土手、この上、楕矢來、眞中水門口、よき處に松の立木、すべて問註所裏手の模様。こゝに一學、高股立、着込みのこしらへ、大童になり刀を持ち、是れを捕手大勢、高張を照らし、突棒、刺叉、袖搦みにて、取卷き居る見得。鳴物ドン／＼にて、道具宜しく納まる。

一學　企て露顯の一學が、尾形を退く道を妨げ、コリヤ、おのれらに指圖あつてか。

○　言ふにや及ぶ。叛逆謀叛の篠原一學、當家の忠臣、主水殿より下知を受け。

◎　落行く所は、裏手の水門口と察せし故、

△　かく取捲きし上からは、袋の鼠、籠中の鳥

□　異議に及ばゞ、憂目を見せん、一學殿。

皆々　罪に服して、繩かゝれ。

一學　小癪な奴らめ、妨げなすと撫切りだぞ。

皆々　何を、小癪な

トドン〳〵早笛になり、好みの立廻り存分あつて、トヾ捕手皆々は花道へ追ひ込み、直に早き鳴物になり、四郎次郎捕物のこしらへにて、花道より出て來り、

四郎　卑怯未練の篠原一學、のがれぬ所と諦めて、サア、尋常に縄かゝれ

一學　ヤア、過言なり、夏目四郎次郎。小癪な腕立て、怪我まくるナ

四郎　ヤア、引れ者の小唄とやら、サア速に腕廻せ

一學　何を、小癪な

ト是より大小入りの鳴物になり、兩人烈しき立廻り存分あつて、宜しく見得。此時以前の主水先に組子大勢槍を持ち、上手より出て、後ろへ取卷く。

主水　ヤア、お家に仇する、不敵の一學。

四郎　サア、速に腕廻せ。

一學　何を小癪な

ト一學きつとなる。捕手立廻りちよつとあつて、皆々並よく取卷き、主水、四郎次郎、上下よりぢつと詰寄る。双方見得宜しく留り、是れにて

目度く打出し。

鬼神のお松（終り）

夏祭浪花鑑（なつまつりなにはかゞみ）

夏祭浪花鑑（團七九郎兵衛――三幕）

序幕　住吉鳥居先の場

役名　團七九郎兵衛、一寸德兵衛、釣船の三婦、役人堤藤內、玉島磯之丞、こつぱの權、なまこの八、大鳥佐賀右衛門、髮結床三分、醫者、町人　繩取中間、團七女房お梶、悴市松、琴浦等。

住吉鳥居先の場。本舞臺少し上手へ寄せて、誂への髮結床、上の方石の鳥居、同じく駒寄せ、石垣、石燈籠、床に續いて下の方草土手、是へ松の並木、下の方に葭簀張りの居酒屋、模樣物の掛のれんの入口、よき處に紅葉の立木、同じく若葉の釣枝、總て住吉濱邊、明神鳥居先の模樣、爰に町人仕出しの中へ、〇一人力紙附きし朝比奈のかつら、浴衣なり、醫者坊主かつらにて、〇を引附けて居るを髮結取押へ居る、外の仕出し思ひ〳〵のこしらへにて留めて居る、辻打にて幕あく。

町〇　此の醫者ばウめが、おれに恥をかゝせやあがつたな。

醫者　ヤイ〳〵、此の赤村へ、へ、へた藏めが恥をかゝせたもよく出來たおのれが癲癇を起すたんびに、呑ませてやツた氣附藥の代ばかりも、幾ら溜つて居ると思ふ。其の藥代の催促をすればふて腐手をぬかしやあがる、料簡がならぬぞ〳〵。（ト立掛るを、町人皆々留めて、

町皆　マア〳〵、待ちなさい〳〵。

町〇　コレ〳〵、お前方は、うつちやつておきなさい、藥代の掛取に廻る醫者が、どこの國にあるものか。此の竹の子坊主め。

醫者　ナニ、竹の子坊主だ。此の盗人朝比奈め。

町〇　盗人とは何の事だ。

醫者　其のいゝ口を、どうするか。

ト町人皆々留めるを拂ひ退け、町人〇の横づッぽをくらはせる。

町〇　アイタ、うぬ、ぶつたナ〳〵、痛え〳〵、目玉が飛び出たぞ〳〵。

髪結　コレサ〳〵、まア〳〵おまへも、お腹も立たうが、お醫者樣とあれば、人を助ける長袖の事ぢやアございませぬか。（トよろしく留める。）

町皆　マア〳〵、御料簡なされませ。
醫者　何の長袖どころか、モウ斯うなつては、筒ツぽでも袢纏でも藥禮を取らにやアならねえ。
町〇　骨が舎利になるとても、藥代はやらねえぞ〳〵、
醫者　取らねえでおくものか、

ト兩人爭ひながら、辻打早めて、上の方へ、摑み合ひながら鳥居の内へはひる。

町皆　こいつア、大笑ひだ。

ト右の鳴物にて、仕出し皆々上下へはひる。髪結は床の中へはひる。と誂への出の鳴物になり、花道より、釣船の三婦、好みの着附、尻はしをり、石割り雪駄、珠數を爪ぐりながら先に立ち、此の跡より團七女房お梶、好みの着附け後ろ帶、悴市松の手を引き出て來り、三婦花道にて、市松へこなしあつて。

三婦　ヤレ〳〵、小びつちよめが、じやうだん歩き、附き合うて來たかして、思ひの外早かつたわえ。
お梶　ほんに、さうござんすなア。コレぼんや、サアおとなしく、歩きませうぞ。アレ〳〵、[illegible]うが住吉樣の鳥居先。

三婦　あれ、アノ鳥居を潜つて、それから行くと、反橋があるぞ。
お梶　今少しぢや、あんよしやよ。
市松　アイ〳〵。（ト右の唄にて、舞臺へ來り、）
三婦　ア、、おとなしい〳〵。
お梶　サア、爰まで來たれば、ちよつと爰で休みませう〳〵、三婦さんも休みなさんせえ。
ト是にて床几を見て、
三婦　ヲヽサ、幸ひの此の床几、ちよつと、腰を休めようかい。
トこなしあつて床几へ掛ける、右の合方、辻打の鳴物をあしらひ、市松へこなしあつて。
さて此の坊主は、よう歩いたの。大方天下茶屋邊りで、慥かにだらけようと思うて二十五文が駕籠相乘で振舞ふ處を、三文の地黄煎餅で、まじなうた。サア〳〵、ぼんちも爰へ休め〳〵。
トお梶も市松も、よろしく床几へ掛けることあつて、
昨日、こなたが戻つて、團七が牢から出ると聞いた故、おれはモウ嬉しうて、夜がな寢られず、夜の明ける迄待ち兼ねた。
お梶　そりやモウ、おまへの言ふ通り、私も昨日お役所へ出るまでは、若しも命にも及ぶやうな御裁

許になりはせまいかと、大抵や大方案じたではない。が案じるよりは産むが安いと、けふはお許しが出ると聞いた時の其の嬉しさは、どのやうだと思ひなさんす。是と云ふも三婦さん始め、御近所の衆の勢力でござんせう、有難うござんすわいなア。

三婦　ヲヽ、定めし嬉しからう／＼。コレ坊ンよ、おツつけ、とゝに逢はしてやるぞ、嬉しいか嬉しいか。

市松　アイ、とゝ様に逢ふのは嬉しい／＼。

三婦　ヲヽ、さうであらう／＼。イヤ、したがもつと隙が入らう、祝うて明神様へ、お禮がてら連れて參らつしやれい。

お梶　ホンニちよつとお禮參りして、來ませうわいなア。

三婦　おれは、間違ひの無いやうに、爰に待つて居ようわ。

ト　お梶、市松を連れて立ちかけ、こなしあつて。

お梶　それに附けても三婦さんは、こちの團七殿と念頃な仲ぢやとて、いかい世話でござんすなア。

三婦　なんのいなう。然し言はれて言ふぢやなけれども、いつたいはこなたの親父三河屋の義平次が

來て、やらにやならぬ筈を、けふはまたなぜ來ぬの。

お梶　さいなア、今朝から腰が痛いと云うて。

三婦　サア〳〵作病じやテ、殊に直ぐにもないわろぢやもの、イヤ、こんな事は誰れも來ともない。

お梶　アイ、そんならさう致しませう。（ト市松へこなしあつて、）コレ、いゝがんがへ參つて來ようといやいなう。

市松　いゝがんがへ參つて來ますといやいなう。

お梶　何を云やるぞえ。そんなら、三婦さん。（ト思入あつて、）ドレ、參つて來ようわいなア。

ト是れより竹本になり、

〽口寫し云ふ鸚鵡の鳥、親子は宮へまうで行く。

トお梶、市松の手を引き、上の方へはひる。

三婦　ドリヤ、一服やろうわえ。

〽三婦は石に腰打ち掛けすつぱすぱ、茶の跡始末と見えにける。

ト此の内、提げ煙草入より、火打道具を出し火を打ち、煙草を呑み居る、此の時下座の囃子になり、花道の揚幕より駕籠を舁き、こつぱの權、なまこの八、磯之丞を乘せ出で來り、よき處にて息杖を突き。

權　ヲイ棒組、ちよつと入れようぜ。（ト駕籠を立て、）エモシ旦那え、跡の立場の駕籠と、替へにやアなりやせん。駕籠の錢を、

兩人　やつて下さいまし。

磯之　是は又どうしたものだ、乘る時に大阪までと極めたではないか、先へ行つたら渡さうわいの。

八　それぢやアちツと、勝手が惡うございますよ。

權　跡の駕籠と替へねば、成りませぬから。

兩人　どうぞ爰で、やつて下さいまし。

磯之　サア、やる事は安けれども、錢を爰に持ち合さぬ故、大阪へさへ行つたなら、慥に渡さうわいの。

八　コウ相棒、聞いたかえ。なんだか、あやふやな物云ひぢやアねえか。

權　その事よ。（トこなしあつて、）モシ旦那、今受取らにやア、どうも勝手が惡うございますよ。

八　さうして大阪は。
兩人　どこへ行くので、ございますえ。
磯之　されば、長町邊で尋ねて見たら。（ト沙汰が成らぬと思入。）
八　先きは知れぬと云ふのは。
權　それぢやア、いよ〱爰で渡して、
兩人　貰ひたうござりやすね。
磯之　ハテ、しつこい、爰には錢が無いといふに。
八　ナニ、錢が無い、おきやアがれ、直を極めて駕籠へ乘りながら。
權　こゝ迄仕事をさせておいて、錢がねえもよく出來た。
八　おら達を騙りやアがるな〱。
ト此内駕籠をおろして、左右よりがなり立てる、磯之丞こなしあつて、
磯之　ア、コリヤ、武士に向つて麁相申すな。
八　なんだ、武士に向つて麁相もねえものだ。
權　ヘン、武士も、よく出來た。

兩人　見れば、丸腰ぢやアねえか。

磯之　エ。

ト丸腰に心附き、ぎつくりこなし。

八　それで騙りは分つて居るわえ。

權　こんなやつは、見せしめに。

兩人　かうしてくれるア。

〽思ひ合うたる惡者同士、駕籠をぐるりと打返され、内より出たは磯之丞、落ちたるはづみに、ひざすりむき。

ト兩人にて駕籠をかへす、中より磯之丞ころげ落ちる。

權之　アイタ。コリヤ、私をばどうするのぢや。

〽くわつと急く氣も身の恥と、さしうつ向てこらへ居る。

權　コレ先棒、錢の持ち合せがねえと云つて、此まゝではでは濟まされねえ。

トよろしくこなしあつて、

八　知れたことよ、なんでなりと、爰までの籠賃を取らねえでなるものか。

權　下着でも上着でもふんばいで、錢にするがいゝ。

八　さうしべい〳〵。

磯之　スリヤ、手ごめにしても、駕籠代を。

兩人　ヲヽ、知れた事だア。

ト立掛るを磯之丞ちよつと拂ひ退けるを、又兩人掛る、これを三婦ツカ〳〵と出て、磯之丞を圍ひ兩人を見得よく留めて。

〽立掛らんとする處を、三婦は見兼ねて割つて入り。

三婦　コリヤ〳〵。めつたな事をして、こいつらア跡で後悔しやアがるな。

〽横合ひから三婦が聲、

ト兩人の駕籠舁き、こなしあつて、

八　エヽ、此のぢゞいめ、何を巾をきかせるのだ。

權　なんの譯も知らねえで。

ト誂らへの鳴物に成り。

三婦　ホヽ、知つて居る〳〵、コリヤ、いがむなやい。サア〳〵足許の明かるい内、とつぱしらいで

ナ。

ト兩人の駕籠舁き、よろ〳〵思入、三婦は磯之丞へこなしあつて。

イヤ、見れば樣子がありさうなお方、お年は若いがおとなしい、よう堪忍さつしやるぞ、シテ籠代は何ぼぢやの。

ト磯之丞、面目なきこなしにて、

磯之　サア、チト樣子がござりまして、着のみ着のまゝで走り出で、僅かの鳥目に差支へしをお目にふれ、面目もござりませぬ。極めました駕籠代は、二百五十文でござります。

ト氣の毒さうに云ふ。

三婦　アヽ、二百五十文か、テモ高い駕籠ぢやの、乘らしつたこなさんもこなさんぢや。由縁かゝりは無けれども。（ト兩人へこなしあつて、）コレ、此の親仁が尻持ちするぞ。

兩人　ヤア、そんならこなたが尻持つか。

三婦　ヲヽ、此の釣船の三婦が、尻持つた達引〳〵。（ト手に持ちし珠數を見て、）此の珠數で數へて見りやア、丁度九百九十九出入りがある。前なら、うぬ、疊んでしまひ千人投の數に合すれど、堪忍して去なしてやるぞよ。

〽痰切り顏を、ぢろりとながめ、（ト兩人こなしあつて、）

八　ホヽ、釣船面白い、おら達二人を、

權　どうして去なせる。それを見ようかえ。

〽摑み掛るを身をかはし、ころりと投げたは百の錢、

ト兩人三婦へ摑み掛るをちよつとあしらひ、懷中より百文投げ出してやる、兩人是を見てよろしくこなし、

三婦　高い極めはこつちの損、料簡して半分やる此格で、いがんだら大きな目に合ひをらう、それ取つて早う行け。

〽丸うさばいた男作り、美しいので氣味惡く、

ト三婦こなしあつて、兩人の駕籠屋よろしくこなしあつて、顏見合せ色々あつて、件の錢を、よろしく取り上げる事。

〽錢受取るもこわ〳〵に、

それで言ひ分はあるめえな。

〽尻そこばゆく雲介は、（ト兩人よろしく、）

兩人　ハイ、言ひ分はござりませぬ。

〽駕引かたげ歸りける。

ト兩人よろしく、駕籠舁下手へはひる。

〽磯之丞はしづ〳〵と、三婦に向つて一禮なし。

ト磯之丞三婦へこなしあつて、

磯之　狼籍者に出合ひ、難儀の處を其の許のお世話にて、事なく納まり大慶致す、只今拙者流浪の身、時を得てお禮を申す爲めなれば、御在所はいづくか、承はりたう存じまする。

トこなし、三婦思入あつて、

三婦　イヤ、さうあつては此親父、處は申さぬ。今聞いてをれば、こなた樣は長町邊へ向けてござるとの事。わしもあの邊りへ行きます者、さうして長町は何丁目。

磯之　イヤ、何丁目かは存ぜねども、三河屋義平次を尋ねて參る者。

三婦　ムウ、アノ義平次に用があるとは、テモ變つた者にお近附きぢやの。

磯之　イヤ、近附きではござらねど、其の娘のお梶へ。

三婦　ヘエ、そんならおまへは、てつきり、磯之丞樣とやらでござりまするか。

磯之　とは又、よく御存じで。

三婦　サア、からでござんす、けふ團七が出牢迎ひに、お梶と息子と二人を連れて來てやりました、その道々おまへの話しを聞きました、何れあなた樣の事は團七が、よいやうにしまする、氣遣ひさつしやりますな。（ト上手へこなしあつて、）お梶は宮へ參られたが、戾りの遲いは、オヽてつきりコリヤ坊主がだらけて、新家の晝飯、あつちやから行つて昆布屋に居ませう、三婦に聞いたと云はつしやりませ

磯之　是は重疊、きのふは堺町で日を暮らし、けふは大阪へ參る處、よい處でそこ許にお目に掛り。

三婦　アヽイヤ、その御挨拶もゆるりとしませう、まアちやつと行かつしやりませ。

磯之　然らば後程、御意得ませう。

ト磯之丞こなしあつて、上手へはひる。三婦跡を見送り、

へ昆布屋をさして急ぎ行く。

三婦　アヽあの人は、よい處でおれに逢うたぞ、イヤ逢うたは逢うたが、この團七はモウ來さうなものではある。（トのれんを覗きこなしあつて、）床の衆、けふのお拂ひものは、いから遲うござるの、わしや大阪から迎ひに來たのぢや、來る迄爰を借りますぞや。（ト床の内にて、）

髪結　ハイ、こつちへお掛けなされませ。

三婦　アイ、それは忝うございます。

ト三婦床の内へはひる。時の太鼓になり、

見物　ソリヤ、科人のお拂ひものが來るぞ〱。

ト見物人の仕出し大勢出る、此内上手より團七、淺黄の仕着せなり、延びたる月代、延びたる附髭にて本繩に掛り、藁草履をはき、是を袢纏侍繩を持ち、藤内十手をさし、大小雪駄、役人のこしらへにて附添ひ出來り、

〽我がいとなみの生洲の魚、沖に出でたる心地なり。

ト此の内舞臺へ來り、

繩取　下に居ろう。

ト團七を引きすへる、仕出し皆々よろしく、遠く退き見物する事。

藤内　今日當番の役目を受けし、堤藤内罷越したぞ。ソレ、御法の通り囚人の繩、解きめされ。

繩取　ハア、。（ト繩を解く。）

藤内　コリヤ團七、委しく屋敷にて介松主計、玉島兵太夫兩人申渡されし通り、去年二月十三日御家

中大島佐賀右衞門が家來に手を負はせ、双方共に牢舍の處、手疵は癒えて相手は牢死、それ故死罪を御赦免なされ、泉州堺をお構ひと相成るぞ、此の趣きを心得よ。

團七　ヘイ〳〵。

藤内　たとひ、相手は病死たりとも、其の方が死罪はのがれ無きを、格別の思召し、有難く心得ませうぞ。

團七　有難う存じまする。

藤内　以來お構ひの場所を辨へず、若し立寄るか、又惡しき風聞もある時は遁れぬぞ、必ず身持を愼みませうぞ。

〽言渡す事言ひしまひ、

ト藤内繩取へこなしあつて、

者共參れ。

繩取　ハツ。

〽直ぐ樣屋敷へ歸りけり。

ト時の太鼓にて、引返して花道へはひる。見物皆々下手へはひる。

團七　〽跡見送りて團七は、故郷の方を伏し拜み、

ト團七腕をさすり、色々こなしあつて、

ア、忝い、有難い〳〵。佐賀右衞門が中間達の下手人に取らるゝかと思へば、無念で口惜しかつたを、はからず命助かつたは、日頃信心する不動樣の御利益、又一つには兵太夫樣のお蔭、お禮は申さぬ其の替り、磯之丞殿のお身の上、命に替へても、みぢんさら〳〵、御難儀はさせませぬ。

〽獨りつぶやく後より、（ト此時床の内にて、）

三婦　團七々々〳〵。

團七　おれを呼んだは、何處だ、何處からだ。

三婦　イヤ、何處からでもない、床からだ。

トのれん口より、三婦出る、是より好みの鳴物合方になり、團七三婦を見て、

團七　ヤア、三婦殿、テモ珍らしい、息災にごさつたの。

三婦　ヲヽ、おりや大阪から堺へ通ふ、わりや堺から大阪へ通ふ、生業は違うても心は變らぬ念頃。料簡强いわれがアヽした事、よく〳〵聞かれぬ事があつてと思うて、扨て案じたが、出かした

出かした、必らず恥ぢやと思ふなよ、江戸を見ぬと牢へはひらぬとは、男の内ぢや無いと云ふ。けさから婦案も坊主も連れ立つて、迎ひに來て待つて居た。

團七　エ、アノ女房や悴めも。

三婦　ちやつと顏見せてやりや、ぢやが。（ト團七の頭を見て、）テモ長い月代、ムウ、くさい若い者ぢやナ、着替への着物は。

ト腰へ提げたる風呂敷包みを見て、

此の包みに入れてある、幸ひナ此の床で、月代剃つて明神樣へも御禮申せ、おりや昆布屋へ行て、落着きするわい。（ト團七思入あつて、）

團七　ア、、そりや、いかい世話でごんした。

ト團七三婦の耳へ掛けし、珠數を見て、

ヤ、こんたも大分、信心者になつたの。

三婦　サア、今はとんと腹が立つても南無阿彌陀佛、笑ひ〳〵も、なむあみだ、念佛講で忙がしい、是から大阪住居するおぬし、春から打ち續けの當り芝居。又あの張り出しの淨瑠璃のと、見せ度い物は山々ある、イヤ、こんな事云や日が暮るゝがイヤ云はにやならぬ事があるわい、お梶

が話しで、委しう聞いた磯之丞殿に、たつた今逢つた故、一緒に昆布屋へやつておいた。

團七　そりや、わしが大事の人。

三婦　サア〳〵、其の譯も聞いて居るテヤ〳〵。

團七　兎角昆布屋で、ゆる〳〵と話しやせう。

三婦　エヽ、いゝ男になつて、女房に顔見せてやるがよい。コレ床の衆〳〵。

髪結　ハイ〳〵。（ト出て來る。）

三婦　氣を附けて、顔やつむりを引かけねえようにしてくんなよ。

髪結　畏りました、サアお前さん。

團七　そんなら釣船、ドレ男を一番、磨いて來ようか。

ト思入。唄になり、床ののれんの内へはひる。三婦のれんの内を覗き込み、

三婦　コレ、床の衆頼みますぞや。

ト風呂敷包を取り上げ、

サア風呂敷包みをそこへ渡すぞ、中へ錢も煙草入も着物まで入れてあるぞ。見たか、よからうな。ヤ南無三しまつた、かんじんの白旗を忘れて來た、アヽとんだ事を。エヽまゝよ、けふ切

り立の初穂をばちよつとおれがしめたばかり、年寄だけに赤旗だ、まア是れを間に合せに。

〽両手を腰にむく〳〵と、左りの袖からのれんの口へ、

ト此の内よろしくあつて、緋縮緬のゆもじを出して、のれんの内へ引ツぱり取らせるこなしよろしく、この捨ゼリフあるべし。

そりや、引いたりショ〳〵。（ト内より引く事よろしくある、）

ア、コレ〳〵、どうする〳〵、痛い〳〵。睾がしまる〳〵。

トやはり床のメリヤス、よろしく内へ引いて取り、

然し、きんをしめるとは、まんざらではないわえ、ハツ〳〵。おりや先へ行つて待つて居るぞ、よいか〳〵、ドリヤ、行かうかい。

〽昆布屋をさして、

トこなしあつて、裾をまくりかけ、心附いておろし、

〽別れ行く。

ト三婦よろしく花道へはひる。と乗りの早き合方、唄になり、是れへかすめて、バタ〳〵になり、花道より琴浦、着流しにて走り出で、上手にて躓き、胸を撫で、こなしあつて、

琴浦　心を空にやう〳〵と走つて來たが、爰はまア何處であらう。〈ト舞臺へ思入あつて〉ホンに爰は住吉樣、磯樣と連れ立つて難波屋へもよう來たが、若しやあすこにぢやあるまいか。

ト あたりを見廻し、ふと向うへ心附き、

ヤ、あそこへ來るは、憎らしい佐賀右衞門づら、見附けられたら捕へられう、コリヤどうせうどうせうぞいなア

〽どこへ隱るゝ間もあらせず、

ト此の内上手より佐賀右衞門、着流し大小にて、ツカ〳〵と出て、

佐賀　ア、コリヤ〳〵見附けたぞ〳〵。

ト琴浦逃げようとするを、り寄つて引きとめ、輕業の鳴物になり。

ヲツト逃げまいぞ〳〵、コレお鯛茶屋から、よう身共を出しぬいて、身を空蟬の藻拔とは、濟まぬぞ〳〵、まアおれが云ふ事何と聞くぞ。元來おぬしには此の佐賀右衞門が附いて居たを、アノ磯めが身請してお鯛茶屋の箱入り、指もさゝせず賞翫しをる、そこで我等が太鼓を持ち、極道に拵らへて勘當させた骨折も、皆貴樣から起つた事。磯めがやうな風來人に、心が殘ると終ひの果は飛田へ曝され、お情どころを犬や烏が、ヲヽ思ひ出しても身がふるふ、まだ其の上

にひよつとすると、男は助かつて女は死に損、そんな危い事をせうより、さらりと氣を替へ、サア、まア難波屋で。

ヘ祝言の杯せうと手を取れば、

ト佐賀右衞門しなだれ、手を取るを琴浦ふり切り、

琴浦　エヽいやらしい聞きともない、コレ、爰を放しなさんせ〱。

ト色々あせるを、

佐賀　ハテ、ぴんしやんしても、此の大鳥が摑んだからは、放さぬ〱、爰で逢うたが。

ト手を取るを、

琴浦　エヽ、憎らしい、知らぬわいなア。（ト思入よろしく）

佐賀　ハテ、はしたない、聲が高いわ。

琴浦　高うても、わしや、いやぢや〱。

佐賀　ハテ、いやであらうが、どうあらうが、連れていんで女房にする。

琴浦　いやぢや〱、いやぢやわいなア。

ヘ合點せぬもの無理無體、引きずる意地張る床の前。

ト兩人よろしく爭ふ事。

佐賀　ハテ、おぢやいなう。

〽引立つる佐賀右衞門が利き腕、ぐつとのれん越し捻ぢ上げれば、

トのれん口より、佐賀右衞門の手を捻ぢ上げる。

團七　イヤ何もせぬ、おれでへす。

アイタ〱。コリヤ、どいつだ、何ひろぐ。（トのれんの內にて）

佐賀　ヤ。

〽ずつと出でたる剃立の、糸びんあたま靑月代、

ト是れを誂への鳴物になり、暖簾の內より、團七誂らへの染模樣の衣裳、下駄掛け、手拭をさげ、

ずつと出る、佐賀右衞門よろしく見遣りて、

佐賀　ヤア、おのりや、けふ牢から出をつた。

團七　ヲ、驚くまい、へゝ、團七といふけちな野郎だ。

佐賀　その團七が、何で邪魔を致すのぢや。

團七　イヤ、邪魔は致しませぬ、から見た處が、お侍の分として、女を捕へて見苦しい、チトおた

しなみなされませ。（ト琴浦團七を見て、）

琴浦　どなた樣かは存じませぬが、危ふい難儀をお救ひ下され、有難うござります。

團七　そのお禮にやア及ばねえ、こなさまがアノお鯛茶屋に居やしやつた、琴浦さんぢやアの。ソテ、磯之丞樣に逢はんしたか。

琴浦　イヽエ。

團七　ムヽ、さうしてまア供は何處に居るえ。

琴浦　イヽエ、だれもないわいなう。

ト此内佐賀右衞門抜き打に切り附けるを、團七身をかはし、よろしく突きのける、又掛かるをよろしく留めて、

團七　ハテ大膽な、そんな事だから、ツイ此のやうな惡魔が魅りたがる。コレ、わしは磯之丞樣を世話する團七といふ者でござんす。

琴浦　エヽ、そんならおまへが、お梶さんのお連合かえ。

團七　アイ、左樣さ。

ト爰へ佐賀右衞門又切て掛かるを捉へ、

琴浦　さうして、磯さんは。

團七　コレ、氣遣ひしよまい、ツイそこに。

ト佐賀右衞門こなしあつて、

佐賀　そことは、どれ、

琴浦　どこに。

トこゝろ〳〵の思入、佐賀右衞門立掛るを、どうと押しのけ、兩耳を押へて引附け琴浦へこなしあつて、

團七　此の土手通りを、南へ行くと。

ト云ひながら、佐賀右衞門の耳を押へたまゝ、上の方へ向けて、

並木の蔭の茶屋の內の、昆布屋といふ新見世に、磯之丞樣が行つてござる、又わしが女房も來て居るし、又三婦といふ者に逢うたらば、よう頼んでおかつしやい。（ト思入にて云ふ。）

琴浦　アイ〳〵。

ト呑み込みし思入、此の內佐賀右衞門、兩手を掛けて押へられし耳の手を取るを、其の儘引附けて琴浦へ思入あつて、

團七　アヽコレ〳〵。おまへ行く道を知つて居るか。
琴浦　イエ〳〵、知らぬわいなア。
團七　さうか。

ト團七、佐賀右衞門の右の手を取つて、指をさゝせ、

それ爰を、かう行くと。

ト佐賀右衞門を裏向きにして、

其の黒塀の間から、此のやうな、松の木が出て居るは。其の松の木の筋向うに、こんな。

ト佐賀右衞門と立廻りながら、

地藏樣がある、其の地藏の前の石橋を、

ト立廻りながら、佐賀右衞門を押伏せて、橋にし、ちよと背を踏みながら、

から渡つて。（ト佐賀右衞門を蹴かへし、）一軒、二軒、三軒目だよ。

ト是にて佐賀右衞門、くるり〳〵とかへる事よろしく。

早く行かんせ。

〽とをしへられ、

琴浦　アイ〳〵。

團七　コレ、東側ぢやぞえ、此の仕儀必らず云ふまいぞ。

琴浦　合點ぢやわいなア。

〽いそ〳〵として急ぎ行く。

ト琴浦こなしあつて、花道へはひる、此の內佐賀右衞門色々あつて、

佐賀　アヽ君子は危ふきに近寄らず、三十六計逃げるが第一。(トこなしあつて、)

〽飛ぶが如くに立歸る、

ト大拍子にて、足早に上手へはひる、團七見送りて、

團七　ハテ意久地のねえ、こそ〳〵と逃げて失せたわえ。

〽跡見送りて心附き、

イヤ〳〵、コリやてつきり昆布屋の事を嗅ぎ附けて、先へはよもや廻るまい。とは云へ道が氣づかひな、宮へはいつでも參られる。(ト向うへ行き掛ける。)

〽心急いで行く道から、

ト此の内上手より一寸德兵衞、好みの着附にて、跡より以前のこつぱの權、なまこの八、兩人好みのこしらへにて、連れ立ちながら出て、

兩人　オヽイ。

ト呼ぶ、園七構はず行き掛る、

オヽイ〳〵。

ト園七是に構はず、花道へ行く。

權　ハテ、こんなに呼ぶに、此男は聞えぬか。

園七　ムウ、呼ぶのはおれの事かえ。

德兵　ヲヽサ、まア〳〵、待つて貰はうかえ。

ト鳴物になり、舞臺へ戻つて、

園七　御ていさうに呼びかけて、サ、何の用だ。

德兵　ハテ用がなうて呼ばうかい、こツぱになまこ、そろ〳〵と仕掛けろ、わいらでいかざア、助けてやらう、其間に拔きさした髭でも拔かうか。

ト床の床几に上足組み、煙草入から出す毛拔きも、なんぼう太きせんさく

なり。

ト文句の通りよろしくあつて、

〽いがみと早う見て取る團七、

ト男達の鳴物になり、

團七　コリヤおれに何の言ひ分がある、エイ小面倒な、早うぬかせ。

權　ヲヽサ、云ふなといつても云つて聞かすわ、名は云はいでも頼まれたと云や、合點であらう、

八　ハテ高がさツきの女中、貰ひに來たのだ。

兩人　あのヽ、ものヽ、と口數無しに、おいら二人が。受取らうかい。

團七　ハテ、おれもてつきり、こんな事だと思つた。

權　落附き自慢の魚屋團七。

八　命に掛替へあつたら知らず。

權　こつぱの權。

八　なまこの八が、

權　此の腕で、
兩人　貰つて見せるわ。
團七　イヤ、こいつらア除けて通れば、方圖がない、又渡さねえといつたら、うぬらどうする氣だ。
兩人　かうして疊んで仕舞ふのだ。
團七　ナニ、しやらくせへ。
〽右左り、ばたり〳〵と蹴たふせば、
權　イヤ、こいつ、すね出しを、
兩人　ひろいだな。
ト思入、德兵衞ぢろりと見て、
德兵　疊んでしまへ。
兩人　合點だ。
ト團七へ掛る、團七兩人を相手によろしく立廻り、トゞ兩人したゝかに打すえられ、
兩人　アイタ〳〵。痛え〳〵。
權　親方跡を、

兩人　頼みやんす。

〽跡を頼むといひ捨て、命から〳〵逃げて行く。

ト權と八の兩人、叶はずして花道へ逃げてはひる。團七跡を見て、

〽見て居るやつは大膽者、髭拔き仕まひ毛拔を納め、

ト徳兵衞よろしくこなしあつて、

徳兵　へゝゝゝ、テモ弱い奴等ぢや、あれでも人に頼まれるぢやまで、と云うてひけても居られまい、おれを頼んだのも、無理ぢやないわえ。

〽どりや出て逢はうと、のつし〳〵

ト只入にて、謎への鳴物になり、

團七、ちよつと下に居て貰ひませうかい。

團七　アノ、おれにか。

徳兵　ヲヽよ。

團七　ハテ、だいぶ時代に出かけたな。

ト只入あつて、中腰に居住ふ、

德兵　サア、下に居たが、どうする。されば、友達づくの頼むに引かれず、一寸も跡へは寄らぬ一寸德兵衛が、一寸まア、かうして見ようかえ。

團七　ホヽ、コリヤ又身があつて面白いわい、そんならさし詰め、かうせうかい。

德兵　ムヽ、さうすりや、おりやかうするわ。

團七　ムウ、かうする、イヤ、おりやかうするわ。

〽いや、かうする　わと打つ手留むる手右左り、片手にきり〳〵と尻ひつからげ、

ト　せりふの内より、双方手先の立廻りよろしく、右の文句の通りあつて、左右へ別れて、尻引ッからげ、きつと見得、是より謡への鳴物になり、高札を引きぬき、兩人打合ひの立廻りよろしく、

〽あまり遲さに新家から、迎ひにお梶はたゞ一人、來ればうたてや又喧嘩、

ト花道より、以前のお梶走り出で、是を見て、

お梶　コレ、モシ料簡さしやんせ。コレこちの人、こなたも料簡したがよい。

〽云ふをも聞かぬ摑み合ひ、ウッつうたれつ止めても、踏み飛ばすやら蹴飛

ばすやら、とゞめぬ仕やうも並び立つ、辻札取つて二人が中へ、横にこかして氣轉のかせ。

ト お梶双方を止める立廻りあつて、トゞ傍なる辻札を取り、兩人をよろしく隔てるこなし、

まア〳〵待つて、下さんせ。

團七 イヤ、女房邪魔せずと。

德兵 怪我せぬ内に、

兩人 退いた〳〵。

お梶 イヤ退かぬわいなア、こちの人、けふ御赦免になつたのも、元を糺せば喧嘩故、其の足腰もまだ固まらず、殊に女房や市松に喜ぶ顔も見せぬ内、往來中の此の達引、腹は立たうが、まアまア待つて下さんせ。おまへも何か樣子は知らねど、堪忍して。

ト 思ひに德兵衛の着物と顔を見て、

德兵 ヲヽ、ホンにさうだ、そりや此中の乞食ぢやな。

ホンニ、お梶さんか、面目ない〳〵。

お梶 下りや〳〵、こちの人に何で手向ひ、アノ、非人の、人でなしめが。

トきつと言ふ、徳兵衛しよげる思入にて、尻込みして、

へあやまり入りたる顔つきで、出入りの腰は折れにける。

ト團七思入あつて、

團七　コリヤ、女房、おりや合點が行かぬ、あいつどうして見知つて居る。

お梶　見知つてゐいで何とせう、短う云へば磯之丞樣、お鯛茶屋からお歸りなされぬ其の時の思ひ附き、お遊びなさるゝ濱先で、非人の喧嘩身の上話し、こいつを頼んで言はしたが、お耳へ止まつてお歸りなされた故、お袋樣のお喜び、其の御褒美にアノ着物、まだ其上にお金も遣り、それから止めた其のなりぢやな。

ト徳兵衛團七思入あつて、

團七　ムヽ、そんなら重々憎いやつ、玉島の御恩を着て磯之丞殿に仇をする、佐賀右衛門が尻持つ恩知らずの畜生め、モウゆるさぬぞ。

へとび掛れば、ト徳兵衛を身を引いて、

徳兵　アヽ、待つた／＼、その磯之丞殿といふは、備州出のお侍、玉島兵太夫の御子息か、ハヽア知らなんだ／＼、此の徳兵衛も備中の玉島生れ、少しの科で追ひ拂はれ、國を出る時殘しておい

た女房につれてもお主、おれの爲めにも親方筋、其の思惑の琴浦殿に横戀慕する佐賀右衛門、頼まれた朋輩の尻持つたは大きな間違ひ、達引どころかおれも共々、お世話をさして下さりませ、頼む〱。

〽ぼつくり折るゝ吉野ざし、徳兵衛が一分の立て初めとこそ知られけり、團七始終をとつくと聞き、

ト德兵衛よろしくあつて、團七思入あつて、

團七　くだけて見りや他人はねえと、こりや珍しい出合ぢやナ、其の言葉に違はずば、何ぞ慥な證をせうか。

徳兵　ヲヽそりや何なりと望み次第、コレお内儀、此の連れの繪を見さつしやれ、曾根崎心中の徳兵衛が、生玉で叩かれて恥面搔いて居る處、其の徳兵衛が勘當で、此の徳兵衛が出入留め、斯う打明けて解け合うたは、明神の引合せ、アヽ忝い〱。シタガ、おりやちつとの間も菰着つた此の體を、うろさがつて下さんすな、シタガ、餘り物は喰はなんだわえ。

お梶　あのお人の云はしやる事、寺へ行つた折聞かしやんしたか、百人一首の天智天皇樣も乞食の相が有つた故、木の丸どのにござつたげな、人間に浮沈みはある習ひでござんすわいなア。

〽ゑしやくに團七心づき、

團七　女房ども、あの二人の衆は、昆布屋にござるか。

お梶　サイナ、三婦さんの云はしやるにはナ、舅の處へ戻りがけ掛人二人連れていんだら、氣に入るまい、今度はこちへ連れていんで、女中一人は引受けう、磯之丞樣は行々は大事ない奉公でもさせましたらよからうと、三人づれ先へいんでござんしたわいなナ。

團七　ヲヽ、そりや慥か〳〵。慥ついでに、固めはどうする。

德兵　ヲヽ、腕を引かうか血を呑まうか。

團七　心がすわらにやア役に立たぬぞ、われが性根を見拔いた故、固めの印し渡さうかい。

〽是渡さうと浴衣の片袖、引切つて差出し、

ト團七着附の片袖を、引き切つて思入あつて、

コリヤ、是は團七が身に附いた片袖、磯之丞殿の世話をする、片腕にする證據の袖、とつと受取れよ。

德兵　ヲヽ、面白い、互ひに心底包まず隱さず、德兵衛が證據も、又からうちぎつて渡すわ。

ト德兵衛同じく、浴衣の袖を引きちぎり、

磯之丞殿を袖にせぬと云ふ印し、どんな事があらうも御難儀になる事なら、袖にしないと云ひぬく證據。

兩人　サア、受取れ〳〵。

ト兩人差出す袖を取りかはして、

ヲヽ、受取つた〳〵。

〽互ひに取替へ、手に通し、

ト兩人右の袖を手に引きかけ、

團七　おれが此の袖から肩に引きかけて、世話したら、なう德兵衞。

德兵　ヲヽ、おれもから引きかけりやア、氣づかひはみぢんもない、男は當つて碎けろと。

團七　かうなるからは。

兩人　兄弟同然。

お梶　互ひに心解け合うたで、私も心が落着いたわいなア。サア、此上は德兵衞さんも。

德兵　大阪へ直ぐに行かうかい。

團七　そんなら德兵衞、

徳兵　團七殿、

お梶　連れ立つて、

團徳　是れから直ぐに。

〽裏表なき氣の廣袖、固めはシャンと住吉の、亡者の袖より慥な袖、

ト此内三人よろしく身づくろひする、此時以前の權と八二人窺ひ出で、

兩人　さては二人が。

ト言ひながら、團七德兵衛へ掛るを突き廻し、ポンと返す、お梶帯を引上げ、三人よろしくこなしあつて、双方見合つて、木の頭。

團徳　行かうかい。

〽打ち連れてこそ、

ト三重にて、よろしく

幕

二幕目

釣船三婦の内

役名　團七九郎兵衛、一寸德兵衛、釣船三婦、玉嶋磯之丞、こつぱの權、なまこの八、三河屋義平次、駕籠屋二人。德兵衛女房お辰、三婦女房おつぎ、琴浦等。

釣船三婦内の場。本舞臺三間の間常足の二重、眞中のれん口、正面茶壁佛壇、是れに進上のビラを張り、上手一間の障子屋體、下の方一間の腰障子、是れへ筆太に「釣船」と書いてある。軒づらに祭禮の提灯を掛け、箱火鉢、茶呑茶碗、煙草箱、長煙管、燒火鉢を置き、是れにておつぎ小鰺を燒いて居る、琴浦磯之丞常足の上にて　笊の中より小茄子の蔕を取り居る、此見得よろしく屋臺囃子にて幕あく。

下手よりこつぱの權、なまこの八の兩人獅子袢纏を着て笊の獅子を冠り出來り

兩人　お目出度(めでた)う。

ト内へはひり、獅子舞をしながら、琴浦を見て、

權　琴浦(ことうら)、

ト云ひ掛けるを、八制して、其のまゝ門口へ出て、花道へはひる、

琴浦　さつきからも云ふ通り、何ぼおまんが云はしやんしても、おなかさんが諦められるものかいナ。

磯之　イヤ〳〵、それはそなたの悋氣と云ふもの、其のやうに疑ふものぢやないわいなう。

琴浦　そんなら、なぜおなかさんを連れてござんしたぞいなう。それが私しや聞えませぬわいなア。

ト煙管にて疊を叩いて云ふ、おつぎ思入あつて、

つぎ　アヽモシ、琴浦さんもよい加減に云ひなさんせ、其のやうに悋氣を仕なさんすのがいやさに、こちの三婦どのがおなかさんを、送つて行つたではござんせぬか、おまへの粹のやうにもござんせぬ、男に勤め奉公さしたと思へば濟むわいなア。よい加減に仲を直したがよいわいなア。

琴浦　アノ、そりやおつぎさんの云はしやんす事ぢやござんすれど、おなかさんと心中に行かしやんした清七さんと仲を直したとて、あまり面白うもござんせぬ、九郎兵衛さんも娘御のある内へ奉公にやらしやんしたが、聞えませぬわいなア。

磯之　アヽコレ〳〵、九郎兵衛に何の恨み、かうして三婦殿の世話になるのも、九郎兵衛からの頼み故、恨みがあるなら清七に、たんと云やいなう。

琴浦　サア、其の恩のある人に、恨みを云ふのも、おまんのわざ。

磯之　イヤ〳〵言やんな〳〵、世の中に据え膳と鰒汁を喰はぬは、男の内では無いと云ふわいなう。

琴浦　ソレ〳〵其の口が憎らしいわいなア。

ト此の時三婦親仁のこしらへにて、珠數を持ち、大縞の浴衣にて出來り、門口にて、

三婦　女房共、今戻つた。（ト云ひながら内へはひる。）

つぎ　ヲヽ、こちの人戻らさんしたかいなア。サア〳〵茶々一つ上らんせ。

ト茶を持つて來る。

三婦　何と留守の間に、祭りの料理は出來てあるか。

つぎ　イヤモウ、おまへの云ひ附け通り、鯵の鹽燒に、おさしみに酸の物まで、すつぱりと出來て居りますわいなア。

三婦　おツと、それでよし〳〵、喰へる〳〵。

つぎ　モシ道具屋の娘御は、首尾よう戻してござんしたか。

三婦　ハテ人の大事な娘、拘引したと云はれては、磯之丞殿の男が立たぬ、首をくゝつた傳八めに、何も彼も、なすり附けて、金の事までさらりと濟まし、中買の彌市を殺した事は、彼の書置でしてやつたと思つた處が、いやな風説があるテ、コレ、お二人も聞かつしやりませ、其の書置

の手が、傳八の手跡で無いと一家一門が云ひ出して、御詮議を願ふとの噂故礒之丞樣を大阪の地には置かれまいと、九郎兵衛も氣が附き、おれもさう思へども、さし當つて立ち退かうと云ふ當途もなくやられもせまい、ハテ、どこぞよい處がありさうなものだ。イヤ、さうして端近へ出て、人に顔を見られては悪い、殊に琴浦どのなどは、目がける者があれば猶の事　女房どもも女房どもだ、なぜ此のやうに店先へ。

つぎ　それ見やしやんせ、ぬしの云はるゝ通り。それに何ぞや榮燿らしい燒餅どころか、ことに依つたら二三年も、別れ〳〵にならうも知れぬ、暇乞と仲直りの汗を、一度にかいて置かしやんせ。

礒之　それぢやと云うて。

琴浦　どうまア奥へ。

つぎ　エ、おかしやんせ、何をウヂ〳〵と琴浦さん、早う連れまして。

ト是にて琴浦思入あつて、

琴浦　モウシ礒さん、おまへに話がたんとござんす、ちやツと奥へござんせ。

ト礒之丞の手を取るを木切り、

磯之　ハテ、さうせまいぞ、三婦殿が見てござるわいなう。

ト逃げようとするを、又手を取り、

琴浦　ハテまア、ござんせといふに。

ト唄になり、両人思入あつて、奥へはひる。此の唄をかりて花道よりお辰世話女房のなりにて、日傘を持ち出来り、思入あつて門口へ来り、

お辰　モウシ、ちと物が承はりたう存じます、此の邊に荷物のお世話をなされまする、三婦さんのお内を、御存じではござりませぬか。

ト門口を明け、

つぎ　ハイ、こちらでござります、まアどなたでござりまする。

お辰　ハイわたしでござりまする。

ト三婦お辰を見て、

三婦　ヲヽこれは〳〵。ようござつた、サア〳〵こつちへはひらつしやれ〳〵。コレかゝ徳兵衛のお内儀ぢや。

つぎ　ヲヽ、さうでござんしたか、まア〳〵はひらしやんせ。

とお辰内へはひる。

ほんにまア、此の暑いのに、ようこそ〳〵。サア〳〵、茶々一つお上りなさんせ。

トおつぎ茶を出す。

お辰　是れは有難うござります、モウ〳〵お構ひなされますな。三婦様には先程九郎兵衛様の處で、お目に掛りまして、何や彼やお禮を申しましたれど、お前さまには初めてお目に掛りました、私は備中玉島に居りまする、徳兵衛が女房の、辰と申す者でござりまする。

つぎ　イヤ、コレハ〳〵、暑さの時分、よう上つてござんしたなア。

お辰　まア何からお話し申しませう、連合の徳兵衛殿は僅かな科で國を立退きまして、和泉とやらに居られましたを、皆さん方が世話をして、暫く大阪の住居、生れ附きが荒々しく、喧嘩と云へば一番駈けに刃物三昧致すやうな人、さだめて何やらかやら、お世話勝ちにござりませうと、ちよつとお禮に上りました。

つぎ　是れは〳〵、何のお禮に及びませう、そりやもう、お互ひの事でござんす、さうした荒々しいのはいづ方にも有る事、手前の人も五六年以前までは、それは〳〵喧嘩好きで、假初にもちよつと橋詰へ出て貰はうかと、毎日毎晩、それも又直れば直るものでござんす、今では虫も踏み

殺さぬ佛性、アレあのやうに片時も、珠數を放した事はござんせぬ。腹立つ事がござんすりや、南無阿彌陀佛で消して居られまする。

三婦　イヤモウ、嚊が云ふ通り、常日頃が是れぢや〳〵。

ト珠數を爪操つて見せる。

お辰　それはまア、結構な事でござりまする。

三婦　イヤお內儀、德兵衞も同道でござりまするか。

お辰　サイなア、女房の思ふやうにもござんせぬ。モシ、聞いて下さりませ、お國のお咎めもゆりました故、迎ひに參りましたに、ヤレ嬉しやと申す處へ氣も附かず、まア四五日も跡から下らう、先へ歸れとそつけもなく申されまする故、未練さうに附き合うても居られませず、是非なう先へ下りまする。

ヘと話しの內に、三婦の女房が心附き、言ひ出すしほに、茶を差し出だし。

つぎ　まア〳〵茶々一ツ。ときにお辰さん、あまり馴れ〳〵しいが、おまへにちやツとお賴み申し度い事がござんすが、何と私に、賴まれては下さんすまいか。

ヘとうら問ひかゝれば、立直つて襟かき合せ、

お辰　玉島の田舍に住みましても、一寸德兵衞が女房辰でござんす、賴むとあるを一寸でも、後へは引かぬが、夫の氣性、まア云うて見なさんせ。

つぎ　そりやまア嬉しうござんす、お禮から先きへ申します、定めて德兵衞さんのお話しで、聞いてござんせうが、和泉の國濱田の御家中、玉島兵太夫樣と云ふお方の御子息に、磯之丞樣といふがござんすが、樣子あつて町の奉公なされてござつた處に、若氣の至りで人を。まア此大阪に置かれぬ首尾、今も今とて、內の人との相談、どうぞ此の方を。

お辰　預かりませう、私の方へお連れ申しませう。

つぎ　そんなら、預かつて下さんすか。

お辰　ハテ、そこを引かぬが一寸の女房、殊に其の親御の兵太夫樣には、ちッと私の方にも由緣もござんす、預かッてお連れ申しませう。

つぎ　そんならさうして下さんすか。ヤレ〳〵嬉しや〳〵、それ聞いて落ち着きました、ドレ爰へお連れ申して來ませう。

ト立上るを、三婦留めて、

三婦　コリヤ待て女房、女さかしうして牛賣れぬと、入らざるおのれが差配立て、賴んでよければお

れが頼む、磯之丞どのをお辰どんに、預けてやつてはおれが男が立たぬ。

つぎ　サア、そこを預けるが、あなたのお爲め。

三婦　ヤア、ぬかすなえ、わりや男の一分を捨てさすか、たわけ者めが。

〽呵り飛ばされもぢ／＼うぢ／＼、お辰は聞き兼ね、

お辰　モシ三婦さん、無理に頼まれたうて云ふぢやござんせぬが、私が其のお人を預かれば、おまへの男が立たぬとは、どういふ譯でござんすえ。但しは女子故に、まさかの時は役に立たぬと思うてか、まんざらひじりかすりを喰ふやうな、女子でもござんせぬ、一旦頼むの頼まれたのと云うたからは、三日でも預からねば、私の顔が立ちませぬ、立て下さんせ、おやぢさん。

〽からい女房の言葉の山椒、茶びん天窓をうごかする。

三婦　イヤ／＼、どう云うても、預けては、此の三婦が男が立たぬ。

お辰　サア其の立たぬ譯を承りませう、それには何ぞ様子がござんせう、そりやまア、どうして立ちませぬナ。

三婦　サア立たぬといふ譯は、お内儀の顔に色氣がある故。

お辰　何と言はしやんす。

三婦　徳兵衛が思ふにも、三婦といふ者は、いゝ年をして無遠慮な、我が身に火の附いて來た故に、それがせつなさに若い女房に若い男を預けてやつたは、聞えぬと思ひはせまいが、また思ふまいものでもない。あながちこなたに限つて、さうした事はあるまいけれど、思案の外といふ事があるに依つて、又疑ふまいものでもない事ぢやによつて人の口には戸が立てられぬ、コレ、必らず腹立てまいぞや／＼。いつそ、こなたの顔が、歪んであるか半分そげてあつたら、徳兵衛が何とも思ふまい、又世間も濟むといふもの。おりや誓文、コレ此の珠數に掛けて、頼みたいこなたの氣性、然し萬ケ一徳兵衛が立たぬ事が出來ると、おれは勿論九郎兵衛までが、男がすたるといふもの、間違ひはあるまいけれど、外といふ字で預けにくい、まアさう思つて下され。

〽事を分けたる一言に、道のお辰も詞は出でず、差しうつ向いて居たりしが、何思ひけん立直り、火鉢に掛けし鐵弓の火に成つたのを追取つて、我と我手に我顔へ、べつたり當てる燒鐵に、ウンとばかりに反返る、夫婦もあわて抱きかゝへ、藥よ水よといたはれば、むつくと起きて、

お辰　何と三婦さん、此の顔でも、思案の外といふ字の色氣がござんすか。

ト是れにて三婦手を打ち、

三婦　出來たお内儀、磯之丞殿を頼みます。

お辰　スリヤ、預けて下さんすか。

三婦　唐までなりと、連れ立つて下され。

お辰　エヽ嬉しうござんす、それで私も落ち着きました、磯之丞樣の親御兵太夫樣は、備中玉島が御生國、徳兵衛殿の爲めにも親方筋、その御子息樣を預からいでは、連れ合の男が立ちませぬ、私も主へ立たぬによつて、親の產み附けた滿足な顏へ、疵附けて預かる心、推量して下さんせ。

ト語るを聞いておつぎも涙、三婦も涙の横手を打ち、

三婦　ハテ、徳兵衛は頼母しい女房を持つたなア、なぜ男には生れて來なんだ、あつたら物を落して來たなア。ソレ女房ども、奥へ伴ひ磯之丞樣を、備中へ下す支度をしやれ。

つぎ　合點でござんす。

三婦　お内儀、顏は痛みはしませぬか。

お辰　あいなア、我手でした事、お恥かしうございます。「へをしや盛りを散らせしと、三婦の女房はいたはりて、

つぎ　モシお辰さん、疵が痛むなら、膏薬を上げませうかえ。

お辰　イエ〳〵それには及びませぬ。

つぎ　そんなら、何かの話しは、アノ奥で。

お辰　聞いたり云うたり。

つぎ　話さうわいなア。

お辰　そんなら三婦さん、後程お目に掛りませう。」

ト唄になり、お辰おつぎ奥へはひる。

三婦　ドリヤ、お念佛でも申さうか。

ト佛檀へ前へ直る事、此の時花道より權と八出て來り、門口にて、

權　三婦殿は内にか。

八　イヤサ、お宿にか。

三婦　ヲヽ、コリヤ二人共に、まだ祭りをしまはぬか、呑みに來たのか、今看經を仕掛けて珠數を放

權　されぬ、そこらに樽があらう、ぐつと一杯引つかけて行きやれ。南無阿彌陀佛々々。繃䌷に看
もあらう、南無阿彌陀佛々々。

八　八よ、親仁の今のを聞いたか、何だかぶつ〳〵を聞かうより、手前より言ひ出せ〳〵。

權　エヽ、手前云ふといつて、來たぢやアねえか、手めえ云へ〳〵。

兩人　コレ三婦どん、こなたの內に、貰ひ度いものがあつて來た。

三婦　花をくだんせ〳〵。

八　何だ、花をくれ、ハヽア留守の內に、お神輿か獅子でも持つて來たな。

權　ヲヽ、美しい花を見附けておいた。

八　さる侍に賴まれて、其の花を貰ひに來た。

權　それ〳〵、直につまんで來てやらうと受合つて、其のお侍を宮の內に待たしておいた。

八　以前なら腕づくといふとこだが、白髮親仁の禿天窓を、さうもなるめえ。

權　但しは何とか云つて見る氣か、金にでもする氣があるか。

兩人　どせう骨を落着けて、あいさつしろ〳〵。

三婦　若い者といふものは、たしなめ〳〵。わいらは住吉で初めて逢つたが、モウ根性が直つたらうと思つたが、まだ直らぬ。侍といふのは、大鳥佐賀右衛門といふ奴であらうがな。

兩人　まア、そんなものよ。

三婦　コリヤ、それなれば、琴浦には礒之丞といふれツきとした男があると、いつてくれ〳〵。

權　ヤア、此の親仁、おいら達を子供の樣に思つて居やがるな。

三婦　ヲヽ、おれが目からは子供も子供、稻子の樣に見えるわえ。

八　何だ、稻子だとぬかしやアがつたな、稻子なら刎込んでやらう。

ト奥へ行掛けるを、三婦引捕へ、ちよつと立廻りて兩人を捕へる、此の時奥よりおつぎ出て、

つぎ　モシ、こちの人、私しやさつきから聞いて居たが、コリヤもうこなさん、モウ堪忍がなるまいがな。

三婦　コレ嬶、五六年願うた後生を無にして、いつそ切つてしまはざなるまいかえ。

つぎ　そんな事もようござんすが、それもあんまり不便な故。

三婦　イヤ〳〵、こんな時切らざア、切る時はあるまいぞえ。

ト是れにて兩人、氣味の惡きこなしにて思入あつて、

權　コリヤ面白い、切られよう、サア切れ〳〵。

八　こくにも立たぬ老ぼれめ、きつぱ廻しやア、首と胴との生き別れだ。

兩人　サア切れ〳〵。

三婦　モウ是非がない、切つてしまふぞや。

兩人　ヤ。

三婦　おれが切るのは、此の珠數だ。

トふッつり中途より切り後ろへ投げて、

サア、是れからは元の釣船の三婦、うぬらに刃物が入るものか。

トちよつと立廻り、兩人を投げて、

コレ、脇差をおこせ。

つぎ　ハテ、もう刃物は入らぬではござんせぬか。

三婦　イヤ、此のがらくたは爪の垢とも思はぬが、根ざしの侍佐賀右衞門を、ばらしてしまふ。男の丸腰は見苦しい、よこせ〳〵。

トおつぎ脇差を持つて來る、三婦脇差を指す、權と八は三婦に掛る。

嬶行て來るぞや。

つぎ　ヲヽ、行てござんせ。

ト三婦雨々を相手にしながら、花道へはひる、おつぎ見送つて、

あゝは云ふものゝ、年は取つても居るし、若し怪我を取らねばよいがなア。」

ト花道より義平次、駕籠の者を連れ出來り、門口へ來て、

義平　ハイ、御免なさいまし〱。

ト門口を叩く、此時おつぎ出ながら、

つぎ　ハイ、どなたでござりまする。

ト門口を明ける　義平次見て、

義平　ヲヽ、コリヤ三婦殿のお内儀、此の頃は逢ひませぬ、何時見てもまめやかな。」

つぎ　是れは〱義平次さん、おまへもお達者で珍らしい、何と思うてござんした。

義平　イヤモ、年寄は子に遣はれます、九郎兵衛が云ふには、悪者共が頼まれて、琴浦殿を盗まんと、目を掛ける故、定めて三婦殿にも心遣ひ、四五日こちらへ預けておいたなら、燈臺元暗しとやらで、氣遣ひはあるまい、夫婦の衆も氣休めになる故、迎ひにいつて來いと云つて、駕籠

つぎ　までおこしました、是までは、いかいお世話になりました。何のそのお禮に及ぶ事かいなア、今も今とて惡者共がとつぱさつぱ、連合が其の出入りに行かれました、二三日も此内を明けて、あいらに鼻を明かす心得で、九郎兵衞の魂膽で俄の迎ひでござんせう。舅御のおまへに渡せば、慥かなもの、奥にでござんす、ドレ呼んで來ませうわいなア。

ト奥へはひる、義平次思入あつて、

義平　コレ〳〵駕籠の衆、ひまは取らせぬ、まちやつと待つて下され。

駕屋　ハイ〳〵、畏まりました。

ト此の時、おつぎ琴浦を連れて出て來り、

琴浦　そんなら私は、九郎兵衞さんの方へ行かねばならぬかえ。

つぎ　サア〳〵、二三日の内ぢや、得心してござんせ。

琴浦　私しや九郎兵衞さんに譯を云うて、磯さんのはうへ。

つぎ　それも合點、サア〳〵ござんせ〳〵。

義平　サア〳〵ござれ〳〵、コレ駕籠の衆、靜かに頼みます。

ト琴浦をせかせて駕籠へ乗せる、

そんならお内儀。コレ、駕籠を早くやつて貰ひませう。

ト義平次思入あつて、駕籠舁を追ひ立て〳〵、花道へはひる。此時奥より磯之丞、お辰出て来り、

お辰　ハテ、何もかもよろしうござりまする、御案じなさる事はござりません。

磯之　そんならお内儀、わしやモウ行きまする、どうぞ琴浦の便りを、早う寄せて下されいなう。

つぎ　サア〳〵、それも三婦殿と談合して、直ぐに跡から云うて上げまする。

お辰　そんならおつぎさん、何も心遣ひをさしやんすな、サア〳〵参りませう〳〵。

磯之　行くは行くけれど、どうも心が。

ト門口へ来る、是をお辰留めて、

お辰　ハテ、よろしうござります、私に任せておおきなされませ。

つぎ　磯之丞様のお身を、どうぞ。

お辰　しつかりと預かりました。

磯之　おつぎ殿、又の便りを。

お辰　サア、参りませう。

ト唄になり、兩人花道へはひる。

つぎ　ヤレ〳〵嬉しや〳〵、磯之丞樣を備中へ送り、琴浦さんも九郎兵衞さんの方へ預けたりや、やう〳〵落ち着いた。ドリヤ、おみあかしでも上げようか。

ト此の時花道の揚幕にて、

團七　まア〳〵とつさん、待ちなせへ〳〵。

德兵　コレサ、料簡さつせへ〳〵。

ト云ひながら、三婦をなだめながら九郎兵衞、德兵衞出で來り、

團七　これ〳〵とつさん、たかゞ逃げる侍を、相手にするにやア及ばねえ。

德兵　おとなげねえといふものだ。

三婦　イヤ〳〵、構はずと退いてくれ〳〵。

兩人　まア〳〵料簡さつせえ〳〵。

ト云ひながら、門口へ來る、おつぎ出て、

つぎ　九郎兵衞さんに德兵衞さん、ようござんした、さうして出入りの樣子はどうでござんした。こちの人が引けを取りはしませぬか。

園七　イヤ〳〵、年は取つても氣遣ひな事はねえ、なう德兵衞。

德兵　さうとも〳〵、昔に替らぬ達者もの、八や權を蓮池へどんぶりといはした故、侍めは逃げてしまつた小氣味のよさ。

つぎ　さうでござんしたか、ヤレ〳〵嬉しや〳〵、サア〳〵、はひんなさんせ、祝ひにわッさりと、酒にせうわいなア。

ト是れにて、皆々內へはひる。

三婦　コリヤ女房、よく氣が附いた、德兵衞には取分けお內儀の事を話さにやならぬ、九郞兵衞には又安堵さす事がある。サア、まア奧へ來やれ。

德兵　ドレ、お內儀の御馳走にあづからうか。

ト三婦德兵衞は奧へはひる、園七とまり思入あつて、

園七　お內儀、琴浦殿や磯之丞樣は、見えられぬが、どこぞへ行かれたか。

つぎ　さればいなア、どうやら世間が騷々しい故に、氣をもんで居た處、德兵衞さんのお內儀お辰さんがござんした故、磯樣を預け備中へ遣りました、又其處へおまへの方からの迎へ故、たつた今琴浦さんは。

團七　ムヽ、スリヤあの、誰が迎ひに來ました。

つぎ　ハテ、おまへの舅、義平次さんが見えられて、九郎兵衛が云ひますには、四五日戻して下されと、駕籠まで持つてござんした。

團七　ヤヽヽヽ、そんなら此の九郎兵衛がと言うて。舅殿が、ムヽ、シテ〳〵、其の駕籠はどつちへ。

つぎ　慥かに南の方へ。

團七　それを遣つては。

ト團七駈け出すを、おつぎ留めて、

つぎ　コレ待たしやんせ、そんならおまへは、迎ひにござんした事を知らずにか。」

團七　知つた知らぬは後でのこと。

つぎ　イエ〳〵、それを聞かぬ内は。

團七　エヽ、面倒な。

トおつぎを振り拂ふ柏子に、脇差を突き、逸散に花道へ行く、おつぎウンと云つて倒れる、團七舞臺を見て、

お内儀、此の煙草入れに藥がある、是れ呑んでくだんせ。

ト煙草入をはふる。

〽長町こして、

ト三重にて、團七逸散に花道へはひる。これにてよろしく、

幕

三幕目　長町裏殺しの場

役名　團七九郎兵衞、一寸德兵衞、三河屋義平次、駕籠舁二人、祭りの人足多勢。

長町殺しの場。本舞臺正面黑板塀、見越しの松、上手へ寄せて、刎釣瓶の井戸、舞臺へ二間切り穴の誂らへの泥舟、日覆より松の釣枝よろしく、御輿太鼓にて幕あく。

ト花道より、義平次駕籠屋を先きに、追立て出て來り、

義平　サア〳〵、早くやつて下せへ〳〵。

ト云ひながら急ぐ、此の時揚幕にて、

團七　ヲヽイ〳〵。

ト渡り拍子になり、花道より團七追ひ駈け出て來り、花道にて駕籠と入れ替る、此内本舞臺までかつぎ來る、棒鼻を押へて、

此の駕籠後へ戻してくれ〳〵。

義平　何だ、おれがやつた駕籠だ。構はず先きへやれ〳〵。

團七　イヽヤ、戻して。

義平　やれ〳〵。

ト兩人爭ふ、團七駕籠を下におかせ、きつとなる。

義平　ヤイ九郎兵衛、わりや此駕籠を何とするのだ。

團七　コレ、もうしとつさん、此駕籠の此の女中は、こんたも知つての通り、わしが爲めには、大恩あるお方から預かつたお人、それを今連れてござんすのは、ハヽア、コリヤてつきり惡者共に

頼まれて、金にする氣でござらうが、そりや惡いぞえ〳〵、さうされては此の九郎兵衞の顔が、どうも立ちませぬ。コレとつさん、こんた此中も此中とて、内本町の道具屋で、田舍侍のこしらへにて、僞香爐を持つて五十兩の騙り。

ト義平次駕籠の方へ向いて、云ふなといふ思入。

サ、それもまゝようござんす、然し又惡いと云うてからが、たしなむ心もござるまい、見下げ果てた、是も後の事さ、何もかも云ひますまい、ぢやによつて此駕籠をナ。コレ、駕籠の衆、今聞いて居る通り、親仁どんの氣も直つた、大儀ながら戻して下せへ〳〵。

駕舁　ハイ〳〵。（ト舁き上げる。）

義平　ヤイ〳〵〳〵、待て〳〵。

駕舁　ハイ〳〵。

團七　サ、ヤレ〳〵。

義平　エヽ、おれが雇つた此の駕籠、やる事はならねえぞ。」

ト是れにて駕籠を元の處へおろす

ヤイ九郎兵衞、たしなむ心があるまいことか、見下げ果てたとはよく云つた、忝い、其のあ

いそづかしを、待つて居たのだ、六年以來おれが娘を女房にして、なぐさみ物にして居る、サア揚代を貰はう。ヤイ、こゝな恩知らずめが、コリヤよく聞けよ、おのれは元宿無し團七と云つて、粹方仲間の小歩き、貰ひ喰ひして居たを、おれが引上げて、堺の濱の魚賣をさせておいたぞよ、又其上に娘のお梶と乳操つて、市松といふ子までへり出しをつたぢやないか、月々の當がい物を取るのが好さに、目をねむつて居る中に、乳守の町で喧嘩を仕出して、和泉の牢へ百日餘り、はひつてをつたぢやないか、其内女房や子は誰れが養つて居たと思ふ。

團七　サア、それはみんな、おまへ樣のお世話で。

義平　エゝぬかすなえ〳〵、其の入用を埋合さうと思つて、金儲けに掛れば、おのれが道具屋の内に居るとて、よくもあれを上げさせをつたな。

團七　イエ〳〵、それは其の時の、ツイ。

義平　イヤ〳〵ぬかすかいなう。コレ、けふ琴浦をちよろまかして來たのは、惚れてござる佐賀右衞門殿に渡して、金にするのだ。

團七　サ、其の金もわしがどうでもするほどに、此の女中を人手に渡しては、どうも顏が。

義平　顏が立たぬか、ヲゝさうであらう〳〵、コリヤ長々親子の者が養はれて居た、アノ、此、此、

此顔が立たぬか、よい男だ、立派な者ぢや、ドレ〳〵。

ト顔をこちらへ向けて、

但しは又、此、此、此頬げたが立たぬか、ごくにも立たぬあんだらをぬかしやアがるな。

へ立蹴にはつたと蹴られても、舅は親と無念をこらえ歯を喰ひしばり居たりける。

ト義平次團七を蹴飛ばす、團七思入あつて氣を替へ、

團七　イヤモ、段々の仰せ一々御尤もでござります、何と申しませうやら、返す詞もござりませぬ、親子の者が永々のお世話の上に、又してもく金儲けを妨げまする段、眞平御免下さりませ、モウ〳〵此上ふツつり金儲けの邪魔は致しませぬ、其替りに、アノ女中ばかりは。

義平　イヤ、ならぬ。

團七　そこをどうぞ。

義平　エヽ、ならぬ、ならぬわい。（ト團七思入あつて、）

團七　サア、素手でお詫びは致しませぬ、友達が寄りまして、頼母子講をしてくれました金が、爰に三十兩ござりますれば、是れをおまへ樣に差し上げますが、身の代に取つた思召しで、どうぞ

琴浦殿を三婦の方へお戻しなされて下さいまし、外々へやりましては、どうも此の九郎兵衛が顔が立ちませぬ、慈悲ぢや情けぢや、コレとツさま。

ト袂を引くを振放して、外を向きながら、義平次思入、團七も思入あつて、

〽手引き袖引きひざを突き、親といふ字は是非もなや、義平次も三十兩當分取るに少しは和らぎ、

ト義平次思入あつて、

義平 琴浦を佐賀右衛門殿に渡してやれば、百兩がものはあるけれど、かゝりやつながる娘の縁、ただやつたと思ひ切り、三十兩で戻してやらう。

團七 スリヤ、お戻しなされて下さりまするか。

義平 戻してはやるけれど、そなた、其の金持つて居やるか。」

團七 イヤモ、慥に爰に持つて居ります。

義平 よもや、だましはせまいの。

團七 どう致しまして。

義平 そんならそれに違ひもあるまひ。コレ／＼駕籠の衆、今戻つて來た處まで、其の駕籠を返して

下され。

駕皆　ハイ〳〵畏まりました。

義平　駕籠賃も、先きで存分貰はツしやい。

駕〇　有難うござります、こんな時に貰はねば、ナウ棒組。

駕□　それ〳〵、水も呑む事は出來ねえ。サア〳〵、やらかせ〳〵。」

ト駕籠は花道へはひる、團七見送つて居る、義平次思入あつて、

義平　コレ聟殿、駕籠は眞直ぐに、三婦の内へ戻した、サア、約束の物を。

團七　ヘイ、約束のものとは。

義平　ハテ、氣の附かない、ソレ彼の物よ。

團七　彼の物とは。

義平　エヽ物覺えの悪い、三十兩の金を受取らう。

團七　ハイ、其の金と申しては。

義平　サア、それを出して下され。

團七　イヤ、其の金は。

義平　コレ、心が急くわ、早う渡しやいなう。

ト此内團七もじ〱して、困る思入。

團七　イヤ、其の金は、只今爰にはござりませぬ。

義平　エヽ。

ト義平次びつくりして、後ろへ引くり返る。

團七　只今宿へ歸りまして、才覺致し參りまする。

ト此時義平次やう〱腹の立つ心にて、團七の襟がみを捕へて引附け、

義平　何とぬかす、其の金が無いとは、おのりや親をうまく〱一杯だましをつたな、エ[illegible]が立つ腹が立つ。

ト團七をねぢ伏せる。

團七　モウシ、左様ではござりませぬ、内へ歸れば心當りがござります、まア〱爰を放して下さりませ。

義平　エヽさう云つて爰を逃げようと思つて、さう甘くはさせぬぞ、おのれどうしてくれう、此腹癒せにいつそかうして。

〽かうしてくれるとねぢ廻し、踏んだり蹴たり擧句には、砂に擦り附け石に打ち附け、引廻し〳〵。

ト砂へねぢ附け、石にてくらはし、踏んだり蹴たり、いろ〳〵にさいなむ、此時懐にはさみし雪駄落ちる、是を義平次見て取り、

コリヤ何ぢや、雪駄ぢやの、イヤ、おのれは大層な物をはきをるな、此の親は此年になるが、二十四文の藁草履こんな物をへけらかしてそれで面が立たぬといふのか、アノ、此のツラが。

ト雪駄で兩方の頬を叩く、團七ムゝと思入。

何ぢや〳〵〳〵、おのれは親をにらめをるか、親をにらむと、ひらめになるぞよ。無念なか、口惜しいか〳〵、ヤレ〳〵可愛さうな。

ト是にて背中を撫で、

何ぢや泣くか、ほえるか。コレ、おのれのやうな畜生には、此の雪駄の皮が分相應。

ト雪駄にて散々に團七を打つ、團七無念の思入にて、其の手を取り、

團七　コリヤもう、どうでも。

ト團七脇差の柄へ手を掛ける、義平次びつくりしながら、思入あつて、

義平　何だ〳〵、コリヤ何をするのぢや、われはおれを切る氣ぢやの。

ト是れにて團七思入あつて、脇差を後へ隱す。

團七　どう致しまして、左樣な事が。

義平　イヤ〳〵、切る氣ぢやによつて、脇差に手を掛けたらう。コリヤ面白い、切るなら切れ〳〵、切られよう。サア、爰から切るか。

ト尻をまくり。

イヤ爰から切るか、サア切れ〳〵。

團七　どう致して、左樣な事が。

義平　イヤ〳〵、切る氣だ、サア切れ〳〵。古いせりふだが、切つて白けりやア錢は取らねえ。サア切れ、切れ、此脇差でおれを切れ〳〵。

ト是れにて、脇差の柄を押へて、思入あつて、

サア、此の脇差で切れ〳〵。

ト脇差を持ち添へ、ぬき、

コレ切れ、切らぬか〳〵。

團七　何として、おまへ様を。

義平　イヤ殺せ、サア切つて貰はう、コレよく聞けよ、舅は親ぢやぞよ、コレ親を切れ、一寸切れば一尺の竹の子で引廻すわ、三寸切れば三尺高く、逆ばツつけだ。サア切れ、是れで切れ〱。

團七　どう致しまして、あぶない〱。

ト色々捨ぜリフ、放さんとする思入、此のはずみに思はず義平次を一ト刀切る、義平次いろ〱と掴み合つて居る内に、血の流るるを見て

義平　ヤア、切つた。親殺し〱。

ト花道の方へ逃げようとするを、團七口を押へて、きつとなつてよく〱見て、

團七　コリヤ、手が廻つたか。

ト思はず手を放す。

義平　人殺し〱。

ト駈け廻る故、團七もびつくりして、又義平次の口を押へ、思入あつて、

團七　コリヤもう、九郎兵衞が一生懸命、覺悟さつしやれ。

ト云ひながら、泥場へ切り込み、花道よき處へ行き、きつと見得、是れより鳴物になり、兩人よろ

しく立廻りあつて、トヾとゞめを刺す、此のキツカケよろしく、後ろ灯入りの花車など、屋臺、祇園囃子にて通る、團七思入あつて、死體を片附け、井戸にて水を汲み、體を洗ふ事よろしく、脇差の鞘を尋ねる。よき處へ、上手より、皆々御輿を擔ぎ出て來り、

皆々　ちやうサや〳〵、ようサ〳〵〳〵。

ト云ひながら舞臺を廻り、又よき處にて花道へはひる、團七此中へまじり、舞臺にて辷り、尻へにどうとなりて思入。

團七　惡い人でも舅は親、許して下んせ。

〽八丁目と、そまぎれ行く。

ト團七は花道へはひる。此時上手より、德兵衛出て來り、舞臺よき處にて、團七の雪駄に躓き、拾ひ取り、すかし見て思入あるを、木の頭、かすめて渡り拍子を打込み、よろしく、

ひやうし幕

夏祭り（終り）

大正十四年十一月二十日印刷
大正十四年十一月廿三日發行
大正十四年十一月廿五日再版

『世話狂言傑作集』第六卷
定價金參圓

編纂者檢印

編纂者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　和田利彦

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　瀧澤一郎

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　春陽堂
　　　　（電話本局五一一番）
　　　　（振替東京一六一七番）

河竹繁俊氏
濱村米藏氏 共編
渥美清太郎氏

歌舞伎劇大系(全三十卷)

時代・世話狂言傑作集各十五卷

各冊

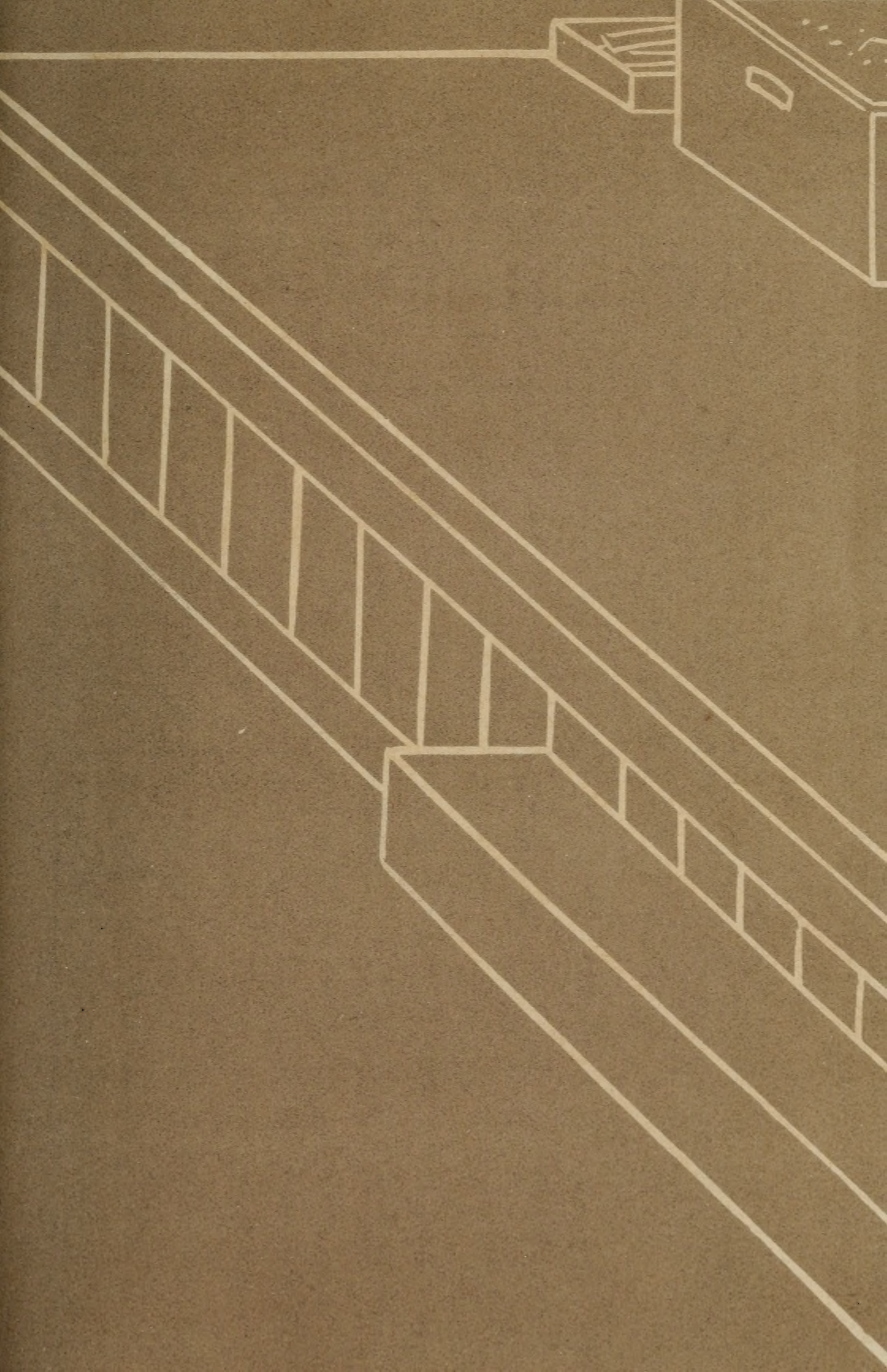
四百頁乃至四百八十頁校訂
嚴密解説詳細挿繪豐富
定價參圓、送料八錢
春陽堂發行

世話狂言傑作集(全十五卷)

第一卷(既刊) 四谷怪談。法界坊。嫁切り。梅川忠兵衞。
第二卷(同) 天竺德兵衞。播隨院長兵衞。酒屋。清玄。
第三卷(同) 八百屋お七。鈴木主水。乳貰ひ。宿無團七
第四卷(同) 唐人殺し。堀川。野崎村。五大力
第五卷(同) 女歌舞伎。殿樣擣次。來山。名工柿右衞門、鼓の里、裏表心曲尺。(榎本虎彥集)
第六卷(同) 累物語、白石噺。鬼神お松。夏祭り。
第七卷(續刊) め組の喧嘩、三人片輪。上野戰爭。松田の仇討。(竹柴其水集)
第八卷(同) 朝顏日記。二人新兵衞。廓文章。梅の由兵衞。
第九卷(同) 大經師。お妻八郎兵衞。千兩幟。かしく六三。
(以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし)

時代狂言傑作集(全十五卷)

第一卷(既刊) 義經千本櫻。石切梶原。扇屋熊谷。蓮生物語。卅三間堂。
第二卷(同) 高野山。嫗山姥。玉三。義經腰越狀。新薄雪物語。
第三卷(續刊) 阿漕。菅原。板額。山門五三桐。
第四卷(同) 先代萩、國性爺。辨慶上使。關平物狂、彥山權現
第五卷(同) 忠臣藏。小野道風。六彌太。娘景清。
第六卷(同) 廿四孝。平家女護島。宅兵衞上使。鎌倉三代記。
第七卷(同) ひらがな盛衰記。伊勢物語。岸姫松輝虎配膳。
第八卷(同) 伊賀越、阿古屋。盛綱。安達ヶ原。有職鎌倉山。
第九卷(同) 一の谷。富士見西行。楠昔噺。八陣。
(以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし)



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 8245